勇者大戦ブレイブサーガA's

ジャン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇者大戦ブレイブサーガＡ'ｓ

【Ｎコード】
Ｎ５６５２Ｓ

【作者名】
ジャン

【あらすじ】
生きとし生ける者に絶望した神々
神は人間を滅ぼそうと行動を開始した
だがそんな時世界を・・・生きる者を救った勇者達が再び集った。

※勇者大戦なのはわざとです。他作品の作者様とかなりコラボします。

第一話　世界崩壊

第一話　世界崩壊

それはいつもと同じ日だった。

何の変哲もない日常が流れていた。

『・・・愚かな人間共め』

背中に白い翼を纏った人間がビルから町を見下ろしていた。

『やはり・・・人間など創るべきではなかった・・・人間・・・死すべき・・・』

そして翼を持った人間は空に手を掲げた。

『天地創造の神の許しを得た!!この世に生きる者よ・・・・神の前にひれ伏すが良い!!』

その言葉と共に空が曇り空間が歪み始めた。

そして世界各地でも異常気象が起こり始めた。

街頭テレビ

『皆さん注意してください！世界各地で異常気象がおき始めました！これは！自然に発生したものではありません！！』

時空管理局

「いったい！？どういうことや！？」

はやてがオペレートルームで観測結果を見ていた。

「わかりません！急に次元世界が収縮し始めて・・・このままでは・・世界同士がぶつかり合ってしまいます！！」

「何が起きてるんや？」

「！！次元運航艇ロストしました！！」

「何でいきなり・・・作為的？」

爪を噛んで考えるはやて。その時管理局が空間の歪みに飲み込まれた。

ダグベース

「これって一体？」

ダグベースでオペレートしているシャマル。世界に起きた異常気象を観測する。

「何この嵐・・・日本だけじゃない・・・これって世界規模じゃない！！」

シャマルが通信回線を開こうとする。

「管理局！カイザーズ！宇宙警備隊！宇宙警察機構！銀河連邦！誰でも良いから応答して！！」

必死に通信を試みるが繋がらない。

「みんな・・・え？」

その時通信が開かれた。其処から聞こえてきた声は。

『こちら舞人！応答願います！こちら舞人！！』

「え？舞人君？」

シャマルがダグベースの通信回路を開くと響き渡る舞人の声。

「どうして舞人君が通信を？」

『シャマルさん！？そちらは大丈夫ですか！？』

「大丈夫って・・・何が？・・・まさか」

舞人のいる世界でもこの嵐が起こっていると推測したシャマル。

『急いでください！次元が融合し始めています！』

舞人の通信が切れるとダグベースが嵐に巻き込まれる。

「く！結界を」

「おう！」

次元融合から隔離する為に咄嗟にシャマルとザフィーラが結界を張った。

天野平和科学研究所

「じいちゃん！はやく！！避難しないと！！」

ケンタが天野博士に避難を急がせた。

「待て！これはワシの大事な発明なんじゃ！！」

「もう～おじいちゃんったら！」

「博士～」

ハルカとジェイルが頭を抱える。

「今兄ちゃんが居ないんだから！俺先に外に行って見てくる！」

「ちょっとケンタ！危ないわよ！！」

ハルカに止められながらもケンタが外に出たその時だった。

「え？」

突如天野平和科学研究所が光り輝きその姿が消えてしまった。

「な・・・どうして・・・どうして！！」

突如消えてしまった研究所に驚くケンタ。

宇宙

世界規模で嵐が巻き起こる中、光のレールが地球に繋がれる。

海鳴町

「くっそ・・・なんなんだよこれ・・・」

シズマがヴァリオンに乗りながら呟く。

「おいヴァリオンどういう事だ？」

『わからない・・・かつてのバルドーの時と同じ現象が起こっているのかもしれない・・・あの時は世界が割れたが今度は』

「・・・空が割れ始めてやがる」

空を見上げるシズマ。

「おい！みんな！こっちだ！」

炎が住民の避難誘導をしていると・・・

「な！」

炎の姿が消えてしまった。

風祭生物研究所

「今度は一体・・・」

「おいどうなってんだ？」

翼が研究所で森と共に観測をしていた。

「まさか・・・次元が融合し始めているのでは」

「なに？」

「このままじゃ・・・何処に飛ばされるかわかりません！」

その言葉と共に消えてしまう翼と森。

そして皆が消えた後に現れた竜。

「・・・なんだ・・・空の中に世界がある」

世界融合を感じ取る竜。

山海高校

「急げ！早く避難するんだ！」

「広瀬先生！あなたも早く！」

「私は生活指導員です！私には生徒の安全を守る義務があります！！」

その時山海高校が空間のひずみに飲まれた。

ＶＡＲＳ

「なんなのよこれ？」

愛美が観測をしているとＶＡＲＳのコンピュータが異常な数値をはじき出した。

「これってまるでバルドーの時と同じじゃない・・・けど・・・これは宇宙じゃない・・・まるで次元が融合し始めている・・・空間遮断しないと・・・瞬兵！バーンを」

「わかった！バーンお願い」

「了解だ瞬兵」

バーンのエネルギーに包まれＶＡＲＳが結界を張った。

残骸が漂う宇宙空間

甚大な宇宙嵐を観測した勇者達が調査に向かっていた。

『何なんだ・・・これは?』

状況が読めないファイバードが通信を送るが誰にも通じない。

『こちら!宇宙警備隊ファイバード!応答願います!!・・・な!!』

ファイバードが何かを発見した。

『・・・・』

それは破壊され宇宙空間を漂っていたキングエクスカイザーだった。

『エクスカイザー!どうしたんですか!?エクスカイザー!!』

『その・・声・・・ファイバード・・か?』

朦朧とする意識で呟くエクスカイザー。

『エクスカイザー!これは!!』

『ファイ・・バード・・・地球へ・・・急げ・・・ち・・きゅう・・・が・・・あぶなうおおおおおおお!!』

謎の砲撃を浴び吹き飛ばされるキングエクスカイザー。

『エクスカイザー！！』

ファイバードが何かの気配に気づき振り返る。

『！！』

何かの攻撃を咄嗟にフレイムソードで受け止めるファイバード。

『へえ～流石にドライアスを倒しただけのことはあるね～』

『！！』

ファイバードの前に現れる謎の翼を持った戦士。

『貴様は！？』

『おっと・・・名乗るなんて無粋な真似はしないよ・・・どうせここで死ぬんだからね！！』

ファイバードに攻撃を仕掛けようとした戦士その時。

『うおりゃあああああああああああ！！』

謎の物体に蹴り飛ばされる戦士。

その先に居たのは・・・

『ブレイブダグオン！！』

ファイバードの前に降り立つブレイブダグオン。

『へえ～間抜けな動物はまだ生きてたんだ』

『生憎・・・俺は地獄の閻魔に嫌われてるんでね』

戦士に向かってブレイブソードを構えるブレイブダグオン。

『そうか・・・そういえば地獄ではそんな事になってるって聞いたね』

『地獄では？てめえ一体・・く！！！』

戦士の攻撃を受けるブレイブダグオン。

『ブレイブダグオン！』

『ファイバードここは俺に任せろ！地球へ』

『しかし！！』

『あんたには娘がいるだろ！！』

『！！』

ブレイブダグオンはただ行けと言っている。

『宇宙の仲間がやられたんだ・・・今は地球の仲間しか居ない・・・

飛鳥に・・・炎さんに地球の危機を伝えてくれ』

『・・・わかった・・・』

ブレイブダグオンにこの場を任せ地球へ向かうファイバード。

『余計なことされちゃ困るんだよ!』

『させるかボケ!!』

ブレイブソードを引き抜き戦士に飛び掛るブレイブダグオン。五分五分の斬りあいが続く。

『へえ思ったよりがんばるね~』

『日本のヤクザ舐めんな!!』

ブレイブソードを構えなおすブレイブダグオン。

『てめえら一体誰なんだよ!!』

『ここまで頑張った君への冥土の土産に教えてやるよ・・・冥界の魔族とでも言おうかな』

『なに・・う!!』

胸を刺されるブレイブダグオンそして

『・・・死ね』

『うわあああああああああああああああああああ』

戦士の強大な攻撃の前に飲み込まれるブレイブダグオン。

『ブレイブダグオン！！！』

『ファイバード・・・火鳥さん・・・地球を頼むぜ』

凄まじい閃光が止むと・・・

宇宙を漂っていたのは

ブレイブダグオンだった物だった。

地球へ急げ！ファイバード！

第一話　世界崩壊（後書き）

次元融合から逃れたダグベース。くそ！勇者を狙ってバケモンが現れやがった。みんな散り散りだしどうすれば・・・

次回！勇者大戦ブレイブサーガＡ’ｓ　勇者立つ

俺達が駆けつけるまで持ちこたえてくれよ！

第二話　勇者立つ（前書き）

第二話　勇者立つ

ダグベース

「う・・う～ん・・」

次元崩壊が止んだ後のダグベースで目を覚ますシャマル。痛む身体を起こし時間を確かめた。

「1時間くらい眠ってたみたいね」

そしてダグベースの端末を立ち上げるのだった。

第二話　勇者立つ

「こちらダグベース・・・応答してください・・・カイザーズ!宇宙警察機構!管理局!!」

四方八方に通信を送ってみるが誰も返事がない。通信を送るのと同時に市街地の様子をモニターに表した。

「これって・・・」

思わず口を押さえてしまうシャマル。その光景は・・・町の空に別の町が見えた。

「そんな・・・別世界を直視で見るなんて・・・」

ありえないそう思ったとき。

「シャマル！」

「ザフィーラ？」

ダグベースのオペレートルームに入ってくる傷ついたザフィーラ。

「これは一体？」

「わからない・・・誰とも連絡が取れない・・・」

「管理局は？」

「繋がらない・・・念話も・・・」

万事休すのシャマル。だがふと考え付いた。

「そうだ・・・ここからなら天野平和科学研究所が近い」

「こうしちゃいられない・・行くぞ」

「念のためビークルを持っていきましょう」

「分かった」

シャマルとザフィーラが急いでビークルに乗り込むと天野平和科学研究所に向かった。

「・・・嘘」

シャマルとザフィーラが天野平和科学研究所に到着すると天野平和科学研究所が跡形も無く消えていた。索敵魔法を展開しようとするシャマルその時

「誰？」

「え？」

シャマルが振り返るとそこにはケンタの姿が・・・

「ケンタ君？無事だった！」

「シャマル先生・・・シャマル先生！！」

シャマルに抱きつくケンタ。

「みんなは？」

「わかんない・・・急に光に飲まれちゃったんだ・・・俺・・・俺！」

「大丈夫。もう大丈夫だよ」

シャマルがケンタの頭を優しく撫でた。

「とりあえず・・・ダグベースにおいでよ・・・きっと火鳥さんも着てくれるから」

「シャマル先生・・・わかった」

シャマルがケンタをダグベースに連れて行こうとしたその時だった。

「！！」

突如シャマルとザフィーラが謎の生物に取り囲まれた。

「何これ？」

「一体？」

生物はシャマルとザフィーラそしてケンタを狙っていた。

「勇者・・・ミツケタ」

「なに？」

生物の言葉に驚くザフィーラは警戒を強めた。

「勇者・・・ワレラ天界生物のテキ」

「天界生物？」

キーワードが引っ掛るシャマル。そして天界生物達がシャマルとザフィーラに飛び掛った。

シャマルとザフィーラが戦闘体制に入ろうとしたその時。

「！！」

「ウゲエエエ！！」

突如手裏剣が舞い天界生物達の頭に刺さった。

「ダレダ？」

その言葉に手裏剣を投げた人物がシャマルとザフィーラ、ケンタの前に舞い降りた。その人物は・・・

「竜さん！」

初代ダグオン・刃柴竜。

「トライダグオン」

竜がダグコマンダーを起動させると紫のダグテクターが装着されフルフェイスのマスクで覆われた。

「シャドーリュウ！」

「勇者・・・勇者！！」

天界生物の言葉を聞いた竜は疑問を持った。

「・・・一体何者だ？こいつら」

「わからないけど・・・私たちのファンじゃないって事は確かかな」

「そうか」

「おい来るぞ！」

ザフィーラの合図と共に天界生物が襲い掛かった。

「シャドークナイ！」

竜が天界生物を切り捨てるとそのままジャンプした。

「シャドー流手裏剣！白鳥の舞！！」

空中からの手裏剣の乱れ打ちが天界生物を次々と撃破すると・・・

「手裏剣！かかと落し！！」

足の手裏剣を回転させ天界生物を切り裂いた。

「ぬおおおおおおお！！」

ザフィーラの拳が天界生物を次々と殴り飛ばしシャマルが防御結界でケンタを守った。

「勇者・・・シスベシ」

「なに？」

天界生物が一端地面に潜ると巨大な姿になり出てきた。

「うわああ！！」

「ケンタ君私のビークルに乗って！」

「は！はい！」

ビークルにケンタを乗せるシャマルはすかさずロボットモードにチェンジした。

「融合合体！！」

シャドージェットが人型に変形すると人型になり竜と一体化した。

『ダグシャドー！！』

ダグシャドー、シャマル、ザフィーラが巨大化した天界生物に向かって構えた。

『シャドー大手裏剣！！』

『！！』

『ライドパルス！！』

ダグシャドーの手裏剣、ザフィーラの砲撃、シャマルの超音波が天界生物にヒットするが・・・

『効いてないのか？』

天界生物はダグシャドーに向かって突進するとダグシャドーを吹き飛ばした。

『ぐ！！』

『ダグシャドー！』

倒されたダグシャドーはふと違和感を覚えた。

（・・・力が・・・出し切れていない）

身体の変調に驚くダグシャドー。それはシャマル、ザフィーラも同じだった。

『嘘・・・ビークルの力が出せてない』

『これは・・・！！』

突如地面から膨れ上がってくる天界生物達。

『この数！』

『なら』

ダグシャドーがシャドーガードを召喚した。

『機獣合体！！』

ダグシャドーがジャンプするとガードタイガー、ガードウルフが腕

となりガードホークが翼になるとダグシャドーが変形し巨大な人型になると組みあがりガードホークが合体した。

『シャドーダグオン!!』

シャドーダグオンがカゲムラサキを構え天界生物を斬り捨てた。

『グサアアアア!!』

絶命する天界生物。

『これでやっと互角か・・・』

合体して初めて天界生物の戦闘力に追いつくシャドーダグオン。

だが天界生物は次々と現れシャドーダグオン一人では対処しきれない。

『どうしよう・・・』

『耐えろ!』

焦るシャマルとザフィーラその時だった。

『え?上空から・・・機体反応?』

シャマルのセンサーに引っ掛る機影その識別信号は・・・

『味方!』

上空から天界生物を攻撃する戦闘機、スポーツカー、戦車。

『チェンジ！ビルガー！』

『チェンジ！ボルト！』

『チェンジ！ガンザー！！』

ロボットになりシャマル、ザフィーラと合流するチームアルフェリス。

『チームアルフェリス！』

『シャマル先生！大丈夫ですか！？』

ビルガーがシャマルたちを心配した。

『なんとか・・・けど・・・みんなどうして？』

『な～に言ってんだよ。俺達が居なかったら八神組は単なる極悪集団で終わるだろ』

『言えてる』

ボルトの言葉に肯定するザフィーラ。

『まぁ・・・自分達は保護者ですから』

『キサマらモ勇者か？』

天界生物の言葉にチームアルフェリスは答えた。

『おうよ！八神組若頭！チームアルフェリスとは俺たちのことだ！いくぜ！！』

『『おう！』』

合体フォーメーションに入るチームアルフェリス。

『『『時空合体！』』』

ビルガーが上半身、ボルトが腰、ガンザーが足になり完成した拳士。

『アルフェリス！！』

降り立つアルフェリス。天界生物がアルフェリスに襲いかかろうとしたその時。

『おおっと！助っ人はアルフェスだけじゃねえぜ！！』

天界生物に向かってライオンの顔の新幹線が駆けつけた。

『チェンジ！』

新幹線は三体のロボットに変形しそれぞれ天界生物を攻撃した。

『『『ボンバーズ！！』』』

降り立ち名乗りを上げるボンバーズ。

『ボンバーズ！！』

『待たせたな！行くぜ！』

『『おう！！』』

ライオボンバーが舞い上がり胴体になりバードボンバー、ダイノボンバーが合体し下半身になると上半のライオボンバーが合体し両腕が装着される。

『合体っ！トライボンバー！！』

トライボンバーが降り立ちアルフェリスと並んだ。

『シャドーダグオン！アルフェリス！一気に決めるぜ！』

『おう！光速拳！！』

アルフェリスの光速拳が天界生物にヒットするとすかさず追撃に入った。

『ボンバーミサイル！！』

『シャドー！大大筒！！』

トライボンバーのボンバーミサイルとシャドーダグオンの大大筒が天界生物を撃墜した。

『クラッシャーフィスト！！』

『ボンバーガントレット！！』

『シャドー！牙王斬り！！』

天界生物を貫き爆発が起こるとひとまず鎮圧された。

天野平和科学研究所跡で情報交換を始めるメンバー。

「じゃあ。舞人君は無事なのね？」

『ああ。今俺達勇者特急隊で各地の仲間を探してるんだ』

ライオボンバーが答えると質問するシャマル。

「という事は・・・通信は？」

『残念だけどとれねえ』

「どうして？」

『どうもこの辺一体が魔法みたいなバリアで包まれてんだ・・・世界を超えて通信できねえから合流するってことになってな・・・』

「魔法のバリア・・・結界か・・・」

爪を噛んで考えるシャマル。

「それでみんなは見つかったの？」

『今のところシャマル先生たちだけだ』

「そっか・・・舞人君たちがこの世界に来たって事は甲児さんやユウ君・・・大悟君との世界につながっている可能性も高いわね・・・連絡取れればいいんだけど」

『俺達も良いか？』

「ビルガーどうぞ」

チームアルフェリスが宇宙で起きた事を話し始めた。

『宇宙でも次元嵐が起きててな・・・』

「ああ・・・それで力達が調査に向かったんだな」

ザフィーラの言葉に頷くビルガー。

『そこで俺達は強大な敵に遭遇した・・・力もそいつと戦ってな・・・まるで歯が立たなかった・・・俺達は力に地球にこの危機を伝えろと言われ地球に向かった』

「ちょっと待って・・・デルタは？」

『デルタは・・・俺達を地球に行かせるために・・・囮になって・・・』

「そう」

暗い表情になるシャマル。

すると今度は竜が手を上げた。

「次は俺で良いか？」

「竜さん」

「町の方も混乱している・・・所々の町が姿を消した」

「姿を・・・って・・・どうして？」

「俺の調べた情報によると・・・天地創造の神とやらが動いたという・・・」

「天地創造の神？」

「御伽噺（おとぎばなし）みたいだけどな・・・俺も翼を持った天界人と戦うまで信じられなかった・・・何とか退く事はできたが・・・奴らは次元世界の融合とやらをやった」

「次元世界の融合？それで世界の空に世界が見えるってわけね」

「そして炎たちも消えた・・・だがあれを見ろ」

竜が空に移る世界を指差すとターボライナーの姿が・・・

「あれって海さんの」

「あれを考察してみれば・・・炎たちは別の世界に飛ばされた可能性が高い・・・」

「ちょっとまって！それじゃじいちゃん達は別の世界に」

「可能性は否定できない」

その言葉にホッとするケンタ。

「世界がミックスされたって事ね」

「それにさっきの戦いだが・・・」

『ああ俺もそれは感じた』

竜の言葉に同意するビルガー。

「私たちの力が押さえつけられてるって事？」

『そうか・・・どうりでいつもより調子が悪いと思ったぜ！』

ライオボンバーも自分達の戦闘力ダウンにイラついていた。

「合体してやっとまともに戦えるという事か」

「じゃあ私たちもはやてちゃんたちと合流しないと戦えないってこと？」

「・・・もしくは押さえられた力を解放する方法を探すかだ」

竜の言葉に今後の行動を考えるとザフィーラが提案した。

「今後の事だが・・・しばらくはこのメンバーで戦うのはどうだ？」

その言葉に・・・

「そうだな・・・ここで散り散りになるより今は固まっていた方が動ける」

竜もその提案に乗った。

『そうだな・・・舞人達との合流にも時間があるしな』

ライオボンバー達ボンバーズもその提案に乗った。

「ケンタ君もそれでいい？」

「うん！じいちゃん・・・ハルカ・・・ヴィヴィオ・・・絶対に助けに行くからね」

シャマルの言葉にケンタのひたむきな顔になる・・それを見た竜は・・・

「・・・しばらくは俺達だけでがんばるんだぞ」

「うん！」

ケンタと拳を重ねた。

「決まりね・・・それじゃあみんなでダグベースに行きましょう」

『『『「「おう！」」』』』

シャマルの提案で勇者達はダグベースに拠点を置くのだった。

第二話　勇者立つ（後書き）

一時ダグベースに拠点を置いて対策を練ることになった私たち。町の様子はあまり変わってないけど世界融合は進みそう。次元世界を超える方法を早く見つけないと・・・え?こんな時に天界生物が・・・あれは！

次回！勇者大戦ブレイブサーガＡ，ｓ　宇宙の王者降臨

あれってグレンダイザー？

第三話　宇宙の王者降臨

ダグベース

「・・・・・・・・」

増設されたダイニングルームで昼食の料理している竜。

その理由は

昨日

「さあ食べて♪」

炊事担当を買って出たシャマルの料理を食べた竜は・・・

バタン

「え?ちょっと!竜さん!竜さん!!」

流石の竜も倒れてしまった。しかし全て残さず食べた。

こうしてケンタたちの身の危険もあるため現在のメンバーでの炊事

当番は必然的に竜になってしまうのだった。

「いっただきま～す」

出来上がった昼食を食べるケンタ。

「竜さんの料理って不味くないんだけど何で肉無いの？」

「・・・俺は肉は食べない」

そういう竜。動物の友達が多いためか特に鶏肉は絶対に食べない。

「けど俺苦手なのもあるな」

「苦手なもの食べないと炎や力みたいになるぞ」

反面教師の大人二人にケンタはしぶしぶ食べるのだった。

第三話　宇宙の王者降臨

「ふう・・・これとこれ」

ダグベースへの必要最低限の物を買うシャマル。

「まさかダグベースで生活するなんて思いもしなかったな」

居住すると思ってなかったダグベースははっきり言って何も無かった。

幸いなのか次元嵐後もライフラインや経済は健在の為流通などは困っていない。だが町は静かなものだった。

「どういう事?次元が融合して・・・もう3日・・・最低限のライフラインはある・・・変わったところは空に別世界が何度も見えるだけ・・・」

しばらく天界生物の襲撃がない。今静寂が流れるのだった。

「ただ今~」

ダグベースの憩いの場として機能するミーティングルームに入るシャマル。

「おかえりシャマル先生!」

「どう?みんなから通信あった?」

「全然」

ケンタがビスターを突っついてみるが誰にも応答がない。竜のダグコマンダーも同じだった。

「海鳴にいるみんなだけなら通信は出来るんだけど」

現在の通信の弁は海鳴内の同じエリアに居るメンバーとは通信が出来ることがわかったが、外部エリアに通信を飛ばす事ができなかった。

「当分は海鳴から動けないって事か」

別のエリアに行く手段が見つからない勇者達。

現在海鳴の周辺は空間が屈折している為、次元の壁を超えれば何処に着くから分からない。

そのためボンバーズがこの世界に来たのは正しく奇跡でしかない。

安定して次元を超える手段が見つからない為現状維持をするしか方法無い。

また生身で空間を移動するのは危険でしかない。

「とりあえず・・・ボンバーズの言う合流地点はまたルーレットみたいにどこかって事？」

「下手したら宇宙空間に出ちゃう可能性もあるのよね」

「焦るな・・・チャンスは来る」

「竜さん・・・うん！」

竜の言葉に頷くケンタ。

その時

ビービー！！

ダグベースのアラートが鳴るとオペレートルームに向かうシャマルと竜。

「ケンタ君！」

「あ！シャマル先生！天界生物が！」

「え？」

レーダーに天界生物反応が映り、すぐにポイントを割り出すシャマルと竜。

「ここって海鳴ランド・・・え！」

モニターに映ったのは海鳴ランドで天界生物と戦うロボット。

「これって・・・グレンダイザー？」

「・・・なんだ？・・・そのグレンダイザーとは？」

聞かないキーワードに考え込む竜。

「そういえば・・・竜さんたちには話していなかったっけ・・・前に力君たちが神様の悪戯かなんかで世界を飛ばされちゃって・・・その時に友達になってくれたのだマジンガーZ」

「マジンガーZ？」

知らないという竜にケンタが反応した。

「え！マジンガーZってアニメのロボットじゃん・・て竜さん知らないの？」

「家にテレビは無い」

「・・・・・・・」

気を取り直して話を戻すシャマル。

「次元が融合したせいで・・・大介さんがこっちに来ちゃったのかな・・・」

「て感心してる場合じゃないよシャマル先生！やられそうだよ！！」

ケンタがモニターをさして言う。今のグレンダイザーは天界生物の多さにジリ貧になっていた。

「・・行くぞ」

「ケンタ君！ザフィーラ！ダグベースの点検お願い！」

そう言うと出撃体制に入る竜とシャマル。

ダグベースの後方部分が展開されるとシャドージェットが現れ発進シークエンスに入る。

滝のカタパルトに装着されると発進した。

ダグベースの前方が展開すると線路が結ばれた。信号が青になった瞬間射出されるボンバーズ。

ダグベースが競りあがると４つのコンテナが現れ３つが展開しチームアルフェリスが発進した。

海鳴ランド

観覧車を背にグレンダイザーが天界生物と戦っていた。その最中海鳴ランドに遊びに来ていた人たちは避難していた。

『ぐ！』

人々を守りながら天界生物の攻撃を受け止めるグレンダイザー。

『勇者・・・勇者・・・』

そう呟きながら天界生物は瞳から光線を発射させた。

『ぐお！』

グレンダイザーにヒットするとよろけてしまった。

『・・・ハンドビーム！』

天界生物にグレンダイザーの攻撃がヒットし撃墜するがキリがない。

（く！立てデューク・フリード・・・ここでお前が倒れたら誰が人々を守るのだ）

己を奮起させ立ち上がるグレンダイザー。
天界生物がグレンダイザーに飛び掛ったその時。
その時
『！！』
上空から攻撃され天界生物が後ずさった。
デュークが空を見ると・・・
『機獣合体！！』
ダグシャドーがジャンプするとガードタイガー、ガードウルフが腕となりガードホークが翼になるとダグシャドーが変形し巨大な人型になると組みあがりガードホークが合体した。
『シャドーダグオン！！』
『合体っ！！』
ライオボンバーが舞い上がり胴体になりバードボンバー、ダイノボンバーが合体し下半身になると上半のライオボンバーが合体し両腕が装着される。
『トライボンバー！！』
『『『時空合体！！』』』

ガンザー、ビルガー、ボルトが一つとなり完成した巨大な銃士。

『アルフェリス！γあああああ！！』

降り立つ三体の勇者。

『君達は？』

『大介さん！』

『シャマルさん！』

ボロボロのグレンダイザーの中に入るシャマルはデュークの治療をしていく。

「どうして？ここに」

「お話は後です・・・それと・・・私はあなたの良く知ってるシャマルじゃないので其処のところよろしくお願いします♪」

「はぁ・・はぁ・・」

シャマルのテンションについていけないデュークすると天界生物が飛び掛ってきた。

『シャドー！大手裏剣！！』

シャドーダグオンの手裏剣が炸裂し天界生物を切り捨てた。

『グラビティ！カノン！！』

アルフェリスγの次元振動弾が天界生物を飲み込んだ。

『ぬおおお！』

そのままアルフェリスγは天界生物を掴み取ると・・・

『いくぞ！トライボンバー！！』

『おう！！』

同じく天界生物を掴み取ったトライボンバーの姿がそしてそのまま突進しあい。

『『うおりゃあああああああ！！』』

天界生物同士の脳天を叩き付けあった。

『僕も負けてられないな！反重力ストーム！！』

天界生物が持ち上げられると・・・

『ダブルハーケン！！』

ダブルハーケンで八つ裂きにするデューク。

勇者達の応援により形成が逆転し始めた。

『一気に決める！！スペースサンダー！！』

グレンダイザーの角から稲妻が発射され天界生物達を飲み込んだ。

『これで終わりか？』

シャドーダグオンが辺りを見ると天界生物の姿は無かった。

そしてダグベースに戻った勇者達。

「次元が融合した？」

大介に事情を説明すると驚いた様子だ。

「そうなんです・・・私たちも散り散りになっちゃって・・・今いるメンバーだけです・・・そういえば大介さんはどうしてここに？」

シャマルの質問に答える大介。

「はい。僕の世界でもあなた達で言う次元嵐が起きました・・・その時ゲッター線が暴走して・・・そのエネルギーに巻き込まれたんです・・・僕は気づいたらこの世界に来ていてあの天界生物に襲われました・・・」

「そうか」

竜も聞いていた。

「ここがどこか・・・正直分からず・・・グレンダイザーも度重なる戦いで相当ダメージが蓄積されて・・・」

「そっか・・・専門じゃないから分からないけど・・・ダグベースの応急修理機能じゃ直せないな・・・」

考え込むシャマルその時

ズドン

「何事？」

『おい！そこの兄ちゃん！！』

突如モニターに映るライオボンバー。

「どうしたんだい？」

『やろ！どういうつもりだ！整備しようと思って近づいたら攻撃してきやがった！！』

頭に筋浮かべて怒っているライオボンバー。

「す！すまない！グレンダイザーには自行防衛装置がついているんだ・・・その悪用されないように」

『じゃ！どうやって修理すりゃいいんだよ！！』

「僕が今解除する！」

『だったら最初から解除しやがれ！』

「面目ない」

申し訳無さそうにする大介に苦笑いするシャマル。

だがここで一つの課題が出来た。

（ロボットを直せるエンジニアが必要ってこと？・・・博士やドクター今居ないし・・・かと言って楓ちゃんも行方不明だし・・・）

整備できる人員が限りなく居ないことに頭を悩ませるシャマル先生。

第三話　宇宙の王者降臨（後書き）

う～ん今の課題はエンジニアメンバーの集結なのよね～どうしようかな～また天界生物！・・・あなた達ユウ君にアルトさん！え！！？どうして二人して飛龍に乗ってるの？あなたは！！

次回！勇者大戦ブレイブサーガＡ’ｓ　影の守護者

ヴォルフガングに押し付けられちゃったの！？

第四話　影の守護者

ダグベース

グレンダイザーを整備する大介だが・・・

「くそ・・・ダメージがひどすぎる」

グレンダイザーは宇宙の技術で作られている。その為にこの世界の地球に無いテクノロジーも多い。

『くそこんな複雑な計算式見た事ないぜ』

チームアルフェリスもグレンダイザーを修理するがとても間に合わない。

「技術はともかく・・・専門のロボットの知識を持っている人が必要って事か」

現在技術力不足のダグベース。ＶＡＲＳや管理局に連絡を試みるが何処にも通じない。

第四話　影の守護者

整備に行き詰まり一休みしているシャマルたち。

「このままじゃグレンダイザーが直せない・・・」

大介も頭を悩ます。素材が特殊な為この世界の地球には無かった。

そして頼みのダグベースの整備機能だが全くのＥＯＴであるグレンダイザーを直す手段はない。どんなに技術が進んでもやはり人の手で修理しなければならない状況をかみ締めていた。

「大介さん！お疲れ様」

「ああケンタ君・・・ありがとう」

ケンタが大介にサンドイッチを持ってきた。大介はケンタからサンドイッチを受け取り食べ始める。

「大介さんは直せないの？」

「直せないわけじゃないが・・・ここまでやられているとパーツが足りない」

資材があっても加工する技術がないため頭を悩ませる大介。それは勇者ロボにも言えることだった。

「・・・手持ちのパーツだけで何処まで持つか」

整備されるシャドージェットの様子を見ている竜も今度の事が心配だった。宇宙警察機構からの補給も連絡が取れず時限も捻じ曲がった今の状態から受け取る事ができなかった。

比較的機体ダメージが少ないのはダグオンである竜だけだった。
ボンバーズやチームアルフェリスは技術が違う為専用のパーツを加工する必要があった。
その時
「シャマル」
艦内放送でザフィーラの声が響きオペレートルームに向かった。
「どうしたのザフィーラ?」
「・・これを」
ザフィーラがモニターを移すと砂丘が見えた。
「海鳴に砂丘?」
「どうやら・・・時限融合のせいで各地が繋がったようだ」
「どういうことだ?」
「これを見ろ」
竜の質問にザフィーラがモニターを拡大させると赤い基地が設立されていた。
それを見たボンバーズは・・・

『これ・・・飛龍じゃねえか！』

ライオボンバーが映し出されている基地が飛龍であることに気づいた。

「飛龍って・・・昔エースのジョーさんが乗っていた？」

「ああ・・・野郎に撃墜されたんだ・・・あの顔は忘れねえ」

苦い思い出を話すライオボンバー。

「確かめたほうが良いか・・・今動けるのは？」

『シャドージェットにシャマル先生たちのビークルに俺達チームアルフェリス』

ビルガーの言葉に考えるシャマル。

「ダグベースを守らないといけないから・・・戦力分散か・・・そうね・・ここは私と・・・竜さんお願いできる？」

「良いだろう・・・賢明だな」

「・・・どういう事？」

竜が前に出るとケンタが人選に質問した。

「長距離を動くなら空を飛べたほうが良い・・・それに俺なら単独で動ける・・・あまり人員を割かないで済む」

「私も空飛べるし」

「なるほど・・・人探しならシャマル先生か・・・」

ケンタも納得し直ちに竜たちはシャドージェットに乗り出撃した。

「このエリアは大丈夫なのか？」

「海鳴の範囲内だから多分大丈夫」

そう言いながらシャドージェットを飛ばした。

時限の捻じ曲がった砂丘にて赤い基地が設立されていた。

「ふああ～」

表でアクビしながら伸びをするアルト。

「それにしても・・・ここ何処よ～台風来たと思ったら洞窟に飛ばされたし～ユウ」

「なんだよ・・・」

基地の屋上で洗濯物干してるユウ。

「洗濯なんて干してないで何かいい手考えてよ～」

「しょうがねえだろ連絡とれねえんだから」

「お～いユウ、アルト飯じゃぞ」

奥からエプロン羽織って現れるヴォルフガング。

「お！飯！」

「は～い」

仮設されたダイニングルームで出たのは・・・

「またカップ麺・・・」

「贅沢言うな」

「ラーメンばっかりじゃ太る・・・」

そう言いながらラーメン食べるアルト。

「たく・・・あんたに会わなかったらやばかったな」

そう言ってユウもラーメンを食べ始める。

「まぁ・・・お主らとも奇妙な縁じゃわい」

ユウたちとヴォルフガングが会ったのは2日前。次元嵐の中砂漠を彷徨っていたユウとアルト。

いきなり砂漠に現れ水も食料も無く状況すら分からない時に飛龍に乗ったヴォルフガングとばったり会ったのだった。

「んまぁ・・・姉貴たちがなんかするまでは今の状況がベストかもな」

「そうね～」

「全く若いもんは気楽でいいのお」

その時だった。

飛龍の警報が鳴った。

「なんだ?」

ヴォルフガングがレーダーを見る。

「不味いぞ・・・奴らが来た」

「くそ!行くぞ!アルト!!」

「うん!!」

ユウとアルトがコックピットに向かい飛龍を起動させた。

天界生物が飛龍に群がるとユウが飛龍のハンドルを握った。

飛龍が人型になると天界生物の前に降り立った。

天界生物がユウに襲い掛かる。

『ヒリュウジャベリン！！』

ユウがヒリュウジャベリンを抜き天界生物を切り裂いた。

『火器官製ＯＫ！！』

アルトの声が響くと両足からミサイルが発射され天界生物を撃墜した。

『馬鹿アルト！貴重なミサイルを！！』

『だって～数多いんだもん！』

一体で戦うには不利な状況だ。次々と襲い掛かってくる天界生物にユウは・・・

『紅！！』

ヴォルフガングが取り付けたシグナムとヴィータのビークルに備え付けられているデバイス生成装置を起動させ紅を実体化させるユウ。

『かまいたち！！』

天界生物を切り裂くユウ。

（・・・やはり・・・魔力をプラスしてパワーは補っているが本来の飛龍の力を出せていない）

飛龍の中で観測するヴォルフガング。

すると天界生物が飛龍にまとわりついた。

『くそ！』

『ユウ・・・』

身動きが取れなくなったユウたち。

その時

ズバシュ！！

天界生物が切り裂かれると一人の勇者が現れた。

『シャドーダグオン！！』

カゲムラサキを構え搭乗するシャドーダグオン。

『大丈夫！ユウ君』

『その声・・・シャマル先生？・・・て俺達のところのじゃない』

ビークルに乗っているシャマルが現れたことにより別世界に飛ばされた事を認識するユウたち。

『シャドー大手裏剣！！』

天界生物を切り裂くシャドーダグオン。

『ライドパルス！！』

シャマルの超音波と竜巻が天界生物を飲み込んだ。

『よし！ゲイル・ファング！！』

ゲイル・ファングを構成するユウは魔力を集中させる。

『アルト！照準任せた！』

『ＯＫ！』

『メテオブレイカー！！』

ユウのメテオブレイカーが天界生物を飲み込み鎮圧された。

ベースモードになった飛龍で落ち合うシャマルたち。

「まぁコーヒーでも」

「どうも」

アルトが全員にコーヒーを出し、シャマルたちがヴォルフガングに事情を聞いた。

「時限嵐の事はおぬしらも聞いたじゃろ」

「ええまぁ」

コーヒーに口を付けながらヴォルフガングは続いた。

「それでな。ワシも調査する事にしての轟龍と飛龍を作り直してジョーに連絡を取ったんじゃ」

「え？ジョーさんに？」

「うむ・・・あやつめ自分で調査するとか言いおって轟龍だけ持ってとっとと行きおったわい」

「ジョーさんらしいというかなんというか」

呆れてしまうシャマル。

「そこでワシが残った飛龍に乗って調査を始めたんじゃが何せ時限の壁を越えれば越えるほど訳の分からん世界に出る・・・んで出会ったのが」

「俺達だ」

ユウとアルトが手を上げる。

「まぁ・・・お主らの言う天界生物とやらと出くわした時にのこやつらが襲われていてな恩を売るのも悪くないと思ったんだじゃが奴ら手強くての」

「そこで見かねた俺が飛龍に乗り込んだってわけ・・・ハンドルだから正直焦ったけど」

「悔しいがワシではこやつ以上に飛龍を使いこなす事ができん・・・そこでこやつに飛龍を貸す代わりに調査につきおうてもらうことにしての・・・まぁ・・・若い二人がいちゃつく場所を与えたつもりはないんじゃがな」

「おんや～ユウ君もしかしてアルトと～」

超厭らしい目になるシャマル。

「んなことしてねえよ!!なあアルト」

「え？もうあ～んなことやこ～んな「誤解受けるようなこと言うんじゃねえ～」

アルトの乗りボケにツッコムユウ。

「大丈夫よ～ユウ君も力君並に初心だって分かってるから～」

「まぁ冗談は置いておいて」

「冗談だったのか？」

説明を続けるヴォルフガング。

「ワシの調査によるとお主らの力・・・仮にブレイブパワーとしよう・・・それがお主らの身体から吸収しある一点を指している」

地図のある一点を指すヴォルフガング。

「ということは海鳴はこの地点に何かあるって事か・・・」

地図の指し示す場所を見るシャマル。するとユウが質問した。

「ん?そういや力達は?」

ユウの質問にシャマルたちは今までの経緯を説明した。

「そっか・・・みんな行方不明か」

「そう・・ねえユウ君、アルトさんヴォルフガング博士も・・・良かったらダグベースに来ませんか?」

「ダグベースに?」

「ええ。この状況じゃ折角会ったのに今別れちゃったら次はいつ合えるかわからないわ」

「とか何とか言ってシャマル先生俺たちに勇者ロボの整備させるつもりだろ」

「あはは~バレた~?・・・けど冗談抜きで今の状況は厳しいのよ。私たちやダグベースの整備システムだけじゃ賄えないし・・・専門の知識を持った人が必要なのよ。協力してもらう変わりに衣食住の保障はするわ。どう?」

シャマルの提案に考えるユウ、アルト、ヴォルフガング。

「んまぁ確かにここでまだるっこしい事してるよりは良いかな？」

「私も気兼ねなくお風呂は入りたい」

「む～確かに設備があったほうが時限転移の手段も見つけやすいの」

「じゃ！決まりって言う事で」

早速ダグベースに戻るとユウたちはグレンダイザーの修理に取り掛かった。

「うむ・・・たしかにひどいのお」

ヴォルフガングは頭を捻った。大介も心配になった。

「直りませんか？」

「大丈夫じゃ。同じものは無くても限りなく似ている物はある。それで代用すればいい」

「なるほど」

ヴォルフガングがグレンダイザーを直している最中。

「アルト～スパナとってくれ～」

「は～い」

ユウにスパナを渡すアルト。

「これでユウも勇者の仲間入りだね～」

「うるせえ。それにしてもこれだけ整備するのって正直骨だぜ」

「ぼやかないぼやかない」

「ごめんね～」

整備を手伝うシャマル。するとユウが話しかけた。

「そういえばシャマル先生聞いてるか？」

「何？」

「なんか別の世界で金髪の三蔵法師が実在した～とか言ってたぞ」

その言葉に固まるシャマル。

「もしかして・・・けど彼がくれば凄い戦力になるわ」

ブレイブパワーの集中する地点を調査するべく八神組の凄まじい戦力と合流する決意をするのだった。

第四話　影の守護者（後書き）

ち・・・何なんだこいつら・・・天地創造の神だと？おもしれえ上等じゃねえか・・・！！てめえらキャロに何しやがった！？

次回！勇者大戦ブレイブサーガＡ，ｓ　親娘

こいよクソ娘・・・今殺してやる

第五話　親娘

第五話　親娘

ダグベース

「ここを・・・お～いユウそろそろ繋いでくれ」

「うお～い」

ヴォルフガングの指導の下ユウがグレンダイザーのコンピュータをいじくると修理が完了した。

「直った」

大介も喜んでいる。

「これで僕も戦えます・・・そういえば北斗君を見つけたんだって？」

「ああ」

大介の言葉に答えるユウ。

「みんなお茶ですよ～」

シャマルがお茶を持って現れ北斗の話題になった。

「今の手持ちじゃ北斗が一番メンテにこまんねえから早く合流してえな」

召喚生物の北斗のマシンは自己修復が出来る。

「もう少しで空間転移はともかく何処の空間に繋がっているかどうかはわかるぞ」

ヴォルフガングの発明が完成すれば北斗の元に向かうことが出来るシャマルたち。

そしてユウが呟いた。

「北斗の事だからイラついて銃撃ちまくってるかも」

「そんなこと・・・ありうるわね」

次元が捻じ曲がった砂漠

「うるせえ殺すぞ!!」

ダンダンダン!!

予想通り景気よく発砲している北斗。

「だからお義父さんいつか本当に当たっちゃうよ！！」

キャロ、エリオ、紫は咄嗟に避けたのだった。

「たく・・・俺も反撃するぞ」

北斗と行動を共にしている剣鉄也もデザートイーグルを構えると北斗は・・・

「け・・・口径のでかいだけで銃が」

「なんなら試してみるか？・・・貴様のその玩具みたいな小銃で勝てるか？」

「おもしれえ・・・死ね！！」

「止めなさいって！！」

北斗と鉄也の銃撃戦を止める紫。霧風に至っては呆れていた。

このメンバーが出会ったのは数日前

次元嵐に巻き込まれた北斗一家はこの砂漠でキャロ、エリオと出会った。

なおキャロに久しぶりに会った北斗の一言。

「おめえ背伸びたな」

「お義父さん！！」

「ぐふ！！」

あまりの嬉しさに喜ぶキャロ、劇的に成長したエリオに対し約１．５ｃｍほどのミニっこい成長しかしていないキャロは誰も身長が伸びた事に気づいてもらえなかった。

「お義父さん！ありがとう！！もう『パパ』って呼んじゃズドン！！

再会そうそう発砲されるキャロ。髪の毛２．３本舞ってます。

「・・・いいか最初に会ったときから一つ言っておくが・・・俺をパパと呼ぶんじゃねえ」

頭に筋浮かべる北斗。

「ダ～リン良いじゃないのパパぐらい呼ばせズドン！！

「だからダーリンって呼ぶんじゃねえチビ」

「いや・・・お義父さズドン

「だからてめえもお義父さんって呼ぶんじゃねえ」

エリオに向けて容赦なく発砲する北斗。

そんなこんなで時間は過ぎ

「エリオ君お腹空いたよ～」

「うん・・僕もお腹空いてお腹と背中がくっ付チャキ

エリオのお腹に銃を突き付ける北斗。

「だったら今すぐ腹と背中にバイパスを結んでやろうか？」

「父上・・・弾は貴重なんだからとっとこうよ・・・」

等と砂漠を宛ても無く歩いているときだった。

『勇者・・・勇者！！』

砂漠から出てくる天界生物の襲撃を受け応戦しようとしたその時。

『グレートブーメラン！！』

グレートブーメランに斬り飛ばされる天界生物達。其処にいたのは空の偉大な勇者だった。

「グレートマジンガー？」

『お前は・・・北斗？』

こうして鉄也と合流した北斗達は一緒に行動する事にしたのだった。

なお父親的意見の不一致から北斗と鉄也の喧嘩も日常茶飯事だった。

「・・北斗・・お前は父親として娘に銃を向けていいのか？」

「・・・てめえこそ娘相手にアホな訓練させてんじゃねえよ」

「なにを」

「うぜえ」

にらみ合う北斗と鉄也。

など

そして現在に至り

「たくやってらんねえぜこの暑さ」

「文句言わないの」

ここ数日グレートマジンガーに積んである非常食料で食いつないでいる北斗たち。

尚北斗と鉄也はとても仲が悪い。

だが

戦闘になると意外な連係プレーを見せるため離れるに離れられない。

現在

グレートマジンガーにへばり付きフリードに乗りながらとりあえず

空間の裂け目に向かって飛んでいる一行。

「砂漠って地面掘れば水くらい出たりして」

そう思ったそのときだった。

「無理無理～お前らここで干乾びる運命にあるんだよ！！」

何やら砂漠の向こうに現れる青年。

「ふふふ・・・ねずみが何匹かいるね～」

「あ？・・・！！」

北斗が反応した瞬間青年の斬撃が飛びグレートマジンガーから北斗たちを叩き落した。

『フュージョン！！』

咄嗟にフュージョンし北斗たちを無事に下ろす紫と鉄也。鉄也達が舞い降りると地面から天界生物が現れ始めた。

『貴様・・・一体？』

鉄也がマジンガーブレードを構えると天界生物が鉄也と紫に襲い掛かった。

ダグベース

「え？次元反応？」

シャマルがダグベースのレーダーに次元の歪みを観測した。

ヴォルフガングが先ほど完成させた次元観測機によって次元跳躍の座標が大体読めるようになった。

「みんな！出撃準備！ザフィーラとボンバーズはダグベースの防衛で待機」

『シャドージェット・・・行ける』

『よっしゃ！俺達も行けるぜ！！』

『飛龍行けるぞ！アルトいけるな！？』

『了解！』

『ＯＫ！グレンダイザーいつでも行ける！！』

「よし・・・発進！！」

ダグベースから発進される竜、チームアルフェリス、飛龍、グレンダイザーが発進シークエンスに入る。

『いいかお主らこの座標に向かえば無事に世界跳躍できる！ただし戻ってこれるのは・・・今から１時間半じゃ・・・それ以上を過ぎたらしばらく戻れんぞ』

ヴォルフガングの作った次元観測装置で座標と戻ってくる時間を指

定するヴォルフガング。

シャマルもビルガーに乗り込んだ。

『それじゃ・・・発進!!』

ダグベースから勇者達が発進され指定されたポイントまで飛んだ。

『あれか?』

『行くぜ!!』

ビルガーを筆頭に次元の歪みに突入する勇者達だった。

天界生物と戦闘している鉄也と紫。

『グレートタイフーン!!』

『雷撒蛇!!』

鉄也の竜巻と紫の雷が天界生物を飲み込んだ。

『アトミックパンチ!!』

『子月斬!!』

倒しても倒しても切がない天界生物に鉄也と紫は地上の援護に行けない。

地上では北斗、キャロ、エリオ、霧風、そして先ほどの青年が対峙していた。

「・・・てめえ・・・一体何者だ？・・・この騒動の首謀者か？」

「さあどうだろうね～俺はスサノオ」

「スサノオ？」

「・・・確か・・・神話の神様・・・」

キャロの言葉に笑うスサノオ。

「ははは・・・よく知ってるねえ・・・まぁ俺の目的は君なんだけどさ」

「え？」

キャロを指すスサノオ。

「その子さ・・・八岐大蛇の器になってもらおうと思ってさ」

「八岐大蛇？」

八岐大蛇とはその昔スサノオが倒したといわれる蛇の化け物であり草薙の剣を生み出したとされる蛇の事。

「そ・・・そして八岐大蛇になってもらおうと思ってさ・・・まぁ

蛇なんだけど君達の竜と変わんないし・・・君のレアスキルもあって俺達も必要なんだ・・・まっ君が来ればこの場は大人しく去るよ」

「てめえ・・・その八岐大蛇を復活させてどうするつもりだ?」

「どうもしないよ~ただあいつが本能で暴れまくったら楽しそうだし」

「・・・気にいらねえな」

スサノオを睨み付ける北斗。

「おお怖っ・・いいじゃん血の繋がってない娘なんだからさ」

「キャロは『俺の娘』だ・・・文句あるか?」

「お義父さん」

迷う事のない北斗の言葉。その言葉にスサノオは笑った。

「あははっははは・・・居るよね~君みたいに馬鹿な奴って」

「黙れ・・・殺すぞ」

「ふふ・・・はあああ!!」

スサノオが神の姿を現し舞い降りた。

『さぁってその子を渡しなよ!いい器になるからねえ・・・この世の絶望のロンドだ』

「生憎・・・てめえにやるもんはねえ」

銃を構える北斗にスサノオは笑った。

『アハハハハ・・・わかったよ・・・んじゃ力ずくでもらっちゃうよ』

「おもしれえ・・・アジャスト!!」

北斗のクリスタルが割れると鎧が構築され仮面が纏う。

「来い!黄竜!!」

北斗が陣を描くと黄竜が召喚され北斗の元に舞い降りる。

「フュージョン!!」

北斗と黄竜と一体化すると人型になり舞い降りる。

『竜神!北斗!!・・・四神招来!!』

北斗が鎧を召喚しようとしたそのときだった。

『なに?』

召喚陣がかき消されてしまう。

『どういうことだ?』

北斗が空を見上げると空間が捩じれ始めている。

『君の召喚魔法を封じたんだ・・・まぁ・・・いかに宇宙伝承の秘宝でもこの空間に入る事はできないね』

『・・・ほお』

『あれ?その姿でやる気なんだ?』

『てめえ相手にはこれで十分だ』

竜神の姿でスサノオと対峙する北斗はそのまま飛び掛った。

『龍駕一閃!!』

北斗の拳を受け止めるスサノオはそのまま剣を抜いた。

『ふん!』

『ぐ!!』

スサノオの一閃に吹き飛ばされる北斗はそのまま体制を立て直し蹴りかかるとスサノオに一撃を入れた。

『へえ?他の雑魚よりは少しはやるんじゃない?』

『・・・生憎・・・地球のヤクザなめんじゃねえぞ』

『へえたかがヤクザがねえ!!』

スサノオの剣を受け止める北斗はそのまま蹴りを入れるがスサノオに効いた気配はない。

『穏・摩・爾・香・・・・森羅万象!!』

北斗の気力技森羅万象が放たれるがスサノオは剣で弾き飛ばした。

『へえ?全然効いてないね~ついでに言うと俺はまだ実力の１０分の１も出してないんだよ』

『減らず口を・・・木・火・土・金・水・・・五つの理・・・五行・・・五色の燐光!!』

五色の気が放たれるがスサノオにはまるで効いていない。

『んじゃ・・・そろそろ飽きてきたし・・・死んでもらおうか!!』

『なに!?』

『死んでよ!!』

スサノオの姿が消え北斗の身体に剣の斬撃を浴びせた。

『・・・何・・・』

胴体を斬られ倒れる北斗。

『さって死になよ!!』

斬撃の乱れ打ちを放つスサノオ。北斗の身体に剣の傷が刻み込まれ

ていく。

「お義父さん!!」

キャロが叫ぶと爆発が起き竜神の姿を保てなくなった北斗はそのまま砂漠に倒れるのだった。

「お義父さん!お義父さん!!」

北斗に駆け寄り必死に北斗の身体をゆするキャロ。ダメージがひどすぎる北斗は何も言わない。

するとスサノオが・・・

『どうする・・・後は君の誠意しだいだよ・・・君が八岐大蛇の巫女になればその金髪は助けてあげるよ』

「・・・わかった」

キャロは決意しスサノオの前に立った。

『キャロ!止めろ!く!!』

『止めなさい!!』

鉄也と紫も止めようとするが天界生物の攻撃に足を止められてしまう。

「キャロ!!」

エリオがキャロに向かって叫ぶとキャロは呟いた。

「・・・エリオ君・・・もしもの時は・・・お願い・・・」

そう言うとキャロはスサノオにその身体を差し出した。

『さぁ八岐大蛇・・・この竜の巫女の身体を食らえ!!』

スサノオがキャロの身体に陣を描くとキャロの身体の中に無数の頭を持った蛇が吸収される。

「ううう・・・あああああああああああああああああああ!!!」

納まりきらないオーラがキャロの身体から放たれた。

『さあって・・・あとは好きにしな八岐大蛇・・・こいつら殺しちゃいなよ!!』

『うあああ!!』

キャロの身体を支配し始める八岐大蛇の意思は天界生物達をなぎ払うと紫を殴り飛ばした。

『く!!!』

蹲る紫。

『ち!やはり貴様騙したな』

スサノオをにらみつける鉄也だがスサノオは笑っている。

『ああ！そうだ！！それじゃ俺はここで！！』

そう言ってスサノオは姿を消した。

『ま！待て！！』

鉄也がスサノオを追おうとしたその時だった。

『ぐ！！』

凄まじいオーラを纏ったキャロに殴り飛ばされてしまったグレートマジンガー。

『キャロ？』

「キャロ！！」

エリオがキャロに向かって叫ぶとキャロは涙を流しながら言った。

「お願い・・・殺して」

「・・・キャロ」

その言葉に意を決したようにストラーダを構えるエリオと・・・その言葉に耳を傾ける男。

『エリオ！』

「来ないでください！！」

『なに?』

エリオに止められるキャロ。

「ここは僕に任せてください」

男の意思に火がついた事に鉄也はエリオに任せるのだった。

（キャロ・・・必ず助ける・・・）

そう決意しエリオは踏み込むが・・・

「!!」

エリオを遥かに上回るスピードで八岐大蛇と化したキャロに吹き飛ばされる。

「!!な!!」

避けようとしてもキャロのスピードが速すぎる為エリオは吹き飛ばされてしまう。

「く!!」

身体をコントロールが出来ないキャロこのままではエリオが殺されてしまう。

その時だった

ズドン！！

渇いた音に振り返った。そこには・・・

空に向かい銃を構えた北斗の姿が・・・

（馬鹿な・・・あいつはあの身体で立つのか）

それを見ていた鉄也も驚いていた。致命傷に近い傷を受け立ち上がった北斗の姿に・・・

「・・・・・・・・・・」

何も言わずキャロを睨み付ける北斗はキャロに銃口を向けた。

（馬鹿な！あいつは自分の娘に銃を向けるのか！？）

北斗の目は確実にキャロを殺す気でいる目であることに気づく鉄也。

コントロールの出来ない身体で北斗を見るキャロ。

「・・・お義父さん」

「・・・来いよクソ娘・・・今殺してやる」

キャロに銃を向ける北斗。

「う・・うあああああああああああああ！！」

八岐大蛇のオーラを纏い北斗に殺される為に飛び掛るキャロ。

北斗の銃口にキャロが頭を突きつけようとしたその時だった。

ハラリ

力無く銃を落とす北斗はキャロを受け止めた。

「・・・ばぁか・・・テメエに使うような無駄弾なんて持ってねえんだよ・・・」

キャロの頭を掴み取る北斗。

「・・・おおおおおおおお・・・・・・・」

キャロの身体に気力を一気に注ぎ込み八岐大蛇のオーラを洗い流す北斗。

「・・・おおおおおおおおおおおおおお！！！」

キャロの身体から八岐大蛇のオーラを吹き飛ばした北斗。

「う・・あ・・・」

北斗の胸に倒れこむキャロ。

「・・・手間かけさせやがって・・・」

今度こそ意識を失う北斗だった。エリオと霧風が北斗とキャロに駆け寄りそれを見ていた鉄也は・・・

『・・・たくただの馬鹿か』

そう言って呆れる鉄也その時だった。

『なに？』

紫があることに気づいた。キャロから噴出された気が実体を持ち始め無数の頭を持った蛇と化した。

『キシャアアアアアアア！！！』

『ち・・・あれが・・・八岐大蛇か』

鉄也と紫が八岐大蛇に対峙するのだった。

第五話　親娘（後書き）

現れた八岐大蛇・・・早く倒さないとお義父さんが持たない・・・
どうすれば・・・黄竜？私に力を貸してくれるの？思えば竜は答えてくれるなら・・・私に力を貸して

次回！勇者大戦ブレイブサーガＡ，ｓ　フュージョン

これが・・・竜神の力？

第六話　フュージョン

空間を超えた勇者達が光景を見て驚愕した。

「あれって・・・」

ビルガーの中のシャマルが見たのものは無数の頭を持った蛇と対峙しているグレートマジンガーと紫の姿が・・・

第六話　フュージョン

「みんな！合体よ！」

『時空合体！アルフェリス！！』

『機獣合体！シャドーダグオン！』

『チェンジ！飛龍！』

『ダイザーゴー！！』

シャマルの号令に人型になる勇者達。

『デューク・フリード！』

『鉄也君!!』

グレートマジンガーと並び立つグレンダイザー。すると八岐大蛇が無数の頭をうねらせ勇者達に襲い掛かった。

『切り刻んでやるぜ!かまいたち!!』

ユウの紅からかまいたちが発せられ八岐大蛇を切り裂くがすぐに傷口が塞がってしまう。

『効いてねえのか?』

『カゲムラサキ!!』

『マジンガーブレード!!』

八岐大蛇の首の両サイドを斬りつけるシャドーダグオンと鉄也だが・・・

『ち!再生しやがった!!』

『どういうことだ?』

鉄也とシャドーダグオンも混乱している。

キャロも立ち上がり召喚魔法を展開した。

「ヴォルテール!」

キャロがヴォルテールを召喚すると八岐大蛇と対峙した。

「お願い！お義父さんをみんなを守って！！」

『グオオオオオオオオオオオ！！』

キャロに応えるヴォルテールは光線を吐くが八岐大蛇は効いていない。

再びヴォルテールは殴ろうとしたが八岐大蛇から触手が放たれ縛り付けられた。

「行くよ！フリード！！」

エリオがフリードに跨り八岐大蛇に向かって飛ぶが八岐大蛇の首がフリードを絡めとった。

『ぐ！！』

締め付けられるエリオとフリードだが・・・

『ダブルハーケン！！』

八岐大蛇の首を斬りおとす大介。するとある事に気づいた。

『再生しない？』

『首を完全に切り落とせば再生しないのか！』

その瞬間。

『クラッシャー・・・フィスト！！』

アルフェリスの拳が八岐大蛇の首に突き刺さると膨張を起こし爆散する。

『アルト！照準よろしく！』

『ＯＫ！』

アルトがゲイル・ファングの照準を合わせるとロックオンする。

『メテオブレイカー！！』

八岐大蛇の首を吹っ飛ばすユウとアルト。

『氷結の風！！』

八岐大蛇を氷付けにする紫。

だが

『う！！』

『く！！』

次々と現れる触手に拘束されてしまう勇者達。

『ぐううおおお！！』

引き千切ろうとするが弾力を帯びている触手は締め上げるだけだ。

『アルト！景気よくかましたれ！！』

『ＯＫ！！』

飛龍から発射されるミサイルに八岐大蛇はダメージを負うが苦し紛れに締め付けを強くする。

それを見ていたキャロは・・・

「・・・どうして・・・どうして肝心な時に私はこうなの・・・どうして」

無力感に苛まれるキャロ。

「私も助けたい・・・みんなを守りたい・・・力が欲しい！！」

キャロの隣で倒れている北斗。

そして八岐大蛇がキャロと北斗を捕らえた。

『キャロちゃん！』

紫の叫びも虚しく八岐大蛇はキャロに標的を定めると・・・

「獏龍刃！！」

霧風が気力を解き放ち八岐大蛇に攻撃する。

「霧風君！」

「姉上！父上連れて逃げろ！！はぁぁ・・・」

気力をひねり出しキャロと北斗を逃がそうとする霧風だが八岐大蛇は巨大な身体で霧風を吹き飛ばした。

「ぐう！」

「霧風君！！は！！！」

キャロに八岐大蛇の光線が吐き出されたその時。

『グオオオオオオオオオ！！』

金色の雄々しい竜がキャロと北斗を守った。

その竜は・・・

「黄竜？」

キャロと北斗を守るように渦を巻いている黄竜。

そしてキャロの脳裏に思い出された言葉。

（思えば竜は応えてくれる）

「！！」

その言葉を思い出し黄竜を見つめるキャロは何かを決意し立ち上がった。

「私はお義父さんを・・・エリオ君を・・・みんなを守りたい・・・
お願い・・・黄竜・・・私に力を貸して!!」

黄竜はキャロを見つめると光波を出した。その光波に包み込まれる
キャロ。

そして

「フュージョン!!」

キャロが黄竜と一体化すると人の姿になった。

北斗の戦う姿・竜神になるキャロ。

『これが・・・竜神の力』

自分の身体に流れ込む竜神の力に驚くキャロ。

『キャロが・・・』

『まさか?』

契約した守護者以外が出来るはずのない守護獣とのフュージョン。

だがそれをやったキャロ。

『お義父さんほど上手くできないけど・・・はあ!!』

竜の爪を装着し縛られているフリードの触手を切り解放した。

『グオオオオオオ！！』

フリードは咆哮をあげると竜神と化したキャロに吸収された。

『なに？』

『まさか・・・ダーリンのファイナルフュージョンをやる気じゃ』

キャロが光り輝き進化を始めた。

そして覚醒する翼を持った白銀の翼人。

『翼竜神！！』

翼竜神の胸の竜が咆哮を上げると・・・

『ブラストフレア！！！』

キャロからフリードの技が放たれると燃え上がる八岐大蛇。

『はあああ！！』

そして舞い上がり真空刃で勇者達の拘束を外すキャロ。

『鉄也さん！！』

『任せろ！！行くぞ！デューク！』

『わかった！！』

グレートマジンガーとグレンダイザーが並び立ち八岐大蛇に向かって稲妻が飛んだ。

『『ダブルライトニングバスター!!』』

『ギスヤアアアアアアアアアアああああ・・・・』

グレートマジンガーとグレンダイザーの稲妻が八岐大蛇を飲み込む。

そして

『お義父さんほどじゃないけど・・・やる!!』

両手を合わせるキャロ・・・その技は

『穏・摩・爾・香・・・森羅万象!!!』

『ウア・ガアア・アアア・』

キャロから放たれる北斗の最大の気力技に八岐大蛇は消滅させるのだった。

『やったな!』

グレートマジンガーがキャロに駆け寄ると・・・

『あ・・・あぁぁぁぁぁぁ・・・・』

力を使い果たしフュージョンが解除されるキャロだった。

数時間後のダグベース

「あ・・れ？」

医務室で目を覚ますキャロは身体に何かが巡るのを感じ取った。

「これって・・・」

「目が覚めた？」

「シャマル先生！！」

ベッドから飛び起きるキャロ。

「心配したのよ～羅刹一族じゃないのにフュージョンなんかするから・・・しかも北斗さんの神クラスの守護獣と・・・」

「あう～」

軽率だと思ったのか反省するキャロ。

「とりあえず説明するとね・・・あの後みんなであなた達を抱えて時空の扉を越えたの・・・今グレートマジンガーもフリードやエリオ君も治療中」

医務室で身を固めているフリードとヴォルフガングに整備されるグレートマジンガー。

そしてキャロがあることに気づいた。

「あの！お義父さんは？」

「大丈夫大丈夫～北斗さんあの力君と互角に喧嘩する人よ～生命力もゴキブリ超えてるから～」

見たところ致命傷を抱えていた北斗の傷にキャロは・・・

「あれを治したんですか？」

「・・・致命傷の治療なんて力君で慣れたわ」

あさっての方を向いて語るシャマル先生。今回ばかりは次元世界最悪の悪魔に感謝するキャロだった。

「さって・・・エリオ君入ってきたら？」

「は・・はぁ・・・」

ばつが悪そうな顔で入ってくるエリオ。

「エリオ君?どうしたの?」

「いや・・ちょっと・・情けないというか・・・何と言うか・・・」

「え?」

「キャロの事任されたの僕なのに・・・結局キャロを助けたのは北斗さんだし・・・」

「たく・・・柄にも無くしょぼくれるな」

エリオの後ろから入ってくる鉄也。

「鉄也さん・・・」

「悔しいなら・・・あいつより強くなれ」

鉄也の明快な言葉にエリオは・・・

「そうか・・それでいいんだ・・・よし!僕北斗さんより強くなります」

「だからってウチのお義父さんみたいに銃乱射しないでねエリオ君」

「やるわけないよ!!」

一同大爆笑すると

「・・・おい」

身体中包帯だらけの北斗がユウとアルトに引き連れられ医務室に入ってきた。

「お義父さん！はう！！」

キャロが逃げようとすると鉄也に掴まれた。

「非常時とはいえ無茶をしたんだ・・・怒られて来い」

鉄也に北斗の前に出されるキャロ。北斗はユウとアルトの肩を離れると壁に寄りかかった。

勝手に自分を犠牲にし仲間を傷つけ勝手にフュージョンしたキャロは正直バツが悪い。

「・・・お義父さん」

しょぼくれた顔のキャロをジーッと見る北斗。

「・・・ビール」

「へ？」

「ビール」

「は・はい！」

急いでダグベースの冷蔵庫から缶ビールを持ってきたキャロは北斗

に渡すと申し訳無さそうな表情でいっぱいだった。

缶ビールに口を付けると深刻そうなずっと北斗を見ているキャロ。

そして

パチン！！

キャロの頭に何処から出したのかハリセンが降り注がれた。

「このアホ娘！いつまでもシケた面下げてんじゃねえ！！後のこと考えろっていつも言ってんだろうが！！」

「はうはうはうはうはうはうはう！おおお義父さんごめんなさい～」

はうの度にハリセンで頭叩かれるキャロ。

「あ～ウチのフェイト隊長が見たら北斗さんの事殺しかねねえぞあれ」

「だね」

どうみても虐待しているようにしか見えない北斗とキャロの光景を見ながらユウとアルトは呟いた。

「痛っ～」

頭にタンコブが出来るキャロ。そして気を取り直した北斗は・・・

「たく・・・もう少し休んだら俺も復帰する」

傷を負い戦いに復帰することを決意する北斗だが・・・

「え?けどお義父さんその傷じゃそんなに・・・」

「娘を守るのも親だ」

しかめっ面の北斗の言葉にキャロは・・・

「けど・・・親を守るのも娘の役目です!!」

「あ?」

「私が竜神で戦います」

「「「「なにーーーーー!!」」」」

その言葉に絶叫する北斗いか勇者達。

「いや・・・キャロ・・・こんなアホ親父の為に身体張らなくていいんだぞ」

「そうそう!」

ユウとアルトが必死に止めるが・・・

「・・・こんなお義父さんですけど・・・肝心なところで私の事信じてくれるお義父さんなんです!!」

その言葉に北斗が反論する。

「てめえな・・・いいかげ「パパって呼んじゃうよ」ゾクゾク！！」

キャロのパパという言葉に蕁麻疹になる北斗。

するとエリオが北斗の身体をパシンと叩いた。

「ぐ！！」

痛みを堪えている北斗。するとエリオは・・・

「そんな身体じゃ戦えません・・・大丈夫です！キャロのことが心配ないように僕が絶対に守ります！！」

エリオの宣言に北斗は・・・

「てめえウチの娘傷ものにしたら殺すぞ」

「わかってます・・・わかってますから銃向けないでください」

こうして北斗の代理としてキャロが竜神となって戦うのだった。

第六話　フュージョン（後書き）

やっと地球に辿り着いた・・・ブレイブダグオンの・・・力さんのことを伝えなければ・・・く！また追っ手か！！

次回！勇者大戦ブレイブサーガＡ’ｓ　太陽の勇者

あなたは？

第七話　太陽の勇者

ダグベース

「何・・・俺に炊事をしろだと・・・」

超しかめっ面で嫌そうに紫の提案を聞く北斗。

「だって私たち戦わないといけないし～ダーリンまだ療養中だし暇そうだし黄竜はキャロちゃんが使うから～働き口ないから家事やれ家事」

「てめえ死にてえらしいな」

「嫌ならキャロちゃんに頼んで今度一切『パパ』って呼んで良いって言っちゃうよ」

「ゾクゾク！！・・・てめえ」

こうして蕁麻疹を放ちながら北斗が炊事当番をやることになった。

翌朝

「おあよう・・・あ・・・なんかいい匂いが・・・」

寝ぼけ眼のケンタがダイニングルームに着くとそこには・・・

「何これ」

板前のまかない飯顔負けの朝御飯が並んでいた。既にテーブルについているシャマル達。

「・・・美味しい・・・ちゃんとお出汁取ってる・・・」

「あぶり加減もいい感じ」

吸い物と焼き魚を食べているシャマルとアルト。

「てか・・・北斗さん何処でこんなの覚えたんだ?」

ユウが聞いてみるとキャロが言った。

「うちの朝御飯いつもこんな感じです」

漁師を始めた北斗が職業柄、釣った魚をその場で調理したり和出汁の取り方など魚料理を覚えた北斗。

「へえ~いいな~ユウ~私にも今度作って~」

「・・・断る」

そう言って吸い物を飲むユウ。今度はジーッと北斗のほうを見るが・

・・

チャキ

「・・・・・」

無言の圧力に黙るアルトだった。それを見た鉄也は・・・

「大人気なく女に銃を向けてんじゃねえ」

「・・・ほうテメエから先に死にてえらしいな」

ズドンズドンズドン！！

「ああ～もう朝っぱらから銃撃戦しないでよ」

ケンタももう北斗の銃撃活動に慣れてしまったようだった。

「人間のなれとは怖いね」

「・・・そうだな」

「全くです」

大介、ザフィーラ、エリオの順に会話が進む。ダグベースチームの良識人だった。

「ていうか北斗さん漁師じゃなくて猟師のほうが向いてるんじゃない？」

「まぁ姉貴が弾横流ししそうな気がする」
焼き魚食べるアルトとユウだった。

オペレートルーム

「ふう～お腹いっぱい～北斗さんの意外な特技ね～性格に問題ありだけど～」

その時レーダーが何かを捉えた。

「ん?この識別反応・・・味方・・・これは!!みんな!!」

オペレートルームに八神組のメンバーとケンタを集めるシャマル。

「シャマル先生!どうしたの?」

ケンタが聞くとシャマルは答えた。

「今仲間がこのエリアに着たわ」

「だれ?」

「ケンタ君もよ～く知ってる人」

「まさか・・・兄ちゃん!?」

頷くシャマル。身内が訪れた事にケンタは落ちついた。

「このポイントだから・・・私たち八神組が出動します」

「そうか・・・なら俺達はダグベースの防衛で残ろう」

「・・・俺も今回はダグベースに残ろう」

鉄也と竜の提案にダグベースの防衛は任される。

準備が整いダグベースからビークルが発進された。

『ケンタ・・・狭くないか?』

「大丈夫・・・俺も早く兄ちゃんに会いたい!!」

『わかった』

ケンタがビルガーに乗り込み火鳥が居ると思われるポイントに向かった。

海鳴の荒野

『・・・やっと辿り着いた』

地球に辿り着いたファイバードが力の言葉を伝えるべく通信を取った。

『こちら宇宙警備隊ファイバード！応答願います！博士！ドクター！』

天野平和科学研究所に連絡を取ろうとするが通信が繋がらない。

『・・・研究所は一体・・・』

今度はダグベースに連絡を取ろうとしたその時だった。

『！！』

空から銃撃されるファイバードは咄嗟に攻撃を避けた。

『く！まだ追っ手が・・・・』

ファイバードが空を見上げると次々と現れる天界生物。今のファイバードは力を出し切れず損傷も激しい。

『く！！』

フレイムキャノンで応戦するが天界生物が多すぎる。天界生物は地上に降りるとファイバードを殴りつけた。

『ぐああ！！』

吹き飛ばされるファイバードは立ち上がるが天界生物に囲まれる。

『く！！』

ファイバードが立ち上がったその時。激しい稲妻が起こった。

『これは・・・』

ファイアバードが空を見上げると・・・

『お待たせしました！』

『あなたは！』

『雷鳴合体！！』

サンダーシャトルが人型に変形するとダグサンダーが装填され頭部に三日月の角が現れた。

『サンダァァァダグオン！！』

ファイバードの元に降り立つサンダーダグオン。

『サンダーダグオン！』

『ファイバード！大丈夫ですか！？』

『どうしてここに？』

『今は奴らを倒しましょう！』

サンダージャベリンを構えるサンダーダグオンとフレイムソードを構えるファイバード。

サンダーダグオンの介入により形成が流れ始めた。

次々に来る天界生物を撃墜していくファイバードとサンダーダグオン。

その時だった。

『うあああ！！』

『サンダーダグオン！！』

サンダーダグオンが翼を持った戦士に吹き飛ばされた。

その戦士は

『貴様は！？』

ブレイブダグオンを倒した戦士だった。

『人間が・・・我ら神に逆らうとはねえ』

翼を持った戦士はそのままファイバードに斬りかかるとファイバードはフレイムソードで受け止めた。

『へえ・・・あの馬鹿よりは強そうだね』

『なに？』

『あっけなかったよ・・・あの馬鹿は！！』

『貴様あああああ！！』

戦友を馬鹿にされたファイバードは怒り戦士を押し返した。

『フレイムソード・・・チャージアアップ！！』

不死鳥が舞い戦士に向かって突進するファイバード。

『ぬおおおおおおおおおおおおてえええええええええい！！！』

ファイバードの一撃が戦士に浴びせられる。

膝を着く戦士。

『やったか？』

振り返るファイバードだが戦士は笑っていた。

『ははははは・・おもしろい・・・面白いよ！！こうじゃないとな！！』

戦士には余裕すら感じられる。戦士が立ち上がったその時。

『光速拳！！』

上空から光速の拳が放たれ戦士を引き離した。

『みんな！！』

ファイバードが見上げるとアルフェリス、シャマル、ザフィーラ、竜神のキャロ、紫が舞い降りた。

『八神組到着！！』

『みんな！！』

『へえ・・・おもしろうそう・・・神に逆らうとはね』

戦士が舐めるように勇者達を見るとアルフェリスが答えた。

『へっ！地球のヤクザ舐めんな！』

『地球のヤクザねえ・・・あの馬鹿もそう言って死んでいったねえ』

『なに！？』

地球のヤクザという馬鹿・・・それは力以外の何者でもない。

『まぁ・・・今日は面白くなら無そうだから今日は引いてあげるよ』

『待て！逃げるのか！？』

『あははは・・・じゃあね勇者さん！！』

そう言って翼を持った戦士は舞い上がり去っていってしまった。

そして倒れているサンダーダグオンを保護しダグベースに帰還するのだった。

ダグベース

火鳥が宇宙で起きた事を話し、シャマルは火鳥に地上の出来事を話した。

「そうですか・・・地球ではこんな事が・・・」

そして火鳥がケンタに研究所の出来事を聞いた。

「ケンタ・・ヴィヴィオや博士は?」

「ヴィヴィオとじいちゃん達は・・・空間を・・・」

「そうか・・・頑張ったな」

ケンタの頭に手を置く火鳥。

「それで・・・力君は?」

シャマルの質問に重い表情になる火鳥。

「力さんは・・力さんは・・・」

苦しい表情の火鳥は決意した。

「力さんは！！」

力の最後を伝える火鳥。

それを聞いたシャマル達八神組のメンバーは・・・

「まっどうせすぐ戻ってくるでしょ♪」

「へ？」

シャマルの心配の欠片も感じない対応に素っ頓狂な表情になる火鳥。

「力君が簡単に死ぬわけないって～」

手をヒラヒラさせるシャマル。

「あいつを殺せた奴がいるなら是非ともお目にかかりたいものだ」

腕組んで答えるザフィーラ。

「力さんは死んでも自力で生き返ることが出来ます！！」

付き合い長いせいと北斗の影響で心配の欠片もないキャロ。

『まっ・・・何と言うか・・・あいつ死になれたせいか今更あいつが死んだなんて聞いて驚く俺達じゃないし』

ウンウンと首を縦に振るチームアルフェリス。

「まぁ・・・一つ言えることは・・・あいつは自分勝手に死ぬような奴じゃねえ・・・邪悪神のときも生きて帰ってきたからな」

そういう北斗。

「大丈夫だって火鳥兄ちゃん♪力兄ちゃんを殺せた奴なんて居たらなんて俺だってあってみたいよ」

「ケンタ・・・そうか・・・そうだな・・・肝心な事を忘れていた・・・力さんは約束を残して死なない」

そう言って力を信じる火鳥だった。

「そうそう大体力君は『魔王』って呼ばれるなのはちゃんと『死神』って呼ばれるフェイトちゃんが本気以上出して非殺傷設定や対物設定解除してまで殺せなかった人よ～『神如き』が殺せるわけないじゃない～」

（（（『神如き』って力はドンだけ化けもんなんだ？））））

内心そう突っ込むユウと鉄也だった。

「まぁ～相手が神様だって結局は私たち八神組流の出たとこ勝負で聞くしかないのよね～」

一人納得するシャマル。そして北斗が手を叩いた。

「こういう時は食事だ・・・・食って気分転換だ」

「あ！お手伝いします」

火鳥が立候補をするが・・・

チャキ

「やめろ殺すぞ」

北斗が銃を火鳥に向ける。

「人に銃を向けては行けませんよ」

「わああ！！」

危うく貴重な武器を火鳥に折り曲げられそうになった為ケンタとザフィーラが火鳥を止めた。だがとめた理由はそれだけではない。

（（（命に関わる！！））））

知っている人は知っているのだった。

魚を煮ている北斗。もう味付けは出来ていた。

「出来ましたか？」

「火鳥・・・ああ・・・もう出来た」

「皆さんを呼ばなくていいんですか？」

「あ？・・・しかたねえ奴らを呼んでくるか」

そう言って北斗がダイニングルームを離れると火鳥が鍋の中身を味見した。

「ダメだ。これじゃ栄養が足りない」

結果

「ふ～お腹空いた～」

そう言ってダイニングルームに続々と入ってくる勇者達だが目の前の光景に絶句した。

「あ！皆さん！これなら栄養の配合バランスは完璧です♪」

目の前には鍋に冷蔵庫のもの全てぶち込んだ火鳥の姿が・・・

「・・・てめえ一般家庭の３日分の食料を」

チャキ

火鳥に銃向ける北斗。

「ですから人に向けて銃を構えてはいけません」

「・・・断る」

「なら」

「・・・おもしれえ」

こうして北斗と火鳥のバトルを尻目に鍋の中身をがんばって処理した勇者達だった。

・・・だがシャマル以外が倒れたのは言うまでもない。

宇宙

巨大な青いジェット機が何かを探していた。

『何処に居る・・・力・・・』

第七話　太陽の勇者（後書き）

ヴォルフガングさんがブレイブパワーの集結地点を見つけた。私たちの力を取り戻すべくすぐに調査に向かったけど・・・このモニュメントは一体？・・！！スサノオと戦う？

次回！勇者大戦ブレイブサーガＡ’ｓ　調査

とりあえず前段階に進む！！

第八話　調査

ダグベース

「ふむふむ」

ヴォルフガングが必死にコンピュータを弄ると何かを検索した。

「なるほど・・・これは」

何かを発見したヴォルフガング。

第八話　調査

ブリーフィングルームに集められるメンバー。

「じいさんどうしたんだ？」

ヴォルフガングに問いかける鉄也。

「ふん。口の減らぬ若造が・・・これを見ろ」

ヴォルフガングがモニターに現したのは何かの線がある一点に集中している様子だった。

「これがどうしたんですか？」

アルトが聞いてみるとヴォルフガングが続けた。

「これはお主らのブレイブパワーじゃ」

「え？」

思わず声を上げる大介。

「ここにダグベースがあるじゃろ・・少なくともダグベースに勇者が集中している事を計算に入れて算出したんじゃ・・・」

「じいさんこれどういう事なんだ？」

ユウが質問するとヴォルフガングがある可能性を示した。

「ここにお主らのブレイブパワーが集まっているっちゅうことはお主らの力が出せない理由も分かるかもしれんちゅうことじゃ・・・見てみろ」

既に場所を算出し映し出すヴォルフガング。

「これはわしが開発したスパイ衛星の映像じゃ」

「山脈地帯ですね」

エリオが呟くと話を続けた。

「こんな広い山が海鳴にあるのか？」

見たところゴツゴツしている岩山。

「まぁ・・・この山も空間の歪みによってあらわれたもんじゃ・・・この中心の映像を見ると・・・」

岩山の洞窟に入り中を調査すると何かのモニュメントのようなものを見つけた。

「なにこれ?」

「わしの推測が正しければこれがお主らのブレイブパワーを吸収しちょる」

もっと接近させてみようとするヴォルフガングすると　スパイ衛星が何者かに掴み取られた。

『よお勇者』

モニターに現れるスサノオの姿。

「スサノオ」

「安心せいこっちの声は向こうに入らん」

『まぁ良い・・・お前らここに来るんだろう?ちょうど暇だったんだ・・・遊びに来いよ・・・殺人ゲームを再開させろよ!!』

そう言ってスパイ衛星を握りつぶすスサノオ。

ブリーフィングルームにて

「待った無し・・・罠を仕掛けてやがるな」

そう言う鉄也に対し竜が答えた。

「面白い・・・それならそれで乗ってやろうじゃないか」

「んじゃ～作戦会議～」

シャマルがモニターにマップを表示する。

「まずここのエリア」

シャマルが地図を指した。

「まず私たちロボット組が正面から乗り込んで天界生物を誘い出す・・・そのスキに火鳥さん、竜さん、雷さんたち等身大で戦える勇者組が洞窟から潜入・・・で中枢まで行って」

『うんうん』

全員がその先を聞くとシャマルは・・・

「後はみんな各自適当にやって♪」

ズッコーン!!

鉄也、大介、ユウ、アルトがずっこけた。

「シャマル先生！それで良いんですか！！？」

アルトが思わず突っ込んでいるとシャマルは手をヒラヒラさせて言った。

「だって～私たち結局八神組だし～いつも作戦なんて段取りだけで立てたことないし～第一作戦なんて立てたって私たちのメンバーで言うこと聞く人居ないし～私たちいつも行き当たりばったりでやってたし～」

（（（（（そんな無計画でよく地球の平和が守れたな））））））

意気揚々としているシャマルに唖然とする鉄也、大介、ユウ、アルト。

「第一・・・いつもいつも日替わりでいろんな宇宙人が攻めてきたんだから作戦もくそもないわよ・・・結局・・・今度も私たち八神組流のいつもの出たとこ勝負で戦うしかないのよ～」

ちなみに勇者たちは

『俺も楓につき合わされて違和感ねえな』

ライオボンバーの意見

「・・・俺は飛鳥に付き合わされた」

竜の意見

「僕は楓さんですね」

雷の意見

「そうですね～力さんと一緒に戦うとそうなりますね～」

火鳥の意見

八神組に関わると神経図太くなるようです。

「お父さんの娘やってると慣れました～」

笑顔のキャロ。

（（（（（ああ～自分たちもこうなるのかな？））））））

八神組の体質が伝染すると思ってしまうメンバーだった。

そしてオペレートルームに入るシャマルたちは居ない司令官の席を空けたままダグベースを起動させた。

「それじゃあ・・・ダグベース!!発進!!」

「了解です!」

シャマルの指令で雷の操縦でダグベースはスサノオの山に向かうのだった。

スサノオの山

「来いよ・・・遊ばせろよ勇者～」

スサノオの山で勇者たちを待つスサノオ。

その姿はまるでどこからとも無く現れる勇者たちとの戦いを楽しみにしているようだった。

ダグベース

「おいユウ飛龍のメンテ終わったぞい」

「よっしゃ！次はシャドージェットだ！」

スサノオとの決戦に向けて念入りにビークルの整備をするヴォルフガング。

「くっそ～手が足りねえ～姉貴か楓さんなんでいねえんだ～」

頭を悩ますユウ。

「大丈夫！そんな時には私がいるもん！」

「おお～アルト～見栄張ってないで手動かせ～」

「ぶう～ニブチン！！」

などと漫才が続く中

「おい飯だぞ」

北斗がまかない飯を持ってきた。決戦に向けて英気を養い始める勇者たち。

そしてキャロは北斗のほうを見た。

「お義父さん私がんばります」

「・・・・・・」

何も言わない北斗にキャロは・・・

「がんばるから応援してねパパ♪」

「ゾクゾク！！」

蕁麻疹出る北斗はハリセンでキャロを引っ叩いた。

「はう！お義父さん痛い～」

タンコブのできた頭をさするキャロ。

「だから・・・俺を『パパ』と呼ぶなつってんだろうがこのピンクゴキブリ娘！！」

「ゴキブリ娘!?ひどい!私のどこがゴキブリ!?」

「何だこの触覚は!!」

キャロのあほ毛を指す北斗。

「お義父さんの・・・馬鹿あああああ!!」

そう言って何故か覚えた北斗の気力技で北斗を吹っ飛ばすキャロ。

「おお・・・てめえ相当死にてえらしいな・・・上等じゃねえか・・・」

この後銃を取り出した北斗を総当りで止めたのは言うまでもない。

別室で考え込む鉄也と大介。

「さってと神に喧嘩を売ることになるとはな・・・だが負けるわけにはいかない」

現在のグレートマジンガーにはオプションが無い。それはグレンダイザーも同じだった。

「そろそろ到着ね・・・みんな!発進準備!!」

【了解!!】

全員が発進準備に入るとダグベースがスサノオの山に降り立った。

ハッチが開きコンテナが現れる。

『チームアルフェリス！発進！』

コンテナから発進されるチームアルフェリス。そして次にハッチからレールが発進されると・・・

『アニマル特急！出るぜ！！』

ダグベースのハッチから発進するボンバーズ。

『飛龍！出るぞ！！』

ハッチから発進する飛龍。

そして

『マジンゴー！！』

『ダイザーゴー！！』

ダグベースから発進するグレートマジンガーとグレンダイザー。

「ダグベース・防御モード起動・・・ケンタ君！あとよろしく！」

「わかった！シャマル先生！」

「それじゃあ～あとは皆の創意工夫ってことで～」

ケンタにダグベースを預けるとシャマルたちも発進した。

上空を先行する鉄也、大介、ユウ。

地上部隊も山に入った。

『・・・この山に何があるのか・・・謎ね』

スサノオが根城にしている山に入る勇者たち。すると天界生物たちが姿を現した。

『やっぱり着やがったな！合体だ！！』

『『おう！！』』

ライオボンバーが上半身に変形するとバードボンバー、ダイノボンバーが背中合わせになり下半身に合体しライオボンバーと合体する。

『合体！トライボンバー！！』

完成するトライボンバー。

『『『時空合体！！』』』

合体フォーメーションのために手を組むビルガー、ボルト、ガンザーが合体を始める。ガンザーが上半身、ビルガーが腰、ボルトが足になり完成する銃士。

『アルフェリス！γ！！』

完成するアルフェリスγ。

「フュージョン！！」

黄竜がキャロを飲み込むと人型に姿を変え北斗の戦う姿・竜神になるキャロはそのままフリードを召喚し飲み込むと進化した。

『翼竜神！！』

合体メンバーが合体を完了すると天界生物たちは一斉に襲い掛かった。

『グラビティカノン！！』

『ボンバーミサイル！！』

襲い掛かってくる天界生物を撃破するアルフェリスγとトライボンバー。

『ブラストフレア！！』

翼竜神の炎が天界生物を飲み込んだ。

『ネーブルミサイル！！』

『ハンドビーム！！』

グレートマジンガーとグレンダイザーの連携に撃破される天界生物。

『おりゃあああ！！』

紅で天界生物を真っ二つにする飛龍。そこでふとユウが質問した。

『シャマル先生』

『な～に？』

『俺たち全員出撃でダグベース大丈夫なの？』

『心配要らないわよ～ダグベースには腐っても八神組最悪の五馬鹿の一人がいるんだから～』

特にダグベースを心配した様子の無いシャマルの言葉に、ユウの脳裏に浮かんだタレ目の金髪の銃構えた坊主。

『んじゃ心配ねえか』

『ユウ右から来た！！』

『あいよ！！』

アルトのナビで天界生物を攻撃するユウ。

その頃別働隊

竜と雷がダグテクターを装着し火鳥と共に別の洞窟からモニュメントに向かっていた。

「一見何の変哲も無い洞窟ですね」

「・・・油断するな」

雷の言葉に反応する竜そして火鳥が何かを聞き取った。

「二人とも！」

「「！！」」

火鳥たちの前に現れる等身大天界生物。

「お見通しってことかい！！」

「きます！！」

天界生物が飛び掛ると・・・

「うおおおおおおおおお！！」

火鳥のパンチが天界生物を吹き飛ばした。

「シャドー！クナイ！！」

竜が天界生物を切り裂き・・・

「でああああ！！」

雷が稲妻で天界生物をなぎ払った。

「急ぐぞ！！二人とも！！」

「「おう！」」

火鳥に先導され竜と雷は奥に進むのだった。

その頃

王座のような場所に座っているスサノオ。

「やっと来たか・・・待ってたぜ勇者・・・」

表にいる勇者たちを認識するスサノオ。

「俺は他の奴らと違って戦えればそれでいいんだ！！」

そう言うとスサノオは草薙の剣を持ち戦場に赴くのだった。

スサノオが居なくなったことにより手薄になった根城に入った火鳥たち。

「てあ！！」

天界生物を吹き飛ばすとモニュメントを見つけた。

「これは・・・」

「わかるか？」

「やってみます」

そう言ってモニュメントを調査する火鳥だった。

戦場

『アトミックパンチ！！』

『スクリュークラッシャーパンチ！！』

先陣を切った鉄也と大介の連係プレーで次々と撃墜されていく天界生物。

『うおおお！！』

ザフィーラが吼えると天界生物は足止めされ・・・

『新銀落花拳！！』

紫の拳が天界生物を貫いた。紫は単体でも合体したメンバーと同等の力を発揮するため区も無く戦える。

その時だった

『ぐおおお！！』

『うあああ！！』

吹き飛ばされる鉄也と大介。

その先にいたのは

『スサノオ』

剣を構え神の姿で現れるスサノオ。

『ははは・・・着たな～勇者～神に逆らうなんて無謀だね～』

余裕のスサノオに翼竜神は構えた。

『・・・スサノオ・・・お義父さんの仇・・・とります！！』

翼竜神がスサノオに飛び掛った。

第八話　調査（後書き）

スサノオと戦う私たちは絶対的な力の差に翻弄されます。このままじゃ・・・お義父さんの仇絶対とるんです!!え?火鳥さん?モニュメントが・・・これって!!

次回!勇者大戦ブレイブサーガA'ｓ　決戦スサノオ

力が戻った!!

第九話　決戦スサノオ

第九話　決戦スサノオ

『はあ！！』

翼竜神がスサノオに向かって拳を振り下ろすとスサノオはあっさり受け止めた。

『な！』

『よしなよお嬢ちゃん・・・慣れない戦いするもんじゃねえぞっと！！』

『うあああああ！！』

スサノオに殴り飛ばされる翼竜神。

『てめえ！！うおおおおおおお！！！』

トライボンバーがスサノオに殴りかかるがスサノオは次々と避ける。

そしてトライボンバーに剣を振り下ろした。

『ぐああ！！』

『トライボンバー！！』

『やろ！！』

立ち上がるトライボンバー。それを見たスサノオは・・・

『ほ～見上げた根性だな』

『うるせえ！！ボンバーミサイル！！』

ボンバーミサイルを避けるスサノオはそのままトライボンバーに飛び掛ると・・・

『相手はトライボンバーだけじゃないぜ！！』

紅を生成しスサノオの剣を受け止めるユウ。

『！！』

五分五分の斬りあいが始まると距離を置いた。

『ほお～性能の差を腕前でカバーしてるんだな』

『うるせえ！！』

『ユウ！気をつけてこいつ腐っても北斗さんを倒した奴だよ！』

『へ！神竜神にしねえってことはこいつ神竜神よりは弱いってことだよ！！』

『言ってくれるな！！』

力で押し切ろうとするスサノオの剣を真っ向で受け止めるユウだが徐々に押され始めた。

『く！パワーが・・・』

パワー負けし始める飛龍。

その時

『ユウ君！避けて！』

大介の声で回避するユウ。

すると

『スペースサンダー！！』

ユウが避けたタイミングと同じで大介のスペースサンダーがヒットする。

『ぐ！貴様！！』

今度はグレンダイザーに狙いを定めるスサノオ。

『ダブルハーケン！！』

ダブルハーケンでスサノオの剣を受け止めると力比べになった。

『ぐう！！うおおおおおおおおおお！！』

フルパワーでスサノオを押し返す大介。そのままスクリュークラッシャーパンチが飛ぶが回避するスサノオ。

『はやい・・・！！』

アルフェリスγの背後に現れるスサノオはそのまま斬りつけた。

『ぐあああああ！！』

吹き飛ばされるアルフェリスγ。

『まぁこの程度だよな～』

『数の上ではこっちが有利だぜ！』

そういう鉄也だがスサノオは笑った。

『有利？俺はまだ本気の１０分の１も出してないんだぜ？その金ぴか竜は弱い弱い』

『お義父さんを・・・』

『あ？』

『馬鹿にするなあああ！！』

翼竜神がスサノオに殴りかかるとカウンターパンチで静められた。

『あう！』

『ははは・・・せっかくの竜も一体化してるのがひ弱なお前じゃな～』

北斗のように上手くいかないことにあせるキャロ。

『んじゃ・・・本気でいくぞ！！』

次の瞬間スサノオの姿が消えた。

『！！うあああああああ！！』

トライボンバーが弾き飛ばされ

『うああ！！』

飛龍が吹き飛ばされ

『ぐおおお！！』

グレートマジンガーが吹き飛ばされた。

『はやい！なら！！』

シャマルが索敵しスサノオの動きを追うが早すぎる。

（だめ・・魔力も吸収されてるみたい）

スサノオの動きについていけないシャマルはあせる。

『く！紫ちゃん！上！！』

『ちゃんはやめえい！あたしゃ３０過ぎてんだ！！』

そう言って紫が飛び上がるとスサノオを受け止める。

『ほお～ちび子ちゃんよ～俺の剣を受けられるか～』

『亭主の落とし前つけるのが女房の役目ってね！！』

スサノオを弾き飛ばす紫は必殺の紫の気を発動させた。

『これでましには戦えるかな』

『おもしれえ！！』

スサノオが消えると紫の周囲に現れ切り裂いた。

『く！』

ひざをつく紫。

『どうだ？俺の剣は』

その言葉に紫は・・・

『なんだそのナマクラ！！』

『なに？』

『あたしゃねもっと強い聖剣を知ってる・・・この世に斬れぬものは無し！ダグセイバーをね』

『貴様！！』

『うあああああ！！』

そのまま剣を浴びせるスサノオ。

一方的な攻撃を浴びせるスサノオ。それを見た翼竜神は・・・

（どうして・・・お義父さんみたいに上手く出来ない）

（おいアホ娘）

その時北斗から翼竜神に通信が入った。

（お義父さん！！）

（俺みたいにやろうとしてんじゃねえ・・・てめえのやり方でやれ）

チンプンカンプンのキャロ。そしてふと見てみるとある人物が立っていた。

『おらよ！！』

するとスサノオから膨大なエネルギーが発せられ勇者たちを飲み込んだ。

倒れる勇者たち。

洞窟

火鳥がモニュメントを調べているとあることに気がついた。

「わかりました！」

「どうした？」

「このモニュメントは俺たちの力を吸収して空間異常を起こしていたんです」

その言葉を聞いた雷は・・・

「じゃあ・・・このモニュメントを壊せば・・・」

「我々の失われた力が戻り空間異常も納まるはず・・・」

「じゃあ早速・・・！！」

雷が何かを感じ取ると地面から巨大な天界生物が現れた。

「門番？」

「こうなったら！ファイヤー・・・ジェエエット！！」

火鳥のコールに飛来するファイヤージェットは変形を開始した。

そして火鳥の瞳の回路が唸りを上げた。

「はっ！！」

そのままダッシュすると不死鳥のように舞い人型になったファイヤージェットと一体化した。瞳が強く輝いた。

『チェエエンジ！ファーイバード！！』

ファイバードにチェンジする火鳥はそのまま第二形態に入った。

『フレイム・・ブレスター！！』

空から舞い降りるフレイムブレスターがそのままファイバードに合体し・・・

『フォームアップ！武装合体！ファイバード！！』

そして雷がサンダースロットルに乗り込み稲妻が起こった。

「融合合体！」

雷が飛び上がるとサンダースロットルが人型になり雷と一体化すると瞳が淡い緑に光った。

『ダグ！サンダー！！』

そして第二段階にはいった。

『カムヒア！サンダーシャトル！！』

ダグサンダーのコールに飛来するサンダーシャトル。

『雷鳴合体！！』

ダグサンダーの叫びとともにサンダーシャトルが人型に変形すると頭部が現れ胸に紋章が現れる。

『つあ！』

ダグサンダーが背中に装てんされると頭部に三日月が現れた。

『サンダァァダグオン！！』

降り立つサンダーダグオンとファイバード。

『ここは俺たちに任せて！竜さんはモニュメントの破壊を！！』

「わかった！！」

ファイバードの指示で竜はモニュメントに攻撃を仕掛ける。

「シャドークナイ！！」

シャドークナイが弾かれてしまう。

「ち！！」

攻撃が効かないことに驚く竜。

『サン！スライサー！！』

ファイバードが胸のサンスライサーを投げつけ天界生物を怯ませるとサンダーダグオンの蹴りがヒットした。

そして竜が必殺技の体制に入った。

「大回転！剣風斬！！」

シャドークナイを構え回転しながらモニュメントに体当たりする竜。

「チェストー！！」

モニュメントが真っ二つになると爆発し光が溢れるとファイバードとサンダーダグオンの身体に入った。

力が漲り始めるファイバードとサンダーダグオン。

『！！』

天界生物が二人に襲い掛かったその時。

『サンダージャベリン！！』

サンダージャベリンを引き抜き天界生物を受け止めるサンダーダグオン。

『すごい・・・これが・・・封じられていた力？』

今まで苦戦していた天界生物の攻撃が全然効いてなかった。

『フレイムソード・・・チャージアップ!!』

フレイムソードを構えるファイバードはそのまま不死鳥と化し突撃した。

『ぬおおおおおおおお!!てえええええええええい!!!!』

一刀両断真っ二つにするファイバード。天界生物が爆発するとフレイムソードを納めた。

『さあ!戻ろう!!』

ダグベースに向かうファイバード達だった。

『ぐあああ!!』

スサノオに吹き飛ばされるトライボンバー。

『ぐ!やろ!!うおあああああ!!』

スサノオはそのままトライボンバーを踏みつけた。

『とどめだっぞっと!』

『トライボンバー!!』

草薙の剣がトライボンバーに振り下ろされるその時。

光が降り注がれた。

『な！』

勇者たちに光が降り注ぎ身体に力が湧き上がった。

『力が戻った！！』

『でああ！！』

トライボンバーに蹴り飛ばされるスサノオ。

立ち上がる勇者たちスサノオは・・・

『へへへ・・・そうじゃねえと面白くねえよな！！』

そう言って飛龍に襲い掛かると・・・

『ユウ！』

『ち！！』

先ほどとは段違いの動きで避けるユウ。それにはユウ自身も驚いていた。

『なんだ？飛龍の動きがダンチだ』

『おおおお！！！』

スサノオの剣をマジンガーブレードで受け止める鉄也。

『てあ！！』

鉄也のキックがスサノオを突き放すとアルフェリスがグラビティカノンを構えた。

『シュー！！』

『ぐ！！』

押され始めるスサノオ。

『ち！勇者たちはこんな厄介な力が』

『ボンバーガントレット！！』

『うお！！』

トライボンバーの拳がスサノオに突き刺さると翼竜神が両手を合わせ経文を唱え始めた。

『穏・摩・爾・香・森羅万象！！』

スサノオに最大の気力技がヒットする。

『へ・・へへ・・・いいねえ・・・強いねえ』

勇者たちに力が戻った瞬間形勢が逆転した。

『うおおおお！！』

『ダブルハーケン!!』

『はあ!!』

大介と紫がスサノオを弾き飛ばすと翼竜神がスサノオの前に立った。
そして握り拳を出した。

『とどめは・・・』

翼竜神が手を開くと現れた北斗。

実はちゃっかり外に出てきた北斗はそのままキャロに捕縛された。

『この死にぞこないが!!』

「殺しきれなかったてめえが言ってんじゃねえよ」

北斗は身体からすさまじい気力を噴出した。

『じゃあ!殺してやるよ!!うおおおおおおおお!!』

ボロボロのスサノオが翼竜神に向かって走ると翼竜神の手のひらにいる北斗が経文を唱えた。

『木・火・土・金・水・五つの理・・・五行・・・五色の燐光!!』

五色の燐光に飲み込まれるスサノオそして北斗は銃を構えた。

「・・・ゲームオーバーだ」

北斗の銃が火を噴くとスサノオの眉間が貫かれた。

『へへ・・・人間は俺たち神が・・・やり直させる・・・コンティニューだ』

倒れるスサノオ。

「・・・コンティニューできねえゲームもある」

その言葉を聴いた瞬間スサノオは塵となり消滅した。

こうしてリベンジを果たす北斗だった。

ダグベース

ヴォルフガングが検索すると海鳴に通じる空間の歪みが消滅したことを観測する。

「・・・うむ・・・どうやらあのモニュメントがお主らのブレイブパワーを吸収して次元崩壊の力を維持していたようじゃ・・・」

「性質が悪い・・・私たちの力で空間の歪みを維持してるなんて・・・」

考えただけでも頭痛が起こるシャマル。

「とにもかくにも・・・これで空間の歪みが消えたわけじゃ・・・じゃが今はバランスを保つせいで元に戻らんがな・・・」

「まぁ・・・とにもかくにもこれで別のエリアに行けるわね」

そう決断するシャマルは次の行動に移った。

オペレートルームにて端末を操作する雷。

「準備はＯＫですシャマル先生」

火鳥が舵を取ると

「よ～っし次のエリアに向かって・・・ダグベース！発進！！」

こうしてダグベースを発進させ勇者たちは次のエリアに向かうのだった。

そして勇者たちは

『・・・・・・・・・・・・・・・』

ある者は敗れ宇宙空間に放置され

「・・・・・・・・・・・・・」

ある者は敗北を味わい戦う事に恐怖し

「どこだ!?どこにいるんだ!?」

ある者は仲間とはぐれ必死に探し

「・・・・・」

ある者は狭間の世界に取り残され

さらに別世界の勇者が・・・

「・・・みんな・・・なんでみんな目覚めてくれないんだよ!!」

一人の少年が手帳のようなユニットを握り締めていた。そして少女は少年の肩に手を置いた。

「・・・星史君」

少女・香坂ひかるは少年・高杉星史を心配するのだった。

第九話　決戦スサノオ（後書き）

シャマル
「次のエリアに向かうべく行動した私たち」

はやて
「うちの出番はいつくるんや～」

シャマル
「また急性力君苛めたい症候群になってないわよね～」

はやて
「あ～力君早く帰ってこないかな～もう力君苛めないと暇で暇で～」

シャマル
「末期症状ね～あ？あんなところに力君が・・・へ！！はやてちゃん！なに！首ねじ切っちゃってるの！？」

はやて
「え？なんで偽者に手加減してあげなあかんの？」

次回！勇者大戦ブレイブサーガＡ，ｓ　管理局三大巨悪対偽力

シャマル
「うわ～なのはちゃんもフェイトちゃんも楽しそうに力君殺しちゃって～」

第十話　管理局三大巨悪対偽力

次の空間に向かうべくダグベースは飛行すると空間の境に差し掛かった。

「気をつけろよ。空間を抜けた先でまたブレイブパワーを吸収されかねんからの？」

「了解です」

ヴォルフガングの推測に従い合体できるメンバーは常に温存することになった。

「大介。スペイザーの新プランじゃ・・・」

「はい！」

新作スペイザーの設計図を広げるヴォルフガング。

そして司令室のシャマルが呟いた。

「そういえばはやてちゃん元気かな～」

第十話　管理局三大巨悪対偽力

隔離された時空管理局

時空管理局本部も次元嵐の影響で世界が混合した世界になっていた。しかし幸いなことに管理局は無事でありすぐさま観測が始まるのだった。

デスクで突っ伏しているセミロングヘアの女性。

「ボケ～～～」

立派な大人の女性になった八神はやてが超無気力な態度を取っていた。

「ねえはやてちゃん？」

「ほえ？」

なのはが心配して声をかけてみるがはやての反応はそっけなかった。

（これは来たの）

（これは来たか）

なのはとフェイトが思ったこと。それははやての病気

病名・急性力苛めたい症候群

説明・普段からストレスの溜まりやすい部署のはやてが正気を保っている理由が定期的に力を徹底的に苛めているからだった。それに

よりはやてのストレスは発散させストレスの欠片はないが一度起こってしまうと無気力状態になってしまうのだった。
尚、治療のために力を生贄にささげた場合余波により周りへの被害が甚大になるのだった。
何故力が死なないかはやはり身体が頑丈だからであろう。
とりあえずなのはは話題を変えようとする。
「そういえばはやてちゃんってあの悪魔と夜」
「やってへんで～力君超初心だから～」
「あっそ」
「力君～どこや～力君～」
そう言って力人形に釘打つはやて。はっきり言って
「「末期症状だ！！」」
会議室
なのは、フェイトといったはやてに近い人物たちが会議をしている。
「問題ははやてをどうやって戻すかだよね」
「いっその事変身魔法使ってあの悪魔に化けてはやてちゃんの気を晴らすって言うのは？」

その言葉に青ざめる会議室のメンバー。

「どうしたの？」

「それ・・・なのはがやるんでしょ」

「いやここは一番強い人が・・・「こうなること確定して？」

モニターに映し出されるはやての映像。

『このボケえええええ！！』

『うぎゃあああああああああ！！』

思いっきり首の骨と腰の骨をへし折られている力の映像（提供者シャマル大先生）

「流石の私もあれには耐えられないの・・・あの時のはやてちゃん身体能力が一億倍になるの」

以前勇気ある人物が替え玉作戦を実行したが一撃で伸されたためこの作戦は並の人間が耐えられないと結論されていた。

「どうする？このままじゃ心配というより鬱陶しい」

頷く局員たち。

その時だった。

「ハラオウン執務官！！」

「どうしたの!?管理局員A!!」

「はい!これを!!」

局員Aがモニターに映したのは・・・

「あの悪魔が来たの!!」

力の映像だった。

管理局施設内を移動している力。だがどこか異様な雰囲気を漂わせていた。

「・・・・・・」

辺りを見回す力その時だった。

「見つけたの!!」

なのはがレイジングハートを構えて力を捕らえた。

「なのは?」

「?????」

力に違和感を覚えるなのは。

（おかしい・・・この悪魔は私のこと『なのは』なんて名前で呼ばないの・・・・私のことはいつも『砲台』って言うの・・・）

その時力がなのはに接近し顔を近づけた。

「・・お前結構可愛いな」

「は？」

「俺と来ないか？」

その時

「ささはやて！あの悪魔が居たよ・・・は！！」

フェイトがはやてをつれ目撃したものは・・・なのはを懐柔しようとする力の姿だった。

それ見たはやては頭に筋を浮かべフェイトは青ざめた。

「！！」

そしてはやてが魔法補正なしで１０メートルジャンプし・・・

「はやてキック！！」

１兆トンのはやての蹴りが力に突き刺さった。

「へ？はやてちゃん？」

げしげしと力を蹴り飛ばし続けるはやて。そして首を掴むと３６０度回転させた。

「ちょ！はやてちゃん！いくらその悪魔がナンパ行為に走ったからってやりすぎじゃ！！」

なのはの声に振り返るはやては

「何で偽者に手加減せなあかんの？」

「「・・・・・・・・・・」」

はやての言葉になのはとフェイトは・・・

「・・・偽者のぉ～？」

「ほぉ～そうかそうかぁ～」

次の瞬間はやて曰く偽力が飛び掛った瞬間蜂の巣にされた挙句首刈られた偽力。

「・・・やっぱり・・・歯応えがないの」

人間の頭とは現金なものなのか目の前のもの＝偽者とわかった瞬間、本物より弱いという定義になり戦闘力が急上昇するのだった。

尚はやても力同様力の偽者だったら無条件でわかってしまうらしい

「貴様ら！！」

別の場所から現れる偽力軍団。総勢百体はいるであろう。

そして次々と量産された偽力を見た三大巨悪は・・・

「うわ～敵さんは力君を量産して尖兵にでもするきか～？」

「ち！・・・悪魔を増やしやがった・・・」

「みんな～あの悪魔狩りたい放題だよ～」

と局員たちに呼びかけた。

「え？南力を」

「・・・殺し放題」

『うおおおおおおおおおおおお！！』

その言葉を聞いた瞬間次々と現れる管理局員そして全員が力に恨みを持っているのだった。

理由は

（よくも私たちのはやてさんを取ったな！！）

（よくも覗いたな！！）

という多大なる誤解だった。

「うわ～みんな殺る気満々やな～」

そう言って一番殺る気満々のはやて。

『！！』

偽力が一斉に飛び掛った瞬間局員たちも飛び掛った。

「覚悟おおおおおおおおおおお！！！」

プラズマザンバーを振り下ろし偽力を右と左に真っ二つにするフェイト。

「違う・・・本物じゃない・・・いつものパターンなら・・・」

いつものパターン

「覚悟おおおおおおおおおお！！」

「真剣白羽取り！！」

「チッ！！！」

「てなるはず・・・偽者が！！」

そう言ってザンバー振り回しながら正確に偽力の首を刎ねるフェイ

ト。

「エクセリオンバスター！！」

をマシンガンのごとく放つなのは。次々と蜂の巣になっていく偽力。

「違うの・・・いつものパターンなら」

いつものパターン

「エクセリオンバスター！！」

「“＃＄％＆‘」，＄％”＄＃」

「とか何とか言って全弾避けるの・・・偽者！どうせなら！本物を洗脳して連れてきてほしいの！！そうすれば助けようとして誤って殺したっていう言い訳が出来るの！！」

よっぽど力のことを怨んでいるなのは。

「うおりゃあああああああ！！」

リボルバーナックルで偽力の身体を貫通するギンガ。

「違います・・・いつものパターンなら」

いつものパターン

「うおりゃあああああああああああ！！」

「ぬご・・・鳩尾・・・」

「ていって蹲るだけです・・・本物に比べてもろすぎます！！」

その後も局員全員が楽しそうに偽力を殺していった。ある者は首をはねある者は蜂の巣にした。

その表情はとても楽しそうだった。

「うわ～みんな楽しそうに力君を殺しとるな～よっぽど力君怨まれとるんやな。かという私も楽しいけど」

そう言ってはやてもシュベルトクロイツで力の顔面を刺した。

そして偽力の一人がつぶやいた。

「何故だ！我々は南力以上の力を持っているのに」

「これが力君？」

「悪いけど全然弱すぎるの！！」

まるで雑魚兵士の如く倒される偽力。

「今度力君を作るときはこの3億倍は強くするんやな～」

「こんなんじゃ予行練習にもならない」

そう言って無双の如く偽力をなぎ払うフェイト。

「これでも読んで勉強しとき」

はやてが放り投げたのは『南力百科』、『南力の全て』、『力・ワズ・ナンバーワン悪』の増刊号だった。

「ええか・・・まず力君は風呂に入るときは右足から入るし・・・コーラよりお茶のほうがすきだし・・・（以下省略）・・・なにより・・・力君は超絶的初心やから覗きなんてできへん!!響け・・・終局の雄たけび・・・!!ラグナロクレインボー!!」

はやての拳から七色のラグナロクが放たれると偽力達を消滅させた。

そして全ての偽力が残酷に殺されると・・・

「手ごたえない・・・本物はもっと抵抗してくれるのに・・・」

「これじゃ準備運動にもならないの・・・まぁ良いや・・・今度の狙いは本物なの!!みんな!ガンバって本物を殺すの!!」

『おおおおおおおおおお!!』

と言って『本物』を殺す気満々の局員たち。

「まぁ～状況が状況やから今回は協力して」

『えええええええええ～!!』

はやての言葉にすごく嫌そうな局員たち。

「え?何でみんなそんな嫌そうなの?」

「だって・・・」

「・・・死神に協力してもあの悪魔に協力するのはごめんだよ」

「そうなの!!あの悪魔と協力するくらいなら私たち敵に寝返るの!!」

高々と宣言するフェイトとなのは。

人間嫌われると行く所まで行くらしい。

尚はやては偽者とはいえ力を苛めたことにより一時的にストレスが発散された。

「ていうか・・・なんで力君の偽者がおるん?」

第一の疑問はそうだったが・・・

「まっいいか~どうっせ力君が敵に回ったところで大したことあらへんし~」

そう言って施設に戻り今後の対策を練るはやてだった。

別空間

「けっ！南力を量産すれば面白いことになると思ったのに・・・まぁ・・・いっか」

科学者のような姿をした神がモニターから管理局を見つめるのだった。

一方

ダグベースの向かった世界で少年と少女は呟いた。

「星史君！どうして戦わないの！？」

「駄目なんだ・・・俺だけの力じゃ・・・ダ・ガーン達だって居ないんだ・・・地球に危機が来たのに・・・ダ・ガーンは目覚めなかった！！くっそおおおお！！」

ダイレクターを地面にたたきつける星史。

「星史君の馬鹿！！」

「ひかる？」

「星史君の弱虫！みんな泣いてるんだよ！自分が戦えないからって逃げるの！？そんなの卑怯じゃない！！」

涙を流し始める星史。

「けど・・・俺だってダ・ガーンを呼んだんだ・・・けど何も反応しなかったんだ!!なんで俺なんかを隊長にしたんだよ・・・」

「星史君あきらめるの!!そんなんじゃ・・・ダ・ガーンは絶対着てくれないわよ!!」

(そうだよ)

その時星史とひかるを風が包み込んだ。

「風?」

「何・・・この風?」

星史とひかるが見たものは・・・

風とともに現れる少女だった。

今にも消えそうな実態を持った少女はゆっくり星史に歩み寄った。

「誰だよ!?」

星史が少女に問いかける少女は笑って答えた。

(私・・・風の使者)

「風の使者?」

(星史君・・・なんでダ・ガーンを信じないの?)

「俺が?ダ・ガーンを信じていない?」

(そう・・・ダ・ガーンは地球を守護する勇者でしょ?・・・地球が危機に陥ったとき・・必ずダ・ガーンは現れる・・・)

「けど・・・俺は!!」

(今は世界が滅茶苦茶になっているからダ・ガーン達は真の復活を遂げられないだけ・・・)

「え?」

(今次元世界が複雑な繋がりを見せた・・・それは地球にダメージを与えダ・ガーン達を封じた・・・星史君・・・あなたが信じれば・・・ダ・ガーンは必ず蘇る)

その時少女の姿が消え始めた。

(時間切れか・・・)

「おい!待ってよ!!」

(大丈夫・・あきらめないで・・・ダ・ガーンを信じて)

そう言うと少女は温かい風とともに姿を消した。

「今のは?」

ひかるが風の使者を考えると星史はダイレクターを握り締めた。

「わかった・・・俺信じる・・・もう逃げたりしない！」

星史はそう決意するのだった。

第十話　管理局三大巨悪対偽力（後書き）

次のエリアに到着したダグベース。ここでの仲間を探さなきゃ・・・
え?あなたは?高杉星史君?それ!ダイレクター!まさかあなたは
!?

次回!勇者大戦ブレイブサーガＡ，ｓ　伝説の勇者再び

あれは・・・ダ・ガーン!

第十一話　伝説の勇者再び

別世界を訪れたダグベース

現在ダグベースでは今後の進路をとるべく世界の検索をしていた。

「どこに何があるかわからないわね・・・それにしても・・・世界を抜けた瞬間またブレイブパワーが抜けるなんて」

世界を抜けた瞬間再びブレイブパワーを吸収される勇者たち。

「シャマル先生!帰ってきたよ」

ケンタのナビで偵察に出ていたシャドージェット、サンダーシャトルが帰ってきた。

オペレートルームに入る竜と雷。そして報告に入った。

「どうだった?」

「少なくとも・・・俺たちの仲間の姿はいなかった・・・」

「少なくともここにはダグオンは居ないって事ね」

「いや・・・ここはまだ空間が安定してない・・・下手な世界に行けなくなった・・・」

その時格納庫のライオボンバーが通信を入れた。

『おい！シャマル！』

「どうしたの？ライオボンバー？」

『この世界・・・大列車フォートレスがあるぜ！！あの時はわかんなかったが・・・ここは間違えなく俺たちが最初に居た世界だ・・・』

ライオボンバーの確信にシャマルは次の行動を決めた。

「それじゃ・・・今は大列車フォートレスに向かいましょう。もしかしたら勇者特急隊の誰かが戻ってきてるかもしれないし・・・それじゃあ・・・火鳥さんが戻り次第進路は大列車フォートレスへ！」

第十一話　伝説の勇者再び

格納庫

「ていうわけなんだ」

「う～むなるほどのお」

ケンタに進路のことを聞いたヴォルフガングは複雑な気持ちだった。

「ん？どうしたの？」

「いやなに・・・わしもマイトガインの基地に行くのが複雑での」

「あ～じいさんマイトガインと対立してたからな～」

ユウが頷くとレンチで殴られた。

「こらユウ！ちゃっちゃとやれ！！」

「うぎゃあああぁぁぁぁ・・・・！！」

アルトに引っ張られるユウ。何やら大型の戦闘機のようなものを作っていた。ケンタはヴォルフガングに聞いてみることにした。

「ん？何造ってんの？」

「おおこれか・・・これぞ新型のスペイザー・『バトルスペイザー』じゃ」

「スペイザーってことはグレンダイザーのパーツ」

「うむ・・あやつが一番オプション換装に優れておるからの・・・わしの飛龍も強化したいとこじゃが何分パーツも時間も無い」

「はぁ～こんなとき姉貴が居ればな」

などとため息を吐くユウだった。

「そういえば兄ちゃん何やってんだろ？」

帰りが遅い火鳥を心配するケンタ。すると大介がひとつの提案をし

た。

「そうだ・・・僕がバトルスペイザーのテスト代わりに様子を見てくる」

「頼むよ大介さん」

「わかった。鉄也君にキャロちゃんをあんまり訓練づけにしないようにって言っておいてね」

現在北斗の竜神を使いこなすべく鉄也ともう特訓しているキャロと北斗を超えるべく訓練するエリオ。だがキャロのほうは涼しい顔をしエリオはへばっていた。

緑ヶ浜

ファイヤージェットは緑ヶ浜を偵察している。

「ここも異常なしか・・・仲間の姿も無い・・・ん?」

何かに気づいた火鳥は仏像寺に着陸するのだった。

「えっと・・・お~い君たち~」

火鳥が広場の様子を見ると少年と少女が座っていた。

「・・誰？」

少女・ひかるが火鳥に気づくと少年・星史も振り返った。

「僕は火鳥勇太郎・・・君は？」

「私は香坂ひかる」

「俺は高杉星史」

火鳥は星史とひかるにこの場所について聞いてみることにした。

「そういえば・・・ここは天界生物は？」

「天界生物？あいつら・・・そういう名前だったのか・・・」

「知っているの？」

「ああ。あいつらいきなり現れて町を滅茶苦茶にしてったんだ・・・軍隊も出たけど・・・みんな敵わなかった・・・勇者が居れば・・・」

「勇者を知ってるんですか？」

「あなたも？」

星史が火鳥を見たその時だった。

「また着やがったのか？」

「！！」

空が黒くなり上空から天界生物たちが舞い降りた。

「あれが天界生物？俺たちの世界のとは違う」

天界生物に向かって火鳥は走った。

「ちょっと！どこ行くんだよ！！」

星史の静止を振り切り火鳥は・・・

「ファイヤー・・・ジェエエット！！」

火鳥の叫びに飛来するファイヤージェットは人方に変形した。

そして火鳥の瞳の回路が唸りを上げた。

「はっ！！」

そのままダッシュすると不死鳥のように舞い人型になったファイヤージェットと一体化した。瞳が強く輝いた。

『チェエエンジ！ファアアイバード！！』

舞い降りるファイバード。

『天界生物！この世界の人たちに手を出すことはこの俺が許さん！！』

ファイバードは第二形態に入った。

『フレイム・・ブレスター！！』

空から舞い降りるフレイムブレスターがそのままファイバードに合体し・・・

『フォームアップ！武装合体！ファイバード！！』

「あれは！」

ファイバードに驚く星史。

「まさか・・・ダ・ガーン以外にも勇者が・・・ダ・ガーン・・・」

星史を尻目にファイバードが天界生物に向かって走った。

『行くぞ！ぬおおおおおおおおおおお！！でああああああああ！！』

ファイバードの拳が天界生物に突き刺さるとダイナバスターを発射し天界生物を破壊した。

『やった！う！！』

再び上空から飛来する天界生物たち。数が多すぎるためダグベースに通信を取るファイバード。

『こちらファイバード！ダグベース応答願います！』

『ファイバード?どうしたの?』

通信に出るシャマル。

『天界生物の襲撃を受けています!応援願います!』

『待ってて!今大介さんがそっちに向かってる私たちもすぐに向かうからそれまでは!』

『了解!』

ダグベースが来るまで時間を稼ぐファイバードだが・・・今度の天界生物は自由自在に空を舞うタイプだった。

『フレイムキャノン!』

襲いかかる天界生物をフレイムキャノンで次々と撃墜していくファイバードすると小型の天界生物の他に大型の天界生物まで現れた。

天界生物が翼で嵐を巻き起こすと嵐はファイバードに直撃した。

『ぐあああああ!!』

吹き飛ばされるファイバードそれを皮切りに天界生物たちは次々とファイバードに襲い掛かり追い詰められ始めるファイバード。

『ぐうう!!』

傷ついていくファイバードを見た星史はダイレクターを取り出し握

り締めた。

「見てるか?ダ・ガーン勇者が着て戦ってるんだ・・・お前はずっとそのまま眠ってるのか?・・・それで良いのかよダ・ガーン」

ダイレクターを握り締める星史は・・・

「ダ・ガァァァァァン!!」

その時寺の仏像が光り道を指し示した。

「これは・・・」

光に向かって歩む星史は仏像の前に立つと何かに気づき仏像を見上げた。

「間違えない・・・間違えるもんか・・・ダ・ガーンの勇者の石だ!!」

仏像に駆け寄る星史はダイレクターを掲げた。

「目覚めよ!!地球を護りし大いなる勇者よ!!」

星史がダイレクターを掲げて叫ぶがダ・ガーンの勇者の石は反応しない。

「ダ・ガーン!!世界が危ないんだ!!だから・・目覚めてくれ!!・・・ダ・ガァァァァァン!!!」

その時ダイレクターが光を放つと勇者の石が輝きパトカーと同化し

た。

パトカーはそのまま走り星史の前でロボットになった。

『う・・・せい・・・じ?・・・星史!』

復活したばかりで朦朧としているダ・ガーンは星史の姿を確かめた。

「ダ・ガーン!世界が危ないんだ!だから・・・もう一度俺と一緒に戦ってくれ!!」

星史の願いを聞いたダ・ガーンは・・・

『了解だ!星史!!』

「よおっし!!」

ダ・ガーンの体内に入る星史。

『さぁ!星史!命令を!!』

「よおっし!!ダ・ガーン!あの勇者を助けて悪者退治だ!!」

『了解!!』

星史の命令を聞いたダ・ガーンはそのまま天界生物に飛び掛った。

『ぐおおお!!』

種類の変わった天界生物に攻撃され弾かれるファイバード。フレイムキャノンを発射し撃破するが数が多い。

その時

『とお!!』

ダ・ガーンのキックが天界生物に炸裂した。

『あなたは・・・ダ・ガーン!!』

ダ・ガーンに気づくファイバードだが・・・

『ん?君は?私を知っているのか?』

『え?恭也さんじゃ・・・』

『何言ってんだよあんた?』

星史を見たファイバードは・・・

(彼は・・・別世界のダ・ガーン?)

そう感じるファイバード。

『ダ・ガーンマグナム!』

ダ・ガーンの銃が火を噴き天界生物を次々と撃破していくとダ・ガ

ーンはそのまま飛びあがった。

『ダ・ガーンボンバー！！』

肩のタイヤを外し天界生物に投げつけるダ・ガーン。だが天界生物は次々と現れる。

『切りがない！！』

その時だった。

『待て！！』

上空から飛来するグレンダイザー。

『グレンダイザー！新しいスペイザーは完成したんですか？』

『ああ！これが新しいスペイザー！バトルスペイザーだ！行くぞ！！』

ダブルハーケンを抜き空中の天界生物を次々と撃破していくグレンダイザー。それを見た星史は・・・

『負けられないぞ！よおっし！！ダ・ガーン！！合体だ！！』

星史がダイレクターを掲げると眩い光を放った。

『うおおおおお！！』

ダ・ガーンの瞳が輝くと海を走るアースライナーとアースファイタ

ーが飛来しアースライナーが下半身・アースファイターが上半身に変形する。

『とおっ！！』

ダ・ガーンがコアになるとアースライナーに装填されアースファイターと合体し胸に母なる地球が映し出され頭部が現れる。

『合体っ！！・・・ダ・ガアァァァン！！！エエエックス！！』

伝説の地球の勇者・ダ・ガーンＸがここに光臨した。

グレンダイザーとダ・ガーンＸが空中を飛びエネルギーを集中させる。

『ブラストキャノン！！』

バトルスペイザーから放たれるキャノン砲が天界生物を撃破していく。

『ブレストアースフラッシュ！！』

ダ・ガーンＸの光線が周囲の天界生物を破壊していき最後の一体の大型天界生物を蹴り落とすダ・ガーンＸ。

地上に叩き落された天界生物は立ち上がり唸りを上げるとダ・ガーンＸは降り立った。

『ダ・ガーン！とどめだ！！』

『了解！星史！行くぞ！ファイバード！』

『おう！』

『ダ・ガーンブレード！！』

『フレイムソード！！』

ダ・ガーンXとファイバードが必殺剣を引き抜いた。

『ダ・ガーンブレード！！一文字斬り！！』

『フレイムソード・・・チャージアップ！！』

『『勇者！十文字斬り！！』』

ダ・ガーンXの縦一閃とファイバードの横一線が天界生物を両断し十字に切り裂かれる天界生物が爆発するとダ・ガーンXとファイバードは剣を納めた。

戦いが終わり火鳥にダグベース招待される星史とひかる。

「なぜ？あなたがダ・ガーンを・・・」

「え？何故っていわれても」

シャマルが星史に聞くと星史は訳が分からないという表情でシャマルを見た。

「こういう事か・・・」

「はい？」

シャマルがある結論を出した。

「私たちの歴史だと恭也さんがダ・ガーンの隊長だったけど・・・
この世界は星史君がダ・ガーンの隊長・・・『つまりもしも隊長が
別の人だったら？』の一つの人ってこと」

首をかしげる勇者。

そして星史は無理やり結論付けた。

「なんだかよくわかんないけど・・・俺も一緒に戦うよ！ダ・ガ
ーンと一緒に・・・だから・・・よろしくな！！」

「こちらこそよろしく！！」

大介と硬い握手を交わす星史だった。

第十一話　伝説の勇者再び（後書き）

大列車フォートレスに迫る危機・・・ここにはサリーが・・・影の守護者のヴィヴィオちゃんが居る！俺はこの人たちを護らなければならない！だがマイトカイザー一人では・・・あれは？ダグベース？それにあの列車は？

次回！勇者大戦ブレイブサーガＡ，ｓ　嵐の勇者再び

正義の力が嵐を呼ぶぜ！

第十二話　嵐の勇者再び

ダグベース

「・・・・・・・・・・・」

星史がダイニングルームで気まずそうに野菜を刻んでいる。何故気まずそうかと言うと・・・

「・・・おい切れたか？」

愛想もくそも無いタレ目の金髪の北斗。そうこの危険人物と二人きりだったのだ。

「あの～こういうのは俺じゃなくて火鳥さんとかシャマルさんを呼べば・・・」

「・・・てめえは内側から俺たちを崩壊させる気か・・・」

「・・・・・・・」

流石に死にたくないので渋々炊事当番を続ける星史だった。

第十二話　嵐の勇者再び

大列車フォートレス

「みんなお疲れ様です」

旋風寺舞人の妻・旋風寺サリーが格納庫のスタッフに弁当を配っていた。

「お疲れ様～♪」

サリーと共にスタッフに弁当を配る影の守護者・ヴィヴィオ。

何故ヴィヴィオが大列車フォートレスに居るか？

それは世界融合の次元嵐時に外で遊んでいたヴィヴィオはそのまま嵐に巻き込まれ次元世界を彷徨ってしまった。

その時に各世界の勇者を探していた舞人と偶然出会いそのまま保護されるのだった。

「・・・ホーンボンバー」

舞人は難しい表情をしながら修理中のホーンボンバーを見つめていた。

現在大列車フォートレスは迫り来た敵との戦いにより消耗し移動要塞としての機能が破壊されていた。

戦力も現在はマイトカイザーしか居なく修理されているホーンボンバーは次元嵐時に破壊されていたのだった。

幸いな事に人手とメカニックは無事なため拠点として活動していた。

「今は・・・マイトカイザーしか居ない・・・果たしてどこまで戦えるのか」

「舞人さん」

舞人の後ろから声をかける人物が居た。

「・・・サリー」

「大丈夫です。まだマイトカイザーがいるんです」

「そうだよ！まだマイトカイザーがいるもん！」

「ヴィヴィオちゃん・・・そうか・・・そうだな！」

サリーとヴィヴィオに励まされ舞人は不安を吹っ切った。

「みんなが仲間を探してる・・・俺もここを守ってみせる」

『舞人・・・俺も早く直るぜ！』

ホーンボンバーも修理の最中舞人にエールを送った。

「ホーンボンバー・・ああ！」

『舞人～』

部屋のモニターが点くと浜田が映った。

「浜田君？どうしたんだ？」

『またやつらが出たよ』

モニターの映像が切り替わると大列車フォートレスに向かって次々と押し寄せてくる天界生物。

「分かったすぐに出る！」

『気をつけて！今回は敵が多すぎるよ！！』

「大丈夫だ！サリー！ヴィヴィオちゃん！行ってくる！」

「「いってらっしゃい！」」

サリーとヴィヴィオに見送られながら舞人はヘルメットを装着しドリル特急に乗り込んだ。

「よし！いくぞ！！」

大列車フォートレスから発進されるドリル特急。

『チェンジマイトカイザー！！！』

舞人の叫びとともにブレスが輝くとコンテナから次々と発進されるカイザービークルが人型に合体しマスクが閉じる。

『愛の翼に勇気を込めて！まわせ正義の大車輪！勇者特急マイトカ

イザー！ご期待通りにただいま到着！！』

降り立つマイトカイザーに天界生物が襲い掛かるとマイトカイザーは飛び上がった。

『カイザーバルカン！！』

マイトカイザーの攻撃が天界生物に降りかかり一瞬の隙を作ると右腕にカイザードリルが装着された。

『でああああ！！』

カイザードリルで次々と天界生物を貫くが数が多すぎる。

『ドリルクラッシャー！！』

マイトカイザーの必殺技が天界生物を貫くが数が減らない。

『うあああああ！！』

マイトカイザーに天界生物の衝撃波が降りかかり吹き飛ばされるマイトカイザー。

「・・・舞人さん」

舞人の姿を見つめるサリー。そして浜田が叫んだ。

「ホーンボンバーの修理は！？」

「もう少しかかります！」

「舞人！がんばれ！！」

「舞人さん頑張れ！！」

浜田とヴィヴィオが舞人を応援する。

『く！なんて数だ・・・だが・・・俺は負けるわけにはいかないんだ！！』

起き上がるマイトカイザー。

その時

汽笛の音が響いた。

『あれは！』

マイトカイザーが空を見上げたその時。

「融合合体！」

ドリルライナーがパーツになると激が船首に向かって走ると人型に変形し激と一体化すると瞳が光った。

『ダグ！ドッリイイル！！』

上空から助っ人に駆けつけたダグドリル。

『舞人無事か！？』

『ダグドリル！』

「舞人！」

ダグドリルの肩から出てくるシグナム。

『シグナムさん！無事だったんですか！？』

マイトカイザーが心配するとダグドリル共々囲まれてしまう。

「ああ！おい激！さっさと戦え！」

『ああもう！うるさい娘じゃの！！』

問答するダグドリルとシグナム。そして再び汽笛が響いた。

『ん？わしの他に機関車が！？』

光のレールが現れると一台の機関車が舞い降りた。

『チェンジ！鋼鉄武装！アドベンジャー！！』

マイトカイザーとダグドリルの元に舞い降りるアドベンジャー。

『アドベンジャー！？どうして！？』

『ああ！主たちとはぐれてしまい探していたんだ』

『タクヤ君たちが？』

『おい！説明はあとじゃ！』

ダグドリルの言葉と同時一斉に襲い掛かる天界生物。

『ドリルパルサー！！』

『メガライフル！！』

ダグドリルとアドベンジャーの攻撃に撃墜されていく天界生物に再びアドベンジャーは胸の砲身を開いた。

『ギャラクティカバスター！！』

アドベンジャーの最大の技が放たれ天界生物を一掃していく。

『ドリルアタックモード！ドリルクラアアッシュ！！』

ダグドリルの胸に巨大なドリルが装着されそのまま突撃した。

「シュツルムファルケン！！」

シグナムのボーゲンが放たれ徐々に数が減り始める天界生物。

そして

「あれは？」

ダグベースが上空より飛来した。

「貴様ら・・・遅いぞ!!」

「お待ちどうさま!」

シグナムの文句にまるで出前のように受け答えするシャマル。

「それじゃあ・・・発進~」

緊張感の無い声でダグベースから発射されるシグナムのビークルと共にボンバーズと飛龍が発進した。

さらに

『うおおおお!!』

大列車フォートレスから発進するホーンボンバー。

『ホーンボンバー!?直ったのか!!』

ボンバーズと合流するホーンボンバー。

『ああ!今直ったぜ!!』

『ホーンボンバー!揃ったな!猛獣が!』

ライオボンバーの声と共に集うアニマル特急。

『『『『ボンバーズ!推参!!』』』』

『ようっし!猛獣四体合体!見せてやろうぜ!!』

『『『おう!!』』』

ライオボンバーに先導され合体フォーメーションに入るボンバーズ。

ライオボンバーがライオンの胸を出し上半身になるとバードボンバー、ダイノボンバーが背中合わせになり下半身に合体しライオボンバーと連結し肩にホーンボンバーが合体した。

『合体!!バトルボンバー!!』

猛獣四体合体・バトルボンバーがここに完成した。

『バトルボンバー!天に代わって悪を討つ!!』

『まったく・・・緊張感のない奴らだ』

ビークルに乗り込んだシグナムもそう言う。

そして降り立つユウ。

『飛龍?・・・ジョーか?』

『いや・・・ジョーじゃないぜ舞人』

『ユウ!!』

目の前の飛龍のパイロットが違うことに驚く舞人。

『はああ!!』

レヴァンテインを生成すると天界生物に斬りさくシグナム。

『バトルバースト！！』

バトルボンバーの胸から炎が発射されると熔解する天界生物。

『おっりゃあああああ！！』

ヒリュウジャベリンを引き抜き天界生物を一掃するユウ。

『負けてられない！ドリルクラッシャー！！』

再びドリルクラッシャーで天界生物を一掃する舞人。

「・・・終わった？」

ダグベースが着陸すると戦闘が終結した。

「みんな！」

ダグベースの前に集結する勇者たち。

「うっわ～それにしても急にメンバーが増えたわね～」

集った勇者たちに驚くシャマル。

「とりあえず・・・現状の報告会をしましょうか」

「だな」

シャマルの提案に大列車フォートレスに場を移す勇者たちだった。

第十二話　嵐の勇者再び（後書き）

う～ん急に勇者たちが集ったな～現状の報告会報告会。一方別の場所ではあれ？飛鳥？何そんなに飲んだくれてやさぐれちゃってるの？まさか負けたの？

次回！勇者大戦ブレイブサーガＡ’ｓ　落ちた獣

飛鳥が・・・怖がってる？

第十三話　落ちた獣

大列車フォートレス

「雷さん！遊んで～」

「え？ヴィヴィオちゃんちょっとうあああ～」

ヴィヴィオに連行される雷。それを見殺しにするユウ。

「そういえば舞人君・・・あのときの通信は？」

世界融合の際にダグベースに入った舞人の通信のことを聞いてみるシャマル。

「はい。どうもあれは偶然繋がったみたいなんです・・・通信が切れた後に呼びかけても返事がありませんでした・・・あとはボンバーズが話してくれたとおりです」

舞人の説明が終わり

「とりあえずお茶でも・・・」

サリーが勇者たちにお茶を振舞うと助っ人に来た勇者たちの話が始まった。

第十三話　落ちた獣

『まずは私から』

アドベンジャーの言葉が始まった。

世界融合が始まったとき偶然地球を訪れていたレジェンドラの勇者アドベンジャー。

「全く誰だよ?暇だから地球に帰ろうって言ったの・・・はい!おいらでした!」

カズキ、ダイににらまれるタクヤそして光に包まれ消えてしまった。

『あれ?主たち?』

突然主が消えたことに驚くアドベンジャー。

『地球に着た私は主を探していたのですが・・・見つからず偶然このエリアにたどり着いたんです』

マイトカイザーの戦闘の場には偶然訪れたアドベンジャー。

「今度は私で良いか？」

シグナムが手を上げた。

「私も南家で新次郎とことはの面倒を見ていたときに世界融合に巻き込まれてな・・・見知らぬ場所に居たその時偶然であったのが・・・」

「わしじゃ！」

現れる激。

「しばらくはこいつと二人で下宿していたからな・・・風呂はドラム缶風呂だったしな・・・見張りでこいつを前に立たせていたがな・・・食事も寝るときもこいつと一緒だったからな・・・・」

「ちょっとまって・・・シグナム副隊長・・・激さん前で丸裸になったんですか？」

冷や汗流すアルト。

「激さん不潔～」

「て！除こうとなんてせん！不可抗力じゃ！」

必死に反論する激。

「まぁ良い・・・新次郎にはとっくに見られたからな・・・」

遠い目をするシグナム。なおシグナムの丸裸を見てしまった新次郎はショックのあまり倒れてしまった。

「新ちゃん力君みたいな超絶初心だったのよね・・・」

首を立てに振るシャマル。

「第一！こいつのオールヌードなんて見たら目が腐るわい！！」

「貴様どういう意味だ？」

激の言葉に頭に筋浮かべるシグナム。

尚八神組のメンズの意見は・・・

「こいつの素っ裸なんて見たら俺はムスカの如く目がーって叫んでやる」

と北斗

「・・・興味ない」

と竜

「覗きは不順です！」

と雷

八神組のメンズは欲情しないようです。

「なんか負けた気がする」

そう思うシグナムにシャマルが尋ねた。

「というか新ちゃんとことはちゃん無事なの？」

「お前な・・・あいつらは曲がりなりにも力と同じ遺伝子だぞ・・・」

その言葉に全員が心配という二時が消えた。

「あ～悪運強そうだからな～心配ないか～」

新次郎とことはに対して心配を削除した。

「シグナムは新ちゃんとことはちゃん心配でしょ？」

「まぁ～私があいつらの保護者になってしまったからな・・・」

力に対応するはやての如く苦労し始めるシグナムは遠い目をした。

「他のみんなは大丈夫かしら？」

シャマルが仲間の心配をすると勇者たちは大列車フォートレスで補給を行うことにするのだった。

別次元

「・・・どこ？・・・飛鳥さん」

バイクに乗り飛鳥を探しているティアナ。世界融合の際ティアナは飛鳥を部下とし次元艦で調査に向かっていたがその際次元嵐に巻き込まれ飛鳥たち諸共別次元に飛ばされてしまった。

「まさか・・・飛鳥さんが神に負けるなんて・・・」

数日前

管理局別働隊として活動していた飛鳥は世界融合に巻き込まれ隔離された。ロボットとして戦えるのが飛鳥しか居なかったため飛鳥は連戦を余儀なくされた。

『う・・ぐ・・・あああ』

各パーツを破壊されるウィザーダグオン。目の前には神の姿が・・

『ほお・・・なかなかやるわね・・・このアマテラスと互角にやるとはね・・・けど！！』

『ぐあ！！』

頭を掴まれるウィザーダグオンがもがき苦しむ。

『どうしたの？早くはずさないとザクロみたいに潰れるわよ』

必死に手を出すウィザーダグオンだがアマテラスにまったく通用しない。それどころかウィザーダグオンが粘るところ楽しんでいるア

マテラス。完全に遊ばれていた。

『うぐあああ・・・・』

アマテラスのホールドを外せないウィザーダグオン。

そして

『あああああああああああああ!!』

頭部を握り潰された。

沈み込むウィザーダグオンだが強制的に合体が解除され命は取り留めた。

「飛鳥さん!」

ダグテクターが解除される飛鳥に駆け寄るティアナ。

「飛鳥さん・・・ここのところ連戦だったのに・・・そうじゃなかったらあんたなんかに負けなかった!!」

それを聞いたアマテラスは・・・

『本調子じゃなかったのか・・見込みはありそうだけど・・・私はアマテラス・・・再戦はいつでも受けてたつわよ・・・・もっとも・・・神に挑む度胸があればだけどね』

それだけ言うとアマテラスは去っていった。

精神的に傷ついた飛鳥を集中治療室まで運ぶティアナ。

翌日集中治療室を訪れたティアナが見たものは空っぽになったベッドと飛鳥のＩＤカードだった。

現在

列車に乗る飛鳥はポケット瓶を片手に乗っていた。まるで何処かに逃げるかのように・・・

「・・・・・・・・・」

自分の力がまったく通用しなかった飛鳥。あの時の強制合体解除システムが無かったら死んでいた挙句玩具の様に自分の命が弄ばれてしまった。飛鳥の心は言い知れぬ恐怖でいっぱいだった。

己の強さを信じて戦ってきた飛鳥・・・だがその力がまったく通用せず遊ばれて死んでしまったことに心が完全に死んでしまったのだった。

終着駅の近くの公園で座っている飛鳥はひたすら飲み続けると・・・

「ティアナ居るんだろ・・・出てこいよ」

ベンチに座っている飛鳥の元に歩み寄るティアナ。

「飛鳥さん」

「何で来た?あたしはもう戦えない・・・執務官殿はやることが多いんじゃないですかい?」

「飛鳥さん・・・あなたはここで諦めるんですか?」

「往生際は悪いほうだけどさ・・・・・悪いな・・・あたしはただの酔っ払いだ・・・もうあんたの面倒なんて見ないからね」

「飛鳥さん・・・」

飛鳥らしくない言葉を聞くティアナ。今の飛鳥にはなにを言っても聞いてもらえないと感じたティアナは距離を置くのだった。

そして所かまわず飲み歩きさらにはチンピラに殴り飛ばされる飛鳥。

ゴミ捨て場に叩き付けられている飛鳥。

「・・・飛鳥さん」

「・・・ティアナ・・・まだ居たのか?」

ティアナにたたき起こされる飛鳥は死んだ目をしていた。

「飛鳥さん・・・アマテラスは再戦はいつでも受けてたつって言ったんですよ!」

ティアナの目を見た飛鳥は・・・

「・・・無理だ・・・あたしは負けたんだ・・・」

腕からダグコマンダーを外しゴミ捨て場に捨てる飛鳥。

「何度やったって敵うわけない・・・やつらは化けもんなんだからな・・・・」

千鳥足で歩く飛鳥・・・その姿にかつての生きた姿は無かった。

「飛鳥さん・・・く!!」

握り拳を作るティアナ・・・それは悔しさでいっぱいの拳だった。

心の強い者ほど折れた時のショックが大きいことを実感してしまった。

神の社

「ふふふ」

アマテラスが何かを楽しみに待っていた。

「お母様いったいどうしたんですか?」

アマテラスの娘タキリが様子を聞いた。

「楽しみでしょうがないのよ・・・あの女がどうやって戦ってくれるのか」

飛鳥の能力を買っているアマテラスそのことをタキリは面白くなかった。

夜の公園

「ぶへ！！」

飛鳥に殴り飛ばされるチンピラ。

「てめ！」

「・・お前らにも戦う恐怖ってやつを教えてやるよ・・・かかってこいよ」

チンピラを病院送りにし警察に捕まる飛鳥。

翌日

警察署から釈放される飛鳥はそのまま表に出たそこには知った顔があった。

「飛鳥」

「・・・ん？サイモン？」

八神組最悪の五馬鹿の一人のサイモンが飛鳥の保証人に訪れた。

「散々探し回ってやっと見つけたと思ったらんな姿に・・・見損なったぜ!!」

「ぐう!」

サイモンの拳が突き刺さる飛鳥。そしてサイモンが呟いた。

「ティアナの伝言だ・・・てめえの仇は私がとるとよ・・・」

アマテラスに挑もうとするティアナを知った飛鳥は・・・

「だめだ!アマテラスに手を出すなってティアナに伝えて!!」

「く!!」

再びサイモンに殴り飛ばされる飛鳥はそのまま倒れこむ。

「臆病風に吹かれやがって!!」

飛鳥の様子を見たサイモンは・・・

(あの飛鳥がここまで脅えるなんて・・・天地創造の神とは一体?)

飛鳥の身体に染み込まされた恐怖心を感じるサイモン。

「腑抜けたてめえに用なんてねえ・・・!!てめえなんてもう仲間でも何でもねえ!!」

そう言って立ち去るサイモン。

「待って！サイモン！く！！」

その場に崩れる飛鳥。今の自分にはどうしようもない恐怖心しかない。

「くそ！！」

やり場の無い怒りの飛鳥。

ＢＡＲ

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

カウンターで飲んだくれている飛鳥はもう何も残っていない。そう感じ浴びるように酒を飲んだ。

もう自分は勝てる気がしないそう思ってしまったその時

「・・・・・」

何かの気配を感じる飛鳥だが戦う気は起きない。

「あなたが東飛鳥」

「・・・・・・」

突然目の前に現れる女性。その姿はアマテラスのような姿だった。

「私はタキリ・・アマテラスの娘・・・東飛鳥・・・あなたに決闘を申し込みます」

「？」

まるで興味なさそうな飛鳥その目を見たタキリは・・・

「腐った魚みたいな目・・・これがお母様が見込んだ東飛鳥？」

飛鳥を見下すタキリその時。

「待ちなさい」

「！！」

飛鳥の後ろから現れるティアナ。

「あなたは？」

「義妹です！！」

クロスミラージュを構えるティアナはそう叫んだ。

「下がりなさい・・・あなたじゃ無理です」

「あんたの相手はあたしで十分だ！」

「おもしろい・・・仮にも神の娘の私を・・ふふ」

タキリの念力がティアナに襲い掛かるとティアナは咄嗟に回避するがタキリに殴り飛ばされ倒れてしまう。

「もう終わり？」

「これからが・・・本番よ！！ぐあ！！」

一方的に殴られ始めるティアナ。だが飛鳥は脱力していた。そして一方的に殴られ始めるティアナ。力の差は歴然だった。

ティアナが殴られていると飛鳥は少し昔を思い出していた。

幼い頃、無力だった自分を変えるべくひたすら暴力を鍛え上げるべく喧嘩を吹っかけた。

傷つき倒されても何度でも這い上がり相手を乗り越えるべく強くなろうとしたあの頃の自分。

「うぐ！！」

殴り飛ばされるティアナを見た飛鳥は・・・

「私は・・・負けない！！」

「！！」

倒されても倒されても立ち上がろうとするティアナの姿に昔の自分を重ね合わせる飛鳥。

「・・・見上げた根性ね・・・今日は私が負けを認める」

「やった・・・あ・・・」

ぼろぼろのティアナは神に勝ったということにティアナは安心し倒れた。

「ティアナ！しっかり」

倒れたティアナを抱き起こす飛鳥。

「飛鳥さん・・・これの・・・おかげです・・ね・・・」

ティアナが取り出したのは飛鳥のダグコマンダーだった。

ティアナのひたむきな心に飛鳥の中の・・・

「これは・・・ティアナ・・・あんた・・・タキリとか言ったな！あんた何でこんな事を！？」

・・・静かな・・・

「知れたこと・・・お前をその気にさせるためだ」

「そんな下らない事の為に・・・こんなむごい事を・・・」

野生が蘇った!!

「良いよ・・・相手になる!!」

生きた目を取り戻した飛鳥。

「その気になったの?酒が抜けるまで待とうか?」

「いらん」

タキリの拳が飛鳥の顔に突き刺さると・・・

「・・・ふ」

まるで効いてないと言った顔の飛鳥。

「くそ!!」

タキリの拳が再び襲い掛かると・・・

「！！」

飛鳥の拳がタキリを沈めた。

（なんで・・・こいつ本当にさっきまで飲んだくれてたの！？・・・あ・あ・・・）

意識を手放すタキリ。神の娘とはいえ曲がりなりにも神を一撃で倒す飛鳥。

「・・・やっぱり飛鳥さんはこうじゃないと・・・う！」

薄れる意識で飛鳥を見るティアナはそのまま意識を手放した。

管理局のベッドで目を覚ますティアナその横には・・・

「・・ん？」

「やっと目覚めた？執務官殿？」

「飛鳥さん？」

「悪いけど・・・こいつ返してもらうよ」

ダグコマンダーを持つ飛鳥の姿を見たティアナは・・・

「飛鳥さん！」

ダグコマンダーを装着する飛鳥は・・・

「さって・・・リベンジと行くか！！」

「はい！！」

リベンジを誓い獣は蘇るのだった。

第十三話　落ちた獣（後書き）

現在大列車フォートレスに身を置いた私たち。今は散り散りになったメンバーの情報を集めないと・・・え?この世界の神?そういえば見当たらないな～まさかこの世界はダミーの一つ?あれは・・・

次回!勇者大戦ブレイブサーガＡ，ｓ　宇宙海賊現る

あれって・・・ワルターじゃん

第十四話　宇宙海賊現る

第十四話　宇宙海賊現る

大列車フォートレス

『久しぶりに人のメンテが行き通ってるぜ』

ライオボンバーたちボンバーズがスタッフの手で補給を受けている。

「全く荒っぽい戦い方ばっかりやってるから」

『うるへえ』

などと浜田も頭を悩ませている。

横では・・・

「これがグレートマジンガーですか？」

「おう・・・こやつの光子力はわしらの手に負えん・・・ちゅう訳で改造プランを決行したいんじゃが・・・」

「いいでしょう。平和の為に協力しましょう」

ヴォルフガングと大阪工場長が手を組みグレートマジンガーの改修作業にかかる。

尚八神組も補給を受けているが・・・・

「四日ぶりの飯だあああああ!!」

「飯いいいい!!」

青木のプロデュースのフルコースを食べまくっている八神組・・・

理由は・・・

「いや～みなさんそんなにお腹が空いてたんですか?」

「「おめえのせいだろうが!!」」

そう火鳥である。

北斗が怪我の治療をしている時に火鳥が北斗に栄養をつけさせようと残りの食料を全部鍋で煮込んだのだった。

その結果全員空腹で４日間水だけで過ごしたのだが空腹で出撃できず食べなくても生きていけるボンバーズと飛龍に隠し食料を持っていたユウのみが出撃したのだった。なおチームアルフェリスはダグベース防衛の為残った。

因みにここ４日間ダグベースは天界生物の襲撃を受けなかった。
理由は・・・

翼を持った天界生物が現れると・・・

「４日ぶりの飯だあああああ！！」

「飯いいいいいい！！」

拳銃構える北斗と気力練りだす紫。

「逃がしません！どう料理しますか！！？」

ストラーダ構えるエリオ。八神組のメンバーにとっては天界生物すら食料になるらしい。

天界生物も命が危ないので今回ばかりは逃げ出した。

そんなこんなで青木のフルコースは嬉しかった。

「そんなに喜んでもらえると嬉しいですね」

青木も満足そうにフルコースを振舞っている。

「ユウ！北斗さんがチャーハン追加！！あ！紫さんも餃子２００百個追加！！あ！星史君がオムライスだって！！ケンタ君もハンバー

グ！！」

「うっぎゃあああ！！何で俺が！！」

フライパンを二刀流で扱っているユウ。どうやら一人だけ空腹を紛らわせて動けるという因縁を受けたユウは料理担当にさせられるのだった。

そしてしかめっ面でフルーツパフェ食べている北斗の姿を見てアルトが呟いた。

「・・・北斗さんって甘党？」

「ウチのお義父さんファミリーレストラン行くと必ずデザートから目を通すんだ」

「あっそ」

キャロの言葉をスルーするアルト。

その傍ら・・・

「雷さん激さん遊んで～～」

「ああ～」

「もう勘弁せんかいいい！！」

ヴィヴィオに首根っこ掴まれる雷と激。

そして激を見るシグナムは・・・

「まぁ・・・しっかり遊んでくるんだな激・・・私に負けたままな」

「舐めるないこの黒岩激女子に負けたまま終われぬ！！」

ヴィヴィオに首引っ張られながら連行される激は絶叫するがヴィヴィオは離してくれなかった。

「もう激さんも情けないな～」

ヴィヴィオの相手を８時間以上しても疲労一つ起こしていないキャロ。

「キャロさんあなたなんでそんな平気なの？」

エリオが恐る恐る尋ねてみるとキャロは笑って答えた。

「う～ん小さい頃から一人旅してたし・・・第一」

「？」

「・・・お義父さんの娘やってると体力なんて自然につくもん・・・」

遠い目をするキャロを尊敬してしまうエリオだった。

そこでシャマルは思った。

「当面の敵は天界生物より食糧問題かも・・・」

体力は問題なしだが肝心なものは食料。

「みんな良く食べるからな～特に甲児君と剣児君・・・エリオやスバルも・・・楓ちゃんがいないだけまだマシかも・・」

今は居ない大食らい二人を考え今後の食糧問題を考えるシャマル。

尚楓の普段の食欲はスバルの１０倍である。

その時

ビー！！ビー！！

大列車フォートレスに響く警報に浜田が館内放送で叫んだ。

『舞人！天界生物が近づいてくる！すぐに出撃して！！』

その言葉に北斗が・・・

「たく・・・飯くらいゆっくり食わせろ・・・」

「貴様出撃できんだろ・・・おいユウ行くぞ」

「すまん・・・鍋使いすぎて・・腕が・・・」

散々こき使われた為ダウンしたユウ。

「クソ・・・グレートは改修中だ・・・」

鉄也が煮え切らない言葉を出すと・・・

「ここは俺達が行くよ！ダ・ガーン良いな！」

『了解！星史！』

ダイレクターから響くダ・ガーンの声に今度はアドベンジャーが続いた。

『私も一緒に行こう』

「俺も行きます」

火鳥が続き舞人に先導され出撃した。

『グアアアアア！！』

翼を持った天界生物の群れを捕らえる勇者達。

『みんな！一気に合体するぞ！』

『了解！』

火鳥が続くと星史が何かに気づいた。

『おい！なんか来るぞ！？』

天界生物より上空から巨大な鮫の海賊船が飛来した。

『あれは！？』

アドベンジャーがその海賊船に気づくと・・・

『チェエンジ！！』

海賊船は巨大なロボットに変形した。

『あ！あれは！？』

『宇宙の海は俺の海・・・海賊戦艦！キャプテンシャークとは！俺の事だあああああ！！』

何の脈絡も無く搭乗するキャプテンシャークに度肝を抜かれる舞人たちそしてキャプテンシャークの胸の鮫の口が開くと二人の影が・・・

『悪の天界生物よ！』

『私たちは神を倒す為！』

『正義と平和を守るため！！』

『宇宙の彼方からやってきた！！』

『『その名も！宇宙海賊！イーザックブラザーズなのだ！！』』

キャプテンの鮫の口で堂々と名乗りを上げるイーターとシリアス。

そしてキャプテンが・・・

『船長・船長代理』

「「なんだ?」」

『ここは空の上だ』

ピンポーン

空は空気が薄いです

「げえ!はやくなんとかしてええええ~」

『あいよ』

空気が薄い為酸欠状態になるイーザックブラザーズ。

その登場に・・・

ポカーンとしている勇者達（アドベンジャー以外）と天界生物。

気を取り直して

「とにかくみんな合体よ!!」

シャマルが出撃命令を出すと・・・

「ダ・ガーン!合体だ!!」

星史のダイレクターが輝くとアースライナーが下半身に変形しアー

スファイターが上半身に変形する。

『とお！』

ダ・ガーンがコアになるとアースライナーに装填されアースファイターが合体した。

『合体っ！ダ・ガァァン！エエックス！』

ダ・ガーンＸに合体が完了した。

「ファイヤー・・・ジェエット！！」

火鳥のコールの飛来するファイヤージェットが人型に変形する。

「はっ！！」

火鳥の瞳の回路が唸りを上げ不死鳥のように舞うとファイヤージェットの胸に吸収される。

そのままフレイムブレスターが飛来するとファイバードの胸に合わさった。

『武装合体！ファーイバード！』

完成するファイバード。

『チェンジマイトカイザー！！』

ドリル特急からカイザー１から５が発進されると一つに合体されマ

イトカイザーが完成する。

降り立つ勇者達。

『ん？アドベンジャー？久しぶりじゃねえか？』

『キャプテンシャーク！』

再会を喜ぶレジェンドラの勇者達だがイーターことワルターが通信を取った。

『みんな！はやくこのエリアから出るんだ！』

『どういうことだよ？』

星史が疑問を持つと天界生物から攻撃を受ける。

『く！今はこいつらを片付ける事が先か・・・キャプテン！！』

『あいよ！スパイラルランチャー！！』

キャプテンシャークの肩のミサイルランチャーが天界生物に直撃する。

『くらえ！！』

星史の叫びと共にダ・ガーンXがキックを放つ。

『フレイムキャノン！！』

ファイバードのフレイムキャノンが次々と天界生物を撃墜し・・・

『フットランチャー！！』

アドベンジャーのミサイルが天界生物を撃墜する。

『おかしい・・・前回までの天界生物の進行が弱い』

マイトカイザーが天界生物を撃墜するとキャプテンシャークにアドベンジャーが合体した。

『ハイパーギャラクティカバスター！！』

キャプテンシャークの砲撃が天界生物を一掃し決着した。

大列車フォートレスに戻った勇者達はワルターに状況を聞いた。

「なんだって？この世界に神は居ない？」

その言葉に頷くワルター。

「ああ。私たちが調べたところこの世界は我々の力を弱めるモニュメントがおいてあるだけのダミー・・・つまり陽動だ・・・」

ワルターの言葉に舞人が続いた。

「そうか・・・それでこの前より天界生物の力が低減したように見

えたのか・・・」

「・・・という事は・・・この世界の時空の歪みは解かれたってとこね・・・早いところ次のエリアに行かないと・・・」

シャマルの推測に舞人が・・・

「俺も行きます・・・天界生物の力が今のままなら大列車フォートレスの防衛システムだけで何とかなるはずです」

「良いの？」

「・・・はい・・俺は・・・みんなが平和に暮らせる世界を取り戻したいんです！」

「舞人君」

みんなと一緒にダグベースに行く事を決意する舞人。

「舞人が行くなら僕も行くよ！」

「浜田君・・・ようし！いくぞ！」

「うん！！」

握手する舞人と浜田。

一方

「ヤダヤダヴィヴィオも行く～～～！！」

「ダメだ大人しく待ってろヴィヴィオ」

一緒に行く事をせがむヴィヴィオを止めるユウ。

「いいか～こっちは危険なんだ危ないって」

「とか何とか言ってヴィヴィオの相手するのが嫌なだけじゃないユウ～？」

「なわけねえだろ！（図星だけど）だいいチャキ↑拳銃突きつける音

「・・・ごちゃごちゃ言ってねえでとっとと連れてけ」

「はい！」

声にドスをきかせてタレ目の金髪に脅されて渋々承諾するユウ。

「わあ～ハゲ蔵さんありがとう～」

と言って北斗に懐くヴィヴィオだがウザそうに北斗につまみ上げられると・・・

「・・・おい金髪チビ。ダグベースに来るからにはそれ相応の仕事はしてもらうぞ」

「は～い♪」

「よし約束したぞ・・・おいチビ！娘！息子！」

「「は～い」」

「何だ父上」

北斗に呼ばれる北斗一家。

「こいつらが面倒見てくれるから安心しろ」

そう言ってヴィヴィオの面倒を紫に押し付ける北斗。

「意外に子ども好きなのかな北斗さん？」

等と思うアルトだった。

第十四話　宇宙海賊現る（後書き）

こうして主要メンバーを連れ別世界に旅立ったダグベース。けど戦いは終わってないのよね・・・え?天界生物?違う違う・・・天界生物の百倍は手強い敵・・・そう!食糧問題!!ダグベースはどう切り抜けているか乞うご期待!

次回!勇者大戦ブレイブサーガＡ，ｓ　ダグベース観光ツアー

私たちのダグベースでの生活こうご期待!

第十五話　ダグベース観光ツアー

ダグベース

「キャッキャ！！」

ダグベースに連れられウハウハの影の守護者ヴィヴィオ。尚体勢は北斗に吊られていた。

「・・・おい良いか金髪チビこれからお前の仕事分担だ・・・働かざるもの食うべからず」

「は～い♪」

そう言って北斗に吊られながらヴィヴィオは部屋に行くのだった。

第十五話　ダグベース観光ツアー

次のエリアに向かうダグベースは海辺の広い場所を探し着陸した。
そして着陸と同時にダグベースからポンプのようなものが海に向かって放たれた。

Dブロック格納庫

舞人、浜田、ヴォルフガングが勇者ロボの整備に精を出していた。

「うわ～マイトカイザーが整備されてる～」

「ヴィヴィオちゃんこっち～」

「は～い」

シャマルに案内されるヴィヴィオはいつもの部屋に辿り着いた。

Bブロックブリーフィングルーム

「まぁ主にダグベースの休憩所ね～みんなが気軽に使えるようになってるのよ～」

ブリーフィングルームに集まるヴィヴィオ。世話役のケンタと現司令官シャマル大先生の抗議を受けていた。

「ていうかシャマル先生海水汲み上げてるけど何してんの？」

ケンタの質問に答えるシャマル。

「生きるためにはお水は欠かせないのよ」

「そんなのシャマル先生が魔法で出せば良いじゃん」

「ごめんね～私風属性なんだ～」

水に魔力変換できるメンバーを知らないシャマル先生だった。

「で～私何すればいいの？」

「そうね～やっぱり家事掃除～ん～ヴォルフガング博士と浜田君の整備の手伝い～う～ん」

「うぇ～ん多すぎるよ～」

と嘆くヴィヴィオだが・・

「う～んまずは一番の問題を片付けないとね～」

「一番の問題？」

その時艦内放送が響いた。

『ああ～ダグベースにいる勇者達～ただちに装備２３０を持ってＧブロックまで来て下さい・・・繰り返します・・・・』

雷の放送に・・・

「装備２３０って？」

「さぁ～？」

ヴィヴィオの質問にチンプンカンプンのケンタ。

「これよ♪」

「「はあ？」」

シャマルが笑顔で出したのはハサミだった。

Gブロック畑エリア

「う～んっと」

「よいっしょっと」

人口太陽に照らされながらトマト畑で収穫するケンタとヴィヴィオ。

『みんな～必要な分しか採っちゃだめだからね～あんまり多く採っちゃうと野菜がダメになっちゃうから～』

拡声器で全員に指示を出すシャマル。芋畑で収穫する竜と激。田んぼで米を収穫する鉄也と大介。ニンジン畑を耕すシグナム。その光景を見てケンタとヴィヴィオは思った。

「なんで？ダグベースに畑があるの？」

「さぁ～」

「それはね・・・本来ダグベースは移動要塞として設計されたの・・・その為には食糧問題は必須・・・そこで必要最低限の食料は自給自足が出来るようになっているのよ」

「「おお～」」

シャマルの説明にダグベースの設計に拍手するケンタとヴィヴィオだが・・・

「というのは建前で」

「「建前なの！？」」

「実際のところ力君や楓ちゃんが物凄～～～～～く食べるから流石のはやてちゃんも経済が火の車になっちゃって・・・だったら自分達で作っちゃって予算節約しちゃえ～的なノリで生まれたのがこの畑」

「へぇ～どっからこんな予算が出たの？」

「そりゃ～影の守護者世界に行って商売したり～サイン会やダグオンショーなどで思いっきり稼ぎました・・・」

あの商売の数々はこのためだったらしい。

「・・・普段は楓ちゃんが作り上げた人工季節変換装置で作物にとって最適な環境を作ることが出来るけど・・・所詮は機械・・・結局は人の手でやらないといけないのよ」

「う～ん奥が深いな～」

感心するケンタ。

「まぁ～普段はザフィーラが管理してくれてるからね～生き延びる

為の必需品として水、ミネラル分やたんぱく質は必須」

「ふむふむ」

シャマルの抗議を真剣に聞き始めるヴィヴィオ。

「幸いな事に楓ちゃんの趣味で作った空気中の水分を貯めて真水に変換できる装置のおかげでダグベースは飲み水には困らないの」

「ちょっと待ってよ・・・それじゃあダグベースを海につける必要ないじゃん」

「ケンタ君・・・たしかに飲み水には困らないけど水の需要はそれだけじゃないのよ・・・生活用水と言って掃除やトイレにも水を使うの・・・そこで海の資源としてダグベースは海水を汲み上げて生活水にするのけど塩水じゃ錆びちゃうから楓ちゃんが趣味で作った汚水変換装置と循環装置で海水も真水に変えて生活水にしてるの・・・さらに循環すれば飲料水として使えてこの大きな基地の水問題を満たすことが出来るのよ・・・空気の水じゃ足りないの」

「奥が深い」

「・・・食料に至っても栄養が偏っていてはダメなの・・・・このトマトでミネラル分は一応の決着を見た・・・ただし・・・たんぱく質が足りない！！このメンバーには十分な需要を満たせない・・・よってダグベースは必然的に魚介物の宝庫である海に停泊しなければならない・・・魚でたんぱく質を補給する・・・それに炭水化物補給のために去年から田んぼを設立したの・・・そして麦は小麦粉として保存も利く・・・パンにするのはバツね」

「・・・冗談でしょ？」

「今の状況では日々生き残る方が戦いなの・・・天界生物はぶっ飛ばせば帰ってくれるけど空腹はいつまでも付きまとう」

「「・・・・・・・・・」」

あまりにも的を得ているシャマルの言葉に青ざめる子供二人。

「御飯の問題を甘く見てるとダグベースに屍をさらす事になるわよ～はい！お仕事！」

「「ラジャ！！」」

手をパンと叩くシャマルに敬礼し急いで野菜収穫をするケンタとヴィヴィオ。

「う～んこれとこれ・・・」

奥の木でキノコを収穫するキャロ。キノコには詳しいようだ。

「それにしてもなんでこんなに食べられるキノコばっかりあるんだろう？」

「それはね・・・力君に食べさせてみて問題の無かったキノコだけを集めたらこうなったの」

「そうですか・・・」

キノコの選別に力の体質を利用したシャマルたちだった。

「お！こっちにもあったな～」

火鳥もキノコ採集に精を出していた。

ダグベース前では

『おっしゃ！大漁だぜ！！』

『引け引け！！』

ボンバーズとチームアルフェリスが漁を行っていた。漁のノウハウは本業の北斗に教わった。

『こりゃ！みんな喜ぶぜ！はっはっはは！』

ライオボンバーが網を担いで格納庫に戻った。

Lブロック調理場

玉ねぎ刻んでいるユウとアルト。ニンジンを切っている星史。そしてガスレンジの前に居る北斗とエリオだった。

調理場の壁にはこう書いてあった。

『火鳥とシャマルだけは死んでも居れるな！居れたら殺す！！』

内側からダグベースチームを崩壊させないための手段である。

「おいエリオ・・・鍋しっかり見てろ」

「はい！」

鍋で食材煮込んでいるエリオ。その隣で北斗は釣ってきた魚を焼いていた。

その隣で魚をフライにするアルト。

「コネコネ～」

調味料をこねている紫。香ばしい匂いがし食欲をそそる。それは誰もが知っている調味料。

「では！カレー粉投入！！」

自家製スパイスで出来たカレー粉を鍋に投入する紫。ダグベースははやての趣味により調味料だけには困らず調味料は自作できるため買う必要もないのだった。

本日の献立

魚介&野菜たっぷりカレー

『いっただきま～す！！』

各自食卓に着き食事を取る勇者達。

「がつがつ！」

「はぐはぐ！！」

物凄い勢いでカレーを食べてるケンタとヴィヴィオ。

「どう美味しい？」

「うん！苦労してやっと食べられたんだからミラクル美味いよ！」

「うん！美味しい～」

涙流しながらカレーを食べるケンタとヴィヴィオ。その顔を見て満足そうなシャマル。

「ていうか・・・シャマル先生なんでこんな食べられるの？」

食糧問題としてはお腹いっぱい食べられる事に疑問を抱くケンタ。

「八神組の掟はね・・・美味しいご飯はお腹いっぱい食べる！！」

「「「「「うんうん」」」」」

シャマルの言葉に頷く八神組のメンバー。

「だあって皆必死に戦ってくれてるんだからお腹いっぱい食べて欲

しいじゃない」

八神組の方針としてはどんな状況下においてもお腹いっぱい食べて英気を養う。そのための苦労は欠かさないという方針である。

「まぁ～当分はヴィヴィオちゃんには畑仕事と雑用お願いね～」

「は～い！」

そう言ってカレーを食べるヴィヴィオだった。

第十五話　ダグベース観光ツアー（後書き）

とりあえずこのエリアを探るべく行動を開始した私達。中々情報が集まらない・・・ん?あれは勇者の石

次回!勇者大戦ブレイブサーガＡ’ｓ　空の勇者再び

あれが力君の熱狂的に好きな勇者ね～

第十六話　空の勇者再び

第十六話　空の勇者再び

食糧問題もクリアしたダグベースは周囲の状況を探索するべく調査を開始した。

『こちらファイヤージェット。今のところ異常なし』

「了解です」

火鳥の通信を受け取る雷。ダグベースのオペレーターとしての腕が確かな雷はオペレート担当になった。

『こちらドリル特急・・・こちらも異常なし』

「了解・・・これで後は星史君だけか」

星史の連絡を待ちながら雷はダグベースの内部を見たはじめた。

格納スペース

「はぁ～早く姉貴見つかんねえかな」

整備しながらユウがぼやいていた。

「文句を言わないでよ。今度はマイトカイザーを」

「へいへい」

浜田に指示され勇者ロボのメンテを一手に預かるユウ。だがユウを含めて確実に整備できるメンバーが４人しか居ないのがきつかった。

「ぜってえ俺過労死する」

「その時はお線香の一本でも上げてあげるよ」

「むか！」

そう言いながら勇者ロボを整備するのだった。因みにアルトはヴィヴィオと一緒に畑仕事をしている。

訓練スペースにて・・・

「まだまだ！！」

キャロが鉄や相手に組み手をしていた。

「ふぎゅ！！・・・まだまだ！！」

１０回以上ぶっ飛ばされても尚立ち上がるキャロに鉄也は・・・

「たいした気迫だな・・・それに見上げた根性だ・・・なら・・・それに敬意を表してとことん訓練してやる！！」

「お願いします！！」

そう言って鉄也に蹴りかかるキャロ。

「・・・たくあのクソ娘身体壊しても知らんぞ」

「でもダーリンなんだかんだ言っていつも見に来てるじゃん♪やっぱりお父さんやってますなチャキ

「・・・無駄口言ってんじゃねえよチビ」

しかめっ面で紫に銃突き付ける北斗。

その隣では

「うあああああ！！」

ストラーダごと吹っ飛ばされるエリオの相手をしているシグナムと竜。

「・・・どうした？その程度で北斗を超えられるのか？」

「くっそ・・・・僕は絶対北斗をぶちのめしてみせます！！ズドン！！は！！」

迫り来る銃弾を咄嗟に避けるエリオ。

「ほお・・・何なら今すぐ相手になってやろうか？」

「望むところです！！」

「やめやめやめい！！」

北斗とエリオの乱闘を止めに入る紫と霧風だった。

市街地

ダ・ガーンでパトロールをしている星史。

「天界生物の情報は入るけど・・・この世界の神の情報が入んないな」

ここ数日間神の情報が入っていないため煮詰まっている星史。

『ん？』

その時ダ・ガーンが何かの反応に気づいた。

「どうした？ダ・ガーン？」

『これは・・・天界生物？』

「なんだって！？」

『来る！！』

突如上空から舞い降りる天界生物。それを迎え撃つべく戦闘体制に入るダ・ガーン。

「ダ・ガーン！合体だ！！」

星史がダイレクターを掲げると凄まじい光を放った。

アースライナーが下半身・アースファイターが上半身に変形する。

『とおっ！！』

ダ・ガーンがコアになるとアースライナーに装填されアースファイターと合体し胸に母なる地球が映し出され頭部が現れる。

『合体っ！！・・・ダ・ガアァァァン！！！エエエックス！！』

誕生する伝説の勇者。

『ダ・ガーン！ダグベースに連絡だ！』

『了解！こちらダ・ガーン！』

ダグベース

ダ・ガーンの通信を受け取る雷。

「何ですって？天界生物が？・・・分かりました！」

雷の呼びかけで空を飛べるメンバーが緊急出動した。

『アースバルカン！！』

ダ・ガーンＸの両腕から砲身が現れ天界生物を撃墜していくとそのまま空へ舞い上がった。

『つおおおおお！！』

ダ・ガーンＸのキックが天界生物にヒットすると天界生物は反撃に超音波を放った。

『ぐあああ！！』

『うあああああ！！』

墜落するダ・ガーンＸはホバリングで地上への激突を防ぐが数が減らない。

『くそ！キリが無い！！』

星史が天界生物の数に焦ったその時。

『うあああああああああ！！』

天界生物から一斉攻撃が繰り出されダ・ガーンＸは後ずさった。

『くそ・・・このままじゃ！！・・・ダ・ガーン！負けるな！！』

『了解星史！！』

一斉攻撃を弾き飛ばしダ・ガーンXは天界生物に向かっていくが数に差がありすぎる。だが星史は諦めていない。

その時だった。

『！？』

ダイレクターが輝き４つの光を指した。光はそれぞれの宝石のような石に集中するとそれぞれの体の元へ向かった。

そして身体に憑依するとダ・ガーンXの元に舞い降りた。

『セイバーズ！』

舞い降りた勇者は星史の仲間・・・空の勇者セイバーズだった。

『お久しぶりです隊長！』

ホークセイバーが星史に声をかけた。

『みんな目を覚ましたのか？』

『はい！！』

『は！危ない！！』

『とああ！！』

迫り来る天界生物を弾き飛ばすセイバーズ。振り返ったホークセイバーは星史に向かって叫んだ。

『さあ隊長！私たちに命令を！』

ホークセイバーの言葉に星史がダイレクターを掲げた。

「よおっし！合体しろ！セイバーズ！！」

『『『『ラジャ！！』』』』

巨大な紋章と共にセイバーズの瞳が輝くとフォーメーションに入るセイバーズ。

スカイセイバーが上半身になりジャンボセイバーが胴体になるとシャトルセイバーが足に変形した。

そしてホークセイバーが身体となり合体していく。

『合体っ！！』

頭部が現れると叫びが響いた。

『ヘガサスセイバー！！』

完成した四足の勇者。

そして駆け付けるダグベースチーム。

『あれは？セイバーズ？』

駆け付けた舞人がセイバーズを確認した。

『新入りに遅れをとるな！変形だ！！』

『『『おう！！』』』

鉄也の言葉に変形を開始する勇者達。

『海賊戦艦！キャプテンシャーク！！』

『チェンジマイトカイザー！！』

『チェンジ！飛龍！！』

『翼竜神！！』

『スクランブルダッシュ！！』

空を飛べる勇者達が揃った。

『セイバー！テンペスト！！』

ペガサスセイバーの風が天界生物を吹き飛ばした。

『さあって・・・新しいグレートの力・・・見せてやるぜ！！』

砲門を開くグレート。

『ガトリングミサイル！！』

天界生物を撃墜していくグレートそして・・・

『グレートランサー！！』

巨大な槍で天界生物をなぎ払った。

『行きます！鉄也さん仕込の格闘術とお義父さんの気力技！』

両手を合わせるキャロ。

『気力！噴火！！』

技ではなく気力そのものを放出するキャロ。キャロの気力に飲み込まれていく天界生物。

『うわ～キャロに任せようかな』

『ええいサボるな！！』

『うわ！こんな狭い中でハンマー振るな』

と賑やかな飛龍だが真面目になりゲイルファングを構えた。

『いっけっ！』

ゲイルファングから次々と発射されるバリアブルシュート。

そしてユウが作ったスキを・・・

『ドリルクラッシャー！！』

舞人が突き次々と天界生物を撃墜した。

『ナイス連係プレー！舞人！』

『ああ！』

ユウと舞人のフォーメーションが天界生物を撃墜していく。

『行くぜ！！スパイラルランチャー！！』

キャプテンシャークのミサイルランチャーが天界生物を撃墜した。

形勢逆転しダ・ガーンXがエネルギーを集中した。

『ブレストアースフラッシュ！！』

ダ・ガーンXが天界生物を一掃すると・・・

『セイバーアロォォォォォ！！』

ペガサスセイバーのセイバーアローが天界生物にトドメを刺した。

戦いが集結した勇者達を見る影が・・・

「あれが勇者か・・・なるほど・・・面白い・・・スサノオは簡単

に死んだが・・・このツクヨミが相手になろう・・・」

そう言って姿を消すツクヨミ。

ダグベース

セイバーズが登場した事により戦力が増強するダグベース。

「う～ん力君喜ぶわね～セイバーズの大ファンだったから・・・・」

とセイバーズを見て思うシャマルだった。

宇宙

次元嵐が治まった宇宙で青いジェットが何かを探し続けていた。

『見つけた！！』

青いジェットから現れた傷ついた勇者が瞳に輝きを亡くしたブレイブダグオンの残骸を見つけた。

『力！しっかりしろ！力！！』

ブレイブダグオンは反応しない。

『待ってろ！必ず私がお前を救ってみせる・・・大切な弟子を死なせはしない！！』

そう言って傷ついた勇者は青いジェットでブレイブダグオンの残骸を地球に運ぶのだった。

第十六話　空の勇者再び（後書き）

あれ?なんか身体が変だな・・・え?何でキャロはガン飛ばして銃向けてんの?は!鉄也さんそんなガサツになって・・・え?みんなの身体が入れ替わった!?私に竜さんが入ってアルトにユウ君が入ってヴィヴィオちゃんに舞人君が・・・私は激さんになってる!?これじゃ出撃できないじゃん!

次回!勇者大戦ブレイブサーガA'　s　ダグオン出撃不可!!

うわあ!私ダグテクターで戦わないといけないの!?ああ!大悟君良い所に現れた!!

第十七話　ダグオン出撃不可

拠点を置いたダグベース

「本日も異常無しか」

雷が端末を自動に切り替えると就寝するべく部屋に戻った。ダグベースの勇者とはいえ適度な休息をしなければ身体がもたない。そのため就寝時は寝る心配のないチームアルフェリスやボンバーズ、ダ・ガーンに後のことを任せているのだった。

第十七話　ダグオン出撃不可

ダグベース郊外

一つの光がダグベースに舞い降り人の姿になった。

「ここが・・・ダグベースか・・・」

見たところ女性はダグベースをマジマジと見つめていた。その表情には憎しみが映っていた。

「見ていてください・・・父様の仇・・・このスセリが討ちます・・・」

そう宣言するとスセリは手から光の球を作り出しダグベースに向かって投げつけた。光に包み込まれるダグベース。

「ふふふ・・・これで混乱の最中死ぬがいい」

そう言ってスセリは消えるのだった。

翌日

「・・・う～ん」

シャマルが目を覚ますと身体に変調が起こっている事に気づいた。だがそれを眠気のせいだと思い込み洗面台に向かったその時だった。

「？」

自分の格好が違うシャツにトランクス・・・さらには足にスネ毛まである。慌てて鏡を見ると・・・

「ぎゃあああああああああ！！」

自分の姿が変わっていた。

「なんで？なんで私が激さんに！？声まで激さんと一緒だし・・・・」

激の声で女口調・・・はっきり言って怖い。だがそんな事を気にしている場合じゃなかった。

「まさか！！」

ブリーフィングルームに走る激（中身はシャマル）が見た光景は・・・

「・・・・嘘」

激（中身はシャマル）が見た光景は何故か目つきの悪いキャロ、めんどくさそうな表情のアルト、何故か滅茶苦茶凛々しい己の姿、男前のヴィヴィオとヴォルフガング、ガサツそうな鉄也、キャピキャピしてる雷、以下省略だった。

「・・・どういう事？」

「おお！わしの身体じゃ！！」

激（中身はシャマル）に詰め寄るシグナム（中身は激）。シグナムのボイスで激口調なので違和感無限大である。

「これ・・・どういう事？」

激（中身はシャマル）が状況を聞いてみる。

「・・・知らん・・・朝起きたら突然こうなっていた」

シャマル（中身は竜）も何が何だとわからない状況だった。

「てか・・・どうすんだよ！？これ！！」

鉄也（中身は星史）もどうすれば良いか分かっていない。

ズドン！！

「うるせえ・・・ガタガタ騒いでんじゃねえ」

思いっきりタレ目でガン飛ばしながら銃撃つキャロ（中身は北斗）

「まぁ・・・お義父さんおちつこチャキ

「ああ？俺は十分落ち着いている・・・死ぬかテメエ？」

「・・・お義父さん・・・私の声でそんな事言わないで・・・」

キャロ（中身は北斗）に眉間に銃突き付けられる北斗（中身はキャロ）。中々シュールである。その光景を見て全員が思った。

（（（ああ～キャロが反抗期起こしたらこうなりそうだな～））））

等とキャロに絶対に反抗期を起こさせてはいけないと思ってしまった。

「皆さん大変ですね～」

そう言って何事もない火鳥。

「ねえ兄ちゃんなんで何も起こってないの？」

火鳥に質問する大介（中身はケンタ）。

「さぁ～」

何も考えていない火鳥。

その一方

「うわあああああああああん！私の身体返してよユウーーーー！！」

「馬鹿アルト落ち着けえええええ！！」

ユウ（中身はアルト）に首根っこ掴まれてガクガク揺さぶられるアルト（中身はユウ）。

更に

「わいわいわ～い！！私雷さんの身体になった！！トライダグオン！サンダーヴィヴィオ！！わ～い！」

「あ・・・ヴィヴィオちゃんあんまり僕の身体で遊ばないでね・・・」

雷（中身はヴィヴィオ）はダグテクターを付けて遊んでいてそれをザフィーラ（中身は雷）があまり遊ばないように言う。

「・・・良かった・・・竜の身体で」

竜（中身はシグナム）が少し安心する。はっきり言ってあまり変わらない。

「ち・・・何が悲しくてこんなクソ娘の身体にならねばならねえんだ」

キャロの身体でウザそうにガン飛ばしながら毒づく北斗。

「う・・う・・・」

ユウ（中身はアルト）が何故か嘆きだした。

「どうした？」

「私・・・寝ぼけてこの身体でお風呂は入っちゃった！！」

「・・・そりゃ・・・大変じゃったの・・・嫁入り前で」

「そうだよ！嫁入り前だよ！！」

シグナム（中身は激）に肩叩かれて同情されるユウ（中身はアルト）

「・・・俺は・・・危うく着替えかけたグハ！！」

ユウ（中身はアルト）にハンマーで叩き潰されるアルト（中身はユウ）。

「エッチ！変態！スケベ！！もう信じらんない！！」

「未遂だ！第一お前！自分の身体だろ！！」

絶叫するアルト（中身はユウ）

そこで

「・・・まぁ・・・これで一つ確定したな・・・」

シャマル（中身は竜）が何かに気づいた。

「どういう事じゃ？」

シグナム（中身は激）が叫ぶ。

「・・・このままじゃ俺達は合体できない」

「え？なんで？」

「お前ら融合合体できるか？」

「「「あ！！」」」

シャマル（中身は竜）の言葉に唖然とするメンバー。そうダグテクターはダグコマンダーを起動させるだけで済むが融合合体が出来ない為その先のことが出来ない。

「・・・俺達はこの身体じゃ出撃できません」

「確かに」

ヴィヴィオ（中身は舞人）、ケンタ（中身は大介）、ヴォルフガン

グ（中身は鉄也）、星史（中身はザフィーラ）はロボットに乗れない、耐えられる身体じゃない、操縦できないという状況だった。

「う～ん入れ替わってしまったがゆえのピンチって奴？」

考え込む激（中身はシャマル）

「こんな時に天界生物が攻めてきたら・・・」

「その点は大丈夫。ボンバーズやチームアルフェリス、ダ・ガーンやセイバーズ、アドベンジャーとキャプテンシャークは入れ替えを免れました。みんな張り切ってました」

ヴィヴィオ（中身は舞人）の言葉にホッとするメンバー。

「これで火鳥さんが居るから・・・こっちは合体できて5人か・・・いや・・・ギリギリでユウ君が出撃できて8人・・・厳しいな～」

その時ダグベースの警報が鳴り響いた。

「天界生物出現！ボンバーズ！チームアルフェリス！緊急発進だ！！」

オペレートルームで勇者達に出撃命令を出すひかる（中身は浜田）。

「よし！ダ・ガーン！セイバーズ！お前達も出撃だ！」

『『了解！！』』

鉄也（中身は星史）の命令で出撃するダ・ガーンとセイバーズ。

「浜田君！どうした大丈夫か！？」

「ヴィヴィオ・・・じゃなくて舞人！それが天界生物の奴らみんなが出撃できない事をいい事に暴れまわってるんだ！」

「くそ」

奥歯をかむヴィヴィオ（中身は舞人）。

「シャマル！我々もダグテクターで行くぞ」

「ええ！！」

竜（中身はシグナム）と共に出撃する激（中身はシャマル）それを見送ったシグナム（中身は激）が

「どうでもいいがわしの声で女言葉は気色悪いぞ」

そして

「んじゃユウ行くわよ」

「ええ！何で俺が！」

「あんた貴重な操縦型でしょ！私の身体なんだから操縦できるでしょ」

「えええええ！！」

そう言ってユウ（中身はアルト）に引っ張られるアルト（中身はユウ）だった。

市街地では天界生物が暴れまわっている。警察や軍隊が対抗するが手も足も出ない。

『勇者・・・居なければ・・・コチラノモノダ』

『待て！！』

『？』

『『『『とお！！』』』』

天界生物が振り返るとチェンジし降り立つボンバーズ。

『悪党共！このボンバーズが居る事を忘れるな！！』

ライオボンバーの宣言に天界生物はあざ笑った。

『キサマラ・・・ザコめ・・・』

『ほざくな！！』

天界生物に蹴りかかるライオボンバー。

そして

『よし！我々はＢエリアを引き受ける！！』

『頼むぜセイバーズ！！』

ライオボンバーに見送られながらＢエリアの天界生物に向かっていくセイバーズ。

『よし！！俺達はＣエリアだ！！』

『『おう！！』』

Ｃエリアに向かうチームアルフェリス。その姿を見ていたスセリは・・・

「く・・・エネルギー生命体の魂は入れ替えられなかったか・・・」

出陣の用意をするのだった。

『おりゃあああああああ！！』

ライオボンバーのキックが天界生物を吹き飛ばした。

Ｂエリア

『ホークアンカー！！』

ホークセイバーのアンカーが天界生物にヒットしなぎ払う。

Ｃエリア

『音速拳！！』

ビルガーの無数の拳が天界生物にヒットするとあることに気づいた。

『なんだ？・・・こいつら数は多いが弱いぞ・・・』

『油断するな！』

ガンザーの言葉に構えるビルガー。

Dエリア

『フルアーマーモード！！』

『スパイラルランチャー！！』

アドベンジャー、キャプテンシャークの攻撃に沈む天界生物達。

ダグベース

「ボンバーズ！今度はRエリアだよ！」

『こいつは大忙しだな～！』

「ぼやくなよライオボンバー」

『おおっと待ってくれよ。今のは活躍の場が増えて嬉しいって意味だぜ～』

「悪かった。今の言葉取り消すよ」

『へへ！いいって事よ！』

エリアの敵を次々と倒していく勇者達だが数は減らない。

「う～んせめてヴィヴィオちゃんが聖王モードになれれば舞人もマイトカイザーに・・・」

「浜田君・・・聖王モードの事は言っちゃだめだよ」

「・・・ごめん」

ヴィヴィオ（中身は舞人）に怒られるひかる（中身は浜田だった）

『おりゃあああ！！』

天界生物を殴り飛ばしたライオボンバー。それを合図に戦闘が終了した。

『ふ～やっと片付いたか』

ダイノボンバーが一息入れるとバードボンバーが何かに気づいた。

『ん？何かこっちに向かってくるぞ！』

『あれは・・・天界生物？いや！神だ！！この騒動の首謀者だ』

空を飛ぶ女性の姿を見たバードボンバーはアニマルモードに変形した。

『！！』

『神め！今回の落とし前を付けてやる！！』

バードボンバーの銃撃を浴びる神はそのままカウンター攻撃でバードボンバーを叩き落した。

『おあ！』

『バードボンバー！やっろう！！神めこれでも食らえ！！』

ホーンボンバーのミサイルが神に撃墜すると神・スセリが舞い降りた。

『勇者・・・ボンバーズ・・・父様の仇』

『なに！？父様だと？・・・わけわかんねえがみんな！合体だ！！』

『『『おう！！』』』

ライオボンバーに先導され合体フォーメーションに入るボンバーズ。

ライオボンバーがライオンの胸を出し上半身になるとバードボンバ

ー、ダイノボンバーが背中合わせになり下半身に合体しライオボンバーと連結し肩にホーンボンバーが合体した。

『合体!!バトルボンバー!!』

猛獣四体合体・バトルボンバーがここに完成した。

『バトルボンバー!天に代わって悪を討つ!!』

スセリと対峙するバトルボンバー。そしてその事はすぐにダグベースに届いた。

「ダ・ガーン!セイバーズ!ボンバーズが神と交戦中だ!援護に向かってくれ!」

『『了解!!』』

「兄ちゃん!聞こえた!?」

『分かったケンタ!!』

ボンバーズの援護に向かう勇者達。

『ぐああ!!』

スセリに殴り飛ばされるバトルボンバーは体制を立て直した。

『バトルバースト!!』

『！』

スセリはバトルボンバーの攻撃を避けるとカウンターでバトルボンバーを蹴り飛ばす。

『くそ！』

『まだまだ・・・父様が受けた痛みはこんなものじゃない！！』

扇を展開しバトルボンバーを祓うスセリ。後ずさるバトルボンバー。

そして

『セイバーテンペスト！！』

『アースグレイザー！！』

救援に来たダ・ガーンX、ペガサスセイバーの援護攻撃がスセリにヒットする。そしてファイバード、飛龍、シグナム、シャマルが次々と駆けつけた。

『ちっ・・・勇者め・・・出ろ！！』

スセリが手を翳すと地面から巨大な天界生物が現れた。

「うそ・・・」

「相手にとって不足はない！！レヴァンテイン！！」

「それはシャドークナイよ！！」

竜（中身はシグナム）が巨大な天界生物に斬りかかるがあまり効果はない。

「もう！シグナムの馬鹿！！」

「貴様！激の声でそんな台詞をはくな！！」

「へえ～ならウフ～ンとかイヤ～ンとか言おうか？」

『シャマル先生止めてくれ！！俺たちにダメージが起こる！！』

黒化して冗談を言う激（中身はシャマル）に飛龍の中のアルト（中身はユウ）が絶叫した。

『サン！スライサー！！』

『ダ・ガーンブレード！！』

天界生物に向かってファイバードのサンスライサーが投げつけられ隙が出来るとダ・ガーンXが斬り捨てた。

一方スセリに向かって突き進むバトルボンバー。そこに駆けつけたチームアルフェリス。

『ようし！合体だ！！』

『させるか！！』

チームアルフェリスが合体しようとした瞬間スセリは鏡を取り出しチームアルフェリスを映した。

『う！！』

『くおおお！！』

『うあああああ！！』

次の瞬間チームアルフェリスの身体が入れ替えられてしまった。

『どう？・・・これで合体できまい』

「まさか・・・あれが入れ替えの種？」

激（中身はシャマル）が鏡に気づくそしてチームアルフェリスは・・・

『く！！やってみなければ分からん！！』

『『『時空合体！！アルフェリス！！』』』

合体バンクを使いまわし強制的に合体したアルフェリス。因みにアルフェリスαだが人格は上からボルト、ガンザー、ビルガーの順に合体している。

『おりゃあああ！！』

アルフェリスが殴りかかろうとするとあらぬ方向に向かって拳を突き出した。

『あれ？！！うわあ！！』

自分を殴ってしまうアルフェリス。

理由は・・・

『くそ！いつもと合体ボディが違うから動かしづらい！！』

そう・・・合体できても動かせなくなってしまうのだった。

「そうだ！あの鏡を壊せば！みんな元に戻るかも！！」

『よっしゃ！！』

激（中身はシャマル）の言葉にバトルボンバーが殴りかかるがスセリは回避しバトルボンバーを蹴り飛ばす。

『ぐは！』

バトルボンバーに詰め寄るスセリその時だった。

「チェンジリオン！！」

叫びと共に赤い戦士がスセリを蹴り飛ばした。

『お前は・・・大悟！？』

「大悟君無事だったの！？」

激（中身はシャマル）に振り返るリオン。

「ああ！シャマル先生！おっし！ジークスクランブル！！ジーク！合体指令！！」

『了解！ティラノス！！』

ジークの叫びに大地から現れるティラノスがそのまま人型に変形した。

『フォームアップ！！古代合体！ジークリオン！！』

降り立つジークリオン。そして激（中身はシャマル）が指令を出した。

「大悟君！ボンバーズと一緒にスセリを押さえつけて！！」

『わかった！！ジークブレード！！』

ジークリオンが剣を引き抜きスセリに斬りかかるとその一撃を受け止めるスセリだがパワーはジークリオンのほうが上だった。

『おりゃあああああああ！！』

『く！！』

徐々に押され始めるスセリ。

一方

『うおおおおおおお！！』

天界生物にフレイムソードを突き刺すファイバードだが巨大すぎて浅い一撃になってしまう。

『く！せめて奴の動きをとめることができれば』

「止めればいいのか？」

その時

ズドンズドン！！

天界生物に銃弾が浴びせられるファイバードたちが振り返るとそこにはキャロ（中身は北斗）の姿が・・・

「黄竜！！」

召喚陣を出し黄竜が出てくると・・・

『？』

何故キャロが自分を召喚できたのか混乱している黄竜。

「おい・・・黄竜・・・てめえ自分の主を忘れたか」

このとき黄竜は思った目の前のキャロ（中身は北斗）が反抗期を起こしたと・・・

『フュージョン！！竜神！北斗！！』

久しぶりに竜神になった北斗は手を合わせると経文を唱えた。

『穏・摩・爾・香・・・森羅万象！！』

キャロ（中身は北斗）の気力を浴びせられ動きを封じられる天界生物。

『フレイムソード・・・チャージアップ！！つおおおおおおおおおおでえええええええええい！！』

動きの封じられた天界生物を一刀両断するファイバード。そして膝を突くキャロ（中身は北斗）

『北斗さん！』

『・・・心配ない・・・やっぱりキャロの身体じゃ気力の減りが早いな・・・』

とりあえず天界生物を撃破しスセリに向かう勇者達。

『おりゃあああああ！！』

『く』

ジークリオンに羽交い絞めにされるスセリ。激（中身はシャマル）が鏡を割ろうとするがスセリが暴れる為中々接近できない。

「どうすれば・・・」

万事休すの激（中身はシャマル）。

その時

「・・・それは俺がやろう・・・」

『！！』

ジークリオンの目の前にいつの間にか立っていたシャマル（中身は竜）。

「竜さん！いつの間に」

「少し荒っぽく使うぞ」

「えええ！！」

ジークリオンがスセリを押さえている間にスセリの身体を次々と飛び移るシャマル（中身は竜）。あまりの身体能力に激（中身はシャマル）は・・・

（・・・私の身体って曲がりなりにも守護騎士なのね・・・）

己の身体能力に驚くのだった。そしてシャマル（中身は竜）が上空に3回転捻りの上に空中反転しながら飛ぶと鏡に向かって手裏剣を投げつけた。

ピシ！

手裏剣は見事に鏡にヒットすると鏡は割れ効力が消えていった。

『うお！元に戻った！！』

元に戻ったアルフェリスがスセリの前に並び立つとスセリは構えを説いた。

『良かった～』

飛龍の中のアルトもホッとした。

『今日は私の敗北を認める・・・けど・・・父様の仇は必ずとる・・・』

『おい！父様って誰だよ！！お前いったい！？』

バトルボンバーの言葉にスセリは答えた。

『わが名は・・・スサノオが娘・・・スセリ・・・ツクヨミが出るまでもない・・・私がお前達を倒す！！』

そう言うとスセリは撤退した。

戦闘が終了しダグベースに戻ると・・・

「うわあああん嫁入り前なのに！！ユウううう！責任とってよおおお！！」

「おおおお俺のせいじゃ～ねねねねねね」

アルトに首ガクガク揺さぶられるユウ。

「・・・お義父さん・・・いっぺん死にますか・・・」

元に戻ったのにガン飛ばして北斗をにらみつけるキャロだが・・・

チャキ

「・・・黙ってろ」

「・・・ごめんなさい！！」

拳銃突きつけられあっさり降参するキャロだった。

「つまんない～もっとダグテクター付けて遊びたかった～」

「あははは・・・」

完全にヴィヴィオの子守になってしまった雷。

それは置いておいて・・・

「大悟君は一体どうしたの?何故このエリアに?」

「・・・ああ・・・俺もこの間の次元嵐に巻き込まれたんだ・・・」

大悟をみるとシャマルが何かを閃いた。

「とにもかくにも・・・大悟君が着てくれてよかった・・」

「なんで?」

「だって~ジークが居れば勇者の魂を感じる事が出来るからみんなを探しやすくなったし」

「そうか・・・頼むぜ!ジーク」

『わかった』

こうして古代勇者ジークリオンと合流する勇者達。

その時通信が響いた。

「は~いこちらダグベース♪」

「シャマル先生?」

「竜馬さん!」

第十七話　ダグオン出撃不可（後書き）

竜馬さんと連絡が取れた私達・・・天界生物が!?今の竜馬さんにはゲッターがない・・・隼人さんと弁慶さんは一体何処に・・・なに?あの黒いゲッター?

次回!勇者大戦ブレイブサーガA'　S　黒いゲッターロボ

あれもゲッターロボ?

第十八話　黒いゲッターロボ

ダグベース

トントントン

何故かシグナムが出刃包丁を持って魚を開いていた。

「・・・シグナムさん何をやってるんですか？」

大介が聞いてみるとシグナムは無表情で答えた。

「・・・見て分からないか？干物を作ってる」

「干物？保存食ですか？」

「いや・・・私の趣味だ」

火属性の烈火の将なだけに干物作りに適した能力の持ち主であるシグナム。己の能力をそんな事に使っていいのか？・・・とにかく干物作りはシグナムの数少ない趣味と化した。

しかもこれが意外に味が良いらしく八神組の資金源にもなるほど売れていた。

「食べてみるか？」

そう言って大介に干物出すシグナム。食べてみる大介は・・・

「・・・美味しいです・・・」

「・・・良かった」

日々精進する人は味も精進する人のようだ。

尚、材料の魚は北斗が売れ残りを持ってくるのだった。

第十八話　黒いゲッターロボ

現在ダグベースはとあるエリアに向かっていた。

先日竜馬からの通信が入り竜馬が今ゲッターチームと逸れ単独行動をしているという事だった。

「それにしても・・・竜馬さんよくダグベースの回路に直接アクセスできたわね～」

ダグベースは宇宙人などにハッキングされないようにセキュリティが半端ない。

楓のデータソフトにより常にリアルタイムで更新されていく。

味方の回路じゃないとダイレクトに回線を繋げない。

「もしかして・・・竜馬さんの近くに勇者が居るのかな？」

そう感じるシャマルは竜馬の居るであろう野営地に急ぐのだった。

海沿いに面した野営地

現在ゲッターチームと逸れてしまった竜馬は集落のような場所で厄介になっていた。

「！！く・・・また始まったか・・・」

戦闘に告ぐ戦闘・・・野営地の人々は天界生物の襲撃ですっかり参ってしまった。

「ひ！！」

野営地の人々に天界生物が襲いかかろうとしたその時だった。

『デスランサー！！』

双剣の槍を構えた黒いロボットが天界生物を切り裂いた。

『デスパルサー！！』

両肩のビームキャノンが天界生物を撃ち落すと両腕が放たれる。

『アンカーナックル！！』

吹っ飛ばされる天界生物をデスランサーで倒した黒いロボット。

『・・・・・』

戦闘が終了し黒いロボットは撤退を始めた。

野営地の人々は黒いロボットを見て歓声をあげていた。

野営地から離れた場所に降りた黒いロボットはコックピットが開かれ分離した。中から出てきたのは黒い鎧を着た戦士だった。

「大丈夫か！？大地君」

駆けつけた竜馬に黒い戦士は鎧の装着を解いた。そして中から現れたのは少年だった。

少年の名は南力の子孫にして南楓の弟・南大地だった。

「・・・竜馬さん」

「・・・君にばかり戦わせて・・・俺にもゲッターがあれば」

「よしましょうよ・・・ないもん強請ったってしょうがないだろ・・

・俺がやるよ」

「すまない・・・しかし・・・さすが勇者だ・・・」

「よせよ・・・俺は勇者なんかじゃない・・・」

勇者という言葉を頑なに否定する大地。楓との戦いにより関係は前より悪くはないがやはりどこかで意地になっているようだった。ゆえに勇者という言葉を拒んだ。

「だが・・・君は連日の戦いでボロボロのはず」

「俺の心配より自分の心配でもしてろ・・・等身大の天界生物倒せんの・・・あんたしか居ないんだからな」

それだけ言うと大地はフォートレスストライカーの整備を始めた。

大地の背中を見送る竜馬はその背中がどこか寂しそうなことを感じ取っていた。

竜馬と大地が出会ったのは竜馬がこの世界に飛ばされて数日後の事だった。

数々の天界生物の襲撃。人間の等身大の天界生物なら竜馬が倒せた。だが巨大な天界生物が襲い掛かった時竜馬にはゲッターロボが無かった。

その時

世界調査をしていた大地が駆けつけたのだった。

「・・・流竜馬」

「・・・大地だ・・・」

お互いに自己紹介をする竜馬と大地。大地が駆けつけたことにより巨大な天界生物の相手は大地が、等身大は竜馬が戦っているのだが巨大な天界生物相手には大地一人に任せたままになったのだった。

竜馬がダグベースに送った通信も楓が取り付けたフォートレスストライカーの通信機で行ったのだった。

今竜馬に出来るのは大地のフォートレスストライカーの整備を手伝う事だけだった。

「・・・・・・」

無言でフォートレスストライカーの整備をしている大地。今のこのまともに状況では戦える人間は大地しか居ない。

そんな姿を見ていた竜馬はゲッターが無いだけで戦えない自分が許せなかった。

「大地君・・・手伝うよ」

「・・・断る・・・・自分の面倒は自分で見る」

「意地になるな・・・ん!?」

竜馬が大地の肩に触れた瞬間大地が胸から大量に出血していることに気づいた。先ほどの戦闘で傷を負っていたのだった。

「大地君！すぐに医者に「待て！」！！」

「・・・医者には言うな」

出血が止まらない大地が竜馬を押さえつけた。

「・・・今・・・俺が戦えないってみんなが知ったら・・・野営地のみんなビビったままだろ」

大地の言葉に危険性を感じる竜馬。だが大地の言うこともわかる。疲れ果てた野営地に人々には天界生物と戦う大地が拠り所となっていたのだった。

静かに大地は言葉を続けた。

「・・・結局・・・じいさんも・・・姉貴も・・・俺も自分の思うように生きられないんだよ・・・」

「え？」

「常に誰かに何かを託される・・・俺はそんな運命が憎かった」

「・・・大地君」

「けどな・・・俺はもう抵抗すんのやめる・・・やるしかねえんだよ・・・俺は」

大地の瞳に何かの決意を感じ取る竜馬。

その時

「「!!?」」

凄まじい気配と共に何かが野営地にやってきた。

「ちっ・・・着やがったか・・・う!!」

傷が更に開き始めた大地に竜馬が駆け寄った。

「大地君!その傷じゃ無理だ!!」

竜馬の言葉に大地は竜馬をにらみつけて返した。

「俺は戦う!戦って神を倒す!!・・・たとえ俺が勇者じゃなくても・・・俺はみんなを守りたいんだ」

荒々しく・・・そして穏やかに言う大地の言葉に竜馬は何処となく力を重ねた。

「行くぜ・・・コネクション!!」

ジェノサイドアーマーを装着する大地。そしてフォートレスストライカーが起動した。

「合身!!」

フォートレスストライカーが人型に変形するとコックピットが開き

大地が接続された。瞳が緑に光る。

『デスライカー！！』

完成するデスライカーが天界生物と対峙した。

『ちっ・・・でかいな・・・』

今回の天界生物はいつもと違い巨大で力強い姿をしていた。早期決着を試みるデスライカー。

『デスランサー！！』

デスランサーを振り回し天界生物に襲い掛かるが天界生物はデスランサーを受け止めた。すかさず武器を切り換えるデスライカー。

『シュート！！』

デスライカーの銃撃が天界生物に襲い掛かるがそのまま天界生物に殴り飛ばされてしまった。

『うああ！・・うわ！！・・・がは！！』

連続で蹴り飛ばされるデスライカー。その姿を見ていた竜馬は・・・

「いつもと動きが違う・・・まさか！傷が！！」

傷が深くまともに戦える状態じゃない大地。だがそれでも戦うという選択をしたのは大地。

「くそぉぉぉ・・・・・」

握り拳を作る竜馬。

「ゲッター・・・俺にゲッターがあれば」

『うあああああ!!!』

天界生物に締め上げられるデスライカー。

その姿を見た竜馬が叫んだ。

「ゲッタァァァァァァァ!!!」

竜馬の叫びと共に海が割れた。

そして海から赤いゲッターロボが競り上がってきた。

「あれは・・・ゲッターロボ?・・・・!!」

海から現れたゲッター1・・・次の瞬間無数のエネルギーがゲッター1に降り注がれた。

光り輝くとゲッター1のゲッター炉が暴走しオーバーロードし・・・進化した。

「・・・あれは・・・」

竜馬が見上げるとゲッターロボは黒くマントを靡かせ禍々しい姿となり竜馬の下へ降り立った。

「よし！！」

覚悟を決め竜馬は黒いゲッターロボに乗り込んだ。そのゲッターロボはスペックがゲッターロボGに勝るとも劣らなかった。

「黒いゲッターロボ・・・ブラックゲッター・・・よし！！いくぞ！！」

竜馬が操縦桿を握るとブラックゲッターが起動し天界生物の元に向かった。

『ああ・・・』

徐々に破壊されるデスライカー。天界生物がデスライカーにトドメを刺そうとしたその時だった。

『待てええ！！』

『あれは？』

天界生物を蹴り飛ばすブラックゲッター。

『大地君！大丈夫か！？』

『その声は・・・竜馬さん・・・それはゲッターロボ』

駆けつけたブラックゲッターに驚くデスライカー。

『行くぞ！天界生物！どんな敵が来ようと！ゲッターで相手になってやる！！トマホーク！ブーメラン！！』

ブラックゲッターのトマホークが天界生物を切り裂くとそのまま腕のスパイクブレードで天界生物を殴りつける。

『・・・凄い力だ・・・格闘型か・・・よし！！』

フック系のパンチを浴びせ天界生物を殴り倒すとそのまま蹴り飛ばした。

『・・・すげえ』

竜馬の戦いに何かを感じるデスライカー。

『いくぞ！とお！！』

漆黒のマントを渦巻くように突撃すると螺旋を描くようにゲッタービームが放たれた。

天界生物がゲッタービームに押されたとき懐に入るとスパイクブレードで何度も斬りつけトマホークを叩きつけトドメに至近距離のゲッタービームを放った。

爆発する天界生物。そしてブラックゲッターに肩を借りながら起き上がるデスライカーの姿が・・・

戦いが終わり大地と竜馬の姿が会った。

「・・・行くのか?」

「ああ・・・あれがここの地域のボスだ・・・もうこのエリアは大丈夫だ・・・う!」

よろける大地に竜馬が肩を貸す。

「すぐにダグベースが来る・・・そこで治療を・・・」

「今更ダグベースの連中にどの顔下げて会えばいいんだ?・・・!!」

竜馬の手を振り払う大地はそのままフォートレスストライカーに向かって歩いた。

「・・・大地君!君は・・・「誰かに何かを託されるけどな・・・」

振り返る大地。

「結局それを決めたのは自分なんだ・・・俺が決めたんだ・・・自分が決めた事守れねぇんならな・・・死んだ方がマシだ」

決意の表情・・・どこか力と似たような表情の大地を見た竜馬も決意した。

「・・・わかった・・・もう止めない・・・改めて名乗ろう・・・俺は流竜馬」

「南・・・大地」

「南？・・・まさか！君は！？「じゃあな」！！」

竜馬を尻目に大地はフォートレスストライカーに乗り込みその場を後にした。

大地の苗字を聞いて確信した竜馬。

「大地君・・・いつか君とも仲間になれるかな・・・」

そして轟音に振り返った竜馬の下に駆けつけるダグベース。

『竜馬さん！』

「みんな・・・」

こうして竜馬はダグベースに合流するのだった。

第十八話　黒いゲッターロボ（後書き）

ツクヨミを探すダグベースチーム。だが俺はやる事があった。アマテラス・・・飛鳥を倒した神。だったら・・・俺が！！

次回！勇者大戦ブレイブサーガＡ，ｓ　サイモン対アマテラス

・・・飛鳥・・・仇はとる

第十九話　サイモン対アマテラス

ダグベースにてキャリアにリフトアップされるブラックゲッター。

「うわ～ゲッター線なんてギガやばいもの整備しなきゃならんのか・・・」

少し焦るユウ。

「なんでこんな所にゲッターロボが合ったんだろうね？」

「それは・・・俺たちで考えましょう・・・」

「あ」

舞人が指を刺すと考えすぎてぶっ倒れている肉体労働担当者達

「まぁ・・・こういう事じゃない？今の世界ってＩＦの世界が融合したんでしょ？んでその融合した世界のどこかで誰かがゲッターロボ作ってたんでしょ・・・んでその誰かが作ってたゲッターロボが竜馬さんに答えたのよ」

「シャマル先生本当はわかってないでしょ？」

舞人の言葉にシャマルは・・・

「早い話が・・・あるんだったら勿体無いから使っちまえ！！」

「いいのかな～それで」

流石の竜馬も苦笑いすると・・・

ビービー

「ん？」

オペレートルームのレーダーが何かを捉えた為シャマルが確認した。

「これって・・・」

モニターでなにやら黄色い光が点滅していた。

「これは・・・サイモン君！！」

「え？どういう事ですか？」

雷の言葉に答えるシャマル。

「このダグベースにはね・・・力君・飛鳥・北斗・サイモン・楓ちゃんのような問題児に反応する探知機が付いててね・・・何かあったときのための最終手段であるのよ・・・このエリアにサイモン君が居るってことね・・急げ全速前進！！」

「はい！！」

ダグベースの操縦かんを握るアルト。操縦担当になったようだ。

第十九話　サイモン対アマテラス

ダイブライド内

「よっし！！」

拳を叩きつけるサイモンは何かを決意しタクティカルコマンダーを整備する。そこに・・・

「おい・・・おめえ何やらかすきだ？」

「親びん・・・」

サイモンの部屋に入ってくるヴィータ。サイモンとヴィータは次元嵐時すぐに合流していた。

「親びんじゃねえよ！おめえなにやらかす気だって聞いてんだ」

「この近くにアマテラスが居るって情報が入ってな」

「アマテラスが？・・・ここはツクヨミの縄張りだろ？」

「どうも八神組の連中が行動起こしてるらしくてツクヨミがアマテラス呼んだんだと・・・」

「ならあたしも行く」

「は？」

「おめえ一人であだ討ちでもやろうってんだろ？」

「んまぁな・・・！！」

ヴィータの鳩尾を殴りつけるサイモン。

「・・・おめえ・・・」

「悪いな・・・大切な人を死ににいかせるような男にゃなりたくないんでね！！」

そのままダイから出るサイモン。

「ダイ！親びんを頼んだぞ」

『了解！王子！！』

ダイに後のことを任せサイモンはアマテラスの下に向かった。

ツクヨミ領土内のアマテラスの部屋

「・・・ツクヨミ・・・私を呼びつけるとは何事?・・・呼ばれたは良いけど・・・こう待たされたんじゃ退屈ね」

ツクヨミに勇者達の対策があると言われ呼び出されたアマテラス。
だがツクヨミはアマテラスを別室に缶詰にしているだけだった。

「?」

何かを感じ取るアマテラス。

その時だった。

「!!」

天井を突き破ってタクティカルスーツで降り立つサイモン姿が・・・

「・・・へえ・・・退屈しのぎに刺客か・・・ツクヨミもいきな計らいじゃない」

アマテラスに向かって構えるサイモン。

「八神組のサイモンだ・・・アマテラス俺と勝負だ!」

「ちょうど暇だったところだから構わないわ・・・けど私に挑むというのはどういうことか分かっているの?サイモンさん?」

「けっ・・・あんたの恐ろしさは飛鳥で思い知らされたけどな・・・俺は飛鳥のようにいかねえ!!」

「そういう事・・・あなたが死んだら彼女もっと惨めになるでしょうね・・・」

「うるせえ!!」

「!!」

飛び掛ったサイモンのパンチを無駄な動き一つ無しで受け止めるアマテラスはそのままサイモンの右腕を握りつぶした。

「ぐあああああああ!!」

右腕を抑えながらもがくサイモン。その姿をあざ笑うように見下すアマテラス。

「この程度?」

「・・・試してみるかああ!!ソードブレイカー!!!」

無事な左腕でソードブレイカーを構えるサイモン。そのままブレイカーモードを起動した。

「ソードエンド!!」

「!!」

ソードエンドを素手で受け止めるアマテラス。

「なに!?うわあああああ!!!」

そのままサイモンを叩きつけた。

「・・・サイモン・・・あなたは弱すぎる・・・命があるうちに帰ったほうがいい」

「そうは・・・いかねえな・・・」

タクティカルスーツが放電を起こしながらも立ち上がるサイモン。

「まだ切り札でもあるの?・・・折角だから見せて」

「見せてやらあああ!!」

破損したタクティカルスーツが輝き始めるとソードブレイカーにエネルギーが蓄えられた。

「行くぜ!スーパーバスタードラッシャー!!!」

分散されたエネルギー弾が一点でクロスし凄まじい光を放ちながらアマテラスに向かうが・・・

「!!」

アマテラスの腕がエネルギー弾をかき消すとサイモンの胸を貫いた。

「がは・・・」

「・・・退屈しのぎにはなったわね」

「うおお！！」

そのままサイモンの胸から腕を引き抜くアマテラス。

「この部屋は棺おけ代わりにでも使って・・・撤収！！」

サイモンを残し部下を引き連れて部屋から去るアマテラスの軍勢。

「・・・悪い飛鳥・・・仇・・・討てなかった」

そう呟くサイモン。

目を覚まし惨状に駆けつけたヴィータ。凄まじい血の臭いが充満している。

「あの馬鹿・・・どこだよ！？・・・サイモン・・・サイモン！！」

必死にサイモンを探すヴィータその時

「おや・・・び・ん・・・？」

「サイモン!!」

胸から大量出血しながら壁にもたれかかっているサイモン。その表情は青ざめていた。

「誰にやられた?アマテラスか?・・・アマテラスだな!!」

「・・・やろ・・・滅茶苦茶・・・強えでやんの・・・」

口から出血しながら衰弱していくサイモン。

「許せねえ・・・あのアマあたしが倒してやる!!サイモン!おめえ・・・死ぬなよ!!」

「・・・心臓をやられた・・・もうダメだ・・・」

笑ってヴィータに言うサイモン。

「・・・飛鳥のやつ・・・大丈夫かな・・・勝てるよな・・・」

「サイモン・・・お前・・・自分が死ぬのに何他人のこと考えてんだよ!!」

「・・・へへ・・・死ぬのは・・・別に・・・・・怖くねぇし・・・俺は数年前・・・ラディ星で死ぬはずだったんだ・・・」

「なんで・・・なんでそんな事言うんだよ!!」

「・・・だってよ・・・俺は・・・親びんたちの話で生きるよ・・

どうやって生きて・・・どうやって死んだか・・・語り継がれ続ければ生きてんだ・・・」

笑っているサイモンに涙を流し続けるヴィータ。

「・・・もう・・・眠くなっちまった・・・」

「おい・・・おい！死ぬなよ！！サイモン！！！」

サイモンの魂が天に昇ろうとしたその時。

「やっと見つけたのにそう簡単に死んでもらっちゃ困るわよ！！」

「「？」」

サイモンとヴィータが振り返るとシャマルの姿が・・・

ダグベースメディカルルーム

「・・・嘘・・・」

「・・・マジ？」

シャマルの手により心臓を破壊されたのに治ってしまったサイモン。

ヴィータと絶命寸前だったサイモンは驚いていた。

「ふ～ちょ～っと手こずったけどもう大丈夫」

「あの～俺心臓やられたんすけど」

流石のサイモンも焦っているとシャマルが明後日の方を向いた。

「・・・ふっ・・・私が今までどんだけ力君の『致命傷』を治してきたと思ってるの・・・生命活動止まんない限り治せるわよ」

シャマルの回復スキルに思わず懺悔してしまうサイモンとヴィータだった。

「けど・・・内臓へのダメージ大きすぎるわね・・・しばらくサイモン君も戦えないわね～」

北斗に続きサイモンも戦えない今の状況に頭を悩ますシャマル。

「五馬鹿中二馬鹿は見つけたけど・・・二人とも戦えない・・・あああああ！！なんでウチの男共は肝心な時に役に立たないのおおおおおお！？」

「「・・・いやそう言われても・・・」」

頭をかくしかない北斗とサイモンだった。

第十九話　サイモン対アマテラス（後書き）

う～んとにもかくにもヴォルケンリッターは全員揃ったのよね～なんで肝心なはやてちゃんが居ないのよ～合体できないじゃない！！それはまぁ置いておいて・・・別のエリアでは天野平和科学研究所にて・・・あれは楓ちゃん?その姿・・・次元の狭間に取り残されたの！?

次回！勇者大戦ブレイブサーガＡ’ｓ　隔離された風の勇者

・・・楓ちゃんまで

第二十話　隔離された風の勇者

ダグベース

「うぃ～うぃ～」

メディカルルームの包帯だらけのサイモンが唸っていると・・・

「うるせえ！おめえいつまでも唸ってんじゃねえ！！」

「がは！」

ヴィータにアイゼンをお見舞いされるサイモン。

「親びん！俺怪我人よ！」

「親びんじゃねえよ！大体おめえ肝心なときに役に立たねえんだから・・・」

そこでシャマルがあることを思い出した。

「あ！そういえば別にサイモン君が戦えなくてもダイが自分の意思持ってるから戦えるじゃない！！だからとりあえずは戦える！宇宙伝承の伝説の勇者だからね・・・力君や北斗さんみたいに星の一個や二個ポーンって出来るし・・・んでダイは？」

「「・・・・・・・・・・・・・・・」」

姿が無いダイのことを振られて無言になってしまうサイモンとヴィータ。

「どうしたの？何で無言なの？」

「・・・ダイの野郎地球に戻って早々奥さんと子供連れて里帰りしやがったんだ！！」

「ダイいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！！」

家庭第一になってしまった伝説の勇者に向かって絶叫するシャマル。

「ダイはあたしを送ったらとっとと家族の元に帰った」

「まぁ・・・ダイの子供もでっかくなったからな～パイロットの人間が現れればリンクアップして強くなるな・・・」

「ちょっと待って・・・機械生命体は成長するの？」

「ダイは伝説の勇者だぜ・・・だから伝説の力で成長したんだよ・・・多分」

「随分都合が良いわね・・・伝説の力」

「いいじゃねえかよ。朴念仁かシャマル先生」

「そうだ！って朴念仁って何だ？」

サイモンの言葉の意味を知らないヴィータ。そしてシャマルが呆れながら言った。

「・・・朴念仁って言うのはっ・・・頭が固くて融通の利かない人の事・・・いつまで私の狂言回し続くのかしら・・・」

そう思いシャマルはダイとダイキッズにとっとと合流してほしかったのだった。

第二十話　隔離された風の勇者

天野平和科学研究所

「う～む・・・・」

天野博士が頭を捻らせていた。

「お爺ちゃんまだわかんないの？」

「ハルカ・・・そうじゃの～機材は正常値じゃが空間の観測はまるではかどらん」

『これじゃあ・・いつファイバードたちに連絡が取れるか・・・』

天野の観測を手伝っていたエースバロンも考え込んでいた。

「ここしばらくの連戦でそろそろ我々も消耗気味ですね・・・」

ジェイルも手持ちにパーツをいくらか加工しているが出撃回数と補給の回数が合わない状況が続いた。

「ふ～む・・・そろそろ昼飯にしよう・・・ジェイル君ここは頼んだぞい」

「はい！」

そう言って天野博士がダイニングルームに向かった。

食卓にて

がっついて食べているノーヴェに対しウェンディが・・・

「なんだ・・・またハゼの天ぷらッスか・・・」

「贅沢言うな！！」

大所帯の天野平和科学研究所。それゆえに食糧問題はダグベースよりも深刻だった。

「はぁ・・・ケンタ大丈夫かしら」

「ケンタお兄ちゃんはきっと無事だよ」

ハルカの心配をヴィヴィオは宥める。

「心配ない・・・ファイバードも必ず来る」

「お爺ちゃん」

ノルウェールの言葉に勇気付けられるハルカそしてヴィヴィオは表に出た。

「大丈夫大丈夫」

ヴィヴィオは必死で自分を落ち着かせた。

「けど・・・怖いよ・・・パパ・・・お姉ちゃん・・・」

火鳥と楓を思うヴィヴィオ。

その時だった

『グシャアアアアアアア!!!』

天野平和科学研究所の海から現れる天界生物。

「天界生物!!」

そして

天野博士が出撃指令を出した。

「エースバロン!出動じゃ!空将も頼めるますかな!」

「もちろん!」

天野平和科学研究所のハッチからバロンチームが発進し赤い機関車が召喚された。

「フレイムライナー！」

フレイムライナーが変形すると人型になりノルウェールと一体化した。

『チェンジ！フレイムナイト！ソウルユニバース！！』

フレイムナイトの召喚に応じるソウルユニバースが大地を駆けるとフレイムナイトと合体し完成する勇者。

『フォームアップ！炎馬合体！フレイムナイト！！』

『フォームアップ！！』

エースバロンを中心にバロンチームが合体していく。

頭部が現れ稲妻が巻き起こる。

『五体合体！サンダー！バロン！！』

天界生物の前に降り立つフレイムナイトとサンダーバロン。

『サンダーカノン！』

『グラニーバスター！』

天界生物にフレイムナイトとサンダーバロンの攻撃が天界生物にヒ

ットしていくが連戦に継ぐ連戦で二人とも消耗していた。

『ギャザウェイスラッシュ！！』

サンダーアンカーを天界生物に打ち込むとハンマー投げの要領で振り回すと・・・

『うおおおおおおおおおおおおおおお！！！』

フレイムナイトのソウルブレードで一閃を入れると真っ二つになる天界生物。

すると次々と現れる天界生物。

『く！！』

天界生物に羽交い絞めにされるサンダーバロン。

その時

「あ！！」

迷い込んだ子猫を見つけてしまったヴィヴィオ。

「！！」

咄嗟にヴィヴィオが戦いの最中に駆け出し子猫を抱き上げた。

「大丈夫・・・」

ヴィヴィオの手の中で震える子猫。ヴィヴィオが研究所まで走った
その時天界生物の攻撃がヴィヴィオを襲った。

「！！」

ヴィヴィオに天界生物の攻撃がヒットする寸前

・・・優しく・・・温かい風がヴィヴィオを守るように包み込んだ・
・・

『ギシャアア』

風に吹き飛ばされる天界生物。

「ん・・・ここは？」

ヴィヴィオが目を覚ますとそこは静かな空間だった

だが自分が天界生物に襲われた時に守ってくれた風

間違えない

間違えるはずがない

その人は静かに・・・ゆっくりとヴィヴィオの前に現れた

「・・・ヴィヴィオちゃん」

「お姉ちゃん！！」

ヴィヴィオの前に現れた楓。思わず抱きつこうとするが・・・

「！！」

楓の身体をすり抜けてしまうヴィヴィオ。

「どうして？」

「・・・今私はね・・・世界と世界の間にいるんだ・・・この姿は・・・空間を超えきれない状態で少しの間だけ見えてるだけなんだ」

「お姉ちゃん！早く帰ってきて！！」

「・・・それが・・・方法が・・・無いんだ」

「そんな!!」

「私も・・・帰る方法を探したんだけど・・・」

次元嵐のとき時空を超えようとした楓は空間転移の最中、空間の歪みに巻き込まれた。

だが全くの異空間に巻き込まれた楓は空間の歪みが重過ぎる為、跳躍できるほどの魔力が足りず空間跳躍が出来ないのだ。

「私じゃ・・・守れない・・・私・・私!!「ヴィヴィオちゃん!!」!!」

楓の言葉に涙を止めるヴィヴィオ。

「・・・前にも言ったよね・・・ヴィヴィオちゃんはそれでも『ダグオン』なの!?」

「私が・・・ダグオン?」

「そう・・・ダグオンってね・・・ブレイブ星の言葉で『勇者』を意味する言葉なの・・・ヴィヴィオちゃんの勇気が・・・小さな命を救ったじゃない・・・そしてあなたは太陽の勇者・・・火鳥勇太郎の娘でしょ!!」

「私が・・・勇者・・・」

ヴィヴィオの顔を優しく見た楓は風と共に去ろうとするが・・・

「待って！！」

「？」

ヴィヴィオに呼び止められてしまった。振り返ろうとしない楓。

「私！もうお姉ちゃんに会えないの！？私！お姉ちゃんに会って！お姉ちゃんに話したいことがいっぱいあるのに！！」

「会いにきなさい！！！」

「！！」

振り返り目を見開いて叫ぶ楓。再び楓の表情は優しくなった。

「そう思うなら・・・ヴィヴィオちゃんが私に会いにきなさい・・・それは今じゃなくて良い・・・ヴィヴィオちゃんが大人になっても・・・しわくちゃのお婆ちゃんになっても・・・私に会いに来る方法を見つけなさい！！」

「私が・・・お姉ちゃんに会いに？」

「うん・・・そしたら・・・この胸いくらでも貸してあげるから」

「・・・お姉ちゃん・・・うん！！」

「じゃあ・・・その時まで・・・お守りだよ・・・それにね・・・せっかちな人が今来るから」

楓から何かを渡されるヴィヴィオ。

「え！」

そして再び優しい・・・温かい風がヴィヴィオを包み込んだ。

「！！」

気がつくと元の場所に戻っていたヴィヴィオ。

『ヴィヴィオ！無事だったか！？』

サンダーバロンがヴィヴィオを見て安心した。

「がんばって！サンダーバロン！もうすぐせっかちな人が来るって」

『せっかちな人？』

その時サンダーバロンとフレイムナイトを囲んでいた天界生物が次々と破壊されていった。

その先に居たのは

「セイバァァァチェンジ！！」

シズマのブレスが輝くとスカイソニック、ランドファイヤー、マリンスピーダーが各パーツに変形しヴァリオンがスカイソニックに吸収される。

瞳が輝くと完成する戦士。

「セイバァァァァ！ヴァリ！オン！！」

フレイムナイトとサンダーバロンの前に降り立つセイバーヴァリオン。

『おい！お前ら無事か！？』

『シズマ！』

『シズマ君！？』

フレイムナイトとサンダーバロンの元に駆けつけたシズマ。

『ぼさっとしてねえで！やるぞ！！』

『ソウルブレード！！』

天界生物を斬捨て続けるフレイムナイト。そのまま天界生物を蹴り飛ばした。

『サンダークラッシュ！！』

サンダーバロンの必殺技が天界生物を貫き・・・

『セイバァァ・・・ヴォルテック！！』

アフェタの属性が円を描くように敵を包み込み上空からの一閃で天界生物を真っ二つにするセイバーヴァリオン。

セイバーヴァリオンの登場に天界生物が形勢不利と認識し撤退するのだった。

「シズマ君・・・どうしてここに？」

ノルウェールの言葉にシズマは相変わらずぶっきら棒に答えた。

「ああ・・・楓に頼まれたんだ・・・」

「どうですか？ヴァリオン？」

『そう・・・あの風は正しく楓だった』

「ヴァリオンが言うなら間違えないでしょう」

「て！俺を信用しなねえのか？」

「それ相応の立ち居振る舞いをしなさい」

ノルウェールにそう言われてしまうシズマ。

「そうだ。もう大丈夫だよ」

子猫を放すヴィヴィオ。

「ん？」

ヴィヴィオが何かを握っている事に気づいた。慌てて確かめてみるとそれは・・・

「これって」

楓のダグコマンダーだった。

「・・・私・・・絶対お姉ちゃんの居る世界に行くね・・・そして・・・これをお姉ちゃんに返す」

そう決意し研究所に戻るヴィヴィオだった。

第二十話　隔離された風の勇者（後書き）

ううー何でこんな寒いのよー？ツクヨミが太陽のエネルギーを吸収して星の気温を下げてる！？まずい！

次回！勇者大戦ブレイブサーガＡ’ｓ　氷河期到来

んな寒い事になって溜まりますかい！

第二十一話　氷河期襲来

海鳴タワーに現れたツクヨミ。何かの装置を太陽に向けて起動させようとしていた。

「ふふふ・・・他の神は分からないけど・・・私は頭脳で勝負させてもらうよ・・・・」

装置を起動させると何かの光線が太陽に向かって放たれた。

第二十一話　氷河期襲来

翌日

「ガタガタブルブル！！」

ダグベースの司令室で防寒服を着ているシャマルが水を飲もうとすると・・・

「凍った！！」

ティーカップの紅茶は凍りついてしまった。

格納庫

『・・・参ったぜ』

格納庫で凍り付いている勇者ロボたち。

食堂

「わ～い！！カキ氷食べ放題だ！！」

そう言ってダグベースの外壁の氷砕いてカキ氷機で砕くヴィヴィオ。
しかも何処から仕入れたのか大量のシロップを持っていた。

「子供は呑気でいいなあ～」

等とヴィヴィオにカキ氷を３０杯ほど食べさせられている雷。

「お腹壊すかも・・・」

大悟もカキ氷の処理をさせられていた。

何故こんな事になっているかと言うと・・・

「何でこんな凍り付いてるのよ！！」

ダグベースの周辺が氷河期のように凍り付いていたのだった。

原因を調べているヴォルフガング。

「うむ・・・太陽エネルギーが吸収されとるようじゃの」

太陽エネルギーが吸収され地球の気温が急激に下がっていたのだった。

「ぶるぶる・・・寒い・・・」

ダグベースの格納庫ではシグナムが頑張って火を熾している。己の能力をそんな事に使っていいのか疑問だが緊急事態だとしょうがない。なおグレートマジンガーではダグベースが融けてしまいかねないため却下された。

「フリード・・・火」

「キュル」

火を吐けるということでフリードも暖房器具代わりに活動させられていた。

「ダ～リン・・・人肌って意外と暖まるらしいよ～ねえダ～リチャキ

「下らねえ事やってんじゃねえよ」

紫に銃突き付ける北斗。

「鍋出来たぞ～」

チゲ鍋作ったサリー。とりあえず暖まるのだが・・・

ビービー！！

出撃命令が下った。

「良いみんな！今回は海鳴タワーに向かって！そこでこんな事になった原因があるの！」

シャマルによって出撃された星史、ワルター、ユウ、鉄也。何故このメンバーが選ばれたというとギリギリで動けるロボットがこの４体しかいなかったからだった。

「うう～・・・早く終わらせて温泉でも入って暖まりたい」

「いいねえ・・・お前奢れよ」

アルトにそう言ってハンドル握るユウだった。

「着たわね」

海鳴タワーの頂上から勇者達を見つめるツクヨミ。

「出なさい」

ツクヨミが合図を送ると地面から出てくる巨大な天界生物。

『やっぱり出やがったか！ダ・ガーン！合体だ！！』

ダイレクターが輝くとアースライナーが下半身、アースファイター

が上半身に変形した。

『とおっ！！』

ダ・ガーンがコアになりアースライナーに合体するとアースファイターが合体し胸に母なる地球が描かれると頭部が現れる。

『合体っ！ダ・ガァァン！！エェェックス！！』

天界生物に向かって走るダ・ガーンX。

そして海鳴タワーに着く飛龍。

「んじゃ爺さん宜しく」

「ふん！口の減らん小僧じゃわい。行くぞ火鳥」

「はい！」

太陽エネルギー吸収装置を破壊するべく潜入したヴォルフガングと護衛の火鳥。

装置までには等身大天界生物が立ちはだかった。

「はあ！！」

火鳥の攻撃で徐々に後ずさる天界生物達。そして装置を発見しヴォルフガングは操作を開始した。

「これを逆作動させれば良いんじゃろ？」

「それにしても・・・神は一体？」

火鳥がツクヨミの姿を探すが既に姿はいなかった。

一方

『おりゃあああああああああ！！』

キャプテンシャークのパンチを浴びる天界生物。

『もらったぜ！ぐ！！』

次の瞬間キャプテンシャークに冷凍光線を浴びせる天界生物。

『さむううううううううう！！』

キャプテンシャークの中のワルターが凍りつきそうになっている。

『ブハアアアアアアアア！！』

天界生物に冷凍光線を浴びせられる勇者達。更にグレートマジンガー、ダ・ガーンXに天界生物に冷凍光線を浴びせる。

『ううう！！』

『ぐう！！』

ダ・ガーンXとグレートマジンガーが徐々に凍り始める。

『にゃろ！！ぐ！！』

飛び掛る飛龍も冷凍光線をあび撃墜された。

その頃ワルターは・・・

「ブルブル・・・なんだこの寒さは!?温かいラーメンでも食べたい!!」

「ワルター様そんな事言ってる場合じゃありませんわ～」

流石に寒いのかまともな思考になるシャランラ。

「ぶるぶる・・・寒いぜ・・・」

ダ・ガーンXの中の星史は凍りつきそうになる。

「溜まったもんじゃねえ・・・」

「風邪引いちゃうよ～」

ユウ、アルトも寒さでダウンしそうになったその時。

「そうだ!?」

ある事を思いついた星史。

とあるラーメン屋

「はい！どうも！ラーメン毎度あり！で？お届けは？なに！？ダ・ガーン！？」

ラーメン屋の店主が絶叫する。

「はい！そうです！お願いします！！ぐ！！」

ダ・ガーンの中から携帯電話で店主に言う星史。そして攻撃を受け続けてしまう。

「わかった！過ぎに持ってってやる！！」

そう言って店主は電話を切った。

『く！！』

『ぬ！！』

ダ・ガーンXとキャプテンシャークが天界生物の攻撃を受け続ける。星史とワルターがまともに動けないため戦闘力が落ちている。それは飛龍の中のユウも同じだった。

その時

「毎度！！」

岡持ちでラーメンを持って現れた主人。

「ラーメン出来立てお待ち！！ホイホイ軒特性馬鹿美味ラーメンです！！」

「ラーメン！！」

急いで取りに言った星史は受取配り始めた。

「温か～い」

思わずラーメンを抱きしめるアルトだが・・・

『ブハアアアアア！！』

冷凍光線を吐き出す天界生物。

『くそ！ゆっくり食べている暇もないのか！？』

ワルターが毒づくと

『俺に任せろ！』

鉄也が立ち上がり天界生物に構えた。しかもラーメンを食べ終えていたのだった。

『ブレストバーン！！』

冷凍光線とぶつかり合うブレストバーン。天界生物は高温に弱いようだった。

「ずるずる・・・う～んスープが違う！！」

「チャーシューも美味しい～」

勇者達はラーメンを平らげると身体が暖まり・・・

『行くぜ！ダ・ガーン！！』

『了解！星史！！』

氷を突き破るダ・ガーンXとキャプテンシャーク。

『うおおおおおおおお！！』

ダ・ガーンXの蹴りとキャプテンシャークのスパイラルランチャーで後ずさる天界生物。

『かまいたち！！』

飛龍のかまいたちを受け止める天界生物に向かい。

『アトミックパンチ！！』

グレートマジンガーのアトミックパンチが天界生物を殴り飛ばした。

ダ・ガーンXの胸に母なる地球が描かれた。

『ブレストアースバスタァァァァ！！！』

ブレストアースバスターで消滅する天界生物。

海鳴タワー

「・・・さあってこれで太陽エネルギーは元に戻った。あとはこいつを跡形もなくぶっ壊す。火鳥」

「はい！！」

火鳥の鉄拳で跡形もなく消し飛ばされる太陽エネルギー吸収装置。

その光景を見ていたツクヨミは・・・

「勇者・・・面白いじゃない・・・もう少し遊ばせてもらうわ」

そう言ってツクヨミは撤退するのだった。

尚ダグベースでは凍った影響により電気系統が破損しまくったダグベース&勇者ロボたちを数少ないメカニックメンバーが総力を挙げて修復させられる羽目になった。

「楓ちゃん帰ってきて～」

「シャマル先生！今度はメディカルルームの点検！」

「はいはい！」

ユウに指示されてメディカルルームに急ぐシャマル。

「姉貴の野郎・・・とっとと来い！！」

「ユウ～浜田さんが格納庫のメンテだって～」

アルトにそう言われて睡眠不足で死にそうになるユウだった。

「というか・・・楓さんよく一人でやってたな・・・」

「いや・・・量が量なだけでしょ」

大介とヴィータも整備しながら感心していた。

そしてラーメン屋では

「ホイ様ラーメン届けてきましたよ」

「うむ」

店主チンジャーを迎えいれるホイコウロウ。

「よかったですね」

「なぁ～にマイトガインたちに貸しを作っておくのも悪くない」

そう言ってホイコウロウはホイホイ軒のノレンを出すのだった。

第二十一話　氷河期襲来（後書き）

ここは・・・何処だ？・・・どっかの戦艦？なんでこんなにチューブが付けられてんだ・・・俺は宇宙で死にそうになって・・・

次回！勇者大戦ブレイブサーガＡ’ｓ　目を覚ましたダメ人間

なんだ・・・戦えない？

第二十二話　目覚めたダメ人間

ダグベース

「そういえば・・姉貴たち何やってんだ?」

勇者ロボの整備をしながら考えるユウ。

「さぁ～大方そこら辺で天界生物に喧嘩売ってるんじゃないの?」

等と言ってアルトも整備に没頭していた。

第二十二話　目を覚ましたダメ人間

「魔導ミサイル発射!!」

ミツキの戦艦・ひなぎくから発射される魔導ミサイルで空中の天界生物が撃破されていく。

「左舷前方に天界生物!早いです!!」

ひなぎくの左側から特機型の天界生物が攻撃してきた。動きが素早い為副砲の陰に隠れられてしまう。

それを見たはやては・・・

「ちょっとミツキ！あの天界生物にはひなぎくじゃ分が悪いんやないか？」

はやての指摘にミツキはにやりと笑った。

「大丈夫よ～切り札は最後までとっておくもんよ」

「な！まだなんかあるんかい！？」

はやてを尻目にミツキは格納庫に通信回路を繋いだ。

「ジョーさん出撃してください」

『・・・わかった』

「え？ジョーって・・・」

「轟龍発進！！」

ミツキの指令と共にひなぎくのハッチが開くと轟龍が発進された。

『！！』

天界生物の前でジェット機形態からロボットモードに変形する轟龍。

すかさず天界生物へパンチを放った。

「嘘・・・」

「まさか勇者までいたなんて」

「ミツキさん食えない」

スバル、ギンガ、ティアナはいきなりの轟龍の登場に驚いているのだった。

『旋風寺舞人よりはるかに弱いな・・・はあ!!』

轟龍のミサイルが天界生物に直撃するとそのまま巨大な銃ゴウリュウキャノンを構えた。

『!!』

放たれたゴウリュウキャノンに貫かれる天界生物は爆発した。

大型天界生物が撃破されると天界生物の進行は治まりひなぎくはコミュニティに進路をとった。

一方轟龍はひなぎくに着艦しメンテナンスを受けていた。

「うひゃ~ 荒っぽい乗り方してんな~」

整備班一同は轟龍のパーツを急ぎ交換していた。

ジョーはオペレートルームに戻るとミツキと今後の相談をする事にした。

「今後の進路は?」

「とりあえず様子見かな～それじゃジョーさん後宜しく」

「ちょっと待て・・・ここ数日休み無しで１８回出撃だぞ」

「あら～轟龍の修理が嵩む～とか無一文の人に食事とかの世話してあげたの誰かな～」

滅茶苦茶ジョーに恩を売っているミツキ。そうジョーがひなぎくにいるのは単体活動の限界に達しミツキに運よく拾われたからだった。

「・・・貴様絶対いい死に方しないぞ」

「そうね～私は死んだら地獄に逝くのよ～♪」

ジョーの皮肉をジョークで返すミツキ。尚スバルは・・・

「うわ！エースのジョーだ！！」

そう言ってジョーに懐くのだった。

そうこうしている内にひなぎくは野戦病院に到着するのだった。

ひなぎくが着陸すると機関部がコミュニティの巨大なジェネレーターにつながれた。

「ミツ姉・・・また行くの？」

「うん」

ひなぎくから降りたミツキはある病室に向かった。

その病室のプレートには・・・

「・・・南力」

ミツキが病室に入るとユンと呼吸器とチューブを取り付けられ、簡易ベッドで眠っている力。その力はユンが付きっ切りで治療していた。

「ユン先生どうですか?力君の容態は?」

「いい方向には行かないね・・・ある意味たいした奴だよ・・・肉体はとっくに致命傷で死んでいるはず・・・しかしこいつは精神力だけで生きている」

「助かる確率は?」

「3%ってとこか・・・もう絶望的だよ」

ユンの診断に焦るミツキ。

『・・・力』

「エクスカイザー?」

力の病室のモニターに映るエクスカイザー。エクスカイザーは天界生物との交戦の後傷つきならドラゴンジェットでブレイブダグオンの残骸を探していた。

そしてブレイブダグオンを発見するも既にダグベースは別のエリアへの進路を取っていた為合流する事ができずこの野戦病院まで運んだのだった。

幸いだったのはミツキ達が力の仲間ということだった。

その時だった。

「警報？」

「また来たか！？」

警報が鳴り響く、それは天界生物の襲撃の合図だった。急いで通信を入れるミツキ。

「魔導師隊！出撃！ジョーさん！お願いします！ひなぎく！起動！」

『私も行く』

「エクスカイザー？無理よ！キングローダーはまだ壊れたままなのよ！」

『大丈夫だ！』

そう言って天界生物を迎え撃つべく出撃したエクスカイザー。

「私も行きます！ユン先生！他のみんなの治療を」

「命令するとは・・・いい度胸だね・・・おいチビ」

「はい！」

ユンの隣で助手をしていた少年を呼び止めるユン。

「こいつの面倒頼むよ・・・たく・・・早く目覚めろ」

そう言うとユンは力を少年に任せ出撃するのだった。

ひなぎくが浮上し上空からの天界生物に備えた。

「ラグナブラスト・・スタンバイ！！」

「無理です！さっきまでコミュニティのエネルギー不足にひなぎくを繋いでた性でラグナブラストのエネルギーが足りません！！」

コミュニティは非常にエネルギーを消費する。そのためひなぎくのエネルギーを繋ぎコミュニティに回していたのだった。

そこでミツキは考えた。

「う～ん・・・これ楓さんが弄くったのよね」

ひなぎくを指して言うミツキに答えるナリア。

「そうですけど・・・まさか姫！？」

「そう！楓さんの性格だからこんな時の為に『都合よく』なんかの装置を付けたはず！！」

付合いが長くなったせいか楓の性格を細かく分析しているミツキ。

そしておあつらえ向きのスイッチがあった。

「え～と『ピンチの時以外押しちゃダメＢｙ楓』ピンチだからいいのよね～」

ポチっとスイッチを押すミツキするとひなぎくが凄まじいエネルギーを集め始めた。紅く発行し始めるひなぎく。

「何これ！？トランザム！？」

「あ！説明文出ました・・・ミラージュブラスト・・・これはひなぎくの魔力機関だけじゃなく外に散らばっている微量の魔力エネルギーを吸収してひなぎくの攻撃エネルギーに変換するシステムです！」

ナリアの説明にノアが・・・

「楓のやろう・・・変なもん付けやがって！！」

「まぁ良いじゃないの楓さん結局『趣味』でハイパーモード付けちゃうなんて・・・なら・・・思う存分使おうじゃないの！！」

「・・・姫ノリノリですね」

「大方八神組の無謀なその場のノリが伝染したんじゃない？」

冷静に分析するナリアとティアナ。そしてひなぎくの船首に５つの魔方陣が描かれた。

「それじゃ・・・ミラージュブラスト・・・撃てえええええええええ！！」

「うわあああ！後はどうにでもなれ！！」

ノアが引き金を引くとラグナブラストの同時５連発が放たれ何千単位の天界生物を消滅させた。

「ようし！今度は地上にゴー！！」

『了解！！』

そう言って地上のコミュニティに向かうひなぎくだった。

地上では轟龍とエクスカイザーが天界生物を相手していた。

『ドラゴンジェット！！』

エクスカイザーのコールに飛来するドラゴンジェットが人型になると全体が開き始めた。

『とお！！』

エクスカイザーがドラゴンジェットに納まると全体が閉じ始めた。

『フォームアップ!巨大合体!ドラゴンカイザー!!』

轟龍の隣に舞い降りるドラゴンカイザー。

『いくぞ!ジョー!』

『命令するな!!』

二匹の竜は天界生物に飛び掛った。

『あちゃーーー!!』

『!!』

ドラゴンカイザーと轟龍の蹴りが天界生物にヒットしドラゴンカイザーが胸の弓を構えた。

『ドラゴンアーチェリー!サンダー・・・アロー!!』

ドラゴンカイザーのサンダーアローが天界生物を貫くと天界生物が爆発し進行が収まった。

『中に入った天界生物は!?』

ドラゴンカイザーはそういうと分離しコミュニティに入れる状態に戻るとコミュニティの中に入った。

「ひ・・い!!」

力の眠っている病室では天界生物の駆除がまだ終わっておらず力の

看病をしていた少年が天界生物に狙われていた。

『ウガアアアアア』

「うわあああ!!」

少年に天界生物が襲いかかろうとしたその時だった。

「!!」

少年の目の前に吹き飛ばされる天界生物。少年が恐る恐る目を開くと・・・

「・・・やれやれ・・・どうも困ってるガキは放っておけない性質だな・・・」

呼吸器を付けチューブを付けられながらも立ち上がる力の姿が・・・

呼吸器を外す力。

だが・・・

「う!!うげえあああああ!!」

突如嘔吐してしまう力。

「へへ・・・まずいな・・・こりゃ・・・」

身体の変調に気づく力だが構っていられない襲い掛かる天界生物を蹴り飛ばし少年を保護する。だが・・・

「う！ぐううう！！げあはあああ！！」

戦っている最中にもかかわらず嘔吐してしまう。だが嘔吐しながらも力は天界生物を叩き潰し続ける。

「力君！！」

「！！」

力達の元に駆け付けたミツキとユンは驚愕した。そこには嘔吐しながらも天界生物を全員叩きのめした倒れている力の姿があった。力を抱き起こすミツキ。

「！！」

力の血色は悪く戦いの中で気を失っていた。

「こいつ・・・まさか・・・身体が戦う事を拒否してるんじゃ・・・」

「え？」

「一度刷り込まれた肉体への恐怖は認めない限り次に進めない・・・だがこいつは精神は刷り込まれた恐怖を認めようとしない・・・厄介だ・・・これじゃ戦わせらんないね・・・」

「まさか・・・力君にもう戦いをさせないつもりじゃ」

「・・・ああ・・・残念だけどもうこいつは戦えない・・・戦闘か

ら外す」

「・・・けど・・・それで力君が納得するんですか？「・・・全くだぜ」力君！！」

意識を起こす力に驚くミツキとユン。

「たくよ・・・落ち着いて寝てもいられねえな」

「力君」

「ユン先生よぉ・・・俺を戦いから外すだの冗談にしちゃ癇に障るが今日のところは勘弁してやるよ・・・」

「ほざくな野良犬」

「そりゃどうも」

「・・・馬鹿が嫌味で言ってやったんだよ・・・はっきり言ってやろうか？野良犬の今のお前が戦いに出たところで血統書つきの名犬にズタボロにされて負け犬になるのがオチだよ」

「野良犬ってのはな・・・囚われないんだよ・・・先生よぉ・・・治療してくれた事は感謝するけど戦いから外れるのだけは願い下げだ」

そう言って力は外の空気を吸いにいくのだった。

「・・・目を覚ましてあの行動力・・・力君並の人間じゃないかも・・・ていうか・・・ユン先生に喧嘩売るなんてどんだけ命知らずよ」

「たく・・・あの馬鹿が！！」

驚くミツキと持っていた聴診器をへし折るユン。

コミュニティの外

「へへ・・・参ったな・・・」

精神的に参っている事は自覚している力。だがここで逃げるのがシャクに障るというチャチな理由で意地を張っていた。

「あのやろう・・・たしか・・・カグツチだっけ?ぜってぇ・・・グシャグシャのボロボロにしちゃる・・・う！！」

力が再び嘔吐しようとしたその時

力の中に天から闇が入り込んだ。

第二十二話　目覚めたダメ人間（後書き）

ツクヨミさん今度は何を考えてるのよ・・・なぬ！合体を阻止する道具って・・・な！合体できなくなっちゃったじゃない！？空気呼んでよ～

次回！勇者大戦ブレイブサーガＡ，ｓ　合体阻止

合体ロボの掟破りを・・・

第二十三話　合体阻止

野営地

「・・・？」

力の中に闇が入り込み一瞬意識が奪われたが直ぐに意識を取り戻した。

「何だ今の・・・まっ・・・身体に変調ねえし・・・いっか・・・」

ド～ンと構えてしまう力。頭が悪いせいか物事を深く考えない体質のようだった。

「・・・力さん」

「ん？」

力が振り返ると先ほどから力の看病をしてくれていた少年がいた。

「大丈夫ですか？」

「な～に・・・大丈夫だって」

少年の言葉に笑って答える力。

「・・・僕にだって・・・デッカードがいれば・・・」

「デッカード？」

「うん・・・僕の大切な友達なんだ」

「・・・坊主・・・名前は？」

「・・・勇太！友永勇太だよ」

「・・・勇太か・・・俺も会ってみてえな・・・そのデッカードさんとやらにな」

「うん！」

そう言って元気になる勇太。

「さてと・・・あの神の野郎・・・どうしちゃるかな」

身体に恐怖を刷り込まれながらも力は神と戦う決意をするのだった。

第二十三話　合体阻止

ダグベース

「ひ～んひ～ん！！」

数少ない整備士メンバーが活動する格納庫で泣きながら鉄也から直々に操縦訓練を受けているアルト。

「まだまだ！こんなもんでへばったのか！？」

「だって！８時間ぶっ通しで操縦訓練ですよ！！」

「キャロは平気だぞ」

「へ？」

アルトの視線の先で同じ訓練メニューをこなしたのにもかかわらず汗一つかかず更に武術訓練始めたキャロの姿が・・・

「・・・なんで・・・八神組と一緒にいると力君たちの超人の身体能力が遺伝するの！？」

「へ？力君普通の人間だけど」

そういうシャマル先生・・・もう付き合い長すぎるせいか人間の身体能力の標準基準が力になってしまったのだった。

「それじゃ・・・訓練再開だ！」

「いやぁあああああああ！！」

そう言って連行されるアルト。それを見つめるヴォルフガングは・・・

（ふ・・・頑張れよお嬢ちゃん・・・今のメンバーであれを乗りこなせる訓練が出来るのはお主だけじゃからの・・・）

そう言って何かのロボットの設計図を出すヴォルフガング。

（・・・こやつと飛龍が一つになった時飛龍は新たな姿を現す・・・
まぁ・・ロボット形態は補助機能じゃからの・・・あとはあやつが
乗りこなせるかじゃな・・・）

そう言うとヴォルフガングは飛龍にある機能を追加するのだった。

「おいジジイ」

「なんじゃ小僧？」

「アルト早く返せよ！これ全部俺と浜田だけでやらせる気か！？」

「まぁ・・・頑張れ・・・わしだってマイトガインと戦うロボットは毎回一人で作ったんじゃからの」

「あんたといっしょにするな！！」

そう言って浜田と二人で勇者ロボ&グレートマジンガー&グレンダイザー押し付けられるユウだった。

それを見ていたシャマルは・・・

「・・・さっさと楓ちゃん見つけないと整備メンバーが過労死するかも・・・」

等と思っていたのだった。

ツクヨミアジト

「よ～し」

分析したデータを元に何かの装置を天界生物に取り付けるツクヨミ。

「これこそが・・・奴らのウィークポイント・・・装置がつき次第出撃する」

ツクヨミがアジトから出撃した。

ダグベース

「今日も異常無し・・・というかツクヨミは用意周到だな・・・スサノオみたいに尻尾を現さない」

ダグベースのオペレートをしている雷がレーダーを見たそのとき。

「天界生物？」

突如町に現れる天界生物に雷が出撃の指令を出した。

『よし！いくぞ！！』

出撃した舞人、ボンバーズ、ダ・ガーン、チームアルフェリス、キャロ。

他のものはダグベースの守りに残ったのだった。

街中で一体の大型天界生物と中型の天界生物、そして上空では空中戦艦が待機していた。

「さぁ・・・来い」

戦艦の中で出撃した勇者達の姿を見ていた。戦艦の下には何かの装置を取り付けられた天界生物の姿が。

『よしみんな合体だ!!』

天界生物を捉えたマイトカイザー、ボンバーズ、ダ・ガーン、チームアルフェリス、キャロが合体フォーメーションに入るが・・・

『いまだ!合体阻止光線発射!!』

ツクヨミの指示と同時に地上に設置してあったアンテナから光線が放たれ勇者達をキャッチした。

『なんだ!?』

『しびれる!!』

光線の中に囚われ合体のタイミングが狂いビークルの状態で落下してしまった。

『どういうことだ!?』

何かを感じる舞人。

『ははは!簡単なことだ・・・キサマラは合体して我々と・・・五

分・・・ならば合体させなければいい！！これにより９９．９パーセントの勝率！！』

『やろう！ふざけやがって！ぐあ！！』

天界生物の攻撃を浴びるライオボンバー。

勇者達はそのままの形態で戦う決断をする。

『ダ・ガーンマグナム！！』

『音速拳！！』

ダ・ガーンとビルガーの攻撃を浴びる天界生物だがあまり効果がない。

『うあああ！！』

吹き飛ばされるシグナム。

その時

『チェンジ！！』

『チェンジ！！』

上空からアドベンジャー、キャプテンシャークが天界生物を破壊しながら舞い降りた。

『グレートブーメラン！！』

『トマホーク！！ブーメラン！！』

グレートマジンガー、ブラックゲッターも天界生物を破壊しながら駆けつけた。

『貴様ら』

『悪いな！我々は合体しなくてもつよおおおい！！なっはっはっは！！』

ツクヨミの言葉に答えるワルター。グレートマジンガー、ブラックゲッターの広範囲攻撃に押され始めるツクヨミ。

『こうなれば物量戦だ！！』

ツクヨミの指令で天界生物達の動きが活発になる。

『くっそ！負けられない！！ぐ！！ダ・ガーン！合体だ！！』

『了解！』

ダ・ガーンが再び合体を試みるが

『無駄だ！』

『ぬあああ！！』

天界生物に取り付けられた合体阻止光線により凄まじい磁場で身体を拘束され合体できなくなってしまうダ・ガーン。

『このままじゃ・・・・』

『ふん！死ね勇者！』

『待て！！』

『ん？』

ツクヨミが空を見上げると二つの光が舞い降りた。

『『フォームアップ！！』』

ブルーレイカーとグリーンレイカーが腕を組むと合体フォーメーションに入った。ブルーレイカー・グリーンレイカーが左右に変形すると合体し巨大な胸の鎧が装着されたと同時に頭部が形成された。

『『左右合体！ウルトラレイカー！！』』

降り立つウルトラレイカー。

『ウルトラレイカー！！』

『今助ける！ウルトラキャノンビーム！！』

ウルトラレイカーの放ったビームが天界生物の合体阻止光線装置を破壊した。

『しまった！う！！』

『ウルトラダブルチェーン！！』

そのままウルトラレイカーに投げ飛ばされる天界生物。

『こうなったら力付くで』

『そうはさせるか！！』

天界生物を蹴り飛ばすマイトカイザー。

合体が完了し形勢逆転し始めた勇者達。

そして舞人を中心に並び立つ列車型勇者達。

『いくぞ！合体だ！！』

『『『『『『おう！！！』』』』』』

舞人の号令にマイトカイザー、バトルボンバー、アドベンジャー、アースライナー、ウルトラレイカー、シグナム、ヴィータと新幹線の勇者達が次々と連結した。

『いくぞ！！』

先頭のドリル特急が唸りを上げツクヨミの戦艦に突撃した。

「馬鹿な！！」

『ドラゴン！ファイヤーあああああ！！』

連結した勇者の列車が炎を巻き起こし巨大な龍となりツクヨミの戦艦を貫いた。

爆発するツクヨミの戦艦、それと同時に脱出するツクヨミ。

そしてドリル特急のドリルが輝きを見せた。

「ちぃ・・・」

アジトに戻ってきたツクヨミ。９９．９パーセントの勝率を増援という形で破られたことに愕然とする。

「こうなったら・・あの最後のロボットを出すしか・・・ん？」

水晶玉のような物体にアマテラスのアジトが映った。

「アマテラスの下に・・・あの女諦めてなかったのね」

アマテラスの元に向かう獣の姿を見つめるツクヨミだった。

第二十三話　合体阻止（後書き）

アマテラス・・・あたしはあんたが恐ろしかった・・・二度と会いたくないって思ったけどね・・・もう違う！あんたと戦いたい！そして勝ちたい！！

次回！勇者大戦ブレイブサーガＡ’ｓ　不死鳥対太陽

あたしが勝つ！！

第二十四話　不死鳥対太陽

ウィザーエヴォーラの中からティアナと共にアマテラスの根城に辿り着いた飛鳥。

「それじゃ・・・ここで」

「本気で一人で行くんですか？」

「ああ・・・ここはちょっと修羅場だからね・・・そんじゃ行ってきますよ執務官殿」

そう言ってティアナを背に乗り込もうとする飛鳥。

「飛鳥さん！」

ティアナに呼び止められ飛鳥の足が止まる。

「必ず帰ってきて下さいね・・・上官命令です」

振り返らず手で挨拶する飛鳥と見送るティアナ。

第二十四話　不死鳥対太陽

アマテラスの根城

「ふふふ・・・」

何かを感じ取るアマテラス。その様子はとてもうれしそうだった。

「お母様？いかがされたのですか？」

「サヨリ・・・もうすぐ来るわ・・・あの女がね」

「あの女・・・タキリお姉さまを倒したあの女が？」

サヨリと呼ばれた女性は母・アマテラスの姿に恐ろしくなった。

「あの女・・・タキリを一撃で倒した・・・私は戦えればそれでいい・・・より強い者を倒す・・・だが骨のない神や人間ばかり・・・私の心を満たしてくれるような奴はいなかった」

アマテラスの評価に奥歯を噛むサヨリ。

「そろそろタギツが帰ってくる頃ね・・・サヨリ・・・迎えに行って」

「はい・・・」

面白くなさそうにアマテラスの間の扉を開けるサヨリ。

「戦闘狂のお母様・・・娘の死より自分が満たされる事を選ぶなんて・・・けど姉様も馬鹿ね・・・人間如きにやられるなんて・・・ん？」

何かの気配を感じ取るサヨリだが・・・

「！！」

既に遅かった。

アマテラスはタギツの帰りを待っていると広場の扉が開いた。

だが開かれたが何も言わないタギツのほうを見てみるアマテラス。

「タギツ・・・どうしたの？タギツ？」

アマテラスが振り返るとそこには・・・

「残念・・・タギツはくたばった・・・もう1回言う・・・タギツはくたばった」

飛鳥の姿が・・・

「・・・ここに来る前にサシで勝負してね・・・さっきサヨリって奴も今後一切誰ともお話できないようになったよ」

二人の娘が飛鳥によって絶命させられた事を知るアマテラスだがその表情は笑っている。

「やはりあなたか・・・あの時と別人みたいね」

飛鳥を待ち構えていたアマテラス。飛鳥の内に秘められた野生を感じ取っていた。

「さぁ・・・楽しませてちょうだい」

アマテラスの言葉に飛鳥は答えた。

「・・・あたしはあんたが恐ろしかった・・・二度と会いたくないって思った・・・けどもう違う!!あんたと戦いたい!!そして勝つ!!」

己の野生を最大限に高める飛鳥の姿を見たアマテラスは・・・

「・・・へえ・・・いい目ね・・・もう戦う事を捨てられなくなった人間の目ね」

「うるせえええええ!!」

ダグテクターを装着する飛鳥はアマテラスに蹴りかかった。飛鳥の足を受け止めるアマテラス。

「・・・違うの?・・・ふん!!」

「ぐ!!」

飛鳥を叩きつけるアマテラスだが飛鳥は跳ね返るように立ち上がりそのままアマテラスに蹴りかかった。

「!!まだまだ・・・朱雀・・・舞羽陣!!」

飛鳥の足元に魔方陣が展開されると紅い羽根が舞い上がりアマテラスを包み込んだ。

「へぇ・・・攻防一体の技か・・・けど・・・無駄！！」

羽を吹き飛ばすアマテラスだが・・・

「はあああああああ！！」

一瞬の隙をつきアマテラスを蹴り飛ばす飛鳥。

「ぐ！！」

後ずさるアマテラスは笑みを浮かべた。

「流石は私の見込んだ女・・・なら・・・本気を出そうじゃない」

巨大化し神の姿になるアマテラス。飛鳥もビークルを呼び出した。

「融合合体！！ダグウィザー！！魔導合体！！」

ウィザーウインガーが人型に変形すると胸部が展開しダグウィザーが乗り込むとゆっくり胸部が閉じ、頭部の瞳が淡い緑に光った。

『ウィザァァダグオン！！！』

降り立つウィザーダグオンはアマテラスと対峙した。

『ウィザーダグオン・・・私に一撃加えた女はお前が始めて・・・もっと私を楽しませなさい！！』

『ウィザーカッター！！』

剣を構えるアマテラスと両手からウィザーカッターを突き出すウィザーダグオン。

アマテラスの剣とウィザーカッターが交差するとお互いの身体にヒットした。

『すごいわね・・・前とは別人・・・これが本調子の』

『ごちゃごちゃうるせえ!!』

ウィザーダグオンの蹴りがアマテラスにヒットする。だがアマテラスは飛鳥に攻められる事を喜んでいた。

『うれしいわ・・・やっと本気で戦える相手に巡り合えた!!!』

腰からロッドを取り出し剣と連結させるアマテラス。そのまま竜巻を起こすように回転させウィザーダグオンに斬りかかった。

『ぐ!!!』

ウィザーカッターを交差させて防ぐウィザーダグオン。だが圧力に押され吹き飛ばされるとアマテラスの追撃が入った。

しかし

『朱雀!飛翔脚!!!』

ウィザーダグオンの蹴りの連打がアマテラスにカウンターで入った。

そのまま降り立つウィザーダグオンと墜落するアマテラス。

『私相手にここまでやるとはね・・・その健闘に敬意を評して・・
・私の最大の技で殺してあげる』

アマテラスの薙刀にエネルギーが湧き上がる。

『やべえな・・・あんなもん食らったらあたし消えちゃうかもね・・
・けど・・・逃げんのがシャクでね!!』

最大の魔力をひねり出すウィザーダグオン。

その姿を見たアマテラスは狂喜乱舞している。

『さぁ・・・勝負!!東飛鳥!!』

最大の技を構えるアマテラスに・・・

『・・・消す』

ウィザーダグオンの中の野生が頂点を振り切った。

『オホヒルメノムチ！！』

アマテラスの薙刀から放たれる光り輝く鞭にウィザーダグオンの背中に魔力と勇者の力で生み出された不死鳥の翼が舞いあがった。

『天魔！鳳凰脚！！！』

そのまま不死鳥のようなエネルギーに包まれ蹴りかかるウィザーダグオン。

光と不死鳥はぶつかり合い周囲を破壊していくが・・・

『うおおおおおおお！！！』

ウィザーダグオンが押し勝った。

『！！』

胸を貫かれるアマテラス。

『ふふ・・・東飛鳥・・・やはり見込んだ通りね・・・』

敗北したというのに笑みを浮かべているアマテラス。

『てめえ・・・戦いを捨てられないのはてめえの方だな』

『ふ・・私とお前は似た者同士・・・所詮戦いの中でしか生きられない・・・』

ウィザーダグオンに自分と同じものを感じるアマテラスだが・・・

『悪いな・・・あたしはあんたとは違う』

ウィザーダグオンがアマテラスを否定した。

『・・・ふ・・・お前のような女初めてだな・・・黄泉の国で待つ』

『悪いな・・・もう会えないよ・・・あたしは生まれてから地獄行きが決定してね』

『ならば・・・地獄で待つとしましょう』

そう言って消滅するアマテラス。

『馬鹿が・・・神が地獄にいけるか』

そう言って合体を解く飛鳥は待っている人の元へ向かった。

「・・・・・・」

飛鳥の帰りを待つティアナ。

すると

「！！」

手を振ってティアナの元に帰る飛鳥。

（悪いなアマテラス・・・あたしには待っててくれる奴がいる・・・大切な奴がな）

そう言う飛鳥にティアナは今後の方針を考えた。

「これからどうします？」

「そうだな・・・とっととダグベースに戻りたいとこだけど・・・ちぃとばっかりあの馬鹿に蹴りいれに行く」

「はぁ・・・何でですか？」

「片方が困ってたら片方が手を貸しあう・・・それが相棒だ」

そう言って飛鳥はあの馬鹿の元へ向かうのだった。

第二十四話　不死鳥対太陽（後書き）

飛鳥蘇ったな・・・俺はちょっとスランプだな・・・くそ天界生物が・・ん?あれは!?

次回!勇者大戦ブレイブサーガＡ，ｓ　勇者警察到着

あれが勇太の?

第二十五話　勇者警察到着

野戦病院

相変わらず天界生物の襲撃が続くエリア。その為治療する人間の数が多すぎるのだった。

「はやく！輸血！！」

重症人を治療するユン。診療ベッドでは小さな子供が寝ていた。

「血が足りない・・・急がないと・・・」

輸血の血が足りなくなってきた怪我人の野戦病院。

少年の様子を見たユンが呟いた。

「酷な事を言うが・・・今からこいつと同じ血液型の人間を探し出すしかない」

その言葉に手伝いをしていた力が呟いた。

「ユン先生よぉ・・・頼みがあるんだ」

「なんだ？」

「な～に簡単な事だ・・・ちいとばっか俺の身体からこいつに必要な血液を出して欲しいんだ」

力の目を見たユンは・・・

「・・・死ぬぞ」

「・・・時間がねえだろ・・・どうも俺は・・・普段からはやてに出血させられてるせいで血の分泌量がはやくてね・・・それに・・・ガキを見殺しにして生き残るような奴になりたくなくてね」

「ち・・・全くここまで馬鹿だとはね・・・心意気は買うけど・・・危険ならすぐにやめるからね」

「・・・やめたら殺す」

「威勢のいい小僧だ」

そう言って子供の手術を開始するユンだった。

その後

力の検討もありミツキたちが同じ血液の人間を大至急連れてきた為力も無事で済み子供の手術も無事終わった。

そして外の空気を吸いに出た力は

「・・・・・」

戦う事ができず歯がゆい思いをしていた。

「天界生物の野郎・・・今度見つけたら叩っ殺しちゃる」

そう言って天界生物にリベンジを誓う力だった。

第二十五話　勇者警察到着

翌日

ブレイブエラゴで偵察任務に出た力と勇太。

「全くミツキさんも・・・」

「いいじゃん！ミツキ姉ちゃんいい人だよ」

戦えない力の気持ちを汲んで偵察任務をやらせることにしたミツキ。

その本音は

「ミツキお姉さま・・・力さんの事偵察に出して大丈夫なんですか？」

「だって~ 何かやらせておかないと暴れるんだもん」

との事だった。

なおブレイブローダーはまだ修理中のため大して戦う事のできない力。止め役として勇太を同伴させていたのだった。だが勇太はブレイブエラゴを懐かしそうに見ていた。

「パトカーか・・・」

「ん?どうした?」

「うん・・・デッカードもパトカーだったんだ」

「へぇ〜今度紹介してくれよ」

「うん!デッカードは絶対無事だよ」

勇太がそう答えたその時

「「!!」」

何かの気配を感じた力と勇太。ブレイブエラゴのブレーキを踏むと地下から天界生物が湧き上がってきた。

「勇者・・・シニゾコナイ・・・・」

力を睨み付ける天界生物。

「どうやら狙いは俺みたいだな！勇太！逃げろ！」

「けど！力さん！僕も！！」

「今のお前が居たんじゃ足手まといだ！！」

そう言って無理矢理勇太を下ろした力はダグブレイブに融合合体した。

『いくぜ！ブレイブマグナム！！』

左腕からブレイブマグナムを抜き天界生物を撃つダグブレイブ。

『ギシャアアア・・・』

撃墜される天界生物だが・・・

『ぐ！！う！！！』

天界生物を撃破した瞬間膝を突くダグブレイブ。

そして

『ぐあああああああ！！』

別の天界生物に吹き飛ばされてしまった。

（・・・どうなっちまったんだ俺は・・・くそ！！）

立ち上がろうとするダグブレイブだが無数の天界生物は一斉に光線を吐きダグブレイブを痛めつけた。

『！！』

倒れてしまうダグブレイブ。

「ダグブレイブ！」

ダグブレイブの姿を見た勇太は無力な自分を呪った。

「ダグブレイブ・・・僕にもデッカードが・・・デッカードが居れば・・・は！」

今度は勇太に迫り来る天界生物。

そして勇太は叫んだ。

「デッカードー！！」

『勇太！！』

勇太の叫びと謎の声と共に天界生物が破壊された。

「ふぇ？」

勇太が声の先に見たのは・・・巨大なトレーラーに乗った青いロボ

ットだった。

『勇太！無事か！！？』

「デッカード」

勇太の前に降り立つデッカードは胸から警察手帳を取り出した。

『ホールドアップ！！ブレイブポリス！デッカードだ！！』

「勇者・・・」

デッカードに向かって勇者と呟く天界生物。

そして

『ブレイブポリスはデッカードだけじゃないぜ！！』

天界生物に手裏剣が放たれると一体のロボットが降り立った。

「シャドウ丸！！」

『よ！チビボス』

勇太の下に降り立つシャドウ丸天界生物が詰め寄ってくるとデッカードが叫んだ。

『勇太！私に合体命令を！』

「ようし！！」

警察手帳を取り出す勇太。

「ブレーイブアップ!!ジェイデッカー!!」

勇太の命令と共に警察手帳がサイレンを鳴らし開かれるとジェイローダーと共にデッカードが走った。

ジェイローダーが翼を開き上昇すると脚部が展開しコックピット部分が開き収納されていた腕が展開した。

そしてデッカードが舞い上がりビークルモードになるとジェイローダーに合体し頭部が出ると口元にデッカードの顔が現れマスクが閉じた。

『ジェイ!デッカァァァ!!』

完成したジェイデッカー。そしてシャドウ丸も・・・

『チビボス!私にも合体命令を!』

「え?シャドウ丸合体できたの?」

『つい最近出来るようになりましてね』

「けど誰と?」

背後に気配を感じた勇太が振り返るとそこにはシャドウ丸と同型の龍の翼をロボットが立っていた。

『・・・ボス』

「か・・・カゲロウ!!」

シャドウ丸のプロトタイプにして友であるカゲロウ。だがカゲロウは破壊されたはず・・・

「何でカゲロウが?」

『説明は後ですぜ!さぁチビボス!合体コードはアシュラ丸!』

「よおし!ブレーイブアップ!アシュラ丸!!」

勇太の警察手帳が唸りを上げると展開した。

シャドウ丸とカゲロウが舞い上がり背中の翼が分離すると背中合わせに合体した。

そのままシャドウ丸が左半身、カゲロウが右半身に変形するとシャドウ丸の翼が胸部に合体しカゲロウの翼が背中に合体すると背中から頭部が合体した。

『『アシュラ丸!!』』

ジェイデッカーと並び立つアシュラ丸。

「アシュラ丸・・・わあ!すごいや!!」

アシュラ丸の合体に喜ぶ勇太。

『さあ！勇太！私たちに命令を！！』

「ようし！ジェイデッカー！アシュラ丸！天界生物をやっつけてダグブレイブを助けるんだ！！」

『了解！ボス！！』

『へへ・・・それじゃあっしの活躍見ていてくださいよ！いくぜ！ジェイデッカー！カゲロウ！』

『『おう！！』』

電磁警棒を構えるジェイデッカーはダグブレイブに群がる天界生物を切り裂いた。

『大丈夫か？』

ダグブレイブを起こすジェイデッカー。

『・・・誰だ？・・・あんた』

ジェイデッカーに気づくダグブレイブ。

『ブレイブポリスだ』

『ブレイブポリス？』

『ここは私に任せろ！！トアア！！』

ダグブレイブを避難させると電磁警棒で天界生物を次々と切り捨て

るジェイデッカー。

そしてアシュラ丸が・・・

『サポートは頼むぜ！カゲロウ！』

『任せろ！！』

メイン人格のシャドウ丸のサポートをするカゲロウ。忍者刀を日本引き抜くと天界生物を切り捨てるアシュラ丸。

『はああ！！』

そして空中演舞すると手裏剣を投げ鎖鎌を投げつけた。

『『グシャアアアア』』

次々と撃破されていく天界生物。一体の巨大な天界生物が撤退し始めると・・・

「逃がすなジェイデッカー！」

『了解！ボス！！ジェイバスタァァァァ！！！』

右足に収納されているホルスターから必殺銃ジェイバスターを抜き天界生物に向かって構えるジェイデッカー。

『！！』

ロングレンジモードで放たれたジェイバスターに天界生物は撃墜さ

れた。

「いやった！！」

ブレイブポリスの勝利に喜ぶ勇太とダグブレイブ。

戦いが終わり勇太の元に駆けつけるデッカード。

『勇太探したぞ。無事で何よりだ』

「デッカード！デッカードこそ！」

デッカードとの再会を喜ぶ勇太。

「ブレイブポリスか」

デッカードをマジマジと見る力。

『勇太。彼は？』

「うん！南力さん！僕の大切な友達」

「・・・友達か」

正直友達という言葉にテレを感じる力。

『よろしく力。勇太の友達なら私の友達だ』

手を差し出すデッカード

「んじゃ俺達友達」

そう言ってデッカードの大きな手に自分の手を重ねる力。

「それにしても驚いたよ。まさかカゲロウが生きていてシャドウ丸と合体しちゃうなんて。でもカゲロウはどうしたの？」

勇太の質問をシャドウ丸が説明し始めた。

『ええ。チビボスを探している時でしたね～奇妙な女が来ましてね』

「奇妙な女？」

『はい。その女が海に沈んだカゲロウの超ＡＩをいきなり持ってきたんです』

『・・・女の話だと・・・勿体無いから拾ってきたとのことです』

カゲロウの言葉に何かを引っ掛る力。そして勇太が質問した。

「そうだ！その人どういう女の人？」

『ええ・・紅い革ジャンを着た女でした・・・凄まじい野生を感じました』

「ピクリ」

シャドウ丸の言葉に反応する力。

「なぁ・・・シャドウ丸」

『なんですか?』

「その女馬鹿そうな顔してたか?」

力の言葉に考えるシャドウ丸は迷うことなく・・・

『馬鹿そうな顔してましたぜ』

言い切った。

完全に一致

(・・・紅い革ジャン着てて野性が合って馬鹿そうな女って言ったら・・・あいつだ)

心当たりある力。

そして

「う!」

「どうしたの!?力さん!」

「ちょっとトイレ!!」

そう言って勇太たちから離れる力。

その力を見送った勇太は・・・

「宜しくカゲロウ！」

『こちらこそ・・・ボス』

そう言ってカゲロウと握手を交わした。

「ようっし！デッカード！力さんが帰ってきたら早速作戦会議だ」

『了解ボス！』

そう言って勇太に敬礼するデッカードだった。

一方

「うえええ！げえええ！！」

人の居ないところに来た力は嘔吐し始めた。

「くっそ・・・まだ治んねえのか・・・ん？あの馬鹿来てるな」

誰かの気配を感じ取る力。

その力を見る影が・・・

「・・・これでよし・・・もう少し美味しいところにいくまで、ちょい待たせてもらうよ」

（相変わらずいい性格してるなお前）

「ばぁか・・・おめえがやられた時に現れないとありがたみないっしょ」

（へへへ・・・んじゃ・・・そん時はよろしく頼むよ・・・相棒）

「へいへい♪」

何故これで会話が成立するのか不明だがとにかく力のある意味念話に答える影だった。

第二十五話　勇者警察到着（後書き）

はやて
「一体みんな何処や？ん？ここはこどもの国・・・なぬ！ライナーチームが子供になっとる！！けど頭ん中は大人や・・・これって」

次回！勇者大戦ブレイブサーガＡ，ｓ　子供になったライナーチーム

フェイト
「今の広瀬海なら勝てるかも」

海
「どんとせい！ふぉーおあふぁいぶ！！」

フェイト
「んべ！広瀬海が子供になっても可愛くない！！」

第二十六話　子供になったライナーチーム

ビービー！！

時空管理局八神部隊に響き渡る警報。

「みんあああ～しゅつげきや～」

大層目が据わっているはやての一発に眠いまま無理矢理起きてきたなのはとフェイト。なのはは管理局の上着の下にパジャマのズボンでフェイトに至っては眠そうにパジャマそのままで枕抱えて出てきた。

「なんやあ～二人ともそのかっこうは～～～」

「だってはやてちゃん最近私達出撃のしすぎだよ～」

「うんうん・・・」

現在八神部隊では天界生物とまともにバトル出来るのがロボットを持っているはやてとリイン、それに日頃力を殺す為に凄まじい修行を重ねたなのはとフェイトしか居なかった。尚ギンガは過労で倒れた。

「みんな～弛んでるわ～」

「「・・・・・・・・」」

何やらジーとはやての姿を見つめるなのはとフェイト。そしてフェ

イトが・・・

「・・・はやて・・・これ何？」

「・・・・・・・・・・・・・・・あ・・・」

フェイトにより管理局の制服を前と後ろを逆さに着ていた事に気づかされたはやてだった。

はやても連続の出撃で疲れていたようだ。

第二十六話　子供になったライナーチーム

『どおりゃあああ！！』

ルシファードで天界生物を蹴り殺すはやて。

『おら！！こんかい！かかってこんかい！！』

物凄く不機嫌なはやて。

『はやてちゃん・・・いくら疲れてるからって・・・天界生物に八つ当たりするなんて』

かというリインもぐでんぐでんに疲れている。不幸な事に八神部隊には勇者が都合よく合流しなかったのだ。

『く・・・休み無しで１００戦以上戦ったで・・・なんでこんなに体力あるんやろ?ああ・・・力君に付き合ってたからか・・・』

そう言って撤退するはやて達。

「疲れた～」

「ぐびぐびぐび・・・」

テーブルの上でぶっ倒れているはやて達。にんにくマムシすっぽんと書かれた超強力栄養ドリンクをがぶ飲みしている。

「大丈夫か～あんまこういうのに頼っちゃあかんけど」

「寝込んでるギンガが羨ましい・・・」

「見とれ天界生物・・・八神組に喧嘩売ったことの愚かさを思い知らせたるわ!」

そう言ってドリンクの瓶を握り潰すはやてだった。

「う～・・・レーダーに何も引っ掛らないし・・・やってらんないわよ」

管制塔が端末を操作していると何やら通信のようなものが入った。

「はい！こちらなんでも相談八神部隊」

「こちら広瀬海！」

「はうあ！」

「至急このエリアまで救助を願いたい！繰り返す！」

海からの通信を傍受した管理局はすぐさま現場に向かった。

何処かの施設

「何が起こったんや？」

疑問に思うはやて。いくらなんでも海ほどの男がＳＯＳを送ってくるとは余程のことである。

「まぁいいや・・・」

「そうだね・・・なのはここで広瀬海に恩を売っておけば後々の粛清が軽く済むかも・・・」

野望有り有りで海の救助に当たろうとするなのはとフェイト。

その時だった。

「ん？」

何かの装置から発射された光を浴びるはやて、なのは、フェイトすると身体がドンドン収縮していった。

「な・・なんやこれ？ああ！！」

鏡を取り出し見てみると自分達の姿が9歳の時になっているはやて達。

「しまった遅かったか！！」

何かの気配を感じ取ったはやて達が振り返るとそこには厳格そうな少年、軽そうな少年、頭のよさそうな少年が居た。

「あれ・・・その顔どこかで見たことあるような」

首を傾げるフェイト。すると竹刀をフェイトの顔面に突きつけた少年。

「私を忘れたか！フェイト！」

「この高慢な態度・・・もしかして、もしかしなくても広瀬海！ってことはライナーチーム！？」

何と目の前の少年達は幼児化したライナーチームだった。

「な！何でこんな事に？」

「はやて・・・よく聞いてくれた・・・どうやらこの施設・・・生物を幼児化させる装置があるようだ」

海の言葉にはやては・・・

「なんでそれ先に言ってくれんかったんや！！」

「言おうとしたが・・・何やら舞い上がって人の通信をちゃんと聞かなかったのはそちらだ」

「う！」

黙ってしまうはやて。そう海から通信が入ったことにより重労働から開放されると感じたはやては海の話も聞かずに速攻で現場に駆けつけてしまったのだ。

「・・・全くちゃんと人の話は聞いて欲しいです」

「同感」

幼児化した翼、森にそう言われて黙ってしまうはやて。するとフェイトが海をマジマジと見始めた。

「へえ～広瀬海にもこんな時期が・・・」

「・・・・・・・・」

しかめっ面でフェイトを見る海。

そしてフェイトの脳裏にどす黒いオーラが浮かんだ・・・

「・・・今の広瀬海なら倒せるかも・・・覚悟！！んべ！！！」

幼児化した海に向かってバルディッシュを振り下ろそうとするフェイトにすかさずカウンターで木刀で顔面を引っ叩く海。

「どんとせい！ふぉーおあふぁいぶ！！」

「痛たた・・・やっぱり広瀬海が子供になっても可愛くなーーーい！！」

引っ叩かれた顔面を抑えながら文句言うフェイトだった。

「フェイトちゃん・・・幼児化しても広瀬海は広瀬海だよ」

「全くだ・・海はガキの頃からこんな感じだったぜ」

「ですね」

なのは、森、翼にそうツッコミされてしまうフェイト。

そして今後の対策を練った。

「まずあの装置を破壊すれば良いんだよな？」

「ですね・・・こういう場合って装置を破壊すれば元に戻るって」

森と翼の言葉にそれで良いのかと思ってしまうはやて達。

「んじゃ八神組流の無謀な特攻かましたろか？」

シュベルトクロイツを構えやる気満々のはやて。

その時

『そうはさせるか！』

一体の知性を持った天界生物がはやて達のはやて達の前に立ち塞がった。それを期に続々と群がってくる天界生物達。

「かあ・・・邪魔しに気負った・・・」

「・・・こうなったら」

「やるしかないね！！」

戦闘体制に入るはやて達に天界生物は・・・

「ふん！キサマラを幼児化させたのは・・・その子供の姿では戦えまい！！」

「あっそ」

「なぬ！！」

そう言ってはやて達にズタボロにされる天界生物達。

「どういう事だ？」

「だってうち等ダグオンの皆と違ってこの時から魔法使ってたし」

「「うんうん」」

身体が幼児化しようが大本が変わっていない為問題なく戦えるなのは達。

「ていうか・・・この頃の方が血気盛んで無茶できるで!!」

「「おう!!」」

若返ったことにより逆にやる気満々になるはやて達。超光速スピードで天界生物を斬り捨てるフェイトと天界生物を『素手』で握り潰すはやて。

「やっぱり力君やないから手応えないわ~」

「・・・恐ろしいの」

そして天界生物を潜り抜けなのはが装置を捉えた。

「ディバインバスター!!」

爆発と共に幼児化装置が破壊されるとはやて達の身体に変化が起きた。

「ん?・・・あ!このおっぱい!わあ!元に戻ってる!!」

自分の胸揉んでみてもとの身体に戻ったことを確かめるはやて。

そして

「・・・後は我々に任せろ!!「「トライダグオン!!」」」

海、森、翼がダグコマンダーを起動させるとそれぞれのダグテクターを装着し融合合体を施した。

『『『重連合体!!』』』

ダグターボ、ダグアーマー、ダグウイングが手を組むと合体フォーメーションに入りダグウイング、ダグアーマーが背中合わせになり下半身に合体するとダグターボが上半身になり

両腕が展開され頭部がタービンを回しながら現れた。

『『『ライナァァァ!!ダグオン!!』』』

「・・・・出た」

フェイトのトラウマ・ライナーダグオンの光臨。

『行くぞ!ライナァァァブリザード!!』

ライナーダグオンが凄まじい氷の竜巻を生み出し天界生物を氷漬けにしていき・・・

『アーマーバスター!!』

右腕のアーマーバスターで粉々に砕いた。

『く!!』

天界生物がライナーダグオンに飛び掛ったその時。

『ライナァァタックル！！』

凄まじい回転と共に体当たりで天界生物を貫き撃墜するライナーダグオン。

それを見ていたはやてとなのはは・・・

「おお・・・流石広瀬海・・・」

「これで休めるの」

風紀委員の意地でどんな激務も耐え切ってしまう海の加入を思わず拍手して喜ぶはやて達ここであることに気づいた。

「あれ？フェイトちゃんは」

「これ・・・」

なのはが指差すと氷漬けになっていたフェイト。

ライナーブリザードに巻き込まれたらしい。

それを見た海は・・・

「フェイト！この程度の攻撃を避けられないとは！貴様弛んでるぞ！！」

そう言ってやかんでお湯沸かして凍ったフェイトを解凍する海だった。

余談だがフェイトが風邪でダウンしたのは言うまでもない。

第二十六話　子供になったライナーチーム（後書き）

俺達にジェイデッカーが加わってひと時の休息を得た。相変わらず俺は戦えないまま・・・だがその時ジェイデッカーに何かが取り付いた。
あれは・・・サタンジェイデッカー!?

更に!続々と終結するマジンガー軍団とゲッター軍団!!に・・・俺の中の闇が発動した。

次回!勇者大戦ブレイブサーガＡ，ｓ　蘇る闇!そして駆けつける魔神!!

・・・放っておくわけにもいかねえだろうが!!

第二十七話　蘇る闇！！そして駆けつける魔神！！

野戦病院

「・・・ゲッターロボ？」

「そう」

ミツキの情報ではここ最近このエリアにゲッターロボが現れ天界生物を撃破してくれているとの事。

「ゲッターロボがこちらと合流してくれれば戦力アップは間違いない」

「上手くすれば・・・ここを統治している神とやらも出てきたときに本陣に攻め込めるって訳か」

「そゆこと♪」

そういうミツキに対し力が提案した。

「よし・・・俺が行く」

「え？」

「相手が竜馬さんなら知り合いの俺が行ったほうが話が早い」

「まぁ・・・一理あるわね・・・それじゃよろしく～」

「あいよ・・・ミツキさんとっととアルトのロボ完成させてね」

「だいじょ～ぶよ～♪」

そうミツキに相槌を打たれながら出撃する力は格納庫でブレイブエラゴに乗り込んだ。するとデッカードが後ろから現れた。

「ん？パト吉？」

「もう力さん！パト吉じゃなくてデッカードだよ～」

デッカードの中の勇太に文句を言われる力。あの後デッカードと妙に仲良くなった力はデッカードの事を『パト吉』と呼んでいた。

『勇太。良いじゃないかそれ程友達だって思ってくれていることだよ』

「デッカード・・・もう」

デッカードの言葉に少し面白くなさを感じる勇太。

「で？どうした？」

「あ！そうそう！力さん一人だと無茶するから監視役で僕とデッカードも一緒だって」

「え？ミツキさんが？」

「うう～うん。はやてさん」

「・・・あ・・・っそ」

何処の世界でもはやての尻に敷かれてしまうと思った力だった。

第二十七話　蘇る闇！そして駆けつける魔神！！

「来たな・・・南力・・・あの時の怨み忘れるものか・・・」

一つの影が力とデッカードを見つめていた。

しばらく走っているとブレイブエラゴのセンサーが何かを捕らえた。

「ん？機影？・・・敵反応だけどけど居ない」

「あれ！」

勇太が指差した方角に一体のロボットが・・・

そのロボットは・・・

「ゲッタードラゴン？」

「あれが？」

『気をつけろ！勇太！』

目の前のゲッタードラゴンに不信感を感じるデッカード。目の前のゲッタードラゴンはいつもと様子が違いすぎる。

『！！危ない！！』

目の前のゲッタードラゴンのゲッタービームを回避する力達。すかさずチェンジしたデッカード。

『力！勇太を頼みます！勇太！私に合体命令を！！』

「よおっし！！ブレイブアーップ！！ジェイデッカー！！」

勇太の合体指令と共に勇太の警察手帳が唸りを上げ開かれると・・・

『！！』

ジェイローダーと共に大地を駆けるデッカードが飛び上がるとジェイローダーもウイングを展開し飛翔した。

後方部分が脚部に展開しコックピットが割れ両腕が形成されボディが形成された。

デッカードが飛翔しビークルモードになり胸部に収まると頭部が形成され口元にデッカードの顔が現れるとデッカードの顔を覆うようにマスクが装着された。

『ジェイデッカー！！』

合体完了したジェイデッカー。

『とあ！！』

すかさず電磁警棒でゲッタードラゴンを殴りつけるジェイデッカー。その姿に力の野生の勘が騒いだ。

「パト吉！そいつ偽もんだ！思いっきりやれ！！」

『わかった！！』

「いけえ！ジェイデッカー！！」

『了解ボス！！ジェイバスタァァァ！！』

右足からジェイバスターを抜くジェイデッカーはゲッタードラゴンに攻撃した。するといとも簡単に撃墜されたゲッタードラゴン。

「やった！ジェイデッカー」

『ああ』

「何だこの嫌な予感」

目の前の偽者のゲッタードラゴンを倒したジェイデッカー。しかし力は腑に落ちなかった。どうも誘き出された勘が強かったからだ。

その時

『！！』

ジェイデッカーに黒いスライムの様な物体が取り付いた。

『ぐあああああ！！』

「ジェイデッカー！！」

うめき声を上げるジェイデッカーを徐々に覆いつくす黒いスライム。

「まさか・・・これが狙いじゃ・・・」

力が気づいたときには時既に遅し黒い物体はジェイデッカーを覆いつくし禍々しい姿を形成し・・

サタンジェイデッカーにしてしまった。

「ジェイデッカー！」

勇太の言葉に反応しないサタンジェイデッカー。

すると

「「はっはっはっは!!」」

高らかな笑い声と共に半分が男性半分が女性の物体が現れた。

「てめえ・・・オカマ!!」

「「あしゅら男爵だ!愚か者!!」」

兜甲児の敵であったあしゅら男爵。だがあしゅら男爵は甲児たちにまた自分達によっても倒されたはず・・・

「・・・生きてやがったのか・・・」

「「貴様を殺すまで死ぬわけにはいかん!!兜甲児を殺す前に見せしめでお前を殺す!!幸いお前は戦えない身体のようだしな」」

「く!」

全てを察した力。あのゲッタードラゴンは自分を誘い出す為の罠であった事に・・・

「てめえ・・・パト吉になにしやがった!!?」

「「簡単なことよ・・・テレパシー発信機をつけ強化ボディスライムを纏わり付けただけだ」」

「デッカードを・・・デッカードを返せ!!」

「「ははは!!無理だな!もうジェイデッカーは私の操り人形だ!!」」

勇太の叫びも空しくあしゅら男爵は笑い続けた。

「「ふふふ・・・これだけではないぞ！こい！マジンガー軍団！ゲッターロボ軍団！！」」

あしゅら男爵が杖を掲げると続々と現れるマジンガーZ、グレートマジンガー、グレンダイザー、ゲッタードラゴン。その数一体ではなく数十体といった数だった。

「これは・・・あの時の量産型」

「ふふ・・・別次元では面白いことを考えるな・・・宿敵の量産だがそれだけではないぞ」

再び杖を掲げるあしゅら男爵の前に現れる戦士・・・

「あれは・・・・」

「・・・力・・・さん？」

一体の禍々しい姿をしたブレイブダグオン。ダークブレイブダグオンといった所か・・・

「てめえ・・・趣味悪い事しやがって・・・」

「「ふん！何とでも言え！こやつはプロジェクトFの技術を用いて作り上げた貴様自身だ・・・貴様の潜在能力を全て受け継ぎ尚且つ残忍で怜悧な姿にしてな！！」」

ダークブレイブダグオンの中に映る禍々しい自分自身の姿。

「なるほど・・・甲一さんみてえにならねえようにか・・・」

「ふふふ・・・さあ！ダークブレイブダグオン！サタンジェイデッカー！！無能な人間を殺せ！！」

力にジェイバスターを向けるサタンジェイデッカー。

と

「「うぎゃあああああああああああああ！！！」」

あしゅら男爵を真っ二つにするダークブレイブダグオン。

「「ば！馬鹿な！！何故！？」」

あしゅら男爵のその言葉にダークブレイブダグオンは・・・

『馬鹿が・・・俺に取っちゃテメエが一番無能なんだよ』

そう吐き捨てダークブレイブバーストであしゅら男爵塵一つ残さず消し飛ばした。

「へ！性格悪いのは俺のまんまだな！！」

ダークブレイブダグオンに悪態をつく力。するとダークブレイブダグオンの指示でマジンガー軍団、ゲッターロボ軍団、サタンジェイデッカーは力に攻撃を始めた。

「く！！身体丸めろ！！」

「え！うわあああああああああ！！」

勇太を片手で持ち上げ遠くに投げ飛ばす力。受身を取り戦闘エリアから離された勇太。そしてダグコマンダーでミツキに連絡を取る力。

「ミツキさん！まずい！罠だ！エクスカイザーをこっちによこしてくれ！！」

（・・・やっぱりね・・・わかった！すぐエクスカイザーをそっちに向かわせる！）

「頼むよ・・・それまでは・・・」

（無茶しないで力君！今のあなたの身体じゃ！）

「放っておくわけにはいかねえだろうが！！」

ミツキの言葉を振り切りブレイブダグオンに急速合体する力。

『！！』

サタンジェイデッカーのジェイバスター攻撃されるブレイブダグオンは転がって避け続けた。

『くそぉ・・・身体が言うことききかねえ・・・うぐ！！』

ジェイバスターのクリーンヒットを浴び吹っ飛ぶブレイブダグオン。

さらにトマホークブーメラン、ショルダーブーメランの追撃を転がって避けるブレイブダグオン。

『はぁ・・・はぁ・・・・』

既に息が上がってるブレイブダグオン。

そこに

「やめてデッカード！！」

『・・・・・・・・』

サタンジェイデッカーに呼びかけるために戻ってきた勇太。

『勇太・・・さがれ・・・』

「デッカード！！」

『・・・・』

勇太の言葉に反応せずあしゅら男爵の命令であるブレイブダグオンを破壊するためにブレイブダグオンに攻撃するサタンジェイデッカー。

『ぐあああああああああ！！』

「力さん！！」

『勇太・・・』

「デッカードが・・・デッカードが」

『勇太・・おめえが先に負けてどうすんだ?』

「え?」

『デッカード信じてるなら・・・呼びかけるんだ・・・デッカードに届くようにな!!』

勇太の言葉に立ち上がるブレイブダグオン。

そして勇太を肩に乗せた。

『勇太・・・やるぞ』

「うん!!」

何かを決意し攻撃を掻い潜りながらサタンジェイデッカーに掴みかかるブレイブダグオン。

「デッカード!!僕だよ!!勇太だよ!!目を覚まして!!」

『起きろよパト吉・・・おめえ俺のマブダチだろ!!』

「デッカード!!!」

『ウ・・グ・・・ウウ!!』

サタンジェイデッカー・・・いやジェイデッカーは勇太のブレイブダグオンの呼びかけに己の心と必死に戦いはじめた。サタンジェイデッカーに掴みかかりながらブレイブダグオンは握り拳を作った。

『ううう・・・うおおおおおおおおおおお！！！』

ブレイブダグオンは迷いを吹っ切り全ての思いを乗せたあの拳をサタンジェイデッカーに放った。

『ウグ・・・！！！』

サタンジェイデッカーの胸に突き刺さるブレイブダグオンの拳。

『手応え・・・あり・・・』

ブレイブダグオンはサタンジェイデッカーの胸から腕を引き抜くと取り付いていた電波受信機を破壊できたようだった。だが命令を無視し自分の動きを止めたジェイデッカーの行動が無かったら破壊は不可能であっただろう。

『がは・・・あ・・・』

「ジェイデッカー」

人間で言う気絶をしたジェイデッカーの元に駆け下りる勇太。

『・・・勇太・・・ジェイデッカーを頼むぜ』

「力さん」

すかさず戦闘態勢を切り換えるブレイブダグオン。するとダークブレイブダグオンを筆頭にマジンガー軍団とゲッターロボ軍団がブレイブダグオンに襲い掛かった。

『友情ごっこはそこまでだな！』

『・・・てめえ』

ダークブレイブダグオンに吹き飛ばされるブレイブダグオン。

『この数相手に・・・てめえどうする？』

『愚問だな・・・何処の世界でもな・・・たとえ相手が１００人だろうが２００人だろうがたった一人でも戦うバカっているんだよ・・・』

構えるブレイブダグオンにダークブレイブダグオンはマジンガー軍団を向かわせようとすると・・・

『！！』

突然回転した腕が飛翔しマジンガーＺとグレートマジンガーを破壊した。

『誰だ！？』

『やい！偽もん！！おめえ如きにマジンガーを悪用させるかよ！！』

『・・・あんたは！！』

ダークブレイブダグオン、ブレイブダグオンの目の前に凄まじいエネルギーを纏った皇帝・・・魔神皇帝が舞い降りた。

『力!!』

『甲児さん!』

マジンカイザーで駆けつけた甲児。

『随分探したぜ!見つけないとはやてちゃんに俺八つ裂きにされるところでさ』

『あ・・そ・・・』

助かったはいいが帰ったらはやてにボコボコにされる事が確定したことに恐れる力。この男の泣き所ははやてのようだ。

『まぁ・・・湿っぽい話は無しでいくぜ!!』

光子力エネルギーを全開にするマジンカイザー。

『行くぜ!!光子力ビーム!!』

マジンカイザーの光子力ビームに次々と撃墜されるマジンガーZ。するとグレートマジンガー軍団がグレートタイフーンを一斉に放ってきた。

『ルストトルネード!!』

グレートタイフーンをルストトルネードで押し返しグレーマジンガ

ー軍団をズタズタにする甲児。

すかさずゲッターロボ軍団がチェンジを駆使し可変攻撃をすると・・・

・

『サンダーアロー！！』

次々と撃墜されていく量産型ゲッターロボ軍団。その先には・・・

『ドラゴンカイザー！』

『待たせたな！ブレイブダグオン！！』

ドラゴンカイザーの到着に安心するブレイブダグオンだが・・・

『おら！よそ見すんじゃねえ！！』

『ぐあああ！！』

ダークブレイブダグオンに殴り飛ばされるブレイブダグオン。そしてダークブレイブダグオンはエネルギーを解放した。

『行くぜ！ダークブレイブナックル！！』

『ぐあああ！！』

『ダークバースト！！』

『うあああああ！！』

拳から高熱光線のコンボを浴びたブレイブダグオン。

『見たか！俺は技一本で戦ってきたおめえと違って数々の技があるんだよ！！シューティング！！コメット！！』

『あれは・・・飛鳥の！ぐ！！！』

ダークブレイブダグオンから放たれる相棒の技に倒れたブレイブダグオン。

『野郎待ってろ！カイザー！ブーメラン！！』

『ほあっちゃあああ！！』

グレンダイザー軍団を撃破しながらブレイブダグオンの元に向かおうとする甲児とドラゴンカイザーだがダークブレイブダグオンが増援として呼んだあしゅらマジンガー軍団に阻まれてしまう。

『はああ！！』

『うわあああああああああああ！！』

ダークブレイブダグオンに殴り飛ばされるブレイブダグオン。だがフラリと立ち上がりダークブレイブダグオンに向かって走った。

『うおおおお！！』

『おりゃあああああああ！！』

ブレイブダグオンの拳をカウンターで受け止め尚且つ殴り飛ばすダ

ークブレイブダグオン。

『う・・あ・・・・・』

『エネルギー残量0・・・もう立ち上がれない』

倒れたブレイブダグオンを見たダークブレイブダグオンはマジンカイザーとドラゴンカイザーを葬るべく向かおうとするが・・・

『なに!!?』

何かの気配に気づき振り返るとそこには立ち上がったブレイブダグオンが・・・

『バカな!奴のエネルギー残量はもう0!動けるはずが!立ち上がれる筈が無い!何故だ!何故あいつはエネルギー0で立ち上がるんだ!?』

サーチ画面に切り替えて見てもブレイブダグオンのエネルギー数は0。とてもじゃないが起動できるほどじゃない。

『・・・・・・・』

ダークブレイブダグオンは恐れていた。エネルギー残量が無いのにもかかわらず立ち上がったブレイブダグオンの姿に・・・・

『わかんねえなら教えてやるぜ!力はな・・・非常識な男なんだよ!!』

甲児の言葉に驚くダークブレイブダグオンだが・・・

次の瞬間

ブレイブダグオンの身体から膨大な闇の力が噴出された。その闇はエリア全体を覆うほどの量だった。

『なんだ!?あの闇の力は』

止めるべくブレイブダグオンに駆け寄ろうとしたドラゴンカイザー。

そして

「なに・・・あの闇・・・」

野戦病院に居たミツキも驚き増援に向かおうとするが・・・

（・・・ミツキさん）

（あなた!?）

突然ミツキの脳裏に響く念話。

（大丈夫・・・あの闇に害はないから）

「え?」

何が何だかわからないが、野戦病院をシャドウ丸、カゲロウ、ジョーに任せひなぎくを起動させ現場に向かうのだった。

暗闇の中

力は浮遊していた。

そして

「うわあああああああ！！」

突然重力が降りかかりどん底まで叩き落された。

「何処だ？・・・ここは・・・・」

誰も居ない何も無い空間・・・そこに独り佇む力だが背後に気配を感じ振り返ると一人の男が立っていた。

その男は・・・

「・・・力」

「・・・父さん」

第二十七話　蘇る闇!!そして駆けつける魔神!!（後書き）

何で父さんが・・・俺は死んだのか?何逃げるのなら一生この闇留まれ?嫌なこった!!父さん!悪いけど俺前にしか進めない!それが人だからな!!

次回!勇者大戦ブレイブサーガＡ，ｓ　復活ダメ人間勇者!＆史上最悪の馬鹿コンビ

・・・遅いよ

・・・おめえがやられんのをず～っと待ってたんだよ

・・・相変わらず良い性格してるねお前

第二十八話　復活ダメ人間勇者！&史上最悪の馬鹿コンビ

ひなぎく内

「なに・・・あれ・・・」

胸騒ぎを抑えきれずひなぎくを発進させたミツキはブレイブダグオンたちの様子をモニターで見た。

特に気になったのはブレイブダグオンから噴出し続けている膨大な闇の力・・・それはまるで闇の書を見ているようだった。

「・・・あれって・・・一体」

第二十八話　復活ダメ人間勇者！&史上最悪の馬鹿コンビ

暗闇

「父さん・・・父さん！！」

何も無い空間・・・突如現れた新吉に駆け寄る力。その姿を見た新吉は・・・

「！！」

「ぶはあ!!」

力を徐に殴りつけた。訳がわからず倒れる力その姿を見た新吉は・・・

「力・・・情けない男になったな・・・」

「・・・父さん!!」

新吉はその姿を見ると背を向け力の前から立ち去ろうとする。

「待ってくれ・・父さん!行かないでくれ!!」

父を求めてしまう力。だがその言葉に振り返ろうとしない新吉。

「父さん!!俺を独りにしないでくれ!!!」

その言葉に足を止める新吉。

「力・・・お前は大切なことを忘れてる・・・お前は独りじゃないだろ・・・」

「え?ぐ!!」

何の事かわからず新吉に殴り飛ばされる力。

(ああ・・・そうだ・・・このパンチだ・・・・・俺がウジウジ悩んだとき・・・父さんはこんな骨までバラバラになるような良いパンチをくれた・・・)

新吉の拳で考えている物が吹き飛び始める力。

（そうだ・・・そうだよ・・・俺にはたくさんの仲間がいるじゃねえか・・・勝手に独り焦って・・・自分しか信じねえで・・・）

何かを思った力。

「へへ・・・へへへへへ！！！」

笑い出した力。

その姿を見た新吉は何かを思い力を見つめた。

「父さんよぉ・・・少しずつだけどさ・・・俺は・・・・！！！」

新吉の顔面を思いっきり殴り飛ばす力・・・だが・・・

「・・・・・」

先ほどとは違い一滴の血反吐を吐かなかった。

力に殴り飛ばされ口元の血を拭う新吉は・・・

「そうだ・・・それでいい・・・」

「父さん・・・」

「あとは・・・彼が力を貸してくれる・・・」

「彼？」

力が何かに気づくと新吉の背後から現れるダイノガイスト。

「・・・ダイノガイスト」

『小僧・・・貴様がそのザマじゃおちおち地獄に居ることも出来んのでな・・・』

「！！」

ダイノガイストの目が光ると赤い光線が放たれ新吉を包み込み一体化した。そしてダイノガイストの意識が新吉に切り替わった。

「・・・父さん」

『さぁ力・・・子供の頃の相撲の時みたいに・・・かかってこい！！』

ダイノブレードを力に向ける新吉。その言葉に力は・・・・

「トライダグオン！！」

吹っ切った

力がダグコマンダーを起動させると水色のダグテクターが装着されフルフェイスのマスクで覆われた。

「ブレイブリキ！！融合合体！！」

ブレイブエラゴが人型に変形すると力と一体化し瞳が淡い緑に光った。

『ダグブレイブ！！来ぉぉい！！ブレイブローダー！！』

ダグブレイブの叫びに駆けつけるブレイブローダー。

『勇者合体！！』

ブレイブローダーが人型に変形すると頭部が現れ胸部が展開された。

『うおおおおお！！とお！！』

ダグブレイブが駆け抜けビークルモードになると胸部に納まり胸部が閉じると瞳が淡い緑に光った。

『ブレイブダグオン！！』

新吉・・・いやダイノガイストの前に降り立つブレイブダグオン。

『ブレイブソード！！おりゃあああああ！！！』

『！！』

ブレイブダグオンのブレイブソードをダイノブレードで受け止めるダイノガイスト。

『ふん！であ！！』

『はあ！！はあああ！！』

ブレイブソードとダイノブレードが交差するが・・・

『！！』

ブレイブソードを弾き飛ばされてしまうブレイブダグオン。

『力！これで武器はもう無いぞ！』

ダイノガイストの言葉にブレイブダグオンは・・・

『悪いな・・・俺は・・・素手のほうが強いんだよ！！』

ダイノガイストに殴りかかるブレイブダグオン。そのパンチをダイノシールドで受け止めるダイノガイストだが・・・

『はあ！！』

攻撃をダイノシールドに受け止められながら、ブレイブダグオンはダイノシールドを持っている腕に絡みついた。お得意の関節技を披露する。

『ぐう！！うおおおおおおお！！！』

関節技を強引に外しダイノブレードを構えるダイノガイスト。ブレイブダグオンもブレイブソードを拾い上げる。

『ダークサンダーインフェルノ！！』

『ブレイブソォォォドクラッシュ！！』

両者の技が交差し凄まじい破壊力生み出した。

爆発のエネルギーで徐々に光を取り戻す力。その力を

『・・・行って来い・・・力』

新吉は見送った。

『・・・父さん』

目の前が真っ白になる力。

現実世界

ブレイブダグオンから発せられていた闇エネルギーが吹き飛ばされた。

『な！何が起こった！！』

ブレイブダグオンの姿に混乱するダークブレイブダグオン。

そして

『目え・・・覚めたあああああああああ！！！』

力の中の野生が蘇った

目を覚まし飛び上がったブレイブダグオンはダークブレイブダグオン目の前に降り立ち両腕を思いっきりぶん回した。

『貴様！何処にそんな力が』

『人間の根性甘く見るんじゃねえ！！！』

この男は根性さえあれば復活するらしい。

『このデタラメ人間が！！』

ダークブレイブダグオンにブレイブダグオンに飛び掛ると・・・

『どおおりゃあああああ！！』

ダークブレイブダグオンの男として大切な部分を蹴り飛ばしたブレイブダグオン。物凄い激痛で悶絶するダークブレイブダグオンだが・・・

『おら！！おら！！おら！！うおりゃあああ！！』

おら！！のたびダークブレイブダグオンの大切な部分を蹴り上げ続けるブレイブダグオン。その光景を見ていた男性達が自分の大切な部分を抑えていたのは言うまでもない。

今度はダークブレイブダグオンの頭部を掴み取るブレイブダグオン。

『さっきのお返しだ！！』

思いっきり頭突きしまくるブレイブダグオン。ホントにこの男は勇者なのだろうか・・・

更に・・・

『どりゃあ！！おらおらおら！！』

ダークブレイブダグオンを押し倒しマウントポジションで顔面を殴り続けるブレイブダグオン。この男は相手が自分のそっくりさんであろうが容赦しないらしい。

『ぐ！ぶべ！！ちい！！』

ブレイブダグオンを蹴り飛ばしどかすと撤退を開始するダークブレイブダグオン。

『野郎！逃がすかよ！！』

ダークブレイブダグオンを追いかけるブレイブダグオン。

その様子を見ていたミツキたちは・・・

「なんか・・・もう心配するだけ無駄っぽいわね・・・」

『そうだな』

とにもかくにも力が復活したことに唖然とした。

森林地帯を抜け広いエリアに立つと待ち受けていたマジンガー軍団にゲッターロボ軍団。その真っ只中に降り立つブレイブダグオン。

『おめえら・・・そういやあん時は散々虐めてくれたな～』

やる気満々のブレイブダグオンの元に・・・

『おい！おめえ！いつになったら出てんだよ！！』

ブレイブダグオンのその言葉にブレイブダグオンの元に降り立つ影が・・・

『・・・おせえんだよ・・・おめえは』

『・・・おめえが殺られんのをずっと待ってたんだよ』

ブレイブダグオンと背中合わせで立つウィザーダグオン

史上最悪最凶の馬鹿コンビが復活した。

『で、どうする？・・・この数？』

『偽もんだから余裕っしょ・・・んじゃ・・・よろしく頼むよ・・・相棒』

『へいへい♪』

史上最悪最凶の馬鹿コンビが軍団に突撃した。

第二十八話　復活ダメ人間勇者！＆史上最悪の馬鹿コンビ（後書き）

ようやく目を覚ました俺！ようし！このまま勢いに乗って偽者軍団をぶちのめしちゃる！！んでもってとっととダグベースに合流だぜ！！！

次回！勇者大戦ブレイブサーガＡ，ｓ　決着！力対力

俺の勝ちだ！！！

第二十九話　決着！力対力！

悪のマジンガー軍団・ゲッターロボ軍団に囲まれるブレイブダグオンとウィザーダグオン。

『で、どうする？・・・この数？』

『偽もんだから余裕っしょ・・・んじゃ・・・よろしく頼むよ・・・相棒』

『へいへい♪』

マジンガー軍団、ゲッターロボ軍団が突入すると・・・

『『うううううううううおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！』』

史上最悪最凶の馬鹿コンビが軍団に突撃した。

第二十九話　決着！力対力

ひなぎく内

何やら影の守護者はやてがファントムのメンバーを集めホワイトボードに向って何か書いてた。

「さぁさ！！ブレイブダグオン！ウィザーダグオン！どっちが多く撃墜するか！？一口１０万円からや！！さあ！はったはった！！」

「ブレイブダグオンに１０万円！！」

「ウィザーダグオンに２０万円！！」

何故か白熱しているひなぎく内。

「・・・なんで・・・商売が成り立つほど盛り上がってる・・・」

すでにプチ組長化した影の守護者はやてにホロリとするミツキだった。

『おっりゃあああ！！』

ゲッタードラゴンとグレンダイザーの首根っこ掴んで頭同士をぶつけて潰すブレイブダグオン。

そこに背後からマジンガーZとグレートマジンガーが襲いかかってくると・・・

『ウィザーカッター！！』

両腕から剣を引き出しマジンガーZとグレートマジンガーを滅多斬りにするウィザーダグオン。更にウィザーダグオンの背後をゲッターポセイドンが羽交い絞めにしようとすると・・・

『うおおりゃあああああああ！！』

ブレイブダグオンにアッパーで破壊されるゲッターポセイドン。

お互いの背中を守りあってる馬鹿コンビ。

そしてブレイブダグオンがウィザーダグオンを持ち上げ思いっきり振り回した。

『いっけえええ!!』

『おりゃあああああ!!』

ウィザーダグオンを投げ飛ばすブレイブダグオン。その先にはゲッターライガーが・・・

『朱雀!殺人脚!!』

ブレイブダグオンの馬鹿力の遠心力がウィザーダグオンのファイティングスタイルの蹴り技に合わされたことにより凄まじい破壊力を生み出した。

ひなぎく内

「あら～息ぴったりね～」

「・・・本能がそうしあってるんですかね?」

呑気に見ているミツキとツッコミを入れるナリア。

「まぁ～お茶でもすすってようかしらね～」

お茶すすり出したミツキに通信が・・・

『俺達を忘れんなあああああ!!』

「あ!」

『ん?』

ブレイブダグオンが上を見ると・・・

『タァァボスマッシャーパアンチ!!!』

上空からマジンカイザーのターボスマッシャーパンチがマジンガーZ、グレートマジンガーを貫いた。

『甲児さん!』

『全く!折角助けに着たのに扱いがぞんざいなんだよ!!』

『悪ぃ悪ぃ・・・』

ブレイブダグオン、ウィザーダグオンに並び立つマジンカイザー・・・

更に・・・

『力!!』

『ドラゴンカイザー！』

損傷の激しいドラゴンカイザーが駆けつけた。

『ドラゴンカイザー・・・それは！』

『気にするな・・・さぁ・・・奴らを倒そう！！』

連戦に継ぐ連戦で損傷の激しいドラゴンカイザー。

その時ひなぎくから・・・

『こんなこともあろうかと！！エクスカイザー！あれ呼んで！！』

ミツキの通信で何かを察したドラゴンカイザーは分離した。

そして

『キングローダァァァ！！！』

エクスカイザーの腕から光線が放たれるとエクスカイザーの元に駆けつけるキングローダー。

するとウイングが展開しブースターが背中に折りたたまれリフトアップすると全部分が展開した。

『とお！！』

展開したキングローダーに向って走るエクスカイザー。

『フォームアップ！』

パーツが閉じるとエクスカイザーのマスクが閉まり腕が現れ胸に巨大な獅子が現れ誕生した偉大なる勇者。

『巨大合体！キングエクスカイザー！！』

キングエクスカイザーの登場と同時にひなぎくに格納されるドラゴンジェット。

「今度はドラゴンジェットの修理か」

頭痛を起こすミツキ。

ミツキたち影の守護者メンバーが心血注ぎキングローダーを修復したのだ。

最後に・・・

『ホールドアップ！！』

機能が復活したジェイデッカーがブレイブダグオン達の元に駆けつけた。

『パト吉！動いて平気なのか！』

『ブレイブダグオン！大丈夫だ！』

『僕達も一緒に戦う！』

ジェイデッカーのコックピットから勇太が叫ぶと・・・

『・・・友情ごっこはそこまでだ』

偽ＤＹＮＡＭＩＣ軍団の元に舞い降りるダークブレイブダグオン。

『・・・おめえらまとめて消し飛ばしてやる』

『望むところだ！！行くぜ！！』

『『『『おう！！』』』』

ブレイブダグオンはダークブレイブダグオンに

ウィザーダグオンはグレートマジンガーに

マジンカイザーはマジンガーＺに

ジェイデッカーはグレンダイザーに

キングエクスカイザーはゲッターロボに向っていった。

『うおおおおおおおおおおおお！！』

『ぐはああ！！』

ブレイブダグオンに殴り飛ばされるダークブレイブダグオン。そのままラッシュが続くとダークブレイブダグオンをうつ伏せに張っ倒

した。

『おりゃあああああああああああああああああああああああああ！！！』

メキメキメキメキ！！！

『うおわあああああああああああああああ！！あああああああああああああ！！！！』

ダークブレイブダグオンに逆エビ固めを食らわせて悶絶させるブレイブダグオン。

更に・・・

『おら！おら！おら！おら！！！』

『あぶ！あぐあああああ！！』

ダークブレイブダグオンのマウントポジションに入りボコボコにするブレイブダグオン。

『どうだどうだどうだ！！！』

『ぎゃあああ！！』

ダークブレイブダグオンに腕ひしぎ十字固めを決めるブレイブダグオン。素手だと喧嘩技になるようだ。

そして

パッキン

『うおおおおおおおお！！！』

得意必殺の関節技（サブミッション）でダークブレイブダグオンの腕関節を簡単にへし折った。

・・・はっきりいって虐めか虐待にしか見えない・・・

尚、力の喧嘩技は全てはやてによって身をもって体験させられたことである。

「ていうか・・・力君とこのウチそんな事やってたんだ・・・」

唖然とする影の守護者はやて。するとミツキが一冊の本を渡した。

「ん？『八神はやて流喧嘩術奥義書　これで君も邪神や』ってこんな本出してたんだ」

「・・・まぁ・・・生憎出来る人が居ないんだけどね・・・」

そう言うミツキ。尚売り上げは1位の『南力の全て』2位の『南力を殺すためのトレーニング』に続いて第3位の売り上げを誇った。

「ていうか・・・うち等何もせんでええの？」

「んじゃ・・・ミラージュブラスト・・・発射！！！」

楓の取り付けた困った時はこのボタンを押せスイッチを押すミツキ

によりミラージュブラストが発射され偽ＤＹＮＡＭＩＣ軍団が一掃された。

『わおう！ミツキさん相変わらず容赦ねえな・・・』

『んじゃあ～今度は照準をウィザーダグオンに合わせて』

『出た！必殺！ミツキの悪ふざけ！！』

等とミツキの居候時の毎度のやり取りが続く。

『マジンガーを壊すのは気が引けるけど！！ルストトルネード！！』

マジンカイザーのルストトルネードに吹っ飛ばされるマジンガー軍団。

『カイザービーム！！』

『とあ！！』

キングエクスカイザー・ジェイデッカーの攻撃で偽ＤＹＮＡＭＩＣ軍団は全滅した。

『く・・・なめるんじゃねえええええええええダークアッシュ！！！』

ダークブレイブダグオンから超高熱線が放たれブレイブダグオン達を飲み込み大爆発した。

『やつら等々消えちまったか！！？ん！！？』

凄まじいエネルギーと共に爆発を吹き飛ばすブレイブダグオン、ウィザーダグオン、キングエクスカイザー、ジェイデッカー、マジンカイザー。

『馬鹿な！俺の必殺技が！！』

『へ！あんな技にくたばる俺達じゃねえ！！教えてやるよ！必殺技ってのはな！！【必ず殺す】から必殺技なんだよ！！』

ブレイブソードを構えるブレイブダグオンを筆頭にウィザーダグオン、キングエクスカイザー、ジェイデッカー、マジンカイザーが必殺技の体制に入った。

『カイザーソォォド！サンダァァフラッシュ！！』

『光子力エネルギー！フルチャージ！ファイヤー！！ブラスタァァァァ！！！』

キングエクスカイザーとマジンカイザーの必殺技を一身に受けるダークブレイブダグオン。

『なあ！なにいいい！！』

『ウィザーキャノン！！ファイナルシュート！！』

『ジェイバスタァァァァ！！！』

ウィザーダグオン、ジェイデッカーの一斉射撃に蜂の巣になり・・・

『ブレイブソォォォドクラッシュ！！！』

ブレイブダグオンの一閃がダークブレイブダグオンを真っ二つにした。

1分の1己の偽者を何の躊躇なく真っ二つにするブレイブダグオン。

『ふん！！』

ブレイブソードを拭うと大爆発を起こすダークブレイブダグオン。

『ウシャアアアアアアアアア！！！』

己の断末魔の叫びを聞くブレイブダグオンだが・・・その表情に曇りはなかった。

戦いが終わったひなぎく

「ちゅう中たこかいた～ちゅうちゅうたこかいた～」

賭けで勝った札の枚数を数えている影の守護者はやて。

その一方

「えええええ！？力君行っちゃったの！？」

「ああ・・・一刻もはやくダグベースに合流したいんだと・・・・」

項垂れるミツキと呆れる甲児。そう・・・力はミツキたちの事を甲児に押し付けダグベースに向ってしまったのだ。

というよりどうもこのエリアはあしゅら男爵が天界生物を操っていたらしく以前より天界生物自体の活動は活発ではなくなった。

「たく・・・頭痛の種を・・・バリバリ」

薬瓶から錠剤のようなものバリバリ噛むミツキ。

「それ何の薬？」

「ラムネ」

「紛らわしい容器に入れるな！！」

脅しなどの小道具のラムネを食べるミツキにツッコミを入れる甲児。

「はぁ・・・どうせならこれ持ってってくれればよかったのに・・・」

ミツキがモニターに出したのは一台の巨大なジェット機だった。

「何これ？」

「これね・・・神龍って言ってこの前偶然ダグベースと連絡が取れたときにヴォルフガング博士が送ってきた設計図を元に私がちょちょいのちょ～いって作ったのよ～まぁ８割は出来てるからあと２割はあっちでって思って」

それを聞いた甲児は・・・

「なら・・・俺が手伝うぜ！こう見えてもウチの世界じゃ皆のデバイス作ったからな」

「それじゃあ～お願いしようかしらね～容赦しないでもっとピーキーに作っておこう♪」

「ていうか誰が乗るんだ？」

「将来の義妹♪」

「ぶう！！なんつー事言ってんだあんた！！分かった！またミツキの悪ふざけだろ！？」

「ふふふふ・・・どうかしらね～♪」

黒化するミツキを見た甲児は・・・

（うっわ～この人だけは絶対敵に回したくねえ）

等と思った。

「さあって・・・ひと段落したら私達もダグベースに向うわよ！！全員準備！！」

そう言ってファントムメンバー、甲児、エクスカイザーとブレイブポリスは準備を始めるのだった。

その一方

虚無空間

「！！次元の壁が薄くなった！！」

狭間の世界に取り残された勇者は何かを感じ取った。

「今なら・・・もしかして・・・」

そう感じ力を解放するのだった。

第二十九話　決着！力対力！（後書き）

激戦に継ぐ激戦で消耗したダグベース。慣れない戦いで参ってしまっている俺達を応援するべく買い物に行ったヴィヴィオちゃん。だがそんな時天界生物が現れてしまった。消耗し傷ついた俺に代わってマイトカイザーに乗り込んだヴィヴィオちゃん。

その時

次回！勇者大戦ブレイブサーガA’ｓ　友情の合体バトル

正義の力が嵐を呼ぶぜ

第三十話　友情の合体バトル

ダグベース

「うぃ～・・・・」

現在ダグベースの面々はあまりの戦闘の多さにやつれていた。

「これがこうで・・・ふぅ・・・一苦労じゃワイ」

勇者ロボたちを整備しているヴォルフガングも疲労している。

「えっと・・・ここのスパナでよかったっけ・・・」

「ユウ～そっちじゃなくこっち・・・あれ?そっち?どっち?」

ユウとアルトも整備で疲れ切っている。

そんな中

「わ～いわ～い!!」

ヴィヴィオだけが元気に騒いでいた。

第三十話　友情の合体バトル

格納庫

「ねえ舞人さん！後何やれば良い？」

全員がやつれている中1人超元気なヴィヴィオ。

「ああ。ヴィヴィオちゃんはもう休んで良いよ」

「はあい」

舞人に本日の仕事が終わりだと告げられたヴィヴィオはユウに遊んでもらうべく整備ルームを出ようとすると・・・

「く」

「え？」

舞人の足元がふらついた事に気づいた。舞人は心配ないとヴィヴィオを外に出すのだった。

整備室から出るとユウを探すヴィヴィオ。

「ねえ」

「あ～・・・今度な・・・」

流石のユウも素っ気無い態度（いつもの事だが）ここ数日出撃の連続で全員が交代で仮眠を取るのがやっとといった状態である。

いつ起こるかわからない天界生物を相手にしている為気の抜けない

状態であった。

「・・・・どうして私は舞人さん達みたいなヒーローじゃないんだろう」

ユウが疲労している事を感じ取ったヴィヴィオ戦う事が出来ない事に劣等感を感じてしまった。

「よ～っし」

戦えないなりにヴィヴィオがとった行動は・・・

「で？なんで俺？」

「どうして僕も？」

「なんだよ？」

怪我で出撃できず暇を持て余しているサイモンと頼まれたら断れないヴィヴィオの保護者に任命された雷、更には星史まで呼んだヴィヴィオ。

「というわけで！皆のサプライズ計画をやりたいです！！」

「「「へえ～」」」

ヴィヴィオが画用紙に書いた計画書という名の落書きを見るサイモン、雷、星史。

「サイちゃんってプロのサックスの人なんでしょ！」

「あ・・・そうだけど・・・」

「まずは！サイちゃんに頼んでサックス吹いてもらってパーティします！！」

流離の宇宙のサックス奏者であるサイモンに演奏を頼むヴィヴィオ。

「星史兄ちゃんお料理得意でしょ！」

「え？あそうだけど・・・」

「星史兄ちゃんに御飯作ってもらうの！！」

「ああ・・・まぁ・・・良いけど」

星史にパーティ料理を頼むヴィヴィオすると・・・

「あの～僕は何したら良いんですか？」

「雷さんはヴィヴィオと一緒に買出し！！」

そうしてサンダースロットルのサイドカーに乗り込みパーティの材料を探し始めるヴィヴィオ。

「えっとおやつ～おやつ～」

ヴィヴィオの手元には『姫ちゃんのレシピ』と書かれたノートがあった。

「お菓子か～そういえば力君来ないかな～」

実はお菓子作りだけならはやてを凌ぐ実力を持つ力。

「よっし！これでみんなに喜んでもらうんだ♪」

今のヴィヴィオの戦い・・・それは勇者達をサポートする事だった。

「ふ～大変だ～」

雷もヴィヴィオにこき使われているが嫌でない。

その時

「！！」

大地が揺れ始めた。慌ててサンダースロットルを停止させる雷。すると地面から天界生物が湧き上がってきた。

「く！こんなとこでヴィヴィオちゃん！逃げて！」

「うん！！」

雷に言われ荷物をまとめてサンダースロットルから降りるヴィヴィオ。

そして

「トライダグオン！」

雷がダグコマンダーを起動させると黄色のダグテクターが装着されフルフェイスのマスクが覆った。

「サンダーライ！！」

そして急速合体を行いサンダーダグオンになる雷。

『サンダージャベリン！つあ！！』

襲い掛かってくる天界生物を切り裂くサンダーダグオン。そしてヴィヴィオが荷物持って安全な場所に走ろうとした。

「遠回りできない！いく！！」

戦闘中の道を突っ切ろうとするヴィヴィオ。

すると

『ぐあああ！！！』

連日の戦闘で疲労しているサンダーダグオンが吹き飛ばされるとヴィヴィオの近くに落ちてしまった。

「うわ！！」

突然の事に腰を抜かしてしまうヴィヴィオ。天界生物がヴィヴィオに襲いかかろうとしたその時。

『待て！！』

舞人が駆るカイザージェットが天界生物を攻撃した。後ずさる天界生物。

だが

「きゃあああ！！」

舞人の弾丸がヴィヴィオの近くに被弾した。

『ヴィヴィオちゃん！く！ヴィヴィオちゃんが近くにいちゃ攻撃が・・・うわ！！！』

すると掴み取られてしまうカイザージェット。

『は！！舞人さん！！！てああ！！』

起き上がったサンダーダグオンがカイザージェットを救うべく天界生物に攻撃しカイザージェットを離すが墜落していくカイザージェット。

『く！！』

咄嗟にカイザージェットをキャッチするサンダーダグオンはゆっくりとカイザージェットを下ろした。

『はあ！！』

再び天界生物に向っていくサンダーダグオン。

「舞人さん！！」

カイザージェットのコックピットに入るヴィヴィオ。其処には傷つき気絶している舞人の姿があった。

舞人をカイザージェットから下ろすヴィヴィオ。

「舞人さん・・・私のせいで・・・私がやらなくちゃ!!」

気絶した舞人を介抱するヴィヴィオは意を決しカイザージェットに乗り込んだ。

「いつも姫ちゃんやユウちゃんのお手伝いしてるもん!動かし方くらい分かるもん!!」

そう言ってカイザージェットを起動させるヴィヴィオ。

『チェンジマイトカイザー!!』

カイザージェットからマイトカイザーに変形させるヴィヴィオ。

『ヴィヴィオちゃん!?』

ヴィヴィオがマイトカイザーを動かした事に驚くサンダーダグオン。

だが

『く・・・重い・・・』

マイトカイザーの操縦桿が重いヴィヴィオ。かつて舞人がヴィヴィオの身体に入れ替わってしまった時、出撃できなかったのはヴィヴ

ィオの体力ではマイトカイザーを操縦しきれないからだ。

『てあああ！う！！！』

ヴィヴィオの一撃を避ける天界生物はマイトカイザーにカウンターを入れた。

『く！・・・舞人さんみたいにいかない・・・動かし方が分かるだけじゃダメなの？』

挫けそうになるヴィヴィオ。

『つあああ！！』

そんなヴィヴィオのマイトカイザーをフォローするサンダーダグオン。

『ヴィヴィオちゃん！下がって！！ぐあああ！！』

『雷さん！！』

天界生物の攻撃に吹き飛ばされるサンダーダグオン。

「・・・ん・・・・」

意識を呼び起こす舞人は自分が手当されている事に気づいた。

そして

「あれは・・・マイトカイザーが・・・まさかヴィヴィオちゃんが」

痛む身体を起こしヴィヴィオの基に向おうとする舞人だが今戦う手段が無い。

その時

『舞人！無事か！！！？』

「は！！」

突如汽笛の音が鳴り響き舞人の後ろにあの勇者が・・・

『うわあああああああああああああ！！！』

マイトカイザーごと吹き飛ばされるヴィヴィオ。天界生物の群れは徐々に詰め寄ってくる。

『・・・う！！・・・舞人さん！！』

ヴィヴィオが舞人に助けを求めた。

その時

『そこまでだ！！』

『！！』

天界生物を蹴り飛ばしヴィヴィオのマイトカイザーの前に降り立つマイトガイン。

『舞人さん！！』

『お待たせ！！』

あの時舞人の危機にガインが駆けつけたのだった。

『ヴィヴィオちゃん！行くぞ！！』

『え？・・・うん！！』

『銀の翼に望みを乗せて！灯せ平和の青信号！！勇者特急マイトガイン！定刻どおりにただ今到着！！』

『愛の翼に勇気を込めて！回せ正義の大車輪！！勇者特急マイトカイザー！ご期待通りにただ今到着！！』

舞人共に名乗りを上げるヴィヴィオ。

『僕も・・・忘れないでくださいよ・・・』

並び立つサンダーダグオン。そして逆転が始まった。

『マイティーバルカン！！』

マイトガインのマイティバルカンが火を噴き天界生物を破壊していく。

『てあああああ！！！』

サンダージャベリンで天界生物を斬り捨てるサンダーダグオン。

そして

『ドリルクラッシャー！！』

一対一ならマイトカイザーの性能で実力をカバーするヴィヴィオ。

その時

『決めるぞ！ヴィヴィオちゃん！グレートマイトガインに合体だ！！』

『はい！！』

舞人がコマンダーのスイッチを入れた。

『『レーッツ！！マーイトガーイン！！！』』

舞人のコマンダーが輝くとフォーメーションに入るマイトガインとマイトカイザー。

『グレートダッシュ！！』

マイトガインが上昇するとマイトカイザーがカイザーパーツに分かれ巨大な紋章を描くフォーメーションに入った。

カイザーパーツがマイトガインの足・腕・腰・胸に合体しコックピットに移動する舞人とヴィヴィオが起動レバーに手をかけた。

『『グレートマイトガイン！起動！！』』

舞人とヴィヴィオがレバーを押すと起動するグレートマイトガイン。

『銀の翼に望みを乗せて！灯せ平和の青信号！！勇者特急マイトガイン！定刻どおりにただ今到着！！』

グレートマイトガインの登場に天界生物達は一気に詰め寄ってきた。

「うわ！いっぱい来た！！」

天界生物に恐れるヴィヴィオに舞人は・・・

「ヴィヴィオちゃん！ヒーローの条件を知ってるかい？」

「え？うん！！」

「努力！」

「友情！！」

「そして・・・勝利だ！！」

『グレート動輪剣！！』

グレート動輪剣を構えるグレートマイトガインすると凄まじいエネルギーが天を貫いた。

『『真っ向！！唐竹割り！！！』』

『でああああああああああああああああああああ！！！！』

グレートマイトガインの一閃で両断される天界生物群は全滅した。

グレート動輪剣を納めるとグレートマイトガインのシグナルが輝き戦闘が終了した。

そして

「こりゃ・・・当分使えんの・・・」

マイトカイザーの修理をするヴォルフガング。しかしヴィヴィオがあまりに壊した上にグレートマイトガインにまで合体した為負荷がかかりすぎてしまった。

「大丈夫・・・今はガインが居る」

こうしてマイトカイザーからマイトガインに乗り換える事にした舞人。

そして

ヴィヴィオプロデュースのサプライズパーティが始まった。

「♪～♪～」

格納庫でプロ顔負けのサックスを披露するサイモン。そして星史が作ったパーティメニューが配られヴィヴィオが作ったお菓子も配られた。

「ありがとうヴィヴィオちゃん・・・おかげで元気が出た」

「えっへっへ」

舞人に頭を撫でられ照れるヴィヴィオ。

皆も飲んで騒いで大いに盛り上がっている。凄く気分転換になりヴィヴィオに感謝したいのは皆同じだった。

「舞人さん！私キャッチコピー考えたんです！」

「へぇ～どんなのだい？」

「『魔法と料理をこなす少女』高町ヴィヴィオ！！」

「すっかりお株を奪われちゃったな・・・じゃあ俺は『ナイフとフォークを持つ男』ってことで」

ヴィヴィオにキャッチコピーで返す舞人。

こうしてサプライズパーティは無事終了し明日からの出撃に備えるのだった。

第三十話　友情の合体バトル（後書き）

くぅ～何でウチに居るんはライナーチームだけなんや～結局ウチも毎度出撃せなあかんしやってられんわ！！ん！？あの金ぴかのは・・・それにあの超見覚えある戦艦！！それにあの見覚えのあるタレ目の金髪！！

次回！勇者大戦ブレイブサーガＡ，ｓ　集結！勇者パパ！！

うち等がこ～んなに苦労してるのに家族と戯れとるなんてええご身分やな～

第三十一話　集結！勇者パパ！！

前回子供にされたはやて達は原因を調査するべく天界生物との熾烈な戦いに明け暮れていた。

『く！！』

はやて達が避けると巨大なイカの天界生物。しかもライナーダグオンよりデカイ。

「はやてちゃん！ここは一時退却したほうが利口なんじゃ・・・」

なのはの言葉にはやては・・・

『何言うてるんや！イカに負けるわけにはイカへんで！！・・・は！！』

駄洒落のつもりで言ったのではないが駄洒落に聞こえたら痛いだろうなと思ったはやて。

「・・・・・・・・・」

駄洒落のつもりで言ったのではないだろうと思うがそう聞こえたら痛いだろうなと思ったなのは。

「ぷ！・・・ぷぷ・！！」

もろにツボに入ったフェイト。

尚ライナーダグオンは・・・

『貴様ら下らん事やってないでさっさと行くぞ！！』

そう言ってアーマーバスターを連射しながら突撃するライナーダグオン。

『おっしゃ！！パルサーカノン！！』

ルシファードで既存装備を撃ちながら突進するはやて。

それを見ていたなのはとフェイトは・・・

「なんか良いな・・・ロボ持ってる人」

「うん・・・私達このままじゃ正直防御のほうが危ないよね・・・」

等と思ってしまった。

しかし・・・・

『うぎゃあああ！！』

はやてが吹き飛ばされるとイカ型天界生物は撤退してしまった。

第三十一話　集結！勇者パパ！！

キャンプ場に戻ったはやては凄くやつれていた。

「疲れた・・・」

敵を取り逃がした挙句野営地でキャンプしている為体力が回復しないはやて達。

すると

『これは？はやて殿？』

「ん？」

声をかけられた方向を見るとそこには巨大な金の鳥が・・・それは八神組・直系楓軍団の一人。

「空影！？」

『困っているようでござるが？』

「空影！私たちをみんなの所連れてって～」

そう言って皆空影につれられて何処かに行くのだった。

何処かの一軒家

「あ～はやてさんだ～」

「ほんとだ～」

「何でこんな所に？」

家から出てきたのはタクヤ、カズキ、ダイ、三人組だった。

そして

『主。どうしました？あ！』

奥から出てきたのは黄金剣士・ドランだった。

更に

『わ～組長のお姉ちゃんだ～』

奥から出てきたドラ太郎、ドラ二郎、ドラ三郎、ドラ代の四人。

『あなた？どうしたの？』

ドランの妻マリアまで出てきた。

それを見たはやては・・・

「なんでロボットに子供おるねん！！ウチのやっちゃった婚勇者じゃあるまいし！！」

絶叫すると・・・

『あれ？組長じゃないですか？』

ズッデーン

はやての背後から現れたやっちゃった婚勇者ダイブライド。家族も一緒だった。

「な！なんや・・・うち等がこんな苦労してる時にあんたら家族とウフフアハハな生活おくとったんかい」

そう言って嘆いてしまった。

兎にも角にもドランの甘いマイホームに招かれた勇者達は今後の対策を練るのと今の状況を考察した。

「子供が次々と誘拐されてるって事ですか？」

最近天界生物に子ども達が誘拐されるという状況をを危機更にその度天界生物が強くなっていると言う事だった。

「なんで子供が？」

「・・恐らくさっきの敵は子供成長ホルモンを吸収する目的でしょう」

翼の言葉に考えるなのは。

「・・・恐らく・・・前に僕たちが子供にされたのはその成長ホルモンを分泌させる為だと思われます」

「天界生物め！私の可愛い子ども達を！！」

バルディッシュ握り締めるフェイト。

・・・その横で・・・

「ええご身分やな～ドラン～うち等が天界生物相手にとーーっても苦労しておる時に1人で暖か～い家庭の中におったなんてな～」

『いや！はやて！これは！！』

必死に弁解を試みようとするドラン。

『あははは！！』

「もう！勘弁して！！」

ドラン一家の相手をしている森。

「ダイもええよな～うち等八神組の一員のクセに1人家族と平和に暮らして」

『いや！組長！これには・・・無理だ・・・今の組長は何を言っても聞かない・・・』

付き合い長いせいではやてがボルテージを越えた機嫌を損ねると解決手段は一つしかなかった。

『力殿！！カムバック！！』

そう力をぶちのめすしかないのだった。

「どういう事だ？」

「よっぽど鬱憤たまってるんじゃねえのか？」

「恐妻亭主の悲しい性だね」

とても子供とは思えない考察をするタクヤ達三人組。

「そういえば・・・ダイキッズはいつからそんな身体縮んだんや？」

『いや～僕たちどうやら別の機械で子供にされちゃって』

何故ロボットが成長するのか・・・それはダイの伝説の力がそうさせたのかもしれない。

『父ちゃん！僕達お外で遊んでくる！』

『あんまり遠くに行っちゃダメだぞ』

そう言ってドランチルドレンとダイキッズは外に行ってしまった。
それを見ていたなのは達は

「ロボットがどうやって子供産んだんだろう」

「さぁ～？」

『私たちには種族保存装置といって体内に小さな工場が会って子孫を残す事が出来るのです』

マリアの言葉になのはとフェイトは超冷たい視線でドランを見た。

『そ！そんな目で見るな！事故なのだ！戦いに疲れていて！それで！！その～～～』

『あなた！見苦しいわよ！それでもレジェンドラの勇者なの！！？』

『すまない！申し訳ない！！』

マリアに土下座しまくるドラン。それを見ていたはやては・・・

（へぇ～勇者ってだんな様になったらカカア天下になるんか～）

等と思っていると・・・

ズシーン！！

地響きが起こり全員が外を見ると子供の気配を感じ取った天界生物に襲撃された。

『あなた！子ども達を！』

『わかった！！』

そう言って子ども達を捜しに出るドラン。

すると

「いくぞみんな！！」

「「「おう!!」」」

戦闘メンバーもフォーメーションに入った。

『『『重連合体!!』』』

ダグターボ、ダグアーマー、ダグウイングが手を組むと合体フォーメーションに入りダグウイング、ダグアーマーが背中合わせになり下半身に合体するとダグターボが上半身になり

両腕が展開され頭部がタービンを回しながら現れた。

『『『ライナァァァァ!!ダグオン!!』』』

『チェーンジ!ルシファード!!』

戦闘メンバーが登場すると・・・

『うわ!!』

イカ型天界生物に押し潰されそうになるはやて。

『くぅ!!こんなのに潰されて圧死なんてあっしゴメンやで!!』

「はやてちゃん!詰まんないシャレはやめい!」

なのはにつっこまれながら天界生物を抑えるはやてだった。

それを

『アーマー！バスター！！』

ライナーダグオンのアーマーバスターが火を吹くが効果が無い。

その時

『五色の燐光！！』

上空から五色の気力が降り注がれ舞い降りる竜神・キャロ。気力技に吹き飛ぶ天界生物から解放されたはやて。

『大丈夫ですか！？』

『へ？あんたは？』

はやてが竜神が北斗ではない事に反応しようとしたその時。

「死ね！クソ坊主！！！」

フェイトが竜神に向ってザンバー振り下ろそうとすると・・・

『わああ！フェイトさん違います！私ですって！！！』

頑張って止めるキャロに気づいたフェイトは顔面の寸前で刃を止めた。

「へ？もしかして・・・キャロ？」

『はい』

キャロの顔の横から

「・・・てめえは俺と自分の娘の区別もつかねえのか・・・」

いつもの通り毒舌で現れる北斗。

その言葉に

「死ね！クソ坊主！！」

「・・・上等だ・・・死ね！」

いつものどんぱちが始まろうとしていたが・・・

『貴様らいい加減にしろ！！』

ライナーダグオンに止められるフェイト。しかし北斗は特にライナーダグオンが怖いわけでもないので面倒臭そうに降りた。

『キシャアアアアアアア！！』

天界生物は形勢不利と判断し何かを吸収し始めた。すると周囲から子ども達が引き寄せられた。

『あれは！！』

その光線に気づいたドランが天界生物を見上げると・・・

『ドラ太郎！ドラ二郎！ドラ三郎！！私の子供を返せえええええ！！』

息子の危機に父ちゃんは怒った。

更に

『あれは！！』

ダイが天界生物を見ると・・・

『大一郎！大二郎！大三郎！！己！！私の子供を返せえええええ！！！』

こっちの父ちゃんも怒った。

とどめに

『う・・ぐあああああああああああああ！！！』

竜神になり戦うキャロも黄竜から分離させられ吸収されてしまった。

それを見ていたタレ目は・・・

「・・・俺の娘を・・・殺す」

銃取り出して親父は怒った。

「黄竜！フュージョンだ！！さっさとやれ！！」

『ぐる・・・・』

北斗の怪我が治ってないため躊躇する黄竜だが・・・

「さっさとしねえと殺すぞ!!」

この時黄竜は思った。

（今逆らったら確実に殺される）

今更ながらこいつと契約したのは間違えだったのではないかと思う黄竜。

そして父親達は合体体制に入った。

『ドラン!大空合体でござる!!』

空影が鳥の姿になるとゴルドランの背中に合体した。

『大空合体!!スカイゴルドラァァァン!!』

誕生する黄金勇者。

更に

『チェエエンジ!!超星機甲!!ダイブライド!!フルアーマーモード』

楓印のフルウェポンを装着し完全武装するダイ。

「黄竜!フュージョン!!」

黄竜とフュージョンし誕生する戦士。

『竜神！北斗！！』

誕生した3人の勇者パパ。

『『息子を返せえええええ！！！』』

『娘を返せ！！！』

向っていく姿はカッコイイのだがあまりにも個人的は理由に焦るはやて達。

『ショルダーバルカン！！』

『ダイガトリング！！』

『天靭拳』

スカイゴルドラン、ダイブライド、北斗の攻撃が次々とヒットしていく。さっきまではやて達に押されそうになっていたからパワーアップしたのだがパパ達のほうが強い。

子供の危機にパパは滅茶苦茶強くなるのだろう

『！！』

勇者の子ども達を誘拐したとの事で余計に事態を悪化させてしまった事に不利と感じる天界生物。

『ま！まて！！俺の体内にはキサマラの子供がいるんだぞ』

『そうか！！』

トドメを刺されないようにそう述べる天界生物だが・・・

『だったらこうするまでだ！！』

ダイがミサイルで天界生物の身体に穴を開けると北斗がフュージョンを解き体内に進入した。

「負けるか！！母舐めんな！！」

そう言って突撃するフェイトだった。

「・・・・」

天界生物の体内を散策する北斗。

「何処だ？」

「北斗さん！！」

「ん？」

突如振り返る北斗の先に居たのはフェイトだった。

「良かった～無事だったんだ～」

「・・・・・・」

北斗の姿を見て安心するフェイトとしかめっ面の北斗。

「行きましょう北斗さんチャキえ!?」

いきなりフェイトの頭に銃を突き付ける北斗。

「な!何のつもりですか!?」

焦るフェイトだが北斗は・・・

「・・・テメエなにもんだ?」

「な!何言ってるんですか!?フェイトですよ!!」

「てめえが偽もんなんてことは最初から分かってるんだよ・・・あのクソ女が俺を見てそんなしおらしい訳ねえだろ・・・・」

「北斗さん」

「・・・勉強不足だな」

ズドン!!

そう言って偽フェイトの脳天を撃ち抜く北斗すると何かの実になったフェイトは消滅した。

「・・・あのクソ女は俺を絶対『北斗さん』何て呼ばねえ・・・』クソ坊主』と呼ぶんだ」

そう言ってフェイトの実を調べる北斗。

「こいつは・・・なるほど・・・取り込んだ人間を具現化する実か?・・・あの女ドジッたか・・・」

そう言って銃を構えなおす北斗。

「・・・たくいつものパターンならな」

いつものパターン

「・・・てめえどうして此処に?」

「死ね!クソ坊主!!」

「って言って剣振り下ろすのがオチだ」

そう言って奥に突き進む北斗が見たものは・・・

「・・・何?」

何かの装置に入れられているキャロの姿だった。

「・・・遺伝子情報を取り込む機械か・・・ダイとドランの子供は・・・」

『シャッハッハ！あのロボットの子ども達は別室で待機中だぜ！！』

何かの声が響き振り返ると天界生物の姿が。

『さぁってと！出ろ！！』

取り込んだキャロの遺伝子情報からキャロのコピー品を作り上げる天界生物。

それ見た北斗は・・・

「・・・あ～あ・・・馬鹿を大量生産しやがって・・・」

自分の娘に対して身も蓋もない事言う親父。

『自分の娘にやられちまいな！』

（お義父さん逃げて！！）

そう言って偽キャロ軍団向わせる天界生物。そしてキャロも念話で北斗に逃げるように言う。

偽キャロは北斗の気力技を練りだし北斗を一斉に攻撃しようとする。

『さあ！！自分の娘を殺せるか！？』

だがこいつの場合・・・

「死ね！生ゴミ共！！」

正確に偽キャロ軍団の眉間を狙い一発で仕留める北斗。とても娘にやる事ではない。

（う～・・・偽者とはいえ楽しそうに私の事殺して・・・ちょっと！お義父さん！私だって！！）

自分が死ぬ様に流石に口を開く本物のキャロ。

しかしこいつは・・・

「・・・これがお前だと？・・・舐めてんじゃねえよ・・・」

「・・・へ？」

「・・・俺の知ってるクソ娘はな・・・もっと馬鹿だ」

「・・・お義父さん」

容赦ない罵声に冷や汗をかくキャロだが・・・

「・・・それに・・・本物はもう少し可愛げがある」

「・・・へ？お義父さん！もう！パパズドンはう！！」

パパと言う前に銃撃されるキャロは咄嗟に避けた。すると装置が破壊されキャロが解放される。

「・・・それに本物は俺の弾に殺られるほど間抜けじゃねえ」

『く！』

今度は別室のドラン達の息子を人質にしようとするが・・・

『みんな！こっちだ！！』

ドラ太郎に先導され次々と脱出していく子ども達。ドランチルドレンとダイキッズは別室の子ども達を救助していたのだった。

『なんだと！？』

「・・・勇者の子供舐めんな・・・どうした？もう品切れか？」

北斗の皮肉に天界生物は・・・

『うおおおおおおおおおお！！』

襲い掛かると・・・

「・・・往生際が無様すぎる・・・ゲームオーバーだ・・・」

ズドン

一発で眉間を撃ち抜かれる内部にいた天界生物は消滅すると外装のイカ天界生物が動きを止めた。

『今だ！超電磁ストーム！！』

スカイゴルドランの超電磁ストームが天界生物を飲み込み動きを止めた。

そしてダイがフルウェポンモードで構えた。

『フルブラストエンド！！！』

ダイの全砲門が開き天界生物にダメージを与えると・・・

『スーパー竜牙剣！！』

天界生物に向って滑空するスカイゴルドラン。

『疾風迅雷斬りぃぃッ！！』

天界生物を真っ二つにするスカイゴルドラン。

爆発の直前北斗、キャロ、ダイキッズ、ドランチルドレンに先導され子ども達は脱出していた。

「いや～良かった～良かった～」

事件が解決し能天気なタクヤ。

「こりゃ・・・おいら達もみんな探すのに一緒に行ったほうが良いのかな～」

「まぁ～レジェンドラの勇者って基本的にタクヤ君たちの言うことしか聞かへんし・・・一緒に来てくれる？」

「よっしゃ！！」

そう言ってタクヤ、カズキ、ダイの三人ははやて達に同行する事になり・・・

「ダイ・・・あんたも来るんやで」

『・・・わかりました』

逆らったら怖い事を知っている為大人しく言うこと聞くダイ。

もう一方

『何故だ!?何故一緒に来ないのだ!?私たちは家族じゃないか!?』

ドランの言葉に子ども達は・・・

『あいつら・・・また来る!!』

『僕達!みんなを護るんだ!』

『僕達!勇者の子だもん!!』

『お前達』

涙ぐむドラン。

『あなた・・・心配しないでください。この子達はあなたに負けないような立派な勇者に育てます・・・世界の危機を・・・救ってください』

『く！！』

妻の言葉に涙ぐむドランは家族の思いを受けはやて達の下に合流した。

何処かの空でフリードに乗って移動する北斗とキャロ。

「ねえ～お義父さん良いの？はやてさん達に黙って出てきちゃって」

「・・・気にするな。どうせたまたま通りかかっただけだ」

実は偵察がてら偶然合流しただけの北斗。

「それにあれだけの戦力が要れば分散していたほうが良い・・・」

「お義父さん本心は？」

「もう少しダグベースが静かなほうが良い」

北斗の本音に呆れるキャロ・・そしてふと思った。

「あれ？フェイトさんは？」

「おのれ！あのクソ坊主！！」

実は脱出できていなく爆発に巻き込まれ黒焦げになったフェイトは北斗を怨むのだった。

第三十一話　集結！勇者パパ！！（後書き）

ヴィヴィオ
「お姉ちゃん・・・早くお姉ちゃんの所に行かないと・・・けど次元の壁が厚い」

シズマ
「次元の壁？そんなもんに手間取ってるのか？」

ヴィヴィオ
「何とかできるの！？よ～っし！！」

次回！勇者大戦ブレイブサーガＡ，ｓ　帰還・・・風の勇者

ヴィヴィオ
「おかえり・・・お姉ちゃん！！」

第三十二話　帰還・・・風の勇者

第三十二話　帰還・・・風の勇者

天野平和科学所

「楓が次元の狭間に取り残された？」

ヴィヴィオの説明を聞いて考えるシズマ。

「うん・・・お姉ちゃん・・・帰れる方法が無いって・・・私が大きくなったら・・・絶対に」

「お前・・・方法を探したのか？」

「え？」

シズマに指摘されて驚くヴィヴィオ。

「方法が見えないからって方法が無いとは限らないだろ？・・・楓の言葉だ」

「お姉ちゃんって言うより・・・おじちゃんの言葉だね」

そう言うヴィヴィオはシズマに相談してみた。

「シズマさん・・・おねえちゃんを助ける方法は・・・」

「賭けになるかもしれねえが・・・やってみるか?」

シズマの言葉にヴィヴィオは・・・

「うん!!私はやらないで後悔するより・・・やって後悔する!!」

迷うことなくそう決意した。

庭に出て何かの装置を操作するヴィヴィオ。

「これ・・・前にお姉ちゃんが作ってくれたテレポートマシン・・・」

「なるほど・・・これで空間に穴を開ける・・・もしくは空間の壁を薄くするって事か」

「うん!そしたら・・・シズマさんが」

「任せろ」

ヴィヴィオの言葉に木刀を持って応えるシズマ。

早速装置を起動させるヴィヴィオ。楓に使い方を教えてもらってい

たため操作は出来る。

テレポートマシンから時限転移波を放ち空間に穴を開けるべく空間を振動させた。

「所でよ・・・楓の場所分かってんのか？」

「大丈夫・・・お姉ちゃんの居場所は風が教えてくれるよ・・・優しい風が」

「まぁ・・・そうかもな」

付き合い長いせいか、はたまた無理矢理楓の保護者を押し付けられてしまったせいか楓の行動の想像は大体つくシズマだった。

「それにしても・・・舞人の奴どこに？・・・俺に楓の保護者押し付けてどっかいってんじゃねえ」

そう叫ぶシズマ。

ダグベース

「へっくしょん！！」

何故かくしゃみするもう一人の楓の保護者・舞人だった。

装置が次元の壁を徐々に薄くしていく。

「お姉ちゃんは次元の壁に穴を開けてテレポートする装置を作ったんだよ」

「なるほど・・・空間が安定し始めた今なら空間を抜けられるかもって事か」

各地の神を倒してきたため空間が元の姿を現し始めていた。

その時

『そうはさせるか!!』

「「!!」」

ヴィヴィオとシズマの元に一体の神が襲撃してきた。

「誰だ!?てめえは!?」

『剣の一族!!貴様の力で風の勇者を出させはしない!!』

そう宣言する神。

「ヴィヴィオ!続けろ!!」

「うん!!」

シズマの言葉にヴィヴィオが頷くと・・・

「セイバァァァチェンジ！！」

シズマのブレスが輝くとスカイソニック、ランドファイヤー、マリンスピーダーが各パーツに変形しヴァリオンがスカイソニックに吸収される。

瞳が輝くと完成する戦士。

「セイバァァァァ！ヴァリ！オン！！」

神と対峙するセイバーヴァリオン。

『てめえ！一体何もんだ！？』

『我が名はスクナ・・・風のを封じた者』

『てめえが俺の相棒を・・・どうしてだ！？』

セイバーヴァリオンの言葉にスクナは笑って応えた。

『知れた事・・・風の勇者は厄介な存在だ・・・その秘めてある絶大な力がな・・・閉じ込めるのには苦労したぞ』

『テメエが楓を・・・ゆるさねえ！！』

ラダーブレイドでスクナに斬りかかるセイバーヴァリオン。その一閃を避けるスクナ。

『ふん！我々下級の神が上級にのし上がるにはこれぐらいしないと

な！！』

『勝手なこと言いやがって！』

ディスチャージャーキャノンがスクナを襲うがスクナは避ける・・・そのとき。

『シャイイイン・・・ショオオット！！』

セイバーヴァリオンのシャインショットをまともに受けるスクナは倒れこんだ。

『まだだ！！』

スクナは今度はヴィヴィオに狙いを定めた。

「！！」

『ちい！！』

ヴィヴィオに降りかかる攻撃をセイバーヴァリオンが壁になって防いだ。

「シズマさん！！」

『く！俺の心配より早くしろ！！』

シズマの言葉に装置をフルパワーにするヴィヴィオ。

次元の壁が極限まで薄くなったそのとき。

『セイバァァァ・・・・ヴォルテック！！』

セイバーヴァリオンの一閃が次元を切り裂いた。

『しまった！アフェタの力で次元を斬った！！』

セイバーヴァリオンに次元を斬られたことで次元の壁に裂け目が出来た。その事に恐れるスクナと力を使い果たし膝をつくセイバーヴァリオン。

「お姉ちゃん！！！」

ヴィヴィオの叫びに次元の裂け目から

風が吹いた

「この風・・・」

『遅せえんだよ！！』

シズマの文句に裂け目から一つの光が飛び出した。咄嗟に外に飛び出すヴィヴィオ。

「お姉ちゃん！！」

ヴィヴィオが光に向かって有る物を投げた。

パシ！！

ある物・・・ダグコマンダーを受け取り腕に装着する楓。

「トライダグオン！！」

楓がダグコマンダーを起動させると翡翠のダグテクターが装着されフルフェイスのマスクで覆われる。

「ストーム！カエデ！！！」

ダグテクターを装着した楓がヴィヴィオの前に降り立った。

「ヴィヴィオちゃん！」

「お姉ちゃん！！」

「ぐぶは！！！！！」

楓の姿を見た瞬間お決まりの世界を狙えるであろうタックルで楓に抱きつくヴィヴィオ。ダグテクター越しでも相当痛いらしくのた打ち回る楓。

「あたたた・・・けどこの痛み・・・やっと帰ってこれた感じがす

る！！」

どうも2，3発衝撃が無いと自覚が湧かないらしい。

「お姉ちゃん・・・これ」

ストームバンディットとストームガードを渡される楓。

「ありがとう！融合合体！！」

ストームバンディットが人型に変形すると楓と一体化し瞳が淡い緑に光る。

『ダグストーム！！疾風合体！！』

ダグストームが飛び上がるとダグストームを中心にガードクーガー、ガードジャガーが脚部パーツになり獣の頭部が外れダグストームの足に装着された。

『キエエエエエエエエエエエ！！』

ガードファルコンの咆哮と共に頭部と翼が外れ上半身に変形するとダグストームの上半身に覆いかぶさった。腕が展開され頭部が展開し瞳が淡い緑に光った。

『ストォォォム！！ダグオン！！』

完成したストームダグオンはヴィヴィオを護るように降り立った。

スクナと対峙するストームダグオン。

『先手必勝！！メガストォォォム・・・パァァァンチ！！！！』

ストームダグオンの必殺拳でスクナ強襲するとスクナは盾を出して防いだがヒットの瞬間盾は粉々に砕けた。

『ち・・・当たれば即死か』

『南流喧嘩殺法はガチンコ勝負が基本です！！』

『たった一人増えたところで形勢逆転など！』

『『『そうはさせるか！！！！』』』

突然の声にストームダグオンが上を見た。

『え？まさか！』

『『『リィィダァァァァ！！！』』』

ストームダグオンの上空から４つの光が舞い降りた。

『超青銅合体！ネオブロズガー！！』

『『『神速合体！ハイパーレジェンド！！』』』

『『『四体合体！キングブレイバー！！』』』

『チェエエエンジ！！』

楓の元に舞い降りるレジェンドラの勇者ネオブロズガー、ブレイブポリスエースチーム、宇宙警察ブレイバーズ、剣星人ファルコ。

楓の風に導かれるように集結した楓の仲間・・・通称・八神組直系楓軍団・・・またの名を『楓の保護者』

『楓軍団集結ってわけか・・・』

スクナの言葉に楓軍団は・・・

『そんな大層なもんじゃねえよ・・・』

『強いて言えば・・・凄まじい腐れ縁』

ネオブロズガー、ファルコに言われると・・・

『第一な!!』

ハイパーレジェンドの言葉に全員が口をそろえて言った。

『『『『ウチのリーダーほったらかしておくと何やらかすかわかんねえから不安なんだよ!!!!』』』』

涙流しながらそう宣言する楓軍団・・・よっぽど苦労したのだろう・・・

それを聞いたヴィヴィオは・・・

「やっぱりおじちゃんの子孫だ・・・」

等と思った。

『それにな！楓軍団はまだそろっちゃいないぜ！！』

『そうだ！レジェンドラの勇者や勇者特急隊！それにスバルがまだだぜ！！』

等と宣言されるがスクナにとっては問題ではない。

『こけおどしを！！』

スクナが楓軍団に襲い掛かったその時。

『行くぜ！！ジャックロッド！！おりゃあああああああああ！！！』

ネオブロズガーのジャックロッドがチェーンを放つとスクナを拘束した。

『ドライブシューティング！！』

『ブレイバーキャノン！！』

ハイパーレジェンド、キングブレイバーの一斉射撃を浴びせ怯んだその時。

『アタックモード！！』

ストームダグオンが巨大な翼を舞わせ地上に降り・・・

『ストームダグオン！この俺を使え！！』

上空からファルコが剣の姿になりストームダグオンの目の前に突き刺さった。ファルコを引き抜くストームダグオン。

『うおおおおおおおおおおおお！！！ストームファルコソード！！！！』

ストームダグオンが次元嵐を巻き起こしながらファルコソードを構えた。

『こしゃくな！！！』

拘束を解かれたスクナはストームダグオンに飛び掛るが・・・

『奥義！！！疾風一閃！！！てあああああああああああああああああああ！！！！』

『うわあああああああああああああああ！！！』

次元嵐を巻き起こしたストームファルコソードを振り下ろしスクナを一刀両断するストームダグオン。

断末魔の叫びと共にスクナが爆発するとストームダグオンはファルコを構えた。

「お姉ちゃん！！」

「ぐぶ！！・・・受け止めた♪」

涙流しながらヴィヴィオの世界を狙えるであろうタックルを受け止める楓。

「逢いたかったよ～」

「お～よしよしよし」

ヴィヴィオの頭を撫でる楓。

「たくよ・・・世話かけさせやがって」

呆れた顔でよってくるシズマ。

「おお！苦労かけたね～シズマ～流石私のマイダーリン・・・うぎゃ！！」

特注の木刀（中身は新型超鋼鉄芯入り・作成者ミツキ・サエグサ）で楓の頭ぶったたくシズマ。

「誰がおめえの彼氏になった！！？」

「も～シズマのいけず～って冗談は置いておいて」

真面目は表情になる楓。

「ヴィヴィオちゃん・・・悪いんだけど・・・」

「うん・・・お姉ちゃん行くんでしょ」

楓の言葉を予想していたかのようなヴィヴィオの言葉。

「うん・・・早くこのエリアを支配する本当の神を倒さないと・・・
その為にはダグベースを探す」

ダグベースに合流し戦力を整えなければならない。

「・・・シズマ・・・悪いんだけど・・・もう少し」

「分かったよ・・・」

もう呆れたを通り越して後は任せろといったシズマ。

「それじゃ・・・行ってきます!!」

「行ってらっしゃい♪」

ヴィヴィオに見送られながら楓はダグベースに向かった。

(ダグベースに着いたら・・・お爺ちゃん以外のあれ完成させておかないと)

そう言ってダグコマンダーのモニターで設計図を見た。

「・・・ニューダグテクター」

第三十二話　帰還・・・風の勇者（後書き）

みんな！今どうしてるんだ！？俺は今みんなを守るために戦ってるんだ！！人を泣かせる神なんて絶対許さねえ！！

次回！勇者大戦ブレイブサーガＡ，ｓ　合流！炎の勇者！輝け！！ダグオン魂！！

どんな時も絶対諦めない！それがダグオン魂だ！！

第三十三話　合流！炎の勇者！輝け！！ダグオン魂！！

ダグベース

「うぎゃあ・・・・・」

破壊されたマイトカイザーの修理に目を回すユウ。

「この量・・・マジで・・・つれえ・・・よく楓さん一人でやってたよな・・・アルトの奴も何故か訓練付けだし・・・」

愚痴をこぼすユウ。

その頃のアルト

「うぎゃあああああああ！！」

体力を持て余して暇でしょうがない北斗の銃弾から逃げ回っているアルト。

「ちょっと待って！！何で私がこんな目に！？」

「・・・テメエにはやる事があんだよ・・・・俺が徹底的に鍛えてやる」

「いやだあああああああああ！！」

絶叫するアルト。

オペレートルームでは・・・

「雷さんこのデータ何？」

「ん？」

ヴィヴィオの担当しているレーダーを見る雷。すると・・・

「この反応・・・炎先輩！！」

第三十三話　合流！炎の勇者！輝け！！ダグオン魂！！

次元を飛ばされた海鳴交番

「この野郎！待ちやがれ！！」

炎がダグテクター姿で天界生物を追いかけていた。

「この野郎！日本の警察官を舐めるんじゃねえ！！」

ショルダーバーンで天界生物を撃墜した炎は天界生物に向かっていった。

「へ！ダグオンのリーダーを舐めんなよ！！」

そう言って挑戦するのだった。

現在、炎は隔離された複合エリアで一人戦っていた。幸か不幸か神の襲撃はないが下級の神たちの行動が活発になりつつあった。

「おかえり」

「よ！帰ったぞ」

自宅をかねた交番に帰ってきた炎を迎える真理亜。

「どう？町の様子」

「ああ・・・大分疲れてやがる・・・何とかしねえと・・・」

町が元気を無くしている事に考え込む炎。

すると

「炎さん！」

近所の子供たちが炎の所に遊びに来た。

「よ！坊主！どうした？」

「炎さん・・・天界生物なんてやっつけてくれるんでしょ！？」

どうやら子供も不安になっている。そして炎は明るく答えた。

「心配すんな！ここにはダグオンが居るんだ！それもそんじょそこらのじゃねえ。ダグオンのリーダーが居るんだからな！！」

「うん！！」

炎の言葉に子ども達は明るくなり帰っていった・

「大変ね。リーダーも」

「へ！あいつらの期待に応える為にもさっさと天界生物なんてぶっ倒さねえとな」

闘志を燃やす炎。その姿を見た真理亜はやれやれと言った表情だった。

「今日はどうだ？」

炎がファイヤーストラトスで地域をパトロールしている。今このエリアで戦えるのは炎しか居ない。

「ん？」

パトロールする炎の目の前を子ども達が安心した顔で通過していく。戦いばかりの日々だった炎はその顔に少し癒やされた。

その時

『何処だ！！ダグオン！！』

「！！」

子ども達の目の前に天界生物が舞い降りた。子ども達を人質にするつもりだ。

「やろ！させるか！！トライダグオン！！」

炎がダグコマンダーを起動させると赤いダグテクターが装着されフルフェイスのマスクで覆われる。

「ファイヤーエン！！」

ダグテクター装着する炎。

『！！』

「うわあああああ！！！」

天界生物が子ども達に向かって剣を振り下ろそうとしたその時。

「ファイヤーバードアタァァァァック！！」

炎の必殺技が天界生物にヒットし子ども達に向かわれた剣をそらした。

「融合合体!!」

ファイヤーストラトスが人型に変形すると炎と一体化し瞳が淡い緑に光った。

『ダグ!ファイヤー!!』

天界生物の前に降り立つダグファイヤー。

『てめえ!!何者だ!!』

ダグファイヤーの言葉に天界生物は応えた。

『ふふ!見つけたぞ!ダグオン!!貴様を倒せば・・・俺の名が上がる!俺の名はミナカタ・・・貴様を倒し上級の神になる!!』

『おもしれえ!!やれるもんならやってみやがれ!!!』

ファイヤーショベルを呼ぶダグファイヤー。

『剛力合体!!』

ファイヤーショベルのショベルアームに乗るダグファイヤーの叫びと共にファイヤーショベルが変形を開始した。

ショベルアームが展開しキャタピラがリフトアップしていくとショベルアームの腕が展開し胸部と頭部が展開した。

『!!』

ダグファイヤーが胸部に乗り込むと胸部がゆっくりと閉じ瞳が淡い緑に光った。

『パワァァァ！！ダグオン！！』

ミナカタと対峙するパワーダグオン。

『ふん！たった一人で挑むとは・・・流石ダグオンのリーダーだな！！』

『ごちゃごちゃうるせえ！！行くぜ！！』

パワーダグオンがミナカタに向かって走った。

「がんばれえええ！！ダグオーン！！」

子ども達の声援に応えるようにパワーダグオンはミナカタに飛び掛った。

『パワークローアーム！！おりゃあああああああああ！！』

パワーダグオンがショベルアームでミナカタを殴りつけるとミナカタは剣で受け止めた。

『ふん！』

『ぐああ！！』

後ずさってしまうとそのまま突撃するパワーダグオン。

『おおおお！！とお！！はあ！！おりゃあああああああああ！！！』

ショベルアームでミナカタを散々殴りつけるパワーダグオンだがあまり効果がない。

『この程度か？』

『まだまだ！！パワースターバーン！！！』

パワーダグオンの額から星の熱線が放たれミナカタが包み込まれるがミナカタは炎を弾き飛ばした。

『マグマブラスト！！』

再び火炎に包み込まれるミナカタだが再び炎を吹き飛ばした。

『無駄無駄！！』

『ちっ・・・今までの相手とは違うって訳か！！』

今までの天界生物とは違い神を相手にしているパワーダグオンは実力の違いを感じていた。だが引く気は毛頭ない。

そして目の前の子ども達の為に引くわけには行かない。

『うおおおおおおおおおお！！』

『ふん！！』

ミナカタの剣を浴びてしまうパワーダグオン。すると次々とパワーダグオンの身体に剣傷が刻まれた。

『甘い甘い甘い！』

『ぐあああああああああ！！』

次々と斬られ蹲るパワーダグオンを見るミナカタ。

『ふ・・・ダグオンのリーダーも無様だな・・・最後に言い残しておく事はあるか？』

ミナカタの言葉にパワーダグオンは・・・

『親切だな。だったら俺の仲間に伝えろ！どんな時も諦めない！！それがダグオン魂だってな！！』

『なに！？』

ミナカタの反応を見たパワーダグオンは分離しダグファイヤーになるとミナカタの正面を取った。

『な！』

突然の奇襲に目を白黒させるミナカタすると・・・

『ファイヤーブラスター！！』

至近距離からファイヤーブラスターの連射を浴びせるダグファイヤー。

『ぐ！！』

目をやられたミナカタは後ずさり一瞬の隙が出来た。

『今だ！来い！ファイヤージャンボ！！』

ダグファイヤーの叫びに飛来するファイヤージャンボ。

『火炎合体！！』

ファイヤージャンボからファイヤーラダー、ファイヤーレスキューがサイレンを光らせながら射出されるとファイヤージャンボの格納スペースが展開し両足になり翼が展開された。

頭部が展開されるとファイヤーラダー、ファイヤーレスキューが合体し腕が展開した。

『うおおおおおおお！！とああ！！！』

ダグファイヤーがファイヤージャンボに向かって走るとビークルモードに変形し胸部に収まると胸部が閉じ瞳が淡い緑に光った。

『ファイヤァァァァ！！ダグオン！！』

ファイヤーダグオンに再合体しミナカタと対峙する炎。

『貴様！！』

『ファイヤーブレード！！』

ミナカタの剣とファイヤーブレードが交差すると一旦距離を置いた。

『行くぜ！たたっ斬ってやる！！！』

ファイヤーブレードが輝くとミナカタに向かってブーストダッシュするファイヤーダグオン。

『ち！！』

ミナカタと斬りあうファイヤーダグオン。剣同士で斬り合うとファイヤーダグオンはそのまま突進した。

『うおおおおおお！！フィニッシュ！！』

ファイヤーブレードがミナカタに襲い掛かろうとしたその時・・・

『させるかあああああ！！』

ミナカタの一閃がファイヤーブレードを折った。宙を舞うファイヤーブレードの刃・・・

『万事休すだな！！』

『まだだ！！俺は絶対に諦めねえ！！』

『悪あがきを！！』

ミナカタがファイヤーダグオンに斬りかかろうとしたその時。

ズガガガガガガ！！

『！！

突如ミナカタに襲い掛かる銃弾。

『誰だ！？』

ミナカタが上空を見上げると・・・

『チェエエンジ！！』

巨大な金の剣が獅子の咆哮を上げ変形すると姿を現す宇宙剣士ライアン。

『僕も！！チェエエンジ！！』

もう一つの巨大な大砲が変形すると姿を現すガンキッド。

『ファイヤーダグオン！無事か！？』

『炎！大丈夫！？』

『ライアン！ガンキッド！！』

ファイヤーダグオンの元に舞い降りたライアンとガンキッド。

『ち・・・誰が来たって片付けてやるよ！！！』

ミナカタがファイヤーダグオンに斬りかかると・・・

『ガンキッド！チェエエンジ！！』

ガンキッドが変形するとファイヤーダグオンの腰にユニットが腰に装着されガンキッドが腰に装着された。

『無限砲！！』

ファイヤーダグオンの腰に連結する超巨大大砲無限砲。

『ターゲットマーク！！』

『ファイヤー！！』

ファイヤーダグオンから発射される無限砲に飲み込まれミナカタの剣が粉々に砕けミナカタ自身もボロボロになった。

『まだまだ！！』

ミナカタが剣を持って攻撃しようとしたその時。

『ガンキッド！子ども達を頼む！ファイヤーダグオン！この俺を使え！！』

ライアンがライオソードに変形しファイヤーダグオンの元に舞い降りた。

『ファイヤーホールド！！』

ファイヤーダグオンがライオソードを構えると拘束波が放たれミナ

カタが拘束された。

『ぐ！うう！！』

『ファイヤーライオソード！！！』

ファイヤーダグオンのライオソードでミナカタを両断するとミナカタが爆発し散った。

ファイヤーダグオンの姿を見た子ども達は・・・

「凄い！ダグオンは負けないんだ！！」

そう希望を持つのだった。

『ん？』

ファイヤーダグオンが空を見ると飛来するダグベース・・・

『・・・来たか』

ダグベースの登場に何かを感じるファイヤーダグオン。

海鳴交番

「そっか・・・行くんだ」

「ああ・・・どうやらこのエリアには元凶がいねえんだ」

帰ってきた炎を見て何かを感じた真理亜。

「・・・早く・・・終わらせて帰ってきなさいよ・・・待ってるから・・・」

「ああ・・・オカルト娘」

そう言って炎がダグベースに合流するのだった。

第三十三話　合流！炎の勇者！輝け！！ダグオン魂！！（後書き）

力

「誰だお前は？どうして俺達を狙う？あいつは何で現れた？あの伝説の英雄・・・」

次回！勇者大戦ブレイブサーガＡ，ｓ　その名はヤマトタケル

力

「俺とサシの勝負？」

第三十四話　その名はヤマトタケル

バニングス邸

「わんわん!!」

「ちょっとどうしたのよ!?」

アリサが庭に出ると何やら犬達が一本の木に向かって吼えていた。

「誰か居るの?・・・え?」

アリサが木を見るとそこには枝を背にして眠っている青年が・・・

「て!!人ん家の木で何やってるのよ!!降りなさいよ!!!」

「・・・ん?」

アリサの怒鳴り声に青年は目を覚まし木の上から飛び降りた。

「うわ!!」

驚くアリサを尻目に青年は・・・

「・・・気に障ったのなら謝る・・・悪かったな・・・」

そうアリサに言い残し背を向けてバニングス邸から去るのだった。

青年を見たアリサは・・・

「何・・・悲しい目をしてた」

すると何かに気づいたアリサ。

「あの人・・・どっかで見たことがあるような・・・」

第三十四話　その名はヤマトタケル

「ふ～」

町を警邏している力。いつ天界生物が襲い掛かって来るか分からない。よって力は飛鳥と交代でこのエリアのパトロールをしていた。

「ん？」

何処かの公園を通りかかる力。するとそこにはアリサの家に居た青年の姿が・・・

「あいつ見かねえ顔だな・・・お～い」

青年に声をかけてみる力。

「・・・・・・・・・・・・・」

青年は力の声に反応しようとしない。

「お前誰だ？」

「・・・・名乗るほどの者じゃない」

やっと力に振り返る青年。

「・・・お前・・・勇者か？」

「何？」

青年の勇者という言葉に反応する力。そんな単語を口にするのは天界生物・・・または神しか居ない。

「・・・もう一度聞く・・・誰だ・・・」

青年の睨み付けながら言う言う力。

「・・・無闇に名は名乗らない主義でな」

「何？」

見かけない顔の青年に怒る力。だが青年は力に興味などなさそうだ

った。

「・・・怪しすぎる・・・素性ぐらい明かすのが礼儀じゃねえか？」

力の言葉に青年は力とすれ違い・・・

「・・・俺の名は・・・ヤマト・・・タケル・・・」

「・・・ヤマトタケル・・・まさか」

「・・・無差別に攻撃を仕掛けるだけが・・・天界人の誇りではない」

そう言って力に何も危害を加えないで立ち去るタケルだった。

しばらくタケルが歩くと・・・

「しばらくねえ・・・英雄・・・ヤマトタケル」

タケルが振り返るとその先に居たのはツクヨミだった。

力と飛鳥が一晩の宿として使っている空き家で・・・

「ヤマトタケル？」

「ああ・・・」

飛鳥に今日出会った青年・ヤマトタケルの事を話す力。

「何か・・不思議な奴だった・・・」

「・・・けど・・・神か？」

力と飛鳥が頭を悩ますと・・・その時ダグコマンダーが鳴った。

「あたしだ！・・・ティアナ？」

『飛鳥さん！天界生物が現れました！！』

その言葉に急ぎ出撃する力と飛鳥。

『・・・・・・・・・・・』

ツクヨミが襲撃した町の中で勇者の登場を待つツクヨミとタケル。

「・・・来たか」

タケルが空を見ると・・・

『魔導合体!!ウィザーダグオン!!』

『勇者合体!!ブレイブダグオン!!』

ツクヨミの前に降り立つブレイブダグオンとウィザーダグオン。

「・・・やはり・・・貴様勇者だったか・・・」

『ヤマトタケル!!』

ブレイブダグオンを見たタケルは変身しているのが力だと一発で見抜いた。するとタケルは神の姿を現した。

『・・・・・・・・・』

草薙の剣を構えるタケル。

『・・・ツクヨミ・・・この二人を倒せば良いんだな?』

『ああ・・・やり方はあなたに任せる・・・期待してるわよ・・・数万の敵を一人で倒した英雄さん』

嘲笑うように言うツクヨミに気に入らないといった表情のタケル。

『・・・なら・・・ブレイブダグオン・・・俺と勝負だ』

『何？』

『・・・怖いか？・・・何ならそっちの女も一緒に良いぞ・・・』

挑発するタケルにブレイブダグオンは・・・

『いいぜ・・・相手になってやるよ・・・だがなこれ以上町を破壊させないぜ』

『・・・・・興味はない』

『なに？』

今まで戦ってきた天界生物達とは違う雰囲気に戸惑うブレイブダグオン。

『ウィザーダグオン・・・周りの駆除頼んだ・・・』

『あいよ・・・』

そう言って町を襲撃している天界生物の元に向かうウィザーダグオン。

『うおおおおおおおおお！！！』

『はあああああああああ！！！』

ブレイブダグオンの拳とタケルの剣が交差する。

『やろ！！』

そのまま回し蹴りに持ち込むがタケルは回避する。

『やるな・・・はあ！！』

『ふん！！』

ブレイブダグオンのパンチを剣で受け止めるタケルだが、ブレイブダグオンは上昇しタケルの顔面を蹴り付ける。

『ぐあ！！』

タケルがそのまま倒れるとブレイブダグオンはタケルに逆エビ固めをかけた。

『ぐう！！あああああ！！』

メキメキと背骨が鳴る音が響くとブレイブダグオンは絞める力を強めた。

それを見ていたツクヨミは・・・

『ち・・・何が伝説の英雄よ・・・ここは・・・』

何かを思いツクヨミは別の場所に向かった。

「くっそ・・・なんでこんな時にあの馬鹿いないのよ」

人命救助しながらそうぼやくティアナ・・すると

「う！！」

何者かに身体を鷲づかみにされてしまった。

『ぐおお！！』

ブレイブダグオンに逆エビ固めをかけられているタケル。

その時

『ブレイブダグオン！タケルを離せ！！』

『な！！』

ツクヨミがティアナを人質にしビルの上に立っていた。

「ブレイブダグオン！私に構わず戦って！！」

ティアナがそう叫ぶがティアナを傷ものにしたらウィザーダグオンがうるさい為タケルを離したブレイブダグオン。

『貴様・・・何のつもりだ？』

そう叫ぶタケル。

『お前・・・俺を倒すのが目的だろ・・・だったら好きにしろ』

『何だと?・・・無抵抗な者を倒して何になる・・・』

『気取ってねえでさっさと殺ったらどうだ!!!!』

迷い無くそう叫ぶブレイブダグオン。

『ティアナ!!』

戦いの最中ティアナが人質に捕られている事に気づくウィザーダグオンが駆けつけようとするが・・・

『飛鳥!止めろ!チャンスを待て!!』

そう叫ぶブレイブダグオン・・・それを見ていたタケルは・・・

『・・・・・たかが人質如きで・・・』

『なに!!』

タケルの言葉に怒るブレイブダグオン。その時タケルが跳躍しツクヨミの元に舞い降りツクヨミの首筋に草薙の剣を突きつけた。

『貴様!裏切ったのか!?』

『・・・黙れ・・・人質など捕らなくても・・・俺は実力でこの男

を倒す・・・その人間を解放しろ・・・さもないと貴様の首を・・・斬る・・』

『ち・・・分かったよ』

そう言ってティアナを解放するツクヨミ。解放されたティアナはタケルに向くと・・・

『・・・行け・・・』

「は！はい！！」

そう言ってタケルの下から飛鳥の元に舞い降りた。

そしてタケルもブレイブダグオンの下に舞い降りる。

『良い奴だな・・・お前・・・』

『・・・知らん・・・俺は貴様らが死のうが生きようが興味はない・・・・・だが卑怯な手で勝利しても・・・虚しいだけだ』

『へ・・お前気に入ったぜ！！だったら見せてやるよ！俺の本気！！』

拳をぶつけるブレイブダグオンに草薙の剣を構えるタケル。

『うおおおおおおおおおおお！！！』

『！！』

ブレイブソードを構えるとエネルギーが充填しタケルに突進するブレイブダグオン。

『はあああああああ!!』

タケルが草薙の剣で斬る瞬間・・・

『ブレイブソォォドクラッシュ!!』

『!!』

草薙の剣ごと斬られるタケルは大地に沈んだ。

『・・・・』

ブレイブソードを納めるブレイブダグオン。その姿を見たタケルは・・・

『・・・斬れ』

『・・・嫌なこった』

戦士としてのプライドかブレイブダグオンにトドメを求めるタケル。だがブレイブダグオンは拒んだ。

『・・・何故だ?・・・』

『・・・お前は根っからの悪じゃない・・・』

そう言うブレイブダグオン。

その時

『だが貴様をこのまま帰すわけにはいかん！！』

ブレイブダグオンとタケルの前に立つツクヨミ。その腕には黒い球体のようなものを持っていた。

『何を』

『不味い・・・』

嫌な予感がしティアナを解放しブレイブダグオンの元に接近するウィザーダグオン。

『空間・・・時・・両方越えな！！』

『く！！』

ツクヨミが黒い球体を投げた瞬間凄まじい歪みが置きブレイブダグオンの中の力、ウィザーダグオンの中の飛鳥・・・そしてタケルを飲み込んだ。

『『うあああああああああああああ！！』』

『く！！』

空間を飛ばされる3人だった。

『ふふふ・・・ははははは!!』

ブレイブダグオン、ウィザーダグオン、ヤマトタケルを時空空間に送った事で高笑いするツクヨミ。
そしてそれに応えるように雨が降り始めた。

海鳴町

「ああ!もう最悪!!」

急に振り出した雨に濡れながら急いで帰路に着くアリサ。

すると

「うわ!!」

何かに気づき躓いた。アリサが振り返ると・・・

「この人!!」

倒れていたタケルを見つけるのだった。

一方

「ん?・・・あ?」

何処かの公園で目を覚ました力。

「ここは？海鳴だよな・・・ん？」

風に乗って来た新聞を見ると・・・

「１２年前だあああああああああああああああああ！！！」

闇の書事件の時代に飛ばされた力だった。

第三十四話　その名はヤマトタケル（後書き）

何で闇の書事件に飛ばされんのよ俺は・・・は!?何!?ダグビークルが無いから合体できないだと・・・勘弁してよ～・・・あれは・・・はやて?な!!襲われてる!?

次回!勇者大戦ブレイブサーガA's　闇の書事件

来い!仮面野郎!俺が相手だ!!

第三十五話　闇の書事件

現代

「♪～♪～」

何やらはやてが風呂で胸の手入れをしていた。しかも物凄く入念に・・・

「はやてちゃん・・・そんなに胸大切にする必要あるの？」

なのはの質問にはやては・・・

「何でって力君が戦うのに疲れたらこれでギューしてあげるんや♪」

そう笑って応えた。

第三十五話　闇の書事件

過去・悲しくなった時に来る坂

「はぁ～・・・どうしよう・・・」

とりあえずいつもの悲しくなった時に来る坂で考えている力。

「過去の世界に着ちゃったなんてお手上げだし・・・しかも闇の書事件か・・・手出したら歴史が変わる～けどな～」

現在の歴史・エクスカイザーがダイノガイストと戦っていてダイノガイストは闇の書に関わっていた。

「まあ！いいや！どうせ楓が迎えに来る！飛鳥と合流してそれまではのんびり見物でもしてようかな～」

この物語一便利な孫に面倒ごとを全て押し付け自分はのんびり１２年前を見物と決め込むのだった。

海鳴の町に足を運ぶ力。そこでは

『覚えていろ！キングエクスカイザー！！』

『待て！ダイノガイスト！！』

エクスカイザーとダイノガイストが死闘を繰り広げていた。

それを見ていた力は・・・

（・・・ああ・・この時シグナムさん達蒐集に行ってんだよな・・・はやて一人だし・・・様子でも見に行くか・・・）

何だかんだ言ってはやての事が心配のようだ。

その時

「ん？」

力が空を見ると・・・

（あれは・・・高町・・・それにハラオウンか・・・）

いつも命を狙う二人組がシグナムとヴィータにやられていると・・・

「ほっとけほっとけ・・・」

命を狙われている為助ける義理がないのか、後の展開を知っている為手を出さなくても大丈夫だと思っているのか、ただ面倒臭いだけなのか。とにかく態々歴史改変までする必要はないと思った力だった。

（・・・歴史が変わったらウチの孫五月蝿いし～）

等と思ったその時。

「ん？」

住宅街の道を歩いていると目の前を車椅子で移動してくるはやて。スーパーからの帰りのようだ。

（・・・まぁ・・・ここで出逢っても面倒臭いし・・・）

そう言って民家の壁を向いてスルーを決め込む力。

「♪～♪～」

そしてはやては車椅子で通過すると・・・

「ふぅ・・行ったか「もしもし?」ぎゃあああああああ!!!」

さっき通り過ぎたはずのはやてが力が向いていた民家の壁の隙間からはやてがジーッと力を見ていた。

「(しゅ!瞬間移動したのかお前は!?)・・・!!」

壁から出てきたはやてからそっぽを向く力。すると・・・

「おじさん・・・うちの顔見んかい・・・」

大の九歳児小学生に詰め寄られる23歳中年の男・・・すると・・・

「ダーッシュ!!」

逃亡を図った・・・そして・・・

「逃げても無駄や・・・おりゃあああああああ!!」

車椅子陸上のパラリンピックで世界を狙えそうなスピードで車椅子を転がし始めるはやて。

「ひえええええええええええええ!!」

「待てえええええええええええええ!!」

車椅子の小学生に追いかけられまくる中年の男。それを見ていた住

民達は・・・

（ああ・・・力君が居なくなってからのはやてちゃんが元気を取り戻した）

等とはやての活発な行動に涙ホロリとなっていた。

そして力ははやてに地の果てまで追いかけられると・・・

「必殺！！ライジングドリフトアターック！！」

「うぎゃあああああああ！！」

そう言ってはやてにライジングに踏みつけられる力だった。

「ていうか・・・知らない人に暴力振るって良いのか？」

車椅子の下敷きになっている力。するとはやては・・・

「ええんや！何故か知らんけどお兄さんなら気兼ねなく思う存分暴力をふるってええって思えるんや！！」

本能的に力を察知するはやて。

「あ・・そ・・・・」

九歳児にまでぶちのめされる情けない力だった。

結果

八神家

「何でこんな事に？」

はやてに自宅に招待される力。

「まぁ～ええやんお詫びもさせて欲しいし～」

「お詫びするくらいならさいっしょか追いかけるな！」

等と絶叫するのだった。

だが、しっかりはやてにご馳走になっている。

すると力は自宅を見回した。

（懐かしいな・・・まだ修理する前だ・・・お！あの柱まだ新しいよ・・・）

等と感傷に浸っていると・・・

「おじさんって結婚できたら絶対同情婚やろ？」

「なんで？」

「お金無い女の子にもてない出世の見込みない。女の子の母性くすぐってかわいそ～って思って結婚してもらうタイプやろ・・・最近

のワイドショーでやってた」

（ああ・・・はやてってワイドショーに影響されやすかったのね）

「ウチの近くにもおるな～そういうダメ～なタイプ・・・あれウチが同情しないと絶対もらってくれへんで・・・」

（余計なお世話じゃ）

そう言って降らない話が続く。

「ていうか・・・お前良いのか？知らない人を家に招いて・・・」

「ええんやええんや♪みんな最近忙しいみたいやからな～・・・まぁ～誰もおらへんしボディガードみたいなもんや～」

（・・・良いのかな～判断基準それで・・・・言えない・・・みんな蒐集に行ってるって）

因みに力は蒐集反対派である。

「ん？」

「どうしたん？」

「ちょっと・・・すぐ戻る」

何かの気配に気づき表に出る力。

表に出ると辺りはすっかり夜になっていた。周囲を見回すとそこには仮面をつけた男の姿が・・・

「・・・おい・・・てめえ何のようだ・・・さっきから人んちの周りをコソコソ嗅ぎまわってよ」

「ほぉ・・・私の気配に気づくとはな」

仮面の男は力の目の前に近づいた。

「忠告してやる・・・あの女は危険だ・・・早々に離れたほうが良い」

「なに？」

「・・・忠告はした・・・もっとも忠告を無視した場合私があの娘の命をもらう」

仮面の男のその言葉に力は・・・

「・・・気にいらねえな・・・たかがガキ一人にどうしてそこまで・・・」

力の言葉に仮面の男は・・・

「ふふ・・・あの子は呪われた子・・・居なくなった所で悲しむ人間など居ない」

その時だった。

「気にいらねえな！！！」

「ぐあ！！」

そう叫び仮面の男に飛び掛る力は仮面ごと仮面の男を殴りそのままボディを何度も殴りつけた。

「ぐおお！！ふ！おおお！！！」

並の人間の拳ではない力の攻撃に悶絶する仮面の男・・・

「さあ！今度はやての事一言でも言ってみろ！この場でぶっ殺してやるからな！！！」

「ぐは・・・居るな・・・お前のような馬鹿な男・・・だったらお前が精々守るんだな・・・私の牙が届かない内に・・・」

仮面の男は蹲りながらそう呟き力の目の前から姿を消した。

とりあえず家に戻り何食わぬ顔ではやてとの雑談を開始した。

「それで？おめえさんが同情婚してやりそうな奴どんな奴だい？」

「もう最低なんやで！小さい頃ウチの家来になってウチとず～っと一緒におる言うてたのに！平気で約束破るんやで！！」

怒り心頭のはやての言葉に力は・・・

「最低だなその男」

己の事を最低の人間と認めるのだった。

「やろ?・・・ん?何でわかったん?ウチ男なんて一言も言うてへんけど・・・」

「まぁ・・・勘だな」

まさか自分の事ですとも死んでも言えない力だった。

そして食事が終わり八神家から出ようとする力と見送る。

「んじゃごちそうさん」

「また着てね♪」

「二度と行きません・・・」

そう宣言する力だった。

一方荒れ果てた雑居ビル内、仮面の男に忍び寄る影が・・・

「誰だ?」

「・・・グレアムの猫だな?」

仮面の男が振り返るとそこにはツクヨミの姿が・・・

「何奴？」

仮面の男はツクヨミに警戒するが・・・

「まぁ待て・・・戦う気はないさ・・・ただ・・面白いものを貸してやろう・・・」

そう言ってツクヨミが出したのは機械化された天界生物のカプセルだった。

何処かの家の屋根に居る力。

「・・・とりあえず・・・ダグビークルが無いしする事ねえな～」

完全にやる事なくて困っている力。

「はぁ～早く帰らないと世界が」

（力君が居ない方がその間だけでも世界が平和なのよ～♪）

「あ・シャマルさんの電波が飛んできた・・・とりあえずツクヨミの野郎が俺達に追い討ちかけねえともかぎらねえ・・・飛鳥と合流して対策を練るか・・・蒐集だけは死んでもやりたくねえし」

そう言って飛鳥を探し始める力。

そして

「なんでだろうな～あのおじさん力君にめっちゃ似てたけど」

等と思うはやてだった。

翌日

いつもの通りはやてがスーパーで買い物を済ませ帰宅しようとしていると・・・

「よ・・・」

「あ・・おじさん」

ばったり出くわす力。とりあえず行く当てもなかった為はやての子守をすることにしたのだ。

現在はやての車椅子を押しながら帰路に着く力たちその時。

「ギシャアアアア！！」

「ん！！」

「きゃあ！！」

はやてと力に飛び掛ってくる小型の天界生物。

「ば！化け物！？」

はやてが天界生物に驚くと天界生物ははやてに飛びかかってきた。

「ギシャアアアアアア！！」

「う！！」

「おりゃあああああああああ！！」

身構えたはやてに飛び掛ってくる天界生物を蹴り飛ばす力。

「え！おじさん！？」

「下がってろ・・・」

はやてを離しダグコマンダーに手をかける力。

「トライダグオン！！」

力がダグコマンダーを起動させると水色のダグテクターが装着されフルフェイスのマスクで覆われる。

「ブレイブリキ！！」

「え？力？・・・おじさん一体！？」

力の名乗りに反応するはやて。すると

「通りすがりのただの家来だ・・・下がってろ!!」

「へ!?うん!!」

そう言ってはやてが後ろに下がると襲い掛かってくる天界生物。

「ブレイブシューター!!」

両肩から光弾が発射され天界生物が怯むと・・・

「ブレイブクロー!!・・・決まった!」

天界生物をブレイブクローで斬る力。

そして消滅する天界生物。

(・・・どうやら・・・はやてのそばを離れるわけにはいかなくなったな・・・)

そう考える力。

するとはやてが何かを考えた顔で力の後ろに来た。

「・・・もしかして・・・力君?」

「へ?」

力の姿を見ていたはやては目の前にいる人物が成長した力と確信するのだった。

第三十五話　闇の書事件（後書き）

はぁ～・・・早いとこ楓のやつ迎えに来ないかな～・・・て！！ツクヨミの兵隊が攻めてきやがった！！く！？ダグテクターじゃ間に合わない・・・何？困った時の楓ちゃんシステム？・・・これって！！！

次回！勇者大戦ブレイブサーガＡ’ｓ　発動！ニューダグテクター！！！

これが・・・新しいダグテクター・・・

第三十六話　発動！ニューダグテクター！！

第三十六話　発動！ニューダグテクター！！

八神家

天界生物が現れてしまったことにより、はやての傍を離れるわけには行かなくなった力。シグナム達が蒐集に行っている間だけという理由で八神家に厄介になっている。尚寝泊りは普段海鳴橋の河川敷で新聞紙かけて寝ている日々を過ごしている。

「いや～まさか力君がこお～んなに大きくなっとるとわな～ウチは安心したわ～」

九歳児のはやてに成長を喜ばれてしまう力。

尚、今の時代の力はとある理由のためはやての目の前に現れていない。

「お前よく俺だってわかったな・・・」

「だってこのとても美形とは縁の遠い間抜け顔に中身が詰まってなさそうな頭・・・何処をどう見ても力君や！！」

「そうかいそうかい」

妙な理由で正体がバレてしまった力ちゃんだった。

「で?何で力君ウチの前から消えたん?」

「んな昔のこと忘れた」

「ウチにとっては現代の事や!!たくこんな傷だらけの身体になって・・・今から防がないと」

実は身体中傷だらけの力。深くない為そこまで目立たないが見ようと思えば浮き出てしまう。

「で?最初の傷どれや?」

「・・・これ」

手のひらの切り傷を見せる力。

「うわあ・・・これどうしたん?」

「忘れた・・・」

「自分の傷忘れるな!!たく・・・ウチが見てない間にこ~んな傷だらけになってほんま!!馬鹿やな!!」

はやてにぶん殴られる力。この頃のはやてに既に頭が上がっていない。

とりあえず今日の用件を終え八神家を出ようとする力を見送るはやて。

「んじゃ・・・またな」

「ねぇ・・・現代の力君はいつウチの前に現れるの？」

現代に居るべき力の事について聞いてみるはやて。すると力は・・・

「さぁ・・・高校入るまでは知らん」

そう言って力は八神家から出るのだった。

「はぁ・・・」

ため息つきながら帰る力。

「・・・ガイスターたちが居るから心配しなくなって良かったし、新しい家族に俺は邪魔だから来なくなったなんて死んでも言えるか・・・」

今のはやてに言ったら絶対に殺されると思った力はとっとと帰るのだった。

「・・・干物飽きた・・・」

ここ数日シグナムが作っておいた干物しか食べていない力だったりする。

「ダグオンが付いたとなると厄介だな・・・早期決着をつけるか・・・」

夜、仮面の男がはやての家を襲撃しようと身構えたその時。

「朱雀連舞！！」

仮面の男に降りかかる不死鳥のような蹴りが仮面の男に襲いかかった。

「く！」

仮面の男がその人物を確かめると・・・

「貴様・・・」

「ハロ～♪」

現れたのは力の相棒・東飛鳥だった。

「貴様・・・どうして！？」

「あの馬鹿に頼まれてね・・・夜襲をかけそうだったら私が動けってね・・・」

ダグコマンダーを構える飛鳥。

「トライダグオン！！」

飛鳥がダグコマンダーを起動させると紅のダグテクターが装着されるがいつもの物とは違う。足技に特化したアーマーに魔術師を思わせる上半身のフォルムにハーフフェイスのマスク。

「ダグテクター・・・それは！」

「ウチにはえら～く便利な仲間が居てね・・・装着者の精神エネルギーが頂点を達した時に発動させるみたいよ～」

困った時の楓ちゃんシステムが発動し新たな力を出した飛鳥。

「かかれ！！」

仮面の男の指示で天界生物が飛鳥に襲い掛かる。

「いくぞ・・・フェイスオン！！」

フェイスマスクが閉まったと同時に戦闘モードに移行した。

「く！」

飛鳥の蹴りが仮面の男に炸裂すると仮面の男は吹き飛び群がる天界生物を蹴りはなした。

「軽い・・・良いダグテクターだ・・・」

ニューダグテクターに感心する飛鳥。

「ち・・・引くぞ！！」

そう言って仮面の男は撤退した。

「ふ～さってと・・・早いところ合流しないと・・・ツクヨミの奴

もうとっとと現代に帰ったし」

あの後仮面の男に天界生物を付き付けた後ツクヨミはとっとと現代に帰還したのだった。

翌日

「ふぁ～・・・」

干物齧りながらはやての車椅子を押す力。

「いや～力君とはいえ男の人と歩くのは気持ちええな～」

「へえへえそうですか・・・」

暢気に街中を歩いている力・・・その時・・・

「！！！」

突如はやてを車椅子から持ち上げ跳躍する力。

「ちょ！！力君どうしたん！？」

「黙ってろ！！」

力が跳躍した瞬間車椅子が木っ端微塵に破壊されてしまった。

「なに！？」

「天界生物だ！トライダグオン！！」

水色のダグテクターを装着する力ははやてを連れてそのまま撤退を試みようとするが・・・

「うわ！！」

背中を銃撃されてしまう力。

「力君！！う！！！」

力が蹲った瞬間はやてが力の腕から零れ落ち天界生物にさらわれてしまった。

「力君！力君！！」

はやてが力を見るとダグテクターが砕かれていた。これは力へのダメージが相当深い証拠だ。

「力君！！」

絶叫と共に街中のビル街へ逃亡する天界生物。

「くっそ・・・・」

ダグテクターを破壊され蹲る力。

「力君！！力君！！」

はやて悲鳴と共に立ち上がろうとする力だがダメージで立ち上がれない。

「ちっきしょう・・・負けてたまるか・・・負けるかー!!」

力の精神エネルギーが頂点に達したその時。

「!!」

ダグコマンダーが光った。

モニターに何かの文字が表示される。

「・・・困ったときの楓ちゃんシステム・・・へ?我が孫ながらやってくれるぜ」

立ち上がりはやての元へ向かって駆け出す力。

「う!!」

車椅子もなく移動する手段の無いはやて。ジリジリと仮面の男に詰め寄られる。そして周りからも天界生物が詰め寄った。

「・・・呪われし子・・・死ぬがいい」

仮面の男がはやてに向かって魔力刃を振り下ろした。

その時はやての中にある言葉が蘇った。

俺大きくなったらはやての家来になってずっと一緒に居るよ

（・・・・力君の馬鹿・・・ずっと一緒に居てくれるって言うたやんか・・・）

降りかかるナイフをスローモーションのように見えてしまい、自分の心が走馬灯のように浮かび上がる。

「力君の・・・・嘘吐きーーーーーー！！！」

ビルの上からはやてが叫んだ。

その時

「！！！」

過去の海鳴の町の人だかりを駆ける力はダグコマンダーを構えた。

「トライダグオン！！！」

力がダグコマンダーを起動させると水色のニューダグテクターが力の身体を包み込んだ。

「！！」

姿が変わった力はハーフフェイスのマスクに獅子のタテガミを思わせるマントをなびかせ目にも留まらないスピードで人の間を駆けて行った。

「はぁ！はぁ！！」

這ってでも必死に逃げようとするはやてだが追いつかれるのは時間の問題だった。

「あう！！」

はやてに天界生物が襲いかかろうと迫り来る。声にならない声をあげるはやて。

「！！」

はやてにレーザーが浴びせられる瞬間。

「うおおああ！！」

すかさず力が身体を張りはやての前に立ち塞がった。

「く！」

レーザーを浴び膝を突く力。

「力君！！」

「・・・心配ねえ・・・こんなんお前の攻撃に比べたら屁でもねえ」

はやてを抱き上げる力。

「邪魔するな小僧！！」

「嫌なこった！つかまれ！！」

「うん！！」

力にギュッとしがみ付くはやて。すると力のフェイスマスクが閉じスピードが上がり一瞬でその場から姿を消した。

「早くなった？・・・追え！！」

仮面の男の指示で力を追う天界生物。

「！！・・・・！！！・・・！！！」

ビル街を駆け抜け安全地帯に向かう力。

「ち・・・多いな」

「力君！左後ろ！！」

「とりゃ！！」

はやてが行った方向の逆を跳ぶ力。天界生物を蹴り飛ばすが徐々に囲まれてしまう。

「力君どないする・・・」

「絶体絶命ってか？」

「諦めるんかい！！」

「大丈夫・・・こういう時に限って都合よく来る二人組が居るからな」

「は？」

脱力するはやて・・・その時

「レイソニック！！ウェーブ！！」

無数の衝撃波が天界生物に向かって飛び天界生物を撃破した。

ニューダグテクターで降り立つ楓。

その姿は風の翼人だった。

「お爺ちゃん！はやてさん！大丈夫！？」

「力君・・・誰や？このべっぴんさん」

「孫」

「えええええええええええええええ！！嘘やあああああああああ！！！」

楓初登場時と同じ状況になるはやて。尚、楓は『顔だけ』は美少女であった。

「ちょっと！『顔だけ』を強調しないでください！！」

するとはやてが楓の頭を叩いてみた。

ポンポン

中身の詰まってないいい音がする。

「この中身の詰まってないようなスッカラカンの頭・・・間違えなく力君の孫や」

「せっかく助けに着たのにひどいです！！」

祖父のピンチに駆けつけたのにもかかわらず凄まじい悪口を言われてしまう楓だった。

更に

「烈火脚！！」

凄まじい蹴りで薙ぎ払われる天界生物。

「飛鳥！」

「よっ！！」

力と楓の前に降り立つ飛鳥。

そして天界生物はジリジリと詰め寄ってきた。力は楓にはやての事を任せ飛鳥と天界生物の前に立った。

「数が多いね」

「へ！毎度のことじゃない」

「おお～威勢が良いねえ～んじゃ宜しく頼むよ・・・相棒」

「へいへい」

いつものやり取りが起き天界生物に向かって駆け出す力と飛鳥。絶妙なコンビネーションで次々と天界生物を蹴散らしていく。

「本能が・・ああやらせてるんでしょうね」

そう考える楓。

「飛鳥！あの手で行こうぜ！！」

「あいよ！！」

力が天界生物を合気道の要領で投げ飛ばすと飛鳥が急接近し蹴り飛ばすと吹っ飛ばした方向から力が再び天界生物を殴り飛ばし、ふっ飛ばした方向から飛鳥が蹴るというキャッチボールのような戦法で天界生物を痛めつけると・・・

「いっせ～の・・・」

「「せっ！！！！！」」

合言葉と共に同時攻撃で巨大なＸを描くように天界生物を倒す力と飛鳥。

「楓！ほかは？」

「はい！天界生物は全滅しました！！」

楓が索敵すると周囲の天界生物は全滅していた。そして楓が作ったレーダーで天界生物をサーチしたが一体も居なかった。

「これで・・・ツクヨミが送り込んできた天界生物は全滅ですから・・・この時代での役目は終わりですかね？」

「そうやな・・・う！！」

戦いが終わったのを確認した楓。すると急にはやてが苦しみ始めた。

「はやてさん！」

「はやて！！」

飛鳥が駆け寄りすぐさま応急処置の魔法を当てると楓がすぐに原因を究明し始めた。端末を操作すると・・・

「不味いです・・・闇の書が少し弄られてます・・・」

「どういう事だ？」

「はやてさんへの浸食が早くなってます・・・このままじゃ歴史どおりじゃなくその前にはやてさんが死にます」

はやてが死ぬそう聞かされた力と飛鳥。

「で？手は？」

「へ？」

「手段は？お前のことだから思いついてんだろ？」

こういう場合の勘の鋭い力に楓は答えた。

「この侵食を止めるには・・・闇の書の侵食を超えるような莫大な生命エネルギーを送り込んで無理矢理止めるしかありません・・・」

楓が自分の生命エネルギーを送り込もうとするが・・・

「待て楓・・・俺がやる」

「お爺ちゃん・・・リンカーコアを持ってないお爺ちゃんは下手したら死んじゃいます!!」

「だったらあたしが!!」

飛鳥が立候補するが力は飛鳥を止めた。

「強情だね・・・死ぬかもしれないのに」

「かまわねえよ・・・はやての人生くれてやるくれえなら・・・俺の人生くれてやるよ」

一切の迷いの無い力の言葉に楓達は決意した。

「お爺ちゃんの生命力が勝つか・・・闇の書が勝つか・・・賭けですね・・・良いですか?」

「良いぜ」

力の手に生命力変換式を描くと力の身体から命の力・・・生命エネルギーが溢れ出した。

「ふぅ・・・ふぅ・・・・」

呼吸の荒いはやてに力は・・・

「はやて・・・こんなクズ野郎の生命エネルギーだけど・・今入れるぜ・・・はぁあああ・・・・・」

はやてに生命エネルギーを捻じ込む力。

「・・・！！！！！！！！！」

闇の書の影響か無限に生命エネルギーを吸われる力。

「！！！ぶ！！！！・・・！！！！！！」

終に神経まで浮かび上がり瞳から涙まで出てきた。だが徐々にはやての様子は落ち着いていく。

「頑張れ力！！もう少しだ！！」

「・・・・！！！！・・・・おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！」

飛鳥の言葉に力は全ての命の力を絞り出した。

「！！」

はやての身体に何かが流れ込み脈が安定していく。

そして闇の書のページも完成に近くなるほどまでに埋まっていく。

「・・・埋まれ・・・埋まれ・・・はあああああああああああ！！」

その時力の中の何かが弾けた。

「！！」

楓が測っていた生命エネルギーの数値が闇の書の吸収速度を遥かに

上回っている。

そのまま闇の書が完成するが・・・

「！！」

咄嗟に飛鳥と楓が闇の書の魔法を使わせてページを減らした。

「・・・ごめん・・・ここで闇の書が完成しちゃったら・・・リインフォースさんが覚醒しちゃって・・・」

闇の書の進行を止め尚且つリインフォースを覚醒さない方法は完成する一瞬でページを使うしかなかった。

「う・・・あ・・あああ！！」

そしてそのまま倒れこむ力。今持つ全ての生命エネルギーをはやてに入れてしまった為痙攣を起こし意識を失ったが絶命していない。

はやてもはやてで血色がよくなり気絶していた。

「不死身かこいつは？」

「・・・多分人間の無限の可能性を使ったんじゃ」

「・・・どういう事？」

「お爺ちゃんの生命エネルギーは限界が無いって事ですね」

「まぁ・・・こいつ馬鹿だけど根性だけはあるからな」

「お爺ちゃん根性さえあれば生命エネルギーだろうがダグオンパワーだろうが限界無いんですよね・・・よし」

考察を終え楓ははやての額に人差し指を当てて何かを呟いた。

「魔術だね・・お？」

「すぅ～すぅ～」

楓の魔法が終わると寝息を立てるはやて。

「何をしたの？」

「ちょっとした催眠です・・・下手に今の記憶を覚えてちゃ歴史が変わっちゃうかもしれません・・・今ので記憶の一部を書き換えて全部夢だった思わせるんです・・・記憶変化はあまり使いたくない魔法なんですけど」

「・・・なるほどね・・・芸が細かい・・・んじゃそろそろ現代に帰るぞ！！」

「はい！」

楓が時間移動の魔術式を広げると飛鳥は気絶している力を抱え時間移動を開始した。

力たちが元の世界に帰ったことを確認すると現れた仮面の男。

「結局・・・天界生物など使い物にならなかったな」

気絶し放置されているはやてに詰め寄る仮面の男。

「・・・力君の・・・嘘・・吐き・・」

寝言で呟くはやて。そして仮面の男は・・・

「ふ・・・意識は無くてもあの男を呼ぶか・・・だが・・・もう終わりだ!!」

仮面の男がはやてにナイフを振り下ろしたその時・・・

ガシ!!

はやてに降りかかるナイフの刃を掴み取る手が・・・

「・・・嘘吐きで悪かったな」

ナイフの刃を握っていたのはこの時代の小学6年生の力だった。

「・・・お前は?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

力の手の中から凄まじい血が流れる。そして状況を確認する力。

「・・・なるほど」

「どけ小僧・・・命が惜しければ!!!」

言い終わる前に殴り飛ばされる仮面の男。

「・・・俺は今機嫌が悪くなった・・・徹底的にやってやんぜ！！！」

手に持っていたナイフの刃を握り潰し仮面の男に飛び掛る力。

「・・・命知らずの馬鹿とはお前のような奴を言うんだな」

時空移動中

「あ！そう言えばはやてさんあそこに置き去りにしてっちゃっ炊けど大丈夫かな？」

楓が心配すると飛鳥が・・・

「心配するなって・・・あそこではやてが死んだらこいつここに居ないって」

「なるへそ」

「第一力が本気でぶち切れたらあたしら全員が束になっても止めらんねえし」

「・・・言えてます」

そう言って元の時代に帰還する楓たちだった。

過去

「いって～・・・あの野郎めちゃくちゃやりやがって」

はやてを負んぶしながら手に深い刺し傷を負って帰るズタボロの小学生・力だった。

尚、仮面の男はぶち切れた力にグシャグシャにされた挙句海鳴川に捨てられた。

この頃からこいつは腕っ節だけは強かったらしい。

第三十六話　発動！ニューダグテクター！！（後書き）

ツクヨミ
「ふ・・・今ダグベースはがら空き・・今のうちに手を打っておくか？」

シャマル
「あれ～愚かにもダグベースを襲撃しようなんて事考えてるんじゃないわよね～」

次回！勇者大戦ブレイブサーガＡ，ｓ　暗殺指令ダグベース

シャマル
「ふ・・・ツクヨミも愚かよね・・・私と化かし合いで勝てると思ってるの？『私と』・・・」

シグナム
「シャマル・・・お前怖いぞ・・・」

第三十七話　暗殺指令！ダグベース！

ダグベース

ツクヨミがダグベースに侵入を試みている。その狙いは・・・

「今のうちにダグベースの内部から壊しておいたほうが良いわね」

ダグベースメンバーの暗殺だった。

第三十七話　暗殺指令！ダグベース！

ダグベースの朝ごはん・本日は洋食でトーストにハムエッグとサラダだったりする。

「てめ！！俺のハム！！」

「食べるのが遅〜い」

ユウのハムを盗み取るサイモン。大悟のトーストを激が奪ったり炎がアルトのサラダを強奪するなど幼稚な争いが続くと・・・

「朝っぱらからうるせえんだよテメエら！！！」

ガンガンガンガン！！！

朝っぱらから景気良く発砲する北斗。

するとアルトは・・・

（・・・人間の慣れって凄いな・・・もう北斗さんが銃撃ってもそんなに驚かない）

等といってキャロ並みに真剣が図太くなったのを感じた。

「まぁ・・・お義父さんおちつチャキ

「だからてめえにお義父さん呼ばわりされる筋合いはねえんだよ」

北斗を止めようと試みたエリオだが逆に眉間に銃を突きつけられる。

「まぁ・・・放っておいて昨日作ったジュースでも飲もうか」

自家製ジュースを皆に振舞うシャマル。シャマルが一口グイっと飲み、ほかのメンバーも飲もうとすると・・・

「みんな！飲まないほうが良いわよ」

「へ？なんで？」

ジュースを飲まないように言うシャマルにケンタが異議を唱える。

「これね・・・毒が入ってるわ・・・名前はドクコロシX・・・これは無色透明無味無臭の毒で一度人間の体内に入れば激しい呼吸困難の後に身体中赤い斑点だらけになって死の恐怖をた～～～っぷり味わいながら死に至る毒よ・・・飲んだらアウトね」

「え？シャマル先生飲んだよね？」

「私は『現代医学』に精通してるのよ！ありとあらゆる毒を私は『舐めて』それを特定できるのよ」

「・・・だからシャマル先生体内に入れたんだよね？」

その事については突っ込んではいけないのだろうか？

恐らくそれは現代医学に精通しているからであろう。

それを見ていたツクヨミは唖然としていた。

「・・・もしかしたらあの女が一番厄介な相手かもしれない・・・いや・・・むしろあいつが最凶キャラか？」

シャマル先生の能力に警戒を強めるツクヨミだった。

「・・・ネズミが紛れ込んだようだな」

シグナムが捜査を開始しようとするとシャマルが・・・

「良いじゃないの～もう少し泳がせておきましょう～面白そうだし

♪」

シャマルのこの言葉を聴いたシグナムは思った。

「（この発言・・・捕まえようと思えばとっとと捕まえられるって言ってるようなものだな）因みにお前いつ気づいた？」

「もう進入した時からバッチリ♪」

親指立てて宣言するシャマルの行動を見なかった聴かなかったことにしてスルーすることにしたシグナムだった。

夜

「・・・・」

皆が寝静まった後に内部で行動を開始するツクヨミ。するとある扉を見つけた。

「何だこれは？」

ツクヨミが見るとそこには『ダグベース開かずの間』と書かれていた部屋があるがとりあえずスルーしたすると・・・

「複雑な造りだ・・・迷うな・・・ん？」

ダグベース内で迷子になっているツクヨミはある張り紙を見つけた。

「何々・・・ダグベースでもっとも重要な部屋への順路・・・ふん・・・見え透いた手だな」

そう言って張り紙をはがすと・・・

「艦内マップか・・・こっちだな」

そう言って艦内マップの通りに進むツクヨミ・・・だが気が付かなかった。

ゴトン

艦内マップの下にもう一個本当のマップがあった事に・・・

結果

「うわあああああああああ!!!」

オペレートルームに向かったはずなのだがダグベース伝統の罠・水流しで大量の水に流され外に放り出されるツクヨミ。

「こんな罠を・・・くそ!!神を排泄物扱いして許さん!!」

再度挑戦を試みるツクヨミ。

「暗視スコープ」

ダグベース内で無数のレーザーポインターが張り巡らされていることに気づいた。

「温い罠だな・・・」

レーザーを掻い潜ろうとしたツクヨミだが・・・その時

「死ね！！チビ！！」

「おうおう！！殺れるもんなら殺ってみろ！！ハゲ！！」

突如響いた北斗と紫の喧嘩の声。

すると

ヒュン！！

「！！！」

ツクヨミの顔を掠める弾丸。

「な！！」

今のツクヨミの体勢はレーザーポインターを避けるべく凄まじく無様な格好をしている。

その結果・・・

ガンガンガン！！！ブバシュ！！

北斗の銃弾と紫の気功波がツクヨミに降り注ぎ直撃してしまった。

「が・・は・・・」

ツクヨミがレーザーに倒れると床にこう書いてあった。

「このレーザーはギャグのフェイクです・・・おのれ!!」

ツクヨミが本気を出そうとしたその時。

「は～い♪」

「は!?」

ツクヨミが周りを見るとシャマルの姿が・・・そしてダグテクターに身を包んでいた炎、竜、激、雷によって完全包囲されていた。

「貴様・・・はかったな!!」

「いや～そっちが単純な罠に一枚上乗せした罠に勝手に引っかかったんじゃない♪」

そう・・・嘘のレーザーポインターを仕掛けたのもシャマル。ツクヨミは完全にシャマルの手の平で踊っていたのだ。

「かくなるうえは!!」

逃亡を図ろうとするツクヨミ。

「ええい!逃がすな!!」

「あいあいさーってな!!」

シャマルの命令で炎が敬礼しツクヨミを追いかける。

ダグベースの中では警報が鳴り響きツクヨミが逃げると目の前には降りるシャッターが・・・

「く！！」

シャッターを避けて逃げるツクヨミ。

「ショルダーバーン！！」

炎の銃撃を避けながら逃げるツクヨミはある場所にたどり着いた。

「ここなら」

ツクヨミが逃げ込んだのはダグベースの開かずの間所だった。

「な！！」

入ってみて唖然とするツクヨミ・・・そこには途轍もない激戦の痕が残っているのだった。

「地面が割れている・・・いや・・・穴だらけ・・・は！！拷問の道具まで！！！・・・な！！！！」

突然檻に捕らえられるツクヨミ。

「あら～・・・やっぱりここに逃げ込んだか・・・」

「シャマル先生・・・何ナノここ？」

恐る恐るケンタが聞いてみると・・・

「ダグベース開かずの間・・・別名『力君専用処刑場』！！！」

「！！」

力君専用処刑場・それは力の悪行のお仕置きではやてがそこ等中を破壊し尽くすため、苦情が殺到した結果。

心置きなくお仕置きが出来る場所

として楓の技術の結晶を籠めてダグベースに作ったシェルターだった。耐久力は反物質・・・つまりボルテッカの１０億倍にも耐えられるのだった。

尚、中の地面が割れていたりするのははやてのお仕置きの破壊力が上回っているからであろう。

「で～トドメは～」

ダグベースの端末を操作すると大砲が現れ檻に捕らえられていたツクヨミが装てんされた。

大砲にはこう書かれていた。

力君用打ち上げ大砲

「な！！」

ツクヨミが脱出を試みようとするが対力用に作られているだけあって脱出することが出来ない。

「はい！皆火薬つめて～」

「よっしゃ！！」

八神組は悪党に容赦しないのか炎が火薬をいそいそと大砲につめだした。

「着火！！」

「なぬ！？」

導火線に火を点ける炎。

すると

じじじじじ・・・ドーン！！・・・・ヒュー・・パーン

見事に打ち上げられたツクヨミ。

「た～まや～」

シャマルの掛け声によって打ち上げ花火にされたツクヨミだった。

「ふ～一件落着・・・ブイ♪」

そうやってブイサインするシャマルを見た面々は・・・

（シャマル先生は敵に回さないほうが良いかも・・・）

（ていうか力兄ちゃんあんだけ食らって反省しないんだ）

（え？力は毎回あれやられてるのか？）

と思いはそれぞれだった。

そしてツクヨミは・・・

「・・・神を愚弄するとは・・・シャマル・・・絶対に殺す」

シャマルに手玉に取られ黒焦げになりながらリベンジを誓うのだった。

第三十七話　暗殺指令！ダグベース！（後書き）

そういえばこの間野球の試合のチケット買ったんだ！その試合はアイアンリーグ・シルバーキャッスル対ブルーウェーブスの試合！けどこのピッチャーのマグナムエースって兄ちゃんの声に似てるんだよな～・・・大変だ！！スタジアムに爆弾が・・・あれは！ドライアス！？

次回！太陽の勇者・・・じゃなくて！！勇者大戦ブレイブサーガＡ’ｓ

参戦！シルバーキャッスル！！

正々堂々と！！世界平和だ！！

第三十八話　参戦！シルバーキャッスル

ダグベース

「兄ちゃん見てみて！！」

ケンタが嬉しそうに3枚のチケットを火鳥に見せた。

「ん？どうしたんだ？ケンタ？」

「兄ちゃん！世界が融合して景気づけにアイアンリーグが開始されるんだ！」

「アイアンリーグ？・・・そういえばウチのヴィヴィオがアイアンリーガーってアニメを夢中で見てたな～」

「うん！アイアンリーグが間近で見られるなんてミラクル嬉しいよ！！」

大喜びしながらアイアンリーグを見に行くのだった。

第三十八話　参戦！シルバーキャッスル！！

アイアンリーグスタジアム

凄まじい歓声がスタジアムを包み込む。

「凄い熱狂だな～」

「やっぱりアイアンリーグって人気あるんだな～」

火鳥とケンタが観客たちに圧倒されると・・・

「火鳥さん！これ美味しい～」

影の守護者ヴィヴィオがポップコーンを食べながら騒いでいた。実は後一枚が誰が行くかで大変もめた為アミダくじでヴィヴィオが行くことになったのだった。

『さぁ！アイアンリーグ記念祭！シルバーキャッスル対ブルーウェーブスの試合！1回の表シルバーキャッスルの攻撃！一番バッターはセカンドマッハウインディ！！』

マッハウインディがバッターボックスに立つのを見た火鳥は疑問に思った。

「ケンタ？これは野球なのか？彼はサッカー選手みたいだけど？」

「ああ！シルバーキャッスルは競技タイプがバラバラなんだ。けどそれぞれの特性を生かした戦い方をするんだ・・・ほら！！」

ケンタが指を刺すとマッハウインディがバントでボールを捕らえたところでファーストに向かって走った。ピッチャーがファーストにボールを投げるがマッハウインディの足のほうが速く出塁した。

「なるほど・・・サッカーリーガーの足が武器か」

二番のＧＺがホッケーのスティックを持ってバッターボックスに入る。

「あれは良いのかな？」

「アイアンリーグでは許されるみたいだよ？」

ケンタの解説に納得する火鳥。するとＧＺの打球を内野が取ってアウトにするがマッハウインディはセカンドに入った。

「あ！いよいよだよ！兄ちゃん！！」

「ん？」

ケンタがワクワクしながら指を刺すとそこには・・・

『三番！ピッチャー・・・マグナムエース！！』

【うおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！】

マグナムエースの登場に観客の熱狂が頂点を振り切った。

「なぁケンタ。マグナムエースってそんなに凄いのか？」

「そうだよ！兄ちゃん！マグナムエースって凄いリーガーなんだよ！」

ケンタも熱狂のあまり説明を端折る

ボールボーイロボットが試合で使うボールを用意していると一人の細身の男が来た。

「・・・このボールを使え」

男がロボットにボールを渡すとロボットはそのまま試合に起用した。

「ふ・・・所詮はロボットか・・・」

細身の男は不敵な笑みを浮かべながらその場を後にした。

マグナムエースのバッティングを見ていたヴィヴィオは疑問に思った。

「あのマグナムエースって火鳥さんに声が似てるんだよね～」

「それを言うならヴィヴィオとサイモン君だって似てるよ」

「サイちゃんからタクティカルコマンダー借りて変身して遊んでるんだ～」

「ああ～あれはサイモン君と同じ声の人なら誰でも使えるみたいだからね～」

等と会話が弾んだその時・・・

（火鳥さん！）

「シャマル先生！」

突然シャマルからの念話が入る火鳥。

「どうしたんですか？」

（どうしたもこうしたも！エマージェンシー反応よ！）

「え？」

（落ち着いて聞いて・・・さっき匿名の情報が入ってドライアスがスタジアムに爆弾を仕掛けたの！）

「何ですって！？」

ドライアスという言葉に驚く火鳥。そう・・・ドライアスは既に火鳥達の手によって倒されたはず・・・だがそのドライアスが行動を起こしたことに驚きを隠せなかった。

（匿名だったけど・・・ドライアスの名前を起用してたわ・・・悪戯にしては度が過ぎてる・・・警戒して！！）

「何故ドライアスが・・・は！」

火鳥がスコアボードを見るとそこには長身の男・・・シュラの姿が・・・

「あいつ！！」

「兄ちゃん？」

火鳥がスコアボードに向かって跳ぶとシュラの前に降り立った。

「てめえら！一体何しやがる！？」

「久しいな・・・ファイバード・・・俺たちのメッセージを受け取ったようだな・・・」

火鳥を捕らえるシュラは火鳥を誘い込んだ。

「待て！！」

後を追う火鳥。

すると

「ん？」

スタジアムの中に居るマグナムエースが火鳥達の様子に気づくのだった。

「なんだって！？」

ビスターでシャマルからの通信を聞き急いでスタジアム内を散策し始めた。

スタジアム外

「てえああ！！」

「ふん！！」

火鳥の拳を受け止めるシュラ。

「言え！爆弾は何処だ！？」

「誰が言うか・・・積年の恨み・・・今晴らさせてもらうぜ！！」

シュラがカンフーのような動きで殴ると火鳥は受け流し投げ飛ばした。

スタジアム内ではケンタとヴィヴィオが必死になって爆弾を探していた。

「何処だ～見つからないよ～」

「どこ～」

スタジアムの中をくまなく探しているケンタとヴィヴィオだが・・・

「もしかして・・・目立たない物・・・ボールだ！！兄ちゃん！！」

ビスターでケンタが火鳥に連絡を取る。

「ケンタ？」

『爆弾はスタジアムのボールだよ！！』

「く！！」

火鳥がスタジアムに戻ろうとするとシュラが追いかけてきた。

「おめえと遊んでる暇はねえ！！」

「そうはいかねえんだよ！！」

「ぐ！！」

スコアボードの上でシュラに押さえられる火鳥。

「さぁ見てな・・・スタジアムの歓声が悲鳴に変わる瞬間を・・・」

「なに！？」

火鳥が分析すると既に爆弾の入ったボールはピッチャーマウンドに居るマグナムエースが持っていた。

そのまま投球体制に入るマグナムエース。

「４４ぉぉぉぉ・・・・」

「まずい！止めろ！！」

火鳥がマグナムエースに向かって叫ぶ。

爆弾に扮しているボールを構えるマグナムエースは・・・

「ソニック！！」

そのまま大空に向かって投げた。４４ソニックのエネルギーと共に

大空で爆発する爆弾。

「何故だ!?何故!!」

シュラがマグナムエースの行動に混乱していると火鳥がシュラを蹴り飛ばし距離を置いた。

そして火鳥の隣にマグナムエースが駆けつけた。

「あなたは!?」

「・・・話は後だ・・・貴様が首謀者か!?」

シュラに向かって叫ぶマグナムエース。

「だったらどうした!?ガラクタ!?」

「あんなボールで俺たちアイアンリーガーを騙せると思うな!神聖なスタジアムを汚すなどこの俺が許さん!!」

グローブを構えるマグナムエースに向かってシュラがスタジアムに飛び降りた。

「待て!」

火鳥が後を追おうとするとシュラがロボットを発進させた。

そして

「ファイヤー・・・ジェーット!」

火鳥の叫びに飛来するファイヤージェットはそのまま人型に変形する。

「は！！」

火鳥の瞳のコンピューターが唸りを上げ不死鳥のように燃え上がりファイヤージェットの胸に吸収されると舞い降りるフレイムブレスターと合体した。

『フォームアップ！武装合体！ファーイバード！』

シュラと対峙するファイバード。

突然のロボットの登場にパニックになるスタジアム。

それを見ていたマグナムエースは・・・

「監督！俺のバックパックを射出してください！！」

「なに？」

「このままじゃ観客が危ない！俺が食い止めます！！」

「わかった！！」

エドモンドがマグナムエースのバックパックを射出するとマグナムエースの背中に合体した。

「よし！！」

マグナムエースがシュラに向かおうとしたその時・・・

「マグナム・・・お主一人を行かせはしない」

「！！」

マグナムエースの背後に居たのは・・・

『く！！うおおおお！！！』

シュラの攻撃をフレイムソードで受け止めるファイバードすると・・・

「助太刀いたす！！」

『『！！』』

シュラの居るコックピットに向かって十郎太がムテンソードで攻撃した。

『なに！？』

突然の奇襲に混乱するシュラ・・・すると・・・

「ソルジャースラップショット！！！」

地上からＧＺのショットをまともに受け交代するシュラ。

そこに・・・

「マッハスピン！！！」

マッハウインディのシュート・・・マッハスピンがシュラに炸裂した。膝を突くシュラ。

『く！何故だ！？何故あんな奴らにこれだけのパワーが』

立ち上がろうとするシュラにその時・・・

「どおおりゃあああああああああああ！！！」

フルパワーになったブルアーマーがシュラの足を抑えて動きを封じた。

更に・・・

「竜鉄拳！！！」

リュウケンの拳がクリーンヒットした。

「ヘイ！マグナム！エリス！」

「受け取れ！！」

トップジョイとリインフォースがマグナムエース・エリスにボールを投げ渡した。

「４４ぉぉソニック！！」

「ウイニング！サンシャイン！！」

二つの魔球がシュラに襲い掛かり後退するシュラ。

「今だ！ファイバード！みんな！！」

【おう！！】

マグナムエースの指令に全員が必殺技の体制に入った。

『フレイムソード・・・チャージアップ！！』

フレイムソードに炎の力が湧き上がり不死鳥のような叫びと共に突撃するファイバード。

「トップジョイ！！」

「十郎太！」

「リュウケン！」

「ＧＺぉぉ！！」

「エリス！！」

「リインフォース！！」

「ウインディ！！」

「頼むぜ・・・マグナム！！！」

ブルアーマーから始まった光のダイレクトパスがマグナムエース届けられる。

「シュラ！みんなの力で増幅されたこのボール・・・そして俺たちのアイアンリーガー魂を受けてみろ！！！」

マグナムエースの回路にエネルギーが駆け巡り凄まじい力を生み出した。

「ライトニングクラァァッシュ！！！」

シルバーキャッスルの心のエネルギーが籠められたライトニングクラッシュがシュラに向かって飛んだ。

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおつええええええええええええええええい！！！』

ファイバードの一閃とライトニングクラッシュがシュラのロボットを破壊した。脱出ポッドで飛び去るシュラ。

「覚えていろ！」

フレイムソードを納めるファイバードとファイバードの元に降り立つマグナムエースだった。

「そうですか・・・天界生物というのですか」

マグナムエースが火鳥たちから事情を聞くとある提案をした。

「・・・俺も一緒に連れて行ってもらえますか?」

「え?けど!マグナムエースは勇者じゃ・・・」

「確かに俺は勇者ではありません・・・しかし・・・奴らを野放しにするわけにはいきません・・・皆がアイアンリーグを純粋に楽しめるように俺にも何かさせてください」

マグナムエースの決意に一切の迷いのなさを感じる火鳥。

「俺たちも行くぜ」

マグナムエースが振り返るとそこにはシルバーキャッスルの仲間が集まっていた。

「みんな・・・・」

「水臭いぜ!マグナムエース」

「そうだ!俺たちは仲間だ!仲間が危険なところに行こうとしているのに黙ってみていられない!!」

マッハウインディとブルアーマーがダグベースへの参戦を申し出るがマグナムエースは・・・

「いや・・・皆は残ってくれ・・・」

「何故!?」

エリスの言葉にマグナムエースは静かに答えた。

「皆には・・・アイアンリーグを続けて欲しい・・・俺たちが戦っている間・・・アイアンリーグで皆に勇気を与えて欲しいんだ」

「マグナム・・・へ！わかったぜ！！」

ウインディと握手を交わすマグナムエース。

「忘れるな俺たちのリーガー魂はいつもお前と一緒だぜ！」

「ああ！！行きましょう！火鳥さん！」

「はい！！」

こうして火鳥に案内されながらマグナムエースがダグベースに参戦した。

第三十八話　参戦！シルバーキャッスル（後書き）

大地
「デスライカーが破壊された俺は迅雷に乗り換えた。その途中で蓮と合流した・・・なに？蓮が居なくなった？それに街では勇者の弟が誘拐された噂が・・・勇者・・・弟・・・まさか蓮が・・・あいつら！俺と間違えて蓮を！！・・・ん？あのバイクは？」

次回！勇者大戦ブレイブサーガＡ，ｓ　大地の勇者対鋼鉄神

大地
「お前が蓮を！？」

剣児
「てめえが天界生物か！？」

第三十九話　大地の勇者対鋼鉄神（前書き）

大地のパワーアップ形態フライング登場

第三十九話　大地の勇者対鋼鉄神

大型トレーラーが置ける駐車場があるホテル。その運動施設にはあの男と少年の姿が・・・

第三十九話　大地の勇者対鋼鉄神

「せいせい！」

大地に向かって打ち込んでくる蓮。現在大地は蓮に修行をつけていた。

「はあ！」

「ぐ！」

蓮の蹴りをまともに食らった大地はそのまま蓮の足を掴み取り投げ飛ばした。

「うわああ！」

投げ飛ばされた蓮はそのまま着地しようとするが・・・

「あら？」

足が縺れて着地に失敗する蓮。

それを見た大地は・・・

「今日はここまでだ」

「大兄！？まだやれるよ！」

「身体を守るもの大事だって事だ・・・買い物してこい・・・先に部屋に帰ってるぞ」

そう言って先に部屋に帰る大地。

大地と蓮が合流したのは偶然だった。デスライカーを破壊された大地は封印していた迅雷を使うべく空間閉鎖された霧島園に訪れた時に霧島園を守っていたのが蓮だった。

その後蓮は戦いを早く終わらせる為と言って相棒の聖勇者フラッシュと共に大地と同行することにしたのだ。

その後大地は蓮をあごでこき使いまくり炊事洗濯家事労働全て押し付けて天界生物と戦っていた。

商店街

大地に買い物を押し付けられ商店街を回っている蓮。

「ねぇディーヴァ・・・最近の大兄手加減してくれないんだよな～なんでだろう？」

ここ数日大地にこき使いまくられた蓮。こき使われすぎているせいで何故か戦闘に参加したことがない・・・蓮が帰ってくる間に大地が全て終わらせていたからだ。

自分は必要とされていないのではないかと思ってしまう蓮。

「僕・・・足手まといなのかな？」

（蓮・・・あれは愛情よ・・・大地は貴方の事を弟みたいに思ってるから可愛くて可愛くてしかたないのよ）

「ええ？あの大兄が？」

普段ぶっきら棒な大地の意外な一面に唖然とする蓮。

（そうよ。大地は迅雷の居住スペースで寝泊りが出来るのにわざわざ宿を取ったのよ？蓮に少しでも休んで欲しいからって思ってるんじゃない？）

「大兄・・・うん！」

そう言って蓮は大地の用件を済ませるのだった。

因みに大地が蓮を参加させないのはこんな理由があった。

「・・・はぁ・・・俺たちの戦いにあんなガキをまきこめねえよ」

そう、大地は顔に似合わず人が傷つく姿を見るのを嫌う。自分が傷つくのはいくらでも耐えられるが人が傷つくのが嫌だった。

この性格が楓との対立の原因の一つでもある。

楓は大地のためならいくらでも自分が傷つく道を選んだ。故に大地は楓を嫌った。

そして楓から離れれば楓が自分のせいで傷つくことがなく自分も傷つくことが無いと思ったからだ。

「どうもな・・・この性格治んねえかな」

そう言って不貞寝を決め込む大地だった。

ある店にて

「お願いします」

男が一人の少年に向かって迅雷の写真を出した。

「こいつが天界生物か？」

「はい・・・名前を『迅雷』と言います・・・手ごわい神ですよ・・・我々の施設を悉く破壊していきました・・・そのせいで救援設備

が破壊されて・・・」

「分かったぜ・・・んな野郎！俺がぶちのめしてやる！！」

少年・草薙剣児が大地を打倒するべく立ち上がった。

剣児が立ち去った姿を見送った男は・・・

「ふん・・・チョロいね・・・」

男・ヤマツミは剣児を騙し迅雷を倒させる計画を取っていた。その理由は大地は剣児たちとの面識が全く無い。大地自身も剣児のことなど一切知らない。故に大地と剣児を戦わせる計画を取った。どっちが倒されてもヤマツミにとって得だからだ。

「さて仕上げは・・・」

ヤマツミはある計画を進行させた。

「えっと・・・後は・・・ケーキ？」

大地の買い物メモにはケーキと書かれていた。大地の甘党を知っている蓮は苦笑いした。

「そういえば・・・大兄甘い物には凄まじいこだわりを持ってるんだよね・・・リンクスさんが苦戦してたな」

そう思ったその時だった。

「キャアアアアアアア！！」

「！！」

女性の叫びと共に突如地面から天界生物が現れ蓮が取り囲まれてしまう。天界生物に気づいた人々はパニックを起こし逃げ始めた。それを見ていた蓮は変身を試みた。

「天界生物！？へんし・・う！！！」

変身を試みた蓮だが動きを封じられて変身ポーズが取れない。

『勇者の弟・・・ホカクスル』

（大・・兄・・・）

そのまま地面に引きずり込まれる蓮。

「遅いな・・・いつまで行ってんだ？」

心配になったのか大地が商店街を訪れると何故か人だかりが出来ており近づいてみた。

「勇者の弟って言って・・・男の子が誘拐されちゃったんです」

「な！何だって！！」

話を聞いた大地は証言している女性に駆け寄る大地。

「おい！詳しく聞かせてくれ！！」

事情を聞いた大地は一時ホテルに帰還した。

「・・・なんで蓮が・・・誘拐された勇者の弟・・・」

ホテルのベッドに腰掛けながら考える大地。

「・・・蓮・・・弟・・・一体何故・・・まさか！！」

ある可能性を導き出し立ち上がる大地。

「奴ら・・・俺と間違えて蓮を！！」

ホテルから出ると急いで迅雷に乗り込み発進する大地は公道を目立つように走った。

「何処にいる天界生物・・・お前の仕業だって分かってるんだ・・・出てきて堂々と勝負しやがれ！」

荒野に出る大地。

すると

「あれか？」

大地の姿を捉える剣児の姿が・・・

「あいつが天界生物の迅雷か？つばき行くぜ！」

「うん！」

雷鋼馬を走らせる剣児とビッグシューターで出るつばき。

「ん？」

大地がミラーを見ると後方から接近してくる雷鋼馬とビッグシューターの姿が・・・だが大地は・・・

「天界生物の野郎着やがったな！」

剣児の横に付ける大地・・・すると

「この野郎！！」

「うわあああああ！！」

迅雷で体当たりする大地。トレーラーの一撃を食らってはバイクに勝ち目はない。

「やろ！やりやがったな！！」

雷鋼馬と迅雷がぶつかり合い凄まじい火花が散る。

迅雷の窓から剣児に向かって叫ぶ大地。

「貴様！蓮を何処にやった！！？」

「蓮？誰だそれ！？知らねえよ！！」

「とぼけるんじゃねえ！！」

「とぼけてねえよ！！このボケナス！！」

迅雷に体当たりを仕掛ける剣児。

「くぅ・・・もうゆるさねえ！！！」

剣児がとぼけてると思い込み怒りが頂点に達した大地は剣児に体当たりを仕掛けた。ぶらつく剣児は・・・

「くそこのままじゃラチがあかねえ！！！」

雷鋼馬で迅雷の前に突き進む剣児は迅雷に向かって走った。

そして

「行くぜ！ビルドアーップ！！」

『ジーグパーツシュート！』

拳を合わせる剣児。すると雷鋼馬が頭部に変形するとビッグシューターからジーグパーツが射出され合体した巨人。

『鋼鉄！ジーグ！！』

「正体を現しやがったな！！セットアップ！！合身！！」

Dアーマーを装着する大地はそのまま飛び上がり迅雷と合体しロボットの姿になった。

『迅雷！！』

ジーグの前に降り立つ大地。

『それがテメエの姿か・・・おもしれえ！！てめえのせいで迷惑してる奴らがいるんだ！ここで引導渡してやるぜ！！』

『うおおおおおおおおおおお！！！』

やる気出す剣児に突撃する大地。大地の左右のコンビネーションが降りかかると剣児はガードを固め凌いだ。

『すげえパワーだ・・・けどやられっかよ！！』

『うおおおお！！』

持ち前のスピードを生かしたダイナマイトキックに吹っ飛ばされる大地。

『ちっくしょう！おりゃああ！！』

『ぬがああ！！』

立ち上がった大地はジャンプし剣児の顔面を踏みつけるように蹴り飛ばした。

『ぐあ！！』

倒れこむ剣児のマウントを取った大地・・・そのまま・・・

『おりゃあああああああ！！』

『ぐあああ！！！』

顔面をマウントポジションから殴りまくる大地。その戦い方を見ていたつばきは・・・

「なんだろう・・・あの戦い方どっかで見たことがあるような・・・」

大地の戦い方に見覚えを感じるつばき。

『・・・なるほど・・・パワーでは大地が上か・・・』

大地と剣児の戦いを見ていた天界生物が姿を現した。

「ふむふむ・・・迅雷のほうが今のところ有利か・・・なら・・・」

何かを用意し始めるヤマツミ。

『ぐう！！』

『うおおおおおおおお！！』

単純なパワーでは大地のほうが分がある。マウントポジションから徐々に押され始めるジーグ。

その時

『大地！こっちを見ろ！！』

『なに！？』

何かに呼ばれ大地が振り返るとそこにはヤマツミに捕らえられた蓮の姿が・・・

『こいつがどうなっても良いのか！！？』

『く！』

蓮が人質に取られたことに剣児を離す大地。

『おい！てめえ！なんのつもりだ！！？』

大地に塩を送られたと思い激怒する剣児だが大地は・・・

『お前は・・・俺を倒したいんだろ？・・・気の済むようにしたらどうだ！！』

『な！舐めやがって・・・望みどおりにしてやるぜ！！』

『ぐ！！』

舐められたと思った剣児が大地に殴りかかる。性質の悪いことに蓮が人質に取られていることに気づいていないのだ。

『でああああああああ！！』

『ぐう！！』

今度は剣児のほうがマウントポジションに入り大地を殴りまくる。

『うおああああああああああああ！！！』

剣児の一撃を食らい吹っ飛ばされると大地はすぐに立ち上がろうとするが・・・

『（蓮を無事に助け出すまでは・・・チャンスを待つんだ・・・）うおあああああああああああああ！！！』

一方的にやられる大地を見たつばきは・・・

「いくらなんでもおかし過ぎる・・・あんなに闘争心むき出しで戦っていた迅雷が急に無抵抗になるなんて・・・」

大地の変わりように何かを感じるつばきは周囲を見回した。するとその先には・・・

「あの子・・・まさか・・・あの子が蓮君？という事は彼は・・・剣児！？」

『あ？』

つばきの通信に剣児は・・・

『つばき！！マッハドリルだ！！』

『え？うん！マッハドリルセットアップ！シュート！！』

ビッグシューターから発射されるとジーグは合体した。そのまま大地に突進するジーグ。

それを見ていた蓮は・・・

「大兄!!戦って!!僕はどうなってもいい!!戦って!!!」

蓮の叫びに大地は・・・

『蓮・・・前にも言ったよな・・・男ってのはな自分を守れて他人を守れる奴のことを言うんだってな』

「大兄・・・」

蓮をよそに剣児が大地に向かって突進すると・・・

『おりゃあああああああああああああ!!!』

急速旋回し蓮の元に向かった。

「なに!?うわあああああああああ!!!」

剣児の一撃に吹っ飛ばされる蓮と天界生物。

そして

『蓮!!』

待機していたフラッシュが蓮を回収した。

大地の前に降り立つ剣児。

『大丈夫か!?』

『お前・・・』

『・・・今思い出したぜ・・・お前の戦い方・・・力の喧嘩技だろ』

『お前・・・・爺さんを知ってるのか?』

『爺さん?まさかお前!!』

お互いの素性を知り驚く大地と剣児。そこに降り立つヤマツミ。

『く!馬鹿を躍らせようとしたのだがな・・・』

『お前か・・・俺を騙した落とし前つけてやるぜ!!』

そう言ってヤマツミに飛び掛る剣児。そして

『フラッシュ!僕たちもやるよ!!』

『わかった!蓮!』

新幹線から変形しロボットになる聖勇者フラッシュ。

『こい!スーパーコンテナ!ゴッドアーマー!』

大地が叫ぶと大地の元にコンテナが駆けつけ二つに分離し一つのコンテナが巨大な身体に変形し大地と合体した。

『迅雷！スーパーモード！更に！超神合体！！』

ゴッドアーマーが鎧となり大地と合体し誕生する姿。

『迅雷！ゴッドモード！！』

ヤマツミの前に降り立つ大地。

『貴様ら纏めて相手してやる！！』

ヤマツミが勇者たちに襲い掛かるが・・・

『ゴッドパンチ！！』

『ナックルボンバー！』

『プラズマブーメラン！！』

大地と剣児のロケットパンチに蓮のブーメランがヤマツミを殴り飛ばした。

『マッハ突き！！』

『がああああ！！』

両手にドリルスピアーを構える蓮の無数の突きを浴びるヤマツミ。

更に・・・

『スピンストーム！！』

『うおおおお！！』

剣児のスピンストームがヤマツミを弾き飛ばし・・・

『ゴッドファイヤーガッツ！！』

『うおおおおおおおおおおおおおおおおああああああああああああああ！！』

己を火の玉とし突撃する大地の一撃に飲み込まれるヤマツミは爆発した。

戦いが終わり剣児と対峙する大地。

「悪かったな・・騙されちまって・・・」

「助けてくれたんだ・・・良いって事さ」

「しっかし楓にこんな弟が居たなんてな」

楓の弟ということで珍しそうに大地を見る剣児。そしてバツの悪そうな表情で立っている蓮。

「あのさ・・・大兄・・・」

「蓮・・・」

「うん・・・」

「菓子・・・」

「へ？」

大地の言葉に素っ頓狂な声を上げる蓮。

「怒ってないの？・・・僕！敵に捕まっちゃったんだよ？」

「誰が怒るか・・・んな事気にしてる暇があったら菓子持って来い」

「うん！」

そう言ってお菓子を持ってくる蓮。すると剣児が・・・

「おうおう～甘ったるいね～」

「・・・良いんだよ・・・あいつの成長なら見守るだけさ・・・で？お前どうするんだ？」

「行く当てもねえし。しばらくはお前に付き合うぜ」

「・・・勝手にしな」

ぶっきら棒に言う大地に剣児は・・・

「ああ～勝手にするぜ」

そう言って着いていくのだった。

それを見ていたつばきは・・・

「あちゃあ～・・・こりゃ苦労しそうだわ・・・」

問題児二人の面倒を見ることになってしまったのだった。

尚剣児の雷鋼馬とフラッシュはコンテナにビッグシューターはゴッドアーマーの上に置かれることになるのだった。

第三十九話　大地の勇者対鋼鉄神（後書き）

シャマル
「本日！とうとうダグベースの食料が尽きました♪」

一同
「えええええええええええええ！！」

シャマル
「という訳で～本日は特別に出前をとることにしました～」

ツクヨミ
「食料が無い？チャンスだ・・・これを期に一気にダグベースを壊滅させてやる！！」

ツクヨミの部下
「ツクヨミ様！それだけは止めてください！！」

次回！勇者大戦ブレイブサーガＡ，ｓ　ダグベース壊滅する

ツクヨミの部下
「・・・ツクヨミ様腹が減ったダグベースだけは襲っちゃいけないって知らないのかいな～」

第四十話　ダグベース壊滅する

ある日の食堂

「・・・」

現在戦えずに炊事担当になっている北斗は相変わらずしかめっ面で食事を作っていた。それを手伝わされている星史。

「それにしても北斗さん料理美味いよな～セブンチェンジャーにも見習わせたいぜ」

その時北斗の持っていた包丁が握りつぶされた。

「な・・・何？」

あまりの事にビビる星史。

「・・・良いか？・・・一つ忠告しておいてやる・・・俺たちの前でセブンチェンジャーの話はするな」

「へ？そっちのセブンチェンジャーが何かしたの？」

聞いてみる星史だがこれ以上北斗の機嫌を損ねると発砲されそうなので止めておいた。

後でシャマルに聞いたのだが・・・

八神組や炎や海を含めた初代ダグオン・勇者特急隊やレジェンドラの勇者を含めた楓軍団

全員セブンチェンジャーのことが嫌いなのだ。

その理由はただルーテシアの近くに居ただけで害虫駆除されたからである。

なおルーテシアに対しては縁もゆかりも無いのだが、ただ其処に居ただけでばい菌の如く排除された。

炎や激も力達と一緒に居たので巻き添えを食らったことも山ほどである。

そして

人格者である海や舞人・・・八神組の良心のチームアルフェリスとも反りが合わず

更には八神組で一番温厚な楓までもが嫌いと公言した。

時間移動した先にルーテシアが居ただけで踏み潰されてゴミのように強制送還されれば楓じゃなくても怒るであろう。

暴挙に至ってはモンスターピアレントのように続いた為反感を買った。

これが続いたせいで八神組は

【これではとてもじゃないが肩を並べて戦えないし戦いたくない】

という結論になり全員セブンチェンジャーとの共闘を拒みセブンチェンジャーが増援に来たらとっとと帰るようになったのだった。

「・・・まぁ・・・気持ちは分からんでもないな・・・うちのセブンチェンジャーにはそう言うことはやるなって言っとこ」

そう思い星史は就寝するのだった。

第四十話　ダグベース壊滅する

5日後ダグベースの格納庫内に集まったメンバー・・・何やら神妙な顔つきで台の上に立つシャマル先生。

「・・・ええ・・・まことに残念なお知らせがあります・・・本日・・・ダグベースの食料が底を付きました」

「「「「「何いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！？」」」」」

シャマル先生の言葉に人生のどん底に叩き落されるメンバー・・・そしてダグベースの食料がなくなった理由は・・・

「「「火鳥（さん！！）（兄ちゃん！！）〜〜〜！！」」」

そう火鳥である・・・力に勝るとも劣らないトラブルメーカーでもある火鳥がダグベースの食料を全て鍋にぶち込みごった煮にしたのだった。

「不味い・・・これは非常に不味い・・・」

危機を感じるシグナム・・・そう八神組の最大の弱点といえるのは食糧問題であった・・・移動要塞と化しているダグベースでは食料は必須。

現在は長距離運行中であるため買い置きの食料もあと3日はもつという計算であったがこれはこれで大問題だった。

何せ若く食べ盛りの勇者たちにとっては絶食は死ぬような苦しみであった。

近所の町に下りたダグベースでシャマルが提案したのは・・・

シグナム
「チャーシューメンとライス大盛!」

ヴィータ
「五目ワンタンメンと餃子二人前!!」

ザフィーラ
「天津飯とかに玉!」

ユウ

「ラーメンと餃子！麻婆豆腐滅茶苦茶辛めで！！」

アルト
「ラーメン「麺抜きで」ユウ～～～麺ありだよ！！」

鉄也
「焼肉定食大盛！！」

激
「同じ奴じゃ！！」

竜
「・・・サラダ」

雷
「五目坦々麺！！」

ケンタ
「カツ丼！」

ヴィヴィオ
「親子丼！！」

炎
「ニラレバに中華スープ！！ライス特盛」

竜馬
「チャーシュー麺！！」

大介

「えびチャーハン」

火鳥
「お子様ランチ」

エリオ
「パーコー麺めちゃ盛りに！ライスめちゃ大！」

キャロ
「果物盛り合わせ！！」

北斗
「ショウロンポウにシュウマイ」

紫
「味噌ラーメンにバターたっぷり！！」

霧風
「・・・なんでも良いよ・・・」

そう・・・出前である・・・以前痛い目を見たのにもかかわらず再び出前を取ろうとするダグベース。今回は管理局ではない為私的な報復が出来るからであろう・・・

もしくは限られたラインに食生活を依存しているだけかもしれない。

シャマルがダグベースに設置された回転ダイヤル式黒電話の受話器を取った。

「あいよ！！」

「あれ?どっかで聞いた中華屋さんの声だな?すみません!出前お願いします♪」

「おう!どっかで聞いた管理局の姉ちゃんの声だな?」

そう言って凄まじい長い注文を言うシャマルだった。

ツクヨミアジト

「なるほど・・・八神組は・・・餓死寸前なのか・・・」

どっからともなく八神組が食糧危機に陥ったという情報を掴みニヤリと笑うツクヨミ・・・

「ようっし!集まれい」

ツクヨミが呼び出したのは自分の直属の部下・ワキジ・ゲッテン・ニッコウ・ゲッコウの四人だった。

「ツクヨミ様?今日はどんな作戦と?」

「また下らない作戦でも思いついただがや?」

ワキジとゲッテンに突っ込まれてツクヨミは・・・

「ふふふ・・・奴らの食糧補給を断つ・・・そして餓死させる!!」

ツクヨミの幼稚な作戦に子分四人は・・・

「ツクヨミ様知らないんかいね・・・腹が減ったダグベースだけは襲っちゃいけにゃいって」

ヒソヒソと仲間内で話し始めるのだがツクヨミに逆らった給料が減らされそうなので黙って作戦を実行するのだった。

ダグベース

「・・・・・・・・・」

いつぞやの展開の如く出前が来ない・・・あまりの事にイライラしているシグナム。

「お腹減った～」

そう言って倒れこむアルトが竜に話しかけた。

「竜さん凄いですね流石忍者!」

そうアルトが称えた瞬間。

バタリ

空腹のあまり倒れた竜。いくら竜でも空腹には勝てないようだ。

そしてシャマルが・・・

「あの～先ほどの出前まだでしょうか・・・」

そう言って交渉してみると・・・

「！！」

シグナムが受話器を奪い取った。テーブルに立膝付いて叫ぶシグナム。

「・・・貴様・・・一度ならず二度までも・・・我々の忍耐にも限度というものがある！！！」

「今出たよ！」

「貴様前回もそう言ったな・・・」

「出たと言ったら出たんだよ！！いい若い者が飯遅れたぐらいで何ガタガタ騒いでやがんだ！！小銭握り締めて大人しく待ってろ！！」

かれこれ１０時間以上待っている出前に痺れを切らしメンバーは買出しなどに行こうとするが・・・

悪いことは続く・・・

最寄のコンビニやスーパーに補給に行こうとするが運が悪いことに

改装工事中であり・・・

ダグベースの農園を見てると既に狩り入れが完了した後で何もなく・・・

『『『『『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』』』』』

食べなくても大丈夫な勇者ロボたちとマグナムエースが総出で海に釣り糸をたらすが何も掛からない。

そして電話を取るが・・・

「いい加減にしろよ貴様・・・出前する気があるのか?」

「うるせえな!天界生物に襲われたんだよ!!」

主人の言い訳にシグナムは・・・

「何!?天界生物が恐いだと!?何なら私達が護衛してやっても良いんだぞ!!!」

「じゃあ!そうしろ!こっちは現に岡持ちやどんぶり持ってかれて被害受けてんだ!」

その言葉に・・・

「・・・ちょっと待て・・・今の話本当か?」

事の次第をシグナムに説明しブリーフィングルームに集まる炎・激・

星史・シグナム・シャマルと非戦闘員。他の人間メンバーは空腹のあまりダウンしていた為ギリギリで戦えるのはこの４人だった。

「で？天界生物が私達のご飯を奪っていったってそう言いたいの？」

シャマルが簡潔に纏めると炎が激怒しながら立ち上がった。

「ツクヨミの野郎・・・出てきたら！！」

「どうするの！？」

ケンタの質問に炎がダグベース開かずの間から何かを持ってきた。

「これで回転式逆さ貼り付けの刑にしちゃる！！」

そう言って炎が持ってきたのは、はやて愛用の力お仕置き道具の一つ『１０００億ボルトが流れる回転式逆さ貼り付け台』だった。

空腹状態で凄まじく機嫌の悪い炎・・・いつもなら怒らないが食料の供給を妨害するというツクヨミの手段が許せないのだ。

「うわ・・・これ以上行くともっとドギツイ拷問の道具も出てくるかも」

腹が減っているのであまりツッコミを入れたくない様子である。

「こうなったらオトリ作戦やりましょうか・・・で・・・誰がオトリになるかなんだけど」

全員の視線が一点を見た。

「なんで皆ワシ見るんじゃ！！」

「だってこの中で一番あの格好が似合いそうなの激さんだけだし」

そう言ってシャマルによって着替えさせられた激をオトリにして作戦が決行された。

「まったく・・・なんでワシがこんな事を・・・」

『まぁまぁ・・・』

ボルトが地上から護衛で付いているがその時。

「！！」

『な！！』

いきなり襲撃される激とボルト。そこには

『はっはっはっは！！八神組！これで最後だ！見たか私たちの見事な作戦！！』

そう言ってロボットに乗ってきたツクヨミは激が持っていた食料を完膚なきまでに破壊した。

「あうち」

流石の激も空腹でダウンしてしまうのだった。

すると

『八神組登場！！』

そう言って駆け付けたのはファイヤーダグオン・シグナム・ダ・ガーンXだった。シャマルはとある理由で逃げました。

更に

『『『時空合体！！』』』

ビルガー、ボルト、ガンザーが合体し巨大な拳士が誕生した。

『アルフェリス！！』

『やれい！！』

アルフェリスが完成するとツクヨミが部下達に指示を出した。

『覚悟ー！！！』

ワキジがファイヤーダグオンに襲い掛かるが・・・

『ぬん！！』

滅茶苦茶目つきが悪いファイヤーダグオン。

すると

『うおりゃあああああああああ！！』

ファイヤーダグオンに一撃で蹴り飛ばされるワキジ。

『おらおら！お前それでも高貴ある天界人か！！？しゃっきとせんかい！！』

倒れたワキジの頭を掴み無理矢理殴り飛ばすファイヤーダグオン。

更に

『覚悟おおおおおおおおおおお！！！』

ゲッテンがダ・ガーンXに殴りかかると・・・

『ダ・ガーン！！絶対に容赦するなよ！！いけえええええ！！』

『了解！星史！！』

ダ・ガーンブレードで斬られるゲッテン。

横では

『うぎゃあああああああああああああ！！！』

シグナムのロボットによってボコボコにされるニッコウ。

どうやら腹が減るとダグベースのメンバーは凄まじく機嫌が悪くなりパワーアップを果たすらしい・・・

『・・・・・』

『ツクヨミ様・・・これ明らかに作戦失敗でね？』

ゲッコウに言われるまでも無く開いた口が塞がらないツクヨミは戦術的撤退を試みるが・・・

『おりゃあああああ！！』

アルフェリスに蹴り飛ばされるツクヨミ。

『く！貴様！！』

ツクヨミとゲッコウがアルフェリスに飛び掛った瞬間。

『キャノンエクステンション！！』

上空からビームが放たれゲッコウが吹っ飛ばされた。其処に現れたのは・・・

『デルタ！？』

『お待たせしました！先輩！！』

銀河連邦のチームアルフェリスの後輩デルタだった。

『生きていたのか！？』

『ええ！俺だって八神組ですからね！あれくらいじゃくたばりませんよ！！合体しましょう！！』

『おう！！』

『『超時空合体！！』』

デルタが鎧となりアルフェリスと合体すると完成する巨大な拳士。

『『スゥゥパァァァァアルフェリス！！』』

八神組の戦力がそろいツクヨミを蹴り飛ばす。

『超光速拳！バリアブルプラズマァァァァァ！！！』

網のような光速の光がツクヨミを吹き飛ばした。

『くそ！』

その時

『うおりゃああ！！』

ワキジをあっさり倒したファイヤーダグオンがスーパーアルフェリスの元に駆け付けた。そして並び立つとエネルギーを収束し始めた。

『いくぜ！スーパーアルフェリス！』

『おう！』

必殺技の体制に入るファイヤーダグオンとスーパーアルフェリス。

『ファイヤーブレェェド！！』

『最終奥義！アルティメットデトネイター！！』

『フィニッシュ！！』

ファイヤーダグオンとスーパーアルフェリスの必殺技がヒットし爆発するツクヨミのメカ。そして脱出するツクヨミと逃げる部下達だった。

『くそおおお！！』

捨て台詞を残し撤退するツクヨミだった。

「あ～あ・・・・」

灰になってしまった出前を見て嘆く炎。

『どうしたんすか？』

「デルタ・・・俺たちの飯ぃぃ」

空腹のあまり愕然とする炎に対しデルタは・・・

『そんな事もあろうかと・・・持ってまいりました』

そう言ってデルタが自分のコンテナを取り出すとそこには1週間分はあるであろう缶詰だった。

「どうしてそんなの持ってるの？」

『え？俺がどれだけ八神組やってると思ってるんですか・・・どうせ腹が減ってると思って別の狭間のスーパーから買ってきたんすよ・・・そのせいで合流遅くなっちまったんすけど』

「デルタ！良い奴を持ったぜ！！」

「全くだ！流石八神組の一員・・・ていうか・・・その図体で買いに行ったのか？」

八神組の習性が染み付いたデルタの機転に感激する炎とシグナム。

何はともかくデルタが加わったことにより八神組の良心は復活した。

尚、デルタの持ってきた缶詰は腹が減ったメンバーが食べ過ぎたせいで食糧補給まで３日間で食べつくされたのだった。

第四十話　ダグベース壊滅する（後書き）

アリサ
「突然拾ったこの人・・・名前はタケル・・・昔この人にあったような気がする・・・何処だっけ?え?天界生物が・・・ちょっと!その身体で何する気なの!?」

次回!勇者大戦ブレイブサーガＡ，ｓ　裏切りの神

アリサ
「あなたは神を敵に回すの?」

第四十一話　裏切りの神

「・・・・・・」

アリサがベッドで気を失っているタケルを保護してから3日。力との戦いのダメージが抜けないのか未だに目を覚まさない。

「・・・なんで保護しちゃったんだろ」

自分でも不思議に思ったアリサ。見ず知らずの他人を保護しましてや介護してしまうなどどうかしている。

「この人どっかで会ったことあるのよね・・・何処だか忘れたけど・・・こんなご時世だから親切心でも起こしたかな?」

そう考えながらアリサはタケルを見守るのだった。

第四十一話　裏切りの神

海鳴の町

「・・・・・・・・・・・・・」

天界の神・ヤマトタケルは現世を訪れていた。天界では英雄と呼ばれているが当人には興味など無く、降りかかる火の粉を払っていただけでついた称号だ。故にタケルの力を欲する者も居たがタケル自身は権力等は興味無く、留まらずただ流れるだけの神であった。

「きゃ！！」

「ん？」

誰かにぶつかったことに気付いたタケルが振り返ると其処には子犬を連れた少女の姿があった。

「いたたた・・・」

尻餅をついた少女の事等放っておこう去るタケルだが・・・

「ちょっと！レディにぶつかっておいて！！謝りなさいよ！！」

そう威勢よく騒ぐ少女の下にタケルは無表情で歩み寄った。

「ギョ！」

いきなり間近にタケルのような成人男性が立った事に驚く少女だが・・・

「え？」

「・・・すまなかったな」

無表情で少女に手を貸し立ち上がらせた。

「へ？あの・・・」

タケルの行いにパニックになる少女そしてタケルは続けた。

「・・・気に障ったのなら謝ろう・・・すまなかったな・・・」

そう言って少女の前から流れていった。

当ても無く現世を彷徨っていたタケル。ふと何処かの屋敷の木の上で眠っていた。

「はぁ！はぁ！！」

「・・・・ん？」

何かが騒がしく、タケルが木の上から下を覗いてみると先ほどの少女が血相を変えて駆け回っていたのだ。何事だと思ったタケルは興味本位で少女の元に降りてみた。

「うわ！！」

「・・・何かあったのか？」

突然上から降りてきたタケルに驚く少女に気まぐれで問いただしてみるタケル。

「ちょっちょちょっちょっとあんた！人の家の木で何してるのよ！？」

「・・・ここは貴様の家か・・・」

そう言うタケルに少女は事情を話した。

最近ペットを狙った変質者が現れているため速めに子犬を部屋に連れて行こうとした少女だが背後から来た何者かにペットを連れ出されてしまった。しかも変質者は包丁を持っていたため少女は手も足も出なかった。

「助けなきゃ・・・」

「くだらん・・・止めておけ・・・怪我をするだけだ」

子犬を見棄てるように言うタケル。正直タケルにとってはどうでもいい事なのだ。

だが少女は・・・

「あの子は！私の大切な友達なの！！絶対に・・・助ける！！」

そうタケルを睨み付けながら少女は変質者が滞在しているという廃工場裏に向かうのであった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

その姿をただ黙って見送るタケル。

廃工場裏

「この！！この！！」

「キャンキャン！！」

工場裏で少女の子犬に危害を加える変質者。

「お前が悪いんだ・・・お前が！！この！虫けら！！！」

ただ目の前の自分より弱いものを痛めつけようとする変質者が子犬に鉄パイプを振り下ろそうとしたその時だった。

「誰だ！？」

金属の音と共に足音が響き渡り変質者が振り返ると其処にはタケルの姿が・・・

「誰だ？」

「・・・虫けらを返してもらおうか」

「なに？」

タケルの言葉に顔をしかめる変質者。

「俺はそいつが死のうが生きようが興味は無い・・・だがな・・・あの子にとっては大切な友達なんだろ？・・・返せ」

「う！うわあああああ！！」

タケルに襲い掛かる変質者にタケルは念力を発動させ変質者を吹き飛ばした。

「ひ！ひぃぃぃ！！」

この後騒ぎを聞きつけた警察に変質者は逮捕されるのだった。

「・・・ここね」

少女が工場裏に辿り着き子犬を救出しようと踏み込もうとしたその時だった。

「キャンキャン！」

「へ？」

少女の下に走る子犬はそのまま少女の胸に飛び込み顔を舐めた。

「くすぐったいよ～無事だったの？・・・あ！！」

タケルの姿に気付く少女だがタケルは何も言わずに去っていくのであった。

「・・・ん？・・・・・」

ベッドで目を覚ましたタケル。

「・・・ここは・・・・」

「気がついた？」

「ん？」

タケルの看病をしていたアリサが呼びかける。するとタケルは夢の中の少女とアリサを重ねた。

（・・・この娘・・・あの時の・・・）

自分が気まぐれで手を貸した少女であることに気付くのであった。

「・・・世話になったな」

「ダメよ！まだ寝てないと！」

早々に出て行こうとするタケルを止めるアリサ。どうもけが人を放っておけない性質のようだ。

渋々匿われながら自分が寝ていた気を見つめるタケル。

「あの木がどうかしたの？」

「・・・何？」

「だってあの木の上にいたから・・・」

アリサの質問にタケルは・・・

「あの木・・・」

「ん？」

「いい木だ・・・」

「そりゃ～うちの木だからね～ところで・・・あの木で何をしてたの？」

「・・・昼寝だ・・・夢を見ていた・・・昔のな」

「そっか・・・」

タケルの言葉に頷くアリサにタケルは・・・

「お前・・・あの時の小娘か・・・」

「は?何?私を知ってるの?」

アリサも自分にある拘りを解消するべくタケルに問いかけるがタケルは・・・

「さぁな・・・」

とぼけてみせた。過去の事などどうせ覚えていないだろうと思ったからだ。

すると

ドーン!

轟音が響き渡りアリサが窓の外を見た。

「また天界生物が・・・」

「・・・・・」

天界生物が群がってくる外の様子を見るアリサをタケルは止めた。

「・・・死にたくなければとっとと逃げるんだな」

「大丈夫！こっちには友達が居るんだから！！」

タケルの言葉を否定したアリサは携帯電話を取り出し連絡を取った。

すると

『うおおおおおおおおおお！！』

魔導アーマーを身に着けたD飛鳥（以降飛鳥と表記）が駆けつけた。

アリサの屋敷外で待ち受けることにした飛鳥はそのままライフルを構えた。

『やい！天界生物！ここを荒らす奴はこの俺がゆるさねえ！！』

『ギャアアアアアア！！』

襲い掛かってくる天界生物を殴る！蹴る！撃ち落していく飛鳥。

『おりゃおりゃおりゃ！！』

楓の作った魔導アーマーに独自のカスタマイズを加えた為融合合体並みに戦えるのである。

『よっしゃ！！換装！！』

楓が付けた特殊装置・換装システムによりバックパックとヘッドパーツが変更されバルザックモードになった。

『いっくぜ！！』

背中の拡散砲で群がってくる天界生物を一掃した。

飛鳥の戦いをじっと見ているタケル。

「・・・あの小僧は？」

「え？飛鳥君？」

「・・・いい動きをしている」

飛鳥の戦い方に一目置くタケル。タケルの戦ってきた経験が飛鳥の底知れぬ実力を感じ取っているのだ。

「飛鳥君ね・・・弟とはぐれちゃったって言って彷徨ってたの・・・偶然天界生物に襲われてた私を助けてくれてね・・・このご時世だし行くところもなさそうだったからうちに来てもらったの」

「・・・お節介な女だな・・・ん？」

「なに？どうしたの？」

何かを感じ取ったタケルを心配するアリサ。

タケルは同族と同じ臭いを感じ取ったのだ。

『であ！うおおおおお！！！』

あらかた天界生物を片付けた飛鳥の前に拍手をしながら何者かが近づいてきた。

「すばらしいねえ～」

『誰だお前！？』

飄々とした風貌の男に問いただす飛鳥。すると男は静かに名乗った。

「・・・カグツチ」

『カグツチ！』

カグツチの名を聞いた瞬間飛鳥に衝撃が走った。

「ほう～その反応・・・どうやらあの馬鹿の友達みたいだな」

『お前が・・・力兄を・・・』

既にカグツチが力を倒したことは仲間に知れ渡っている。

そしてそのカグツチが飛鳥の目の前に居る。

『マグナ！！』

『おう！！』

飛鳥の叫びに一台の新幹線が到着し飛鳥と一体化すると人型にチェンジした。

『ハンマーアックス！！』

マグナの一閃がカグツチにヒットしようとした時カグツチが障壁を出し受け止める。

『ぐ！』

弾き飛ばされるマグナ。

『流石・・・力兄を倒した奴・・・一筋縄じゃいかないか』

『せめてフラッシュがいればな』

『弱音は無しだぜマグナ！』

『わかってるよ！！』

飛鳥に檄を飛ばされ立ち上がるマグナだが天界生物に囲まれてしまう。

『なに！？』

「俺の目的はお前じゃない・・・」

『待て！！ぐ！！』

天界生物に足止めされるマグナを尻目に屋敷の中に入っていくカグツチ。

「・・・居た居た」

屋敷の門の中に立っていたタケルとアリサを見つけるカグツチ。

「よぉ～タケル～人間の女に手を出したのか？」

茶化すようにいうカグツチにアリサが叫んだ。

「何なのあんた！？」

「お～気の強い・・・君には用は無いんだよねそこの英雄を出してもらおうか」

「英雄？」

タケルを指すカグツチ。だがそれをアリサは止めた。

「ダメ！」

「へぇ～そいつに惚れた？」

「違う！けど！この人まだ怪我が治ってない！！」

「・・・お前」

アリサの行為を馬鹿にするカグツチと自分を庇う事に驚くタケル。

「まぁ・・・良いや・・・・！！」

「きゃあああああああああ！！」

カグツチが衝撃波でアリサを吹き飛ばすとアリサの周囲を天界生物で囲んだ。

「！！」

「仲間を連れ戻すのは当然のこと・・・さ！今のうちに・・・・」

そう言うカグツチにタケルは・・・

「ふ・・・相変わらず気の強い女だ」

そう言って刀を召喚しアリサの元に跳躍し、アリサの周りを囲んでいた天界生物を・・・・

「・・・！！！」

ズバシュ！！ドピュス！！バシュ！！

全て斬り捨てた。

「貴様！血迷ったか！？」

「・・・いや・・・俺は正気だ・・・・」

カグツチを睨み付けるタケル。アリサも何がなんだか分かっていな

い。

「貴様・・・下等な人間などを守る気か？」

「・・・言ったはずだ・・・俺はこいつらが死のうが生きようが興味など無い・・・！！」

迫ってくる天界生物を斬り捨てながらそう呟くタケル。

「だがな・・・目の前で弱者が踏みにじられるのを見過ごすほど・・・俺は出来た男じゃない！！・・・！！」

刀が光ると神の姿を現すタケルが迫り来る天界生物を草薙の剣で斬り続けた。

「ち！裏切った・・・ヤマトタケルが裏切った！！！・・・ぬううううううう！！」

カグツチも負けじと神の姿を現しタケルと対峙した。

『なんだ？』

『あれって！』

マグナと飛鳥も天界生物を斬りながらタケルの出現に驚いている。

『うおおおお！！』

『！！』

タケルの剣とカグツチの剣が交差し金属音が響き渡る。タケルの剣を掻い潜るカグツチだが戦闘経験はタケルのほうが上でありあっさりとカグツチを蹴り飛ばすタケル。

『く・・・流石英雄神の名は伊達じゃないか・・・』

『知らん・・・英雄など貴様らが勝手に呼んだだけだ・・・俺は唯の流れ者・・・大和一刀流ヤマトタケル・・・参る・・・』

『ふん・・・所詮は二流の神だったようだな!!』

『俺は貴様が気に入らない・・・だから貴様を斬る』

『奇遇だね・・・こっちもだよお!!』

互角に斬り合うタケルとカグツチ。だがまだ身体が不調な分タケルのほうが徐々に押され始めている。

『どうしたどうした!!英雄さんよぉぉぉ!!!』

『!!』

やがて押し負けタケルが吹き飛ばされてしまう。

『とどめ!!』

カグツチのトドメの瞬間だった。

『岩石割り!!!』

マグナの一閃がカグツチにヒットし怯んだ。

『今だ！！』

『！！』

飛鳥の叫びに刀を納めるタケル。

『大和一刀流・抜刀術！！雷鳴斬！！』

『ぐううおおおおおおお！！』

タケルの稲妻を纏った居合いの一閃を紙一重でかわすカグツチだが剣風で胸に大きな傷を負ってしまった。

『く！当たれば両断されていたか・・・』

傷を抑えるカグツチにタケルが弐の太刀を浴びせようとするがカグツチは撤退した。

『覚えていろよ！お前が裏切ったことは絶対神に報告する！！』

そう言ってカグツチは撤退するのだった。

戦いが終わりタケルとアリサが向かい合っていた。

「どうするの？これから・・・」

「さぁな・・・足の向くまま・・・何処かに流れるさ・・・着の身着のままも悪くない」

アリサの質問に答えるタケル。

「まぁ・・・寂しくなったらまた来なよ・・・あんたの寝るとこくらいはあるし・・・このまま借り作ったままじゃシャクだし」

「・・・心配ない・・・俺は借りを返しただけだ・・・世話になった」

「二度目だよね・・・あなたに助けられるの」

そう言うアリサに対しタケルは・・・

「・・ふ・・・じゃあな」

ささやかな笑みだけを残し新たなる道を歩むのだった。

「行っちまったな」

横から出てきた飛鳥にアリサは・・・

「飛鳥君・・・行ってあげて」

「え？」

「あれに付いて行けば・・・必ず弟君に当たるはずだよ・・・戦う宿命を持った彼の元に勇者は来るはず」

「・・・なるほどね・・・わかった！世話になったぜ！！」

そう言って飛鳥はタケルに同行することを決めるのだった。

第四十一話　裏切りの神（後書き）

スバル
「うわ～皆何処～宇宙警備隊！管理局！八神組どこ～」

赤スバル
「へぇ・・・君がもう一人の僕の別の可能性か？」

スバル
「ん？誰？」

赤スバル
「僕は・・・」

スバル
「あ！そうか！私生き別れの双子の妹が居たんだ♪」

赤スバル
「君・・・馬鹿だろ・・・」

次回！勇者大戦ブレイブサーガＡ’ｓ　鋼鉄の勇者対悪魔神

スバル
「どんな時も諦めない！何があってもやり遂げる！それが勇者だ！！」

第四十二話　鋼鉄の勇者対悪魔神

とある世界迅雷内

「♪～♪」

呑気に迅雷を運転しながら缶ジュース飲んでいる大地。

「大兄～サンドイッチ出来たよ」

「おう」

運転席に出てきた蓮からサンドイッチを受け取り食べながら運転すると・・・

「ん？」

何かを捕らえる大地。

「大兄～どうしたの？」

「いや・・・何かあっちの方でスバルが何かやらかしそうな予感がしてな」

「え？スバル姉さんが？どうするの？」

「ほっとけほっとけ・・・」

そう言って呑気に迅雷を転がす大地だった。

第四十二話　鋼鉄の勇者対悪魔神

神界の神殿

『目覚めろ・・・』

「・・・・・・・・・・・・」

暗闇の間で神が光指す場所の中心に赤い髪の少女に赤い光を与えていた。

「・・・・・」

ふらっと目を覚ます少女は背中から翼を出すのだった。

隔離施設

「よっこいせ」

避難民の配給を手伝っているスバル。

『おい！スバル！こっちも頼むぜ』

「わかったよ！ガードファイヤー！」

ガードファイヤーに呼ばれ食事を配り始めた。

あの次元嵐の時・スバルはガードチームと共に行動を共にしており
ガードチームと共に天野平和科学研究所から隔離されたと思われる
ストームクレーンを発見しながらメンバーを探していた。

救助の必要なエリアを回っては天界生物撃退を繰り返していた。

そんなスバルを見つめる影が・・・

「あれが・・・もう一人の僕の可能性か・・・」

スバルを見つめる赤い髪の少女。

「♪～♪～」

非難エリアから離れキャンプを始めたスバルとガードチーム。今日はスバルがストームクレーンで買出しに出かけ崖沿いの公道を走っていた。スバルたちが今いるエリアは荒野が広く買出しに行くにしても往復5時間はかかってしまうのだ。

「はぁ・・それにしてもみんな何処だろうな～」

現在スバルは天野平和科学研究所ともダグベースとも連絡が取れず八神組以外のメンバーを心配してた。

「まぁ・・・八神組の皆は殺したって死なないし・・・ケンタ君やハルカちゃん大丈夫かな～」

付き合いが長くなったせいで身体能力的に化け物な八神組の心配は無用なのだが普通の人間である為凄く心配している。

その時だった。

「ん？・・・ええ！！」

前方から光が飛んできたことに気付き急ブレーキをかけた。

光はストームクレーンの周囲に着弾しスバルの視界を奪った。

赤スバルを見たスバルの第一声は・・・

「おお！ノーヴェ！元気だった～！！？」

「ずけ！！」

ノーヴェと勘違いしたらしいスバルにずっこける赤スバル。

「ち！があう！僕は！」

「あれ？んじゃ鏡かな？」

「あのね・・・だから！僕は！！」

「んじゃそっくりさん！」

「・・・君・・・わざとやってるだろ・・・面倒くさい！カクカクシカジカ！！」

既に説明するのに時間を取るのが嫌になり赤スバルは小説流説明で簡略的に説明する。

「どう？わかった？君は僕・・・僕は君」

「ああ！そうか！私生き別れの双子の妹が居たんだ～♪」

「ずけえええ！！」

スバルのああ勘違い的発言にずっこける赤スバル。

「君・・・馬鹿だろ・・・」

「いや～よく言われるよ～」

八神組と付き合いが長くなったせいなのか凄く肝が据わったらしいスバルだった。

「君は一体・・・」

「聞いてなかったのかな・・・僕は君・・・君は僕」

「そんなこと無いよ！あなたはあなた！私は私！！」

赤スバルの言葉を返すスバル。

「なるほど・・・どうやら君は僕のところのとは違うみたいだね・・・」

「え？どういう？」

「明確な戦う意思があるってことさ・・・だったら・・・」

「！！」

赤スバルの強襲に咄嗟にガードするスバル。そのまま赤スバルの連打を受け流し一撃を加えた。

「どういうつもり！？」

「へぇ～やるじゃん・・・魔神の魂を持ってるだけはあるね・・・

けどさ・・・それだけじゃねえ～」

「何分けのわかんないこと言ってるの！？」

「・・・違うという事は似たような力か・・・だったらさ・・・見せてよ・・・君の全力」

赤スバルが構えると・・・

『ヌアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！』

巨大化し凄まじい魔神の姿になる赤スバル・・・いや・・・デビルマジンガー。

「嘘・・・マジンガー・・・どういうこと」

『さぁ・・・君も力を出しなよ・・・魔神の力を』

「そんなの持ってないよ！！ストームクレーン！！」

スバルの叫びにストームクレーンが発進するとスバルの元に駆けつけた。

「機甲合体！！」

＜ＰＯＷＥＲ　ＬＯＡＤ＞

スバルがストームクレーンから飛び上がるとクレーンアームが展開した。そのまま上半身が起き上がり下半身の四輪部分がリフトアッ

プしていく。リフトアップと同時にクレーンアームが装着されている腕が展開し胸部が展開し・頭部が展開した。

「たあ！！」

スバルが胸部に乗り込むとゆっくりと胸部が閉じ同時に竜の顔が胸に現れた。

＜ＣＯＮＮＥＣＴ＞

瞳が淡い緑に光る。

『メタルゥゥゥゥゥゥゥ！ダグオン！！！！！！』

完成したメタルダグオンがデビルマジンガーの前に降り立った。

『へぇ・・・それが君の力か・・・』

『え？』

『それじゃ・・・行くよ！！』

デビルマジンガーの拳がメタルダグオンに襲い掛かるとメタルダグオンはバックステップで避けた。

『ちょ！いきなり！』

『へぇ・・・中々やるじゃん・・・なら・・・光子力ビーム！！』

デビルマジンガーの瞳から光線が放たれると・・・

『メタルスターバーン！！』

メタルダグオンの額の紋章から光線が放たれ光子力ビームとぶつかり合い相殺した。そのまま組み付き力比べになる。

『くぅ！重い・・・』

『どう・・だあ！！』

『うわあああああああああああ！！』

デビルマジンガーに投げ飛ばされるメタルダグオンは地面に叩きつけられた。

『デビルパンチ！！』

『メタルトンファー！！』

デビルマジンガーから放たれるロケットパンチをメタルトンファーで受け止め投げ飛ばすとデビルパンチはデビルマジンガーの腕に戻るとメタルトンファーを砲身形態に変形させた。

『メタルバレット！！』

鋼鉄エネルギーの弾丸を放つがでデビルマジンガーにあまり効いていない。

（・・・奴の要は右腕の武装か）

メタルダグオンの戦闘の要を右腕のクレーンアームを中心としたファイティングスタイルである事を見抜くデビルマジンガー。

『くぅう！！』

デビルマジンガーの攻撃力に必殺技の体制に入るメタルダグオンと同じ構えに入るデビルマジンガー。

『一撃必倒！』

『ディバイイン』

『『バスタァァァァァ！！』』

ディバインバスターの打ち合いをするがメタルダグオンの方が徐々に押し返される。

『うあああああ！！』

吹き飛ばされるメタルダグオン。すると右腕に違和感を覚えた。

『くぅ・・・これは・・・』

右腕の回路に異常をきたし始めてしまった。追撃を逃れるために右腕の回路以外の武装を使うメタルダグオン。

『マグマブラスト！！』

メタルダグオンの胸の龍の口から高熱の炎を放つが・・・

『ダークネスファイヤー！！』

『うわあああああああああああああああ！！！』

胸の放熱板から放たれたダークネスファイヤーに飲み込まれるメタルダグオンを見届けるデビルマジンガーは・・・

『・・・完全に壊れた・・・こんなことじゃ神には・・・ん？』

何かに気付くと爆炎の中から現れるメタルダグオン。

『へぇ・・・見上げた根性だね・・・さすが僕・・・』

ダークネスファイヤーに飲み込まれたのにも関わらず倒れないメタルダグオンはよろけながらもデビルマジンガーに向かって走った。

『・・・く・・・必殺！！』

異常をきたした右腕の回路を無理矢理使いながらも切り札を使うメタルダグオン。

『切り札を使うか・・・だったら・・・確実に潰さないとね』

『振動けえええん！！！』

最大の技で強襲するメタルダグオン。

『ふ・・・ん！！』

避けようとするデビルマジンガーだが急に身体が動かなくなった。

（まさか！もう時間が・・・）

『うおおおおおおおおお！！！』

足元がおぼつかないメタルダグオンの拳は空振りするがデビルマジンガーの足を掠め破壊した。

『く！うわ！』

倒れるデビルマジンガー。

『何で・・・避けなかったの？』

足からオイルを流すデビルマジンガーを見るメタルダグオン。

『どうやら・・・時間切れみたいだね・・・』

『時間切れ・・・え！！』

メタルダグオンが周囲を見回すと悪のマジンガー軍団が囲んでいた。

『マジンガーZ・・・どうして！？』

『ははははは！！』

声のする方向を見るとそこには天界人の姿が・・・

『デビル・・・貴様が裏切ることは分かっていた』

『く・・・』

『え？どういう事？』

パニックになるメタルダグオンの疑問に天界人が変わりに答えた。

『ふ！その小娘は貴様らに我々の情報を伝えようとした・・・だから泳がせていたらな』

『よく言うよ・・・僕を生き返したのもマジンガーの情報を得るためだったくせに・・・』

『当たり前だ・・・それ以外に貴様に何の価値がある・・・その為だけに与えたかりそめの命だ』

すると周囲のマジンガー軍団が詰め寄ってきた。

『さぁ・・・逃げなよ』

『え？』

デビルマジンガーの言葉に虚を突かれるメタルダグオン。

『ここは僕に任せて・・・』

『けど・・・』

『見なよ・・・この足・・・これは足がぶっ壊れましたサインだよ・・・これじゃとてもじゃないけど逃げられない・・・ゲームオーバー・・・さぁ行きなよ・・・天界人を絶対倒しなよ・・・』

自分を残していくように宣言するデビルマジンガーにメタルダグオンは胸倉を掴み上げた。

『勝手なこと言って甘えないでよ!!たかが足が片方壊れたぐらいでグチグチ言って!!!』

『え?』

『どんな時でも諦めない!何があってもやり遂げる!!それが勇者でしょ!!』

『・・勇・・・者?』

『あなただって・・・形はどうあれ勇者じゃないの!!』

『僕が・・・勇者?・・・そうか・・・君にあるのは勇者の魂なんだ・・・』

そう呟くデビルマジンガーに天界人は・・・

『ふ・・・馬鹿が・・・そのまま消えるが良い!!やれ!!』

天界人の合図でマジンガー軍団が一斉に襲い掛かると・・・

ズドーン!!

一斉に爆発したマジンガーZ。

『！！』

メタルダグオンが振り返ると其処に居たのは・・・

『大地！！』

マグナムバズーカを構えガイアモードの状態で立っている迅雷。そのままメタルダグオンとデビルマジンガーの前に降り立った。

『大地！どうして』

『・・・たまたま通りかかった』

ぶっきらぼうに答える大地に天界人はうろたえている。

『何故だ！？マジンガーZ以上の性能を誇っているはずなのに！！』

『馬鹿かテメエは・・・所詮偽者だ・・・舐めんじゃねえぞ』

『なに？』

『マシンはな・・・信頼してる奴に答えてくれる・・・例え性能が勝っていてもな・・・心のない力じゃ下の下の下だ』

『くぅううわあああああああああああ！！』

大地の皮肉に怒る天界人は飛びかかった。

『ファイナルモード！エネルギーチャージ！！』

マグナムバズーカをファイナルモードにし天界人を狙う大地。

『うおおおおおお!!』

『マグナムノヴァ!!』

大地の放ったマグナムノヴァに飲み込まれ消滅する天界人。

戦いが終わると大地とスバルが各々のマシンの元に立っていた。

「大地?どうしてここに?」

「あ?たまたま通りかかっただけだ・・・」

スバルの質問にそう言って突っぱねる大地。

「大兄~」

「あ!蓮君!どうしたの?」

「あ!スバル姉さん!?大兄が何かやらかしても困るって言って結局飛び出して行っちゃって」

「へぇ~大地がねえ~」

そう言って大地を見るスバル。無論不機嫌そうにそっぽを向く大地であった。

因みに剣児たちは宿を取ってもらっている為別行動をしている。

「とりあえず・・・仲間で合流かな帰ったらガードーチームの皆も合流しよう。君も一緒に・・・あれ？あの子は？」

赤スバルの姿が消えていることに気付いたスバル。

かなり離れた場所・あの後赤スバルは残された時間をフルに使いかなり離れたエリアに来たのだった。

「あ・・・あああ！！」

仮初めの命を抜き取られもがき苦しむ赤スバルは無様に這い蹲っている。

「あ・・・・あ・・あ・あ・・・・」

もう言葉も出すことが出来ない。

その時だった。

「ん？」

赤スバルの元にタケルが現れた。

「・・・・・・・・・・・・・」

消えかけている赤スバル元に歩み寄るタケル。もがき苦しんでいる赤スバルを見ると全てを悟った。

そして

「・・・生きたいか？」

「・・・・・？・・・・」

「・・・生きたいか？・・・自分の意志で・・・・」

タケルの問いに赤スバルは・・・

（生きたい！！）

声に出せないが心からそう願った。

その目を見たタケルは自分の胸に手を当てると青く優しい光を放つ小さな命の玉を取り出した。

「！！」

そしてぶっきら棒に赤スバルの胸元に投げ込むと命の玉は赤スバルの中に溶け込んでいった。

徐々に苦しみから解放される赤スバル。

「え？・・・お前一体？」

苦しみから解放された赤スバルはタケルを見つめ呟いたがタケルはこう返した。

「・・・好きな所に行き・・・好きなように生きろ」

その言葉を残しタケルは去っていった。

「タケルさん」

タケルの後についていく飛鳥がタケルの先ほどの行為について聞いてみた。

「タケルさん。どういう事」

「・・・まれに天界人は命を二つ持って生まれる・・・だから一つくれてやっただけだ」

「・・・なんで自分の命をあげちゃったの・・・」

静かに答えるタケル。

「天界人の目は腐っている・・・栄光にすがるだけのつまらん目をしている・・・だが奴は違った・・・必至に生きたいという目をしていた・・・ぎらぎらとした生きた目をな」

「ぎらぎらとした生きた目?」

「見たくなってみた・・・そんな生きた目がどうやって生きていくか見てみたくなった・・・ただの気まぐれだ」

そう言って飛鳥と共に去ろうとするタケルだが・・・

「・・・だったら見てみれば良いじゃん」

「・・・何？」

タケルが振り返るとそこには赤スバルの姿があった。

「どうした？」

「言ったよね・・・好きなところに行って好きなように生きろって・・・自分で種を蒔いたんだから責任取ってよね・・・」

「・・・着いてくるつもりか？」

「他に行くとこなんか無いし・・・あんたは他の髪とは違いそうだし」

「俺はただの素浪人だ・・・行き先は風任せだが・・・勝手にしろ・・・」

「うん～勝手にするよ～」

そう言って勝手にタケルについていく赤スバル。

「あ！ちょっと待ってよ～！！何だかな～色の強い二人が着ちゃったな～」

等と言って心労がたたり始める飛鳥だった。

第四十二話　鋼鉄の勇者対悪魔神（後書き）

炎
「天界生物にも色々いるんだよな・・・何？ヒーローに倒されたいって・・・え？ユウにやらせるの！？何で俺たちじゃないの？何々俺たちにはヒロインがいないからヒロインいるユウにやらせるって・・・て！アルトをさらいやがった！！ユウ！こうなったらあいつの言うヒーロー像をやるしかねえ！」

次回！勇者大戦ブレイブサーガＡ’ｓ　ヒーローの事情

炎
「恥ずかしがってないでアルトのためにやれ！！」

第四十三話　ヒーローの事情

ある日の大列車フォートレス

「よっし！次はボンバーズだ！！」

旋風寺財閥のスタッフ達が勇者ロボやマジンガーたちをフルメンテしている。

現在、ダグベースは補給の為に大列車フォートレスに立ち寄っていた。

その理由は・・・

「う～んう～ん・・・」

ダグベースの貴重な整備班であるユウや浜田が過労で倒れてしまったのだ。

その理由は普段の楓以上の整備量を押し付けたからである。唯でさえ膨大な量に八神組のいつもの破壊活動が重なり被害が増える一方である為肉体的・精神的に疲労しまくり倒れた。

現在ベッドでうなされながら点滴打ってます。

それを見た舞人は流石に焦り一時代列車フォートレスに機関紙補給を行うことに。

尚、何故ダグベースにスタッフを連れて行かないかというと・・・

「ダグベースが狭くなるのよ～」

これから合流するであろう八神組のメンバーを考えるとダグベースは狭くなってしまう。

その為必要最小限のメンバーしか連れて行けない。

そしてユウは・・・

「楓さん！カムバック！！」

と叫んでいたそうだ。

因みに楓は・・・

「へっくしょん！！」

くしゃみしながら手持ちの工具で力達の勇者ロボの整備をやっていた。

第四十三話　ヒーローの事情

大列車フォートレスでの補給を終え、隼号で買出しに行くユウとアルト。

「たくシャマル先生もこき使ってくれちゃってやってらんねぇ・・・」

「良いじゃん良いじゃん～舞人さんはダイバーズやマイトガンナーとの連絡取ってるから忙しいみたいだし～ユウとドライブ～」

等と言ってハンドルを握っていたその時だった。

『うわあああ！！』

「ユウ！」

「うわあ！アルト！ハンドル握るな！！」

「細かいことは気にしないの！！」

隼号の中に聞こえた悲鳴を聞いたアルトはユウの運転しているハンドルを奪い取り悲鳴のする方向へ向かった。

『うおおおお！！』

ある天界人が女性に向かって両手を振りかざしていた。

「キャー！！」

悲鳴を上げる女性と逃げる女性の彼氏と思われる男性。

『もう少しで来るかな・・・ガオー！！』

何かを待っている天界人。

すると

「なんだなんだ？」

ユウが駆けつけた。紅を持つユウだが・・・

「あう・・・」

まだ本調子じゃない為ふらついていた。

『・・・このボロボロの奴じゃないね』

ふらついているユウをスルーする天界人。

「待ちなさい！」

そこに現われるアルト。かなりやる気満々である為天界人は・・・

『・・・こっちのほうみたいね・・・はあ！！』

「うわあ！！」

アルトに向かって光線を放った。咄嗟に避けるアルトは一目散に逃げまくると天界人は追いかけ始めた。

「ちょっと！ユウ！助けてよ！！」

「ああ～誰か～ヘルプ～」

「人任せにしないでよ！！」

通信機で連絡を取っているユウを怒鳴るアルト。すると天界人が・・・

『ねぇ・・・いい加減にしなよ』

「・・・へ？」

『いつまで生身で頑張ってんのよ・・・早くロボ呼びなよ』

「ちょっと待って！誤解があるから言っておくけど！ロボ持ってるのはあっち！！」

慌てるアルトがふらついているユウを指差した。

『何・・・じゃああんたヒロインでこのやる気のなさそうなのがヒーローなの？』

「うん」

天界人の言葉に頷くアルトに天界人は・・・

『嘘だあああああ!!こんなのヒーローじゃないよー!!』

「「へ?」」

そう言って泣きながら帰ってしまった天界人。

「なんだ?・・・あいつは」

目が点になるユウにアルトは・・・

「多分・・・理想のヒーロー像とかけ離れていたからショックだったんじゃないの?」

腕を組んで納得するアルト。

一方

『くぅぅ・・・何であんなやる気無いのにヒーローなのよ・・・』

普段のユウならともかく散々こき使われたからああなっているのであろうがそれでもショックはでかかったようだ。

『こうなったら何が何でもやる気ださせちゃるからな!!!』

何かを決意する天界人。

翌日

「ふぁ～」

ダグベースの自室でユウが目を覚ますと何故かアルトの姿が無い。

アルトのベッドを見ると書置きとＤＶＤが置いてあった。

「何々・・・『やいやる気の無い勇者。愛しの彼女は預かった。返して欲しかったらヒーローらしくなって取りに着やがれ！』どれどれ・・・これ７０年代のヒーローじゃねえかこのカウボーイスタイルって・・・」

ラッパ片手に参上するヒーロー像のＤＶＤを見るユウはすぐにＤＶＤを止めた。

一方

「ユウに・・そんな事求めたの・・・」

ユウのカウボーイスタイルを想像してみるアルト。ユウがそんな事をしてくれるとは思えない。

『ああもう！ヒーローがヒーローならヒロインもヒロインじゃん・・・とにかく叫んでよ』

「しょうがないな・・・キャー！ユウ！助けて！」

『そうそうその調子』

アルトがノリノリになってきたらしく誘拐されたヒロインになりきっていた。

ところかわってダグベース

「こりゃ・・・犯人の要求飲んであげようよ」

「それが人情ってモンだろ」

現在のリーダーシャマル先生とダグオンのリーダー炎に説得されるユウだが・・・

「断る!めんどい!!第一炎さんがやりゃいいじゃねえか!」

「相手はお前を狙ってアルトを誘拐したんだ!だからお前がやれ!!アルトの命がどうなっても良いのか!?」

「・・・・・・」

炎の説得に耳を貸さないユウ。

「見損なったぞユウ・・・アルトの為ならやると思ったけどな・・・」

そう言う炎はダグコマンダーを持ってシャマルと共にファイヤージャンボで発進してしまった。

「・・・・・・・・」

それを見たユウはおもむろにＤＶＤを手に持ち・・・

アルト誘拐現場の採石場

『ん？来たね』

「て・・・あれファイヤージャンボじゃん」

天界人とアルトの元に舞い降りるファイヤージャンボの中からファイヤーストラトスが発進しダグテクターを装着した炎とシャマル先生が降りてきた。

『ちょっと待て！あの男はどうした！』

「俺が相手じゃ不満なのか！？」

そう言う炎に天界人は反論した。

『そう言う問題じゃなくてね・・・そもそもね・・・お前さんたちが戦ったりなんかして甘やかすからああいう面倒くさがりになるんでしょうが！！』

「うわ・・・ひどい言い方・・・なんでユウに拘るんだ？」

「多分打ちのメンバーでロマンスが似合いそうなのってユウ君だからじゃないの？」

あまりにもわがまま放題の天界人に突如トランペットが響き渡った。

『これは・・・あそこだ！！』

辺りを見回す天界人と炎とシャマル。すると採石場の鉄片にカウボーイスタイルでトランペット吹くユウの姿が・・・

『現われたな・・・ユウ・サエグサ！！』

悪役らしくなってきた天界人にユウは・・・

「この！俺の身体に降り注ぐ太陽の輝きが！！お前を倒せと叫んでいる！！」

７０年代ヒーローのような名乗りを上げるユウ。

それを見ていた炎とシャマル先生は・・・

「あらぁ結構はまってるよ」

「ユウ君って結構ノリノリのタイプかもね～♪」

そう傍観していた。

「アルトさん！今行くぞ！！飛龍！！」

ユウのコールに飛来する飛龍。ヴォルフガングに言って急所呼び出し機能を付けたらしい。

『行くぞ！天界生物！！』

『来い！飛龍！！』

紅を構えて天界生物に斬りかかるユウ。

『ヒリュウミサイル！！』

飛龍のミサイルを放つがアルトが居ない為うまく当たらない。しかしそれは見せ球であり天界人が怯んだ後に蹴り飛ばしアルトから距離を離すと一旦降りてアルトを救出した。

「アルトさん！ここは危険だ！速く安全な場所に！！」

「は！はい！！」

ユウの豹変に何故か畏まってしまうアルトは安全な場所に行くと再びユウは飛龍に乗り込み構えた。

『うおおお！！』

『でああああ！！』

ユウの紅と天界人の剣が交差し互角の斬り合いに持ち込まれる。

『く！！』

徐々に攻撃力で押され始めるユウ。馬鹿そうに見えてこの天界人の実力は相当のものだった。

「ユウ！あんなのだけど強い・・・え？」

戦いを見守っていたアルトだが。次の瞬間アルトの通信端末にメッセージが表示された。

『アルトさん！どこにあれは！』

ユウが空を見上げた瞬間何やらコンテナの様な物が降ってきた。

『アルトさん！』

「！！」

アルトの目の前に降ってきたコンテナにはこう書いてあった。

「『速達で～す♪』って・・・この字は先輩・・・何考えてるんだろう・・・」

そしてアルトが乗り込んでみるとコンテナが開き巨大なジェット機が現われた。

『ええっと・・・テイクオフ！！』

コックピットのアルトが操縦桿を握るとジェット機は起動し天界人に体当たりをした。

『ぬぐぐ！助っ人とは王道の展開じゃないの！！』

『アルトさんあれは！！』

ユウが空を見上げるとジェット機は船首部分が分離し小型ジェットになると人型に変形した。

変形体を見たアルトは・・・

『え？これって・・・スターセイバーだよね・・・昔おもちゃ持ってたけど・・・先輩の趣味？』

『アルトさん！！』

『ユウ！一緒に戦いましょう！合体！！』

ロボットが動体に変形すると残りの機体が身体に変形し一体化すると巨大なロボットが完成した。

『合体！神龍！！』

神龍と名づけたロボットと並び立つ飛龍。

『いいだろう！二人まとめて相手になってやる！！』

もっと悪役らしくなってきた天界人にユウとアルトが一斉攻撃に入った。

『フォトンバルカン！！』

『いっけ！！』

頭部のバルカンを放つ神龍とゲイルファングとヒリュウブレイザーの二丁拳銃で攻撃する飛龍。

『くう！！舐めるな！！』

天界人がユウとアルトの攻撃を防ごうと結界を張るが破られてしまう。

初めてだというのにアルトの操縦が慣れている。

実は北斗とサイモンがアルトを訓練で苛め抜いていた理由はこれだったりする。

『シンリュウケン！！』

神龍が巨大な剣を構えると斬り合いになる。

『ヒリュウキック！！』

ユウのキックが炸裂し後ずさる天界人。だが何か不満そうである。

『ああ！もう！じれったい！！とっとと必殺技出しなさいよ！』

必殺技せがむ天界人にユウは・・・

『んじゃ遠慮なく・・・ゲイルファング！！』

必殺銃・ゲイルファングを構えるとエネルギーが集束されていく。

『食らえ！必殺の閃光！メテオぉぉぉ・・・ブレイカー！！！』

ユウの放つ光線が天界人を飲み込んだ。

『うおおお！！・・・これで・・・かっこよく・・・散れたよ・・・！！』

爆発する天界人に構えた飛龍と神龍。

夕日に黄昏るユウとアルト。

「あの天界人・・・どうして」

「・・・恐らく・・・私にヒロイックに倒されたかったんでしょう」

「・・・ユウ・・・いい加減元にもどんなよ」

そう言って二人で黄昏る。

・・・既に作品が違う方向に向かっている。

「なんだろうな・・・」

「ユウ君ってノリノリになるとのめりこむタイプだったりして」

「んで？シャマル先生何やってんだ？」

炎に指摘されるとカメラを持っているシャマル。

「いやぁ～ミツキさんに面白いシーンを撮影しといて♪って言われてずっと回しておいたのよ～」

「うひゃ～えげつねええな～」

等と言って目を丸くする炎。

尚、この映像はすぐさまひなぎくに転送され笑い話の種になった挙句しばらくユウは自己嫌悪してしまったらしい。

第四十三話　ヒーローの事情（後書き）

大地
「それにしてもユウの奴も災難だったな・・・俺も大変だ」

スバル
「へ？どういう事？」

大地
「俺はできてねえから女と一緒旅は苦手だ。さてバイト何！？天界人が町を襲撃してるって？こうしちゃいられねえ！」

次回！勇者大戦ブレイブサーガＡ，ｓ　迅雷破壊作戦

大地
「貴様ら！俺が狙いなら俺だけを狙いやがれ！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5652s/

勇者大戦ブレイブサーガA's

2011年12月13日05時51分発行